

# ZOIDS学園

影狐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネオゼネバス帝国とヘリック共和国との戦争終結後、70年後の世界の出来事。

今だ世界に民族紛争もあったり、ゾイドバトルが盛り上がる世界。

主人公たちが通う『ミューズ学園』が巻き起こす成長と外道と戦略とミリタリーにまみれたお話し。

自分の少ない知識で、アニメとバトストの要素をそれなりに含んだ2次創作を書いています。

HMM設定も過多です

# 目次

プロローグ：始業式

その1 | 1

その2 | 7

その3 | 14

第1話：1年C組

その1 | 22

その2 | 30

その3 | 39

その4 | 51

第2話：初めてのゾイドバトル

その1 | 61

その2 | 70

その3 | 78

その4 | 90

その4.5 | 106

その5 | 111

帰宅閑話：アシユワース家の日常

\*\*\* | 121

第3話：アイドルはピーキー性能

その1 | 125

その2 | 130

その3 | 137

その4 | 147

その5 | 156

その6 | 164

閑話：放送

\*\*\*

第4話：初めての他校試合

その1

その2

その3

その4

その5

その6

第5話：バカの戦術、マジキチの戦略

その1

その2

その3

171

174

184

191

201

212

223

234

242

250

その4

その5

その6

その7

その8

その9

その10

閑話休憩：生徒会長のイオナ

前編です！

中編です？

後編ですよ♪

おまけ、です!!

第6話：新ゾイド、買います

257

270

276

291

304

322

338

352

375

401

439

その  
6

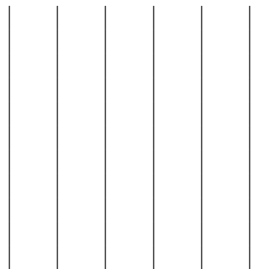
その  
5

その  
4

その  
3

その  
2

その  
1



587 566 535 512 493 474



## プロローグ：始業式

## その1

——季節は、春。

大体の学校は、おそらく始業式だろう日のこと。

「ち、遅刻しそうな時間じゃないですかあ————ツツ!!」

100人に一人はいるであろう言葉と共に、一人の少女は自室で目を覚ました。

時刻は、午前8時半。ちなみに、始業式は9時からである。

「きや——ツ！。パンツ、パンツ何処ですか!?! ブラジャーに制服、あとメガネ!!」

寝るときは全裸派、という結構いるタイプの人間である彼女は、学生特有の慌てぶりをいかになく發揮し着替えていく。

幸い、カバンに必要なものはすべて入れて置いたおかげで、彼女はすぐに用意を完了させた。

「良しー」

彼女は、部屋に掛けてある姿見で自分の格好を確認してつぶやく。

やや黒めのシルバーのブレザー、その上から覗く中々可愛いらしい顔だ。美少女と

言つても過言ではない。

インテリ風なおしゃれかつちゃんど度の入っているメガネが、よく似合う。

おっと、頭のカチューシャ状のアクセサリーも忘れない。

「うーん、寝癖は……目立ちませんかねー」

と、言いつつきつちりくしで長くつやややかな髪を軽くとかし、一つ頷いて部屋を出る。

\*\*\*

「お父さん、おはようございますー!」

「ああ、おはようリナ」

一階のダイニングで、キザったらしい声音としぐさで、湯気と共に芳醇な香りの紅茶を片手に新聞を読む男性がいた。

かなり若く見える彼が、リナと呼ばれたこの少女の父親らしい。

「まあ、遅れそうだとは思っていたから、この通り朝食は特性ベーグルとミニサラダにしておいた。」

もちろん、きちんと食べていくように」

「はあい、いい歳こいてイケメン気取りのお父さん♪」

ふつ、と毒のこもったいつもの娘の言葉をキザに受け流しつつ、彼は静かに朝刊を読みつつ、いい香りの紅茶を一口口に含む。



その向かい側に座り、いただきますと丁寧 hands を合わせて言ってから、これまた丁寧に朝食を食べ始める少女、リナ。

「はむはむ……」

「食べる時は、常に落ち着いて食べるべし。」

相変わらず、我が家の家訓に忠実で何よりだ」

「はいはい、40近いのに中二はやめる事、ですよーお父さん？」

と、言いつつリナは丁寧かつ素早く朝食を食べ終え、ごちそうさま、と静かに言ってから立ち上がる。

「いってらっしゃい。始業式に遅れないように」

「はあい♪」

そうして、彼女は台所を出る。

向かう先は——

\*\*\*

この街にある共用駐車スペース。

いや、『駐車』と言うのは正確ではない。止められているものがなぜなら——

「うわっ!？」

リナの目の前を、長い金属の尾がかすめる。

——リナの目の前に、機械の恐竜がいた。

『いつもの光景』だ、ここまでは。

「すまん嬢ちゃん！ こいつ、相変わらず尻尾癖が悪いもんでな！」

「いいえ〜！」

その恐竜——RZ-014『ゴドス』、民間土木作業仕様に、軽く手を振りつつリナは急ぐ。

「民間使用とはいえ、ガリウスじゃなくてゴドスですかー……何か大きな工事でもあるんでしょうね、ワークトータスよりも手先が器用で同じ位のパワーですし……」

と、小さくつぶやきながら、目的地まで走る。

「つとー！」

その近くには、「大型ゾイド用」と書かれた立札があつた。

それを示すようにか、車を止める駐車場の駐車スペースに必ずある白線が、少なくとも幅が7メートルは開いている。

当然、その中にいるのは、巨大なモノ。

寝息をたてていたり、あくびをしていたりする、巨大な動物型の機械。

いや——これらは生きている。

「（こらー、起きなさい、クロムウエル!!）」

と、そこでリナは一体の機会のような巨大な動物に声をかける。

——それは、巨大な白い獅子。

それが、寝そべった姿勢から起き上がり、鋭い金色の牙の覗く口を大きく開けてあくびをし、そのまま体をぶるぶるとふるって周りに朝露をまき散らす。

「こらくロムウエル!?」 仮にも共和国とガイロス帝国の機動戦主力ゾイドを張ったんだからもつとつつしみを持った行動をしなさい!」

というリナの言葉にも首を傾げ、とりあえず、頭を下げる、ソレ。

すると、ライオンに似た頭部が開き、中にあるコックピットが露出する。

「……それでも自分のやるべきことはわかっている辺り、流石主力ですなね」

まあ、もつとも、とつぶやきながら、リナはそのコックピットに乗り込む。

「共和国Ⅱゴジュラス、の方が一般常識ですけどね。当然です!」

慣れた様子で、座席に乗り込み、シートベルトを締めていく。

「そもそも、あなた元はガイロス帝国に逃げ込んだゼネバス系の科学者がネオゼネバス帝国作るために作られたものなのに、どういう訳か共和国に鹵獲されて、機動戦の主力ゾイドになったいきさつがありますしね」

ピアノでも弾くかのようにコンソールを操作し、この『メカ生体』を操作するためのOSを立ち上げる。

「コンバットシステムよし……フリーズしないでくださいよー?」

そして、彼女が操縦桿を握ると同時に、この巨大なライオンに似た金属の塊が四肢を伸ばし立ち上がる。

「さあ、行きましょう、RZ-041『ライガーゼロ』——私の、クロムウエル!!」  
ぐおおおお、と天高く叫ぶソレ——ライガーゼロ、愛称『クロムウエル』は、走り出す。

\*\*\*

惑星Zi、そこには、

優れた戦闘能力を持つメカ生体、『ゾイド』がいた。

## その2

惑星Zi、西方大陸エウロペ、ミューズ森林地帯からロブ平野方面に訳50キロにある都市『ニューリヴァプール』。

の、ゾイド及び通常車両兼用道路の交差点

『はーい、押さなーい、押さなーい！ そっちのワークトータスは自家用車踏まないようにー！』

『そのコマンドウルフ!! 背中のライフルで車を脅さない!! ゾイドウオーリアーか!?!』

そこは今日も渋滞だった。

ゾイドが、人が入り乱れ、クラクションと鳴き声が響きわたる。

『速くしてくれよお、仕事遅れちゃうよお!』

『くおおらあああ、そのマードー!! いい加減にしないと逮捕するぞお!?!』

惑星Zi最速の一角であるゾイドの一体『EMZ-13 (01) マード』に、交通整理中のゴドス重装型警察使用が、88ミリ市街戦ゾイド制圧用ライフルを向ける。

『ちよ、民間人に何を向けてるんですかあ!?!』

『うるさい！ このぐらいいんとこいつらはつけあがるばかりだ！』

あわてて、同じく交通整理中のEZ-027『レブラプター』警察使用が駆け寄り、そのゴドスを止める。

『また始末書かされますよお？』

『お前は風族だから知らんだろうがな、地球移民である俺の家の家訓にこうある！

『犯罪者は即往生』だ！』

『んな無茶苦茶なあ……』

と、言いつつもちゃんと交通整理をしている辺り、彼らも優秀な警察官なのだろう。

『ごらあ、そこ!! 車に迷惑をかけるな、ぶつ放すぞ!!』

……人格以外は。

と、その時、遠くでガシガシという大きな音が聞こえる。

『この音、どこかで4足歩行ゾイドで速度違反をしているな!?!』

『なんで嬉しそうなんですか!?!』

と、言っている前に、その音がどんどん大きくなっていく。

『ぐつつつつ…… 来るなら来てみるお!!』

こちとら、もう銃の装填はおわつとるんだ!!』

『落ち着いて！ コマンドウルフか、それに近いゾイド相手とはいえ、その砲じゃ絶対に

大参事ですって！」

しるかあ、とゴドスが、88ミリと実戦でも通じる方を音の方向——ちようど、渋滞が幾分かマシな方向に向ける。

『きやがれええ！ そして往生せい……や……あ？』

その姿が見える。

予想以上に大きな、4足歩行の強い音を響かせて、来る。

中型じゃない、アレは……

『お、大型ゾイ、ド……？』

『な、あ、あ、れ、って、ら、らら……！』

それが、大きく跳躍し、交差点を、渋滞をも飛び越える。

『ライガーゼロおおっつ?!?!』

手ごろなワークトータスを踏み越えて——カノントータスになっただけあつて頑丈で、多少揺れた程度で動じない——ライガーゼロは渋滞を抜けた。

\*\*\*

「交通違反上等ですよ——」

現在時速、145・2km/h。

ゾイドによる機動戦の始祖、ゼネバス帝国の末裔たる技術は、その速度ですら『巡航』

速度だ。

「このまま、グラム湖近くの学校まで!!」

交通違反なんてみんなしているし、そんな事よりも初日に遅れる方が大問題です!

ぐおおお、と叫ぶライガーゼロ、ことクロムウエル。

どうも賛同したわけではなく、コックピットごと後ろを向く。

「げえ、もう見つかりました!?!」

後ろから、2機の小型ゾイドが全速力で追いかけて来ていた。

\*\*\*

『待てええええええええ!!』

ゴドスの最高速度は150 km/h、今ほとんどその速度で走っており、表情の见えないゴドスも心なしか苦しそうだ。

『無茶すぎですよ! ここは僕に任せて!』

と、そこで210 km/hは叩き出せる、相方のレブラプターが前に躍り出た。

\*\*\*

「やっぱり、レブラプターは軍よりも警察が似合いますね、そもそも火器らしい火器のない機体なんて普通考えますかアレ?」

帝国の黒歴史ではありますよね、改修してもパイルバンカーとかいうふざけた仕様



ですし！」

とはいえ、トリナは静かに焦った笑みを浮かべる。

「やっぱ速いですね、限定OS（※この場合『オーガノイドシステム』の略）積んであるだけあって！」

ならば、トリナは左手のスロットルレバーを握る。

「クロムウエル、本気出しますよ!!」

スロットルを全開にする。

その途端、ライガーゼロたる容姿の特徴、その背部にあるイオンブースターが開き、機体が加速する。

「パワー、ミリタリー（出力全開）！」

数秒で速度メーターが300を突破、最高速度307km/hを叩きだす。

いつもの心地よいG、景色がどんどん一変する。

「振り切りなさい、クロムウエル！」

始業式に遅刻して私がハブられないためにっ!!」

そんな私利私欲が通じているのかはわからないが、クロムウエルは獅子の咆哮をあげて走る。

\*\*\*

『だめだあ、追いつけない!』

特殊アスファルトの道路は、ドリフトするように止まるレブラプターの足が火花を散らすほどに踏ん張っても、焦げ目ぐらいいしか残さなかった。

『はーっ、はーっ……ええい、逃がした!!』

と、ようやく追いついたゴドスが静かに近づき、中にいる警官がそんな声を出す。

『しっかし、まさかライガーゼロをこの目で見れるなんて……世の中わからないもんですねえ?』

『ふん! どうせ、明日もここを通る!』

え、と驚くレブラプターに乗る警官に、ゴドスの中から相棒の警官が言う。

『あんなもんに乗ってこんなことやるのはただ一人だけだ!』

この先の『ミューズ学園』の生徒で、寝坊した人間、ただそれだけだ!』

くそう、と言いながら、彼はもう見えなくなった方向へ、88ミリ砲を撃つ。

『ちよ、始末書書かされますよ!』

『ウ覚えてろおおおお、悪ガキめえ!! 今度こそ引導を渡して——』

と、そこまで叫んだところで、再び何かの足音が後ろから聞こえる。

『このパターン……!』

『ま、またか!?!』

後ろを振り向く二人。

その後ろから迫るのは――

『ま、まただあ――ツツ?!?!』

再び、今度は中型ゾイドが2体を飛び越える。

銀と赤の、ライオンに似た流線型のゾイドが着地し、走り去る。

『な、なんだ、あのゾイド?』

『ライガー……じゃない?』

その容姿は、二人の見たことが無い物だった。

その謎の4足歩行ゾイドが去っていく。

『……つてか、交通整理どうしましよ?』

『ぬわあ!?! しまったあああああああ!!!』

## その3

ミューズ森林地帯幹線道路入口

「む?」

ライガーゼロのレーダーが、後ろから迫る高速移動体をとらえた。

「後ろから……速い!」

しかもこの速度……!」

レーダー波のドップラー効果、それが導く後方の移動体の速度は——320km／

h。

「なんですかこの速度……! ライトニングサイクスの315キロを超えている……!」

ガイロス帝国製高速格闘戦ゾイド、EZ-035『ライトニングサイクス』の最高速度を超えるゾイドは、リナが知る限りで4体しかない。

「マーダ……? まずそれ以外だと、惑星Zi史上、最も中2臭いゾイドになりますけど

……!」

普通なら、マーダが妥当だろうし、もう一つはまず見るなどない。

……だがもし、トリナの心に疑問が浮かぶ。

「もし……もしも、もしかして……アレだったら……!」

どのみち、ライガーゼロの最高速度を超えている。

このクロムウエル——はるか過去の時代、自分の起源たる地球の民族が持っていた、快速巡航戦車の名前を関するこのゾイドでも、追いつかれる。

「なら見てやりませうとも! 疑問を解くことにためらってはいけません!」

と、思っている内に、目標がどんどん近づいてくる。

中2が出るか、マードが出るか……それとも、

(来た……)

クロムウエルのすぐ横を、弾丸のように飛び出す影。

「!!」

息を飲む。

それは、ライガーと同じ4足歩行型、そしてライオン型ゾイド。

銀色の全身を覆う流線型の装甲、そこから見える赤いフレーム。

(これは……!)

動き回る足の構造は、案外簡素で、なおかつ高速機動戦において真価を発揮するであろう頑丈さを持つ。

(このゾイドは……!)

四肢の指は割れていない、装甲板のみの爪。両肩から覗くビームガン、特徴的な胸部105ミリ衝撃砲と周りのビーム砲。

「間違いない……!」

そんなゾイドなど、リナは一つしか知らない。

「ライジジャー……!」

EHI-09『ライジジャー』……! ゼネバス帝国最後の機体……!」

と、その神がかったタイミングで相手がこちらに気付き、速度をこちらに合わせてくる。

『———そのライガーゼロ! 聞こえるか?』

「っ! まさかライジジャー乗ってる人ですか!」

む、とそのライジジャーに乗っているであろう……意外な事に女性の声が、反応を示す。

『貴殿、まさかライジジャーを知っているのか!』

「知っていますとも!! 最高時速320km/h、機動力、火力、おそらく防御力も最高レベルでまとまっていたとされる、セイバータイガー……いえ、サーベルタイガーの補佐にはもつたない中型ゾイド!」

『なんと!』

「かつての第1次中央大陸戦争時代、この機体が投入されていれば戦況はどうなるかわ

からなかった埋もれた名機を知らない方が失礼です！」

おお、とはつきりわかるほどうれしそうな声が漏れる。

『貴殿が良識者であることはよくわかるな？』

我が中等学校時代は、ライジヤーが新型だとよく勘違いをされていた』

「うっわ、そいつらつて絶対ライガー＝共和国とかいうふざけた思想の持ち主ですよー

！」

『機動戦を先に始めたのは、我が先祖たるゼネバスの民たちだと言うのに』

「むしろ共和国は砲撃の国でしょう!？」

『うむ、それで我が始祖も負けたのだ』

この人、分かってらっしゃる！

という認識が二人の間に生まれた瞬間だった。

『だが、この理解される喜びに浸る暇はないようだ。すでに校門が見える距離まで来て  
いる』

と、2体のゾイドの先、このミュージズ森林地帯に鎮座する建物——『私立ミュージズ学園』の校門が見え始めている。

「しくじりましたね……もう校門が閉まり始めていますよ……!」

リナの言うとおり、校門が閉まり始めていた。

『うむ、これは最高速度で通過せねばいけない状況であろう。』

しかし問題もある、あの校舎との距離——」

「ええ、ぜんっぜん、足りない!」

このまま突っ込めば、おそらくは校舎にぶつかるだろう。人間にとってはかなり広い校門付近であろうとも、ゾイドにはとても小さい。

『貴殿はどうするつもりか?』

「人身事故+施設破壊よりは、施設破壊の方がいいと言う理論を持ち込むつもりですよー?」

さあて、トリナは行動に移る。

「いいですよお、クロムウエル!!」

クロムウエルが吠えると同時に、顔の両脇の排熱機構——たてがみ状のそれが開く。

「あなたはギリギリでブレーキをお願いします!」

『何かするつもりのようなだ、乗っておこう!』

了承は得た、後はやるだけ。

「この技は叫ぶのがお約束です!」

ふおおん、とクロムウエルの爪が黄金に輝き、ライガーゼロ最強の格闘武装が目覚



ます。

「ストライクッ！」

レーザー……!!」

そして、扉が閉まりきる瞬間、2体のゾイドが校門をくぐったその時、

「クロオ————ツツ!!」

舗装された綺麗な道に、それを叩き込む。

『なんと!』

「くう————っ、クロムウエエエツル!!」

その時、ブレーキをかけると同時に、同じくブレーキをかけたライジャラーの前に4つ足ドリフトで回り込み、

「ライガーズロよりライジャラーの方が絶対希少価値高いですし!」

そ、とライジャラーの鼻先が当たった瞬間、最大の力でストライクレーザークロウを地面に食い込ませる。

「多少壊れても許してくださいさああああああい!!」

そして、大きく地面をえぐったまま、急速に速度を落としていき、

コッソ、と校舎に当たって、止まった。

「……はあ……」

そこで、リナは額の汗をぬぐう。

「うーん、どうも無事みたいですねー?」

「何とか、な……ふう、どうも貴殿はよほど荒い操縦が好きらしい!」

「すべてはライジャーが無傷という結果の為!」

にべもなく言うリナに、ライジャーのパイロットらしき女学生はフッフ、と楽しそうに笑った。

『——その生徒!! 遅刻したくないのはわかるが何をしている!』

始業式が終わったら、生徒指導室に連行する!』

と、校内放送用のスピーカーまで使って、そんな怒声が響く。

「あらら、やっちゃいましたね、どうも」

と、いいつつリナの顔に反省の色は、全くなかった。

『よくいう……ええと……』

「おっとつと、そう言えば名前いうの忘れてましたねー」

と、そこでリナはそのライジャーの乗り手に、自分の名を名乗る。

「私、リナソレーネ・アシユワースって言います。

ああ、風族じゃなくて、地球移民4世ですよ?」

\*\*\*

こうして、このミューズ学園にて、彼女たちの生活が始まった。

## 第1話：1年C組

### その1

無事、始業式と入学式に出ることができたりナ達は、生徒指導室で叱られていた。

「——以上だ。今後とも問題を起こすなよ?」

「はい」

フィリア・W・ヴァルツァー、という名前のガイロス系らしい女性の言葉に、気のな  
い返事で返すリナ。

全く反省していない。

「——申し訳ない、ヴァルツァー先生」

と、その隣で謝る生徒がもう一人。

オレンジ色の髪をひとくくりにし、やや赤茶色の肌、そしてより濃い同じ色の瞳を持  
つ、それはそれは凛々しく美しい印象を持つ少女。

恐らくは地底族であろう彼女の、その凛とした雰囲気は、やや無礼な物言いも許され  
る気がした。

「……まさか、お前らが二人もそろって私の担当クラスだとは驚いたよ。

リナソレーネ・アシユワース、そして、ヒルデガルド・ターレス」

ああ、そんな名前だったんだ、と自分は名乗ったものの名前を聞いていなかったリナは驚いた。

「まあ、暴れ馬は嫌いじゃない。無理に『調整』して力を殺すのもおしい」

人の事なんだと思っっているんだか、と思いつつも、黙ってリナは聞き耳を立てる。

隣のヒルデガルドと言う女生徒も、黙って聞いているのだからと。

「……それはそうと、一つ尋ねるが」

と、フィリアがやや声音を変えて二人に尋ねる。

「はい」「なにか?」

「お前らの突破した交通整理をしていた警官な、アレはニューリバプールの中でも相当悪名高い武装警官隊らしい。なんでもすぐにぶつ放すから、ゾイドの被害が絶えないぞうだ」

「そう言えば後ろで撃たれていたような……まあ、つつきちゃいました♪」

「右に同じ、ですな」

「そうか、お前たち見どころがまだあるな? ここで素直に交通規制を守っていたよう

じゃ、半人前もいい所だからな」

なんて先生だ、と思いつつも、なんだかおもしろそうな先生だと思いうりナだった。

「さ、さっさと洋室に行け。」

どうせホームルームまで私はいかん、今のうちにクラスメイトの顔を覚えて置け」と、そう言つて手を振り、行けと言いはじめる。

「はい」

「失礼します」

断る理由もなく、二人は一礼して職員室を出て行つた。

\*\*\*

「改めて名乗らせてもらう、リナソレーネ殿。」

私が、あのライジャールの使い手、ヒルデガルド・ターレスだ」

やや慇懃無礼だが、その高貴そうな立ち振る舞いはそれをごく自然な物だとリナに理解させてしまう。

リナにとっての第1印象は、「絶対どつか帝国系の貴族の末裔だこの人」だった。

「どうも、改めまして、私はリナソレーネ・アシユワースです」

あ、長いのでリナでいいですよ？」

「ふむ、そうか。では言葉に甘えさせてもらうでしょうか、リナ殿」

ただ、違うのは成金とかそんな輩ではなく、確実に相当な高位の貴族系の人物であり、こんな立ち振る舞いを幼い時から仕込まれている、ともリナは理解していた。

この、地底族の色が濃く出た容姿である彼女、それでいて凜とした美しさのある、自分の可愛らしさとは別の女性の魅力がある彼女は、間違いなく本物の――

「では、リナ殿、私の事も気軽に『ヒルダ』とでも呼んでくれ」

と、そこまで考えたところで、そんな声がかげられた。

「ええ、ではヒルダさん、で」

「うむ」

と、笑顔で返してくれる辺り、どうも性格は良いようだ、とリナは判断した。

とりあえずこれでクラス内における女子グループの一つを作れそうだ、とも

(ハブられる心配はこれで、無―し！)

初日から上々です！)

そんな微妙にリナの『女の計算高い思考』を知るかとはともかく、

「それはそうと、リナ殿がライジヤールを知っているとは驚きだ。

何せ、前にいた所では誰一人もあの名機を知らなかったからな」

これは、とリナに衝撃が走る。

「い……いくらなんでもそんな環境は悲しすぎますでしょう!?!」

がぼつ、という擬音が似合うほど素早くヒルダの顔のすぐ前まで顔を持ってきて、叫

ぶ。

「それは……それは、ライジャーは……ライジャーは、ゼネバス帝国の終焉間際に作られ始めたために、ほぼ一切戦線に出ることなく終わった不遇の機体とはいえ……!!

仮にもゼネバスの名を冠しておきながら、知らない人しかいないだなんて……!!」  
「うむ、そうなのだ。」

「どうもこいつも、ゼロイクスだのダークスパイナーだのと……シユトルヒやデイメトロドンはまだ許せるが、」

「それは許せませぬー、どれもゼネバス帝国の名機には入りますしねー」

「後、イグアンだな。あの縁の下の力持ちがいなければ、」

「ゼネバス帝国は一瞬で積んでいたでしようしねー」

イグアンちゃんマジ天使、とリナが言ったところで、ヒルダがなぜネオゼネバスに配備されなかったのか、とうなずく。

実際、今話にでたEZ-017「イグアン」は、ゴドスと対抗するために作られた機体だけあって、ゴドスと同等の性能でありながら、ゴドス以上に火力が高い機体だった。

生産コストから考えても、当時資源的に切迫していたゼネバス帝国、ガイロス帝国の両社は、率先して戦線を支えるべく使っていた間違いのない名機だ。

……ここだけの話、ガイロス帝国の元陸戦ゾイド乗りの中では、レブラプターに機種転換する時期になっても、イグアンを使い活躍した兵士が多い。



「そもそも、レブなんとかみたくに火器の無い機体を小型機で量産するとか、アホの極みですかー？」

「面目ないな……なぜ、格闘武器だけで共和国の砲撃部隊を突破できると当時は思っていたのか……」

やっぱリイグアン、と二人は納得してうなづく。

……まあ、レブプラプターもいいゾイドではある。だがそれだけだ。  
純粹格闘戦機で戦争に勝てるはずがない。

「おっと、話している間についたみたいですねー？」

「むっ？」

と、二人の視線の先に目的の教室——1年C組にたどり着く。

「もう教室か。一応は同クラスの友もできたが、クラスにうまく私はなじめるだろうか？」

「とりあえず、貴族口調を押さえれば可能じゃないですかあ？」

「ほう、それは困った。」

これではクラスでの友は一人だけのさびしい学園生活になってしまう」

ははは、と笑って、二人はクラスの扉を開いた。

ガラララー、

「——てめえ、もっぺん言ってみろゴラア!?」

「——ええ、何度でも言つてやろうじゃない!

この脳筋女!!」

「——あのー、二人ともどうかそのへんで」

そのの光景を一言で表せば「濃い」だった。

中にあるクラスメイトの顔、というよりも雰囲気。

まずがなり立てているのはいかにも脳筋そうな不良女子生徒で、それと言い合いをしているのが、誰がどう見ても『メガネをかけた優等生で堅物の委員長』な女子生徒、

その中心に立つて止めようとしているのが、なぜか頭に黒く変わった意匠の十字の飾りのついた帽子をかぶった女子生徒であり、

「……………」

なぜかその様子を窓の端の席で見ている、銀色のながい長髪的女子生徒は仮面をかぶっており、

「ああ、私だ。昨日伝え忘れた案件だが——」

「……………」

どう見ても制服がコスプレにしか見えない、ダンディなオヤジと、その近くで無言で資料を渡す褐色で背の低い女子生徒がいたり、

「あー、髪が決まらねえー」

「おい、どつちに賭けるアレ？」

「えつと……えつと？」

「ふん！ ふん!!」

他にも今風の男から、気の弱そうな女の子から、不良っぽいのやら筋トレ中やら……

「うわ、私のクラス、濃すぎー」

リナの言葉に、ヒルダも思わず苦笑していた。

## その2

それは、ともかく、

「んだとコラ、このメガネ女あ!？」

「何度だつて言つてやろうじゃないのよお!!」

「だから2人とも落ち着いてでありますよー!」

よく見れば喧嘩している場所がどうもリナの席だったらしいので、とりあえず近づいてみる。

「勝手に人の席に移動するのはやめなさいよ!!」

「てめえの席じゃねーし良いだろ!？」

「えー、その理屈はおかしくないでしょうか?」

大体状況は理解した。

「あの一、そこ私の席なんですけどー」

「あ!？」

とりあえずの一言にも、まさしくな返答が返される。

見ればその不良女子生徒、顔に赤いラインが見える。

刺青じゃないとすれば……西方民族系の人間だろうか？

「あ、じゃなくてー、そこ私の席だつて言ってるんですよー？」

「しつてるわ!!」

「じゃあ、どいてください。簡単な話でしょう？」

「てめえ、と言つて予想通りこちらに矛先を向け、さらに懐からバタフライナイフまで取り出す。

(うわ、分かりやすすぎです)

「おらあ!!」

速いだけであまりにも直線的すぎた。

だからリナには片目をつぶつても『それを掴んでそらす』ことができた。

「あ?」

右わきで挟むようにナイフを持った相手の腕を挟み、体ごと捻る。

「ガッ!」

関節を外したために落ちたナイフをついでに掴み、そのまま腕を『捻り直し』背後に回る。

「い————ッ!」

面白いように痛そうな声をあげる相手を抑え込み、奪ったバタフライナイフを首にあてて笑う。

「はい、制圧♪」

チャキン、と頸動脈に冷たい感触を与えた上で、顔を青ざめたその女子生徒にリナは背後から声をかける。

「とりあえず初めましてー、この机の右上のシールの名前の文系女子生徒のリナソレーネ・アシユワースデーす♪

それで、お名前は？」

「あ…何を…」

「お・な・ま・え・は？」

軽く突きたててひい、と言わせる。別にサディストじゃないが、いい気味だと思ったりナだった。

「く………」

「く？」

「クレーエ……だ……！」

「ふふ、どうもー、クレーエさんですかー、へー変わった名前ですねー？  
で？」

どいてくれますかクレールエさん？」

青ざめた顔でこちらを見る不良生徒クレールエを見て、たぶん大丈夫だとリナはナイフを首から放す。

ついでにポケットにナイフをたたんでから入れて置いた。

「はーっ……はーっ……!!」

クレールエは何か言いたそうにこちらを見たが、すぐに青ざめた顔のまま自分の席に戻っていく。

その様子を見てリナは、ただ一言だけつぶやいた。

「ふう……」

あく怖かった。文系ですしい、荒事つて本当苦手なんですよー」

『いやそれはおかしい!!』

この叫びをクラス全員でしたその時、初めてクラスで一体感が生まれたとかなんとか。

「あのね！　いくらなんでもそれはおかしいわよ!？」

色々とおかしいわよ、本当!!」

と、リナに先程あの不良生徒と言いついていた、見る限り『校則に引っかかるなように髪を一つに束ねて勉強あるいは本の読み過ぎでメガネになった』と思われる女

子生徒がそう声置荒げて言う。

ついでに言えば、癖なのか左手を腰に当て右手でリナを指差している。

「えーと、見る限り小学校のころからクラスで委員長をやっついていそうなあなたは？」

「え、なんでそれを知って…!？」

見ればわかる、とはだれも言わなかった。

「じゃ、じゃなくて……」コホン。

……初めまして、リナソレーネ・アシユワースさん？

私はメルヴィン。メルヴィン・リッツ・フィールグッド。

髪色でわかりにくいけど、一応は海族の出身よ」

髪色はややブラウン、だが目が青く、肌も薄青。確かに海族の特徴だ。

それに考えても見れば、海族は単一にくくられているが入るが、地球系移民と同じく

複数の部族からなるので、当然の見た目だろう。

「そうですかー、よろしくお願ひしますねー、フィールグットさん。」

ところで親しみを込めて『いいんちよ』と呼んでもいいですかー？」

「結局私を委員長としか見ていないのね、あなたあ!？」

うふふー、と笑いながら「だってそんな今どき珍しいぐらいにお決まりのポーズで

突っ込みを入れるだなんて、ねえ？」と心の中で意地悪く思っていた。口には出さない



が。

「はーっ、はーっ……まあ、そんな事は良いわ、うん。別にいいの。」

ただし、いくら相手が不良生徒でもさつきみたいな事はやり過ぎではないのかしら？」

と、一転して神妙な面持ちで彼女は問いかける。

「あー、確かに。」

私みたいな弱い文系少女を大勢の屈強な不良で囲んで報復ー、なんてこともありませんしねえ？」

チラツ、とさつきの不良生徒を見る。

「チツ……そこまではしねーよ……クソが……！」

などと言つて、リナからそっぽを向くクレーエ。

「それ以外はするんですねー……あー怖い」

「多分それ以外されてもあなたは大丈夫なんじゃないかしら……？」

「やーですねー、私を見てくださいよーほら！」

私文系少女ですよー？ 見る限りでもただの文系少女。ここまでわかりやすい文系少女はいませんか？」

「ぶ、文系少女が、コマンド・サブレッション・アーツぶちかますでありますか……？」

と、今の今まで黙っていた、さつきまで喧嘩を仲裁しようとしていた人物が口を開いた。

その女子生徒……なぜか、帝国の軍帽にも似た、翼を広げたワシを模した徽章のような物がある帽子をかぶっている。

髪色は黒色、瞳はとび色……地球系移民だろうか？

「むむ？」

「そのあなた！ まさかコマンドサプレッションアーツをご存じで!？」

「知っておりますとも！」

共和国特殊部隊が対人制圧のために考案した格闘術を！

今の対ナイフ装備制圧、自機非武装状態パターン6の動きを見てピンとききました！」

この言葉を聞いた時、リナに衝撃が走る。

「そこまで覚えているとは……どこで資料を!？」

「月刊「ミリタリーパワーMAX」第26号の特別付録、『制圧の書』を持って、実践したことがあります！ ヴォー!」

「! ま、まさか……私以外に愛読者兼実践者がいるだなんて……!」

ところで、私は最後まで実践し、習得するのに4か月かかりましたけど、あなたは?」  
「自分は3ヶ月であります! もちろん毎日腕立て、腹筋! 背筋ともに鍛えてもいる

であります！」

がしつ、と自然と二人は腕を組んでいた。

「…自分の名前は、オティーリエ・V・カリウスであります…！」

地球系ドイツ人移民4世、趣味は歴史と軍事を調べる事！

「リナとでも呼んでください、オティーリエさん…！」

後で図書室でロイ・ジー・トーマス氏の本探しませんか？」

「喜んで！」

こうして、気が付けば謎の友情が生まれていた。

「……とここで、だな？」

と、ここで今までずっと黙っていたヒルダが、静かに咳払いをしてこうつぶやく。

「もう初めてのホームルームの時間だなのだが、

皆、席に着かなくていいのか？」

キーン、コーン、カーン、コーン

「「あ」」

今まで圧倒されていて何も言わず立っていたメルヴィンを含め、全員が間抜けな顔をしていた。

「……やれやれ、コレが現代（いまどき）の学生という訳か……退屈なささそうだ」

「兄貴ー、オヤジ臭いよー?」

どうでもいいが、この一連の出来事を近くにいたあのどう見てもオヤジの学生と褐色の女子生徒がそう締めくくっていたとかなんとか。

## その3

時刻は、9時50分。ホームルームが始まる。

「総員、傾注。」

これより第1回のホームルームを始める」

と、このクラスの担任であるフィリア・W・バルツァーがそう全体に声をかける。心なしか、クラス全体に緊張が走る。

「さて、まあよくもこの学校で私のクラスに配属されるような不幸者が毎年そろそろな……

今年入ってきたお前らは顔立ちから言っていかにも死にそうな奴らばかりだ。不幸を相乗させるなよ? 全員」

次に出てきた言葉は、それはそれは失礼な物言いだった。

何人かの生徒は軽く怒りの表情や驚きを見せるが、なおも檀上のフィリアは続ける。

「まあ、お前ら蛆虫共がここに來る理由なんぞ知らん。どうでもいいことだ、無理に語るな、時間の無駄だ。」

お前らに期待するのはゾイドを操るセンスと、スカスカな脳みそとはいえ勝てる戦術

を導き出せるであろうと言う事だけだ。

このクラスに来た以上、卒業まで私がお前らをただのクソ虫からまだまともなゾイド乗りのクソ虫に成長させてやる。

何か質問はあるか？」

先生質問です、なんでそこまで酷い事言うんですか？

誰もがそう言いたかった……だがやると言ったら必ずやるというフィリア先生の視線に耐えかねて何も言えなかった。

「はい、せんせー！」

約一名、リナを除き。

「なんだ、校門破壊犯？」

「そう言えばクラスでまだ来ていない子がいるようですけどお、ホームルーム始めちゃってもいいんですかあ？」

普通なら物怖じするか、酷いと反論するのだが、特にリナは反論せずに、先程から誰も座っていない真ん中の空席を指差して質問した。

「ああ、そこか。」

個人的事情で1日遅れで来るそうだ」

「へー、そうなんですかあ……」

「答えてやったんだから、総員間違ってもそこにいる女子生徒をいじめんなよ、生徒指導で帰りが遅れるのは御免こうむる。」

……一度しか言わないぞ？」

殺気のおかげで、全員覚えた。

「まあ、それはいい。個人的な話はここまでだ。」

簡単にこの学校のオリエンテーションをしてやる、感度の悪い耳を立ててそのスカスカな脳みそに叩き込んでおけ」

と、前置きをしてから彼女は話し始める。

「お前らが入学する前に読んでいた資料のおさらいだ。」

この学校は特殊でな、生徒募集は3年に一回しかやっていない」

このミューズ学園は、本当に募集は3年に一回しかやっていない。

募集した年の3年後に新たな入学者が入ってくる仕組みであり、卒業生は入学する生徒を見る前に卒業する。

「私立のくせしてよくそんなので学校が成り立っているなとつくづく思っているほどだ。」

まあ、つまりお前らは先輩も後輩もない。従うべき人間は教師だけだし、部活動だってお前らがいきなり主力だ。

……もつとも、部活動なんてまともな物はほとんどないがな」

部活あるのか……と一部の人間は思った。

というか、野球部で甲子園（この場合、東方大陸のスポーツ施設の名前）、などというベタな事をするイメージが無い。

「だが、良い事にこのやけに広い敷地と金がかかった施設のほとんどは、40人7クラス分だけの物だ。

その方が気兼ねが無いとも思えるがな」

まあ、そうではある。

窓を見れば、ミューズ森林地帯、さらにはロブ平野の広大な景色。

ここは幸い3階の校舎一番端の教室で、この学校に隣接するグラム湖も一望できる。

ここは、かつては西方大陸戦争の戦場だった場所でもある。

この地形の中でのゾイド戦、それを考えただけでも、胸が熱くなる。

それを、たった280人ぐらいだけで、使ってもいいのだ。

「まあ、私のクラスとしても、広大な土地というのはありがたい。

……おっと、そうだこれも説明を入れるのを忘れていた」

と、言つてフィリアは、昔ながらの非電子式の黒板に、古き良き白チョークで何かを書いていく。



「お前ら、クラス分けの話は聞いているか？」

この学校の理事長はどうも洒落好きでな、クラスわけにもある基準で生徒を分配している」

黒板に書かれた簡単な樹形図に、上に四角の中に『お前ら蛆虫』と書かれており、そこから分岐して、A、B、C……と、なぜかFの次にNと書かれたものが完成する。

「？ Fの次が……N？」

「勘は良いようだな、出席番号24番、メルヴィン・リッツ・フィールグット。

これは単純なアルファベット順ではないと言う事だ」

と言って即座に何かをアルファベットの下に書きこむ。

ちなみに今現在。惑星Ziの公用語は地球の英語とおなじ言語である。

「A組のAには、『アサルト』と言う意味がある」

『Assault』の文字を書く。

「本当は強襲の意味だが、転じてここは格闘戦を意味している。

このクラスにいるのが大体の場合格闘戦至上主義で将来はゾイドウォーリアになりたいと言っている輩どもだ……高速機動戦系の4足歩行のゾイドを持つていることが多いな」

要するにコマンドウルフをはじめとしたものだろう。

「同じように、B組は「BLOX」の頭文字だ。

東方大陸製の人工ゾイドを自在に操れる人間が多い。チェンジマイズとかいう曲芸も得意なクラスだ」

合体・変形などという芸当は、確かに他のゾイドにはなかなかできない。

場合によっては全く違う性能のゾイドもできる、変幻自在なゾイドたちだ。

「まあ、所詮2つは曲芸の真似事だ。別に気にするほどでもない」

それを曲芸と言いつけるのが、この先生なのだ。

クラス全員が、この先生の性格を理解した。

「D組は『Detonator』、信管の名からか、手先が器用な戦闘工兵系のゾイド専門のクラスだ。ついでに補給や輸送、簡易なゾイド整備もできる連中だ、侮るなよ？」

E組は『Electronic』、電子戦の頭文字だ。

一番面倒くさい陰険でクソみたいなクラスだ。対策を練らないとクソツタレな笑顔でバカにしてくるからお前らはこいつらの倒し方だけは真剣に考えるように」

なぜかE組にだけ敵意剥き出しでそう言い捨てる。

「それとF組は『Fighter』、飛行ゾイド中心のクラスだ、もちろん攻撃機も爆撃機も所有している。頭上に気を付けろよ？」

最後のNは——」

「『Navy』、海軍とかいうんだろどうせ？」

と、机の上に足を置き、ふんぞり返った姿勢で、クレエエが吐き捨てるように言う。

「ほう？ 出席番号18番、クレエエ……名字はないのか？」

「知らんね。先生？」

「まあ、どうでもいいが洞察だけは鋭いな。山猿のくせしてそこまで見抜くか」

実際、その会話を聞いていたリナは、さっきのヤンキーが良くそんな事をわかるな、と驚いていた。

「グラム湖の水深と大きさなら可能だろ？」

というか、聞こえてんだよ、水の中からの気持ちよさそうな鳴き声かさ」

と、クレエエの言葉に、クラス全員が聞き耳を立てる。

………かすかに、聞こえた。

「態度はともかく、一つ最後に答えろ。

なんで気持ちよさそうだと思っただけ？」

「あ？ いいだろ、そう思っただけだよ」

「………そうか。」

じゃあ今回は何もしないでやるが、さっきと足を降ろさないと、」

チャカツ、と音がしたと思えば、教師であるはずのフィリアの手に銃が握られていた。

指を引き金にかけない辺り、プロの握り方だ。

「へ?」

「え…!?!」「ふあ!?!」「ええ!?!」

声を漏らす生徒もいれば、一気に血の気の引く人間もいた。

(あ、BICLER、HG-45、帝国軍標準装備タイプだ)

若干2名、銃の種類まで特定できた。具体的にはリナとオテーリエの2名だった。

「本物だ。整備も行き届かせている。」

「この教室にいる限り生殺与奪件もあるわけだ」

「あ、あるわけねーだろ…!?! じよ、冗談」

ダン、ダン、と音が響き、後ろの壁に穴が空く。

「本気だ」

「い、イカレてやがる…!」

「そう言う反骨精神は嫌いじゃないが、授業態度位まともにしろ。」

死体の始末ほど面倒なことはない」

素直に従わざるを得なかった。

さすがに、ふんぞり返った足を机に戻す。

「良し。」

さて、で、最後は我がクラスだ」

と言って、空白だったCの文字の下に、残りの文字を示す。

「このクラスはな、古来よりそれが出た瞬間から、戦場を塗り替え、今現在ですら確実に戦争に勝てるある武器の名を冠してある」

その下に書かれた文字は、「onnon」。

Cから続けて読むと、「Connon」。

「大砲（キャノン）……」

「そうだ。」

「ここは砲撃と射撃を主眼に置き、他以上に『実戦』を念頭に置いた授業をするクラスだ」

古今東西、太古の昔、その武器が誕生したときから、

砲撃戦とは、戦場において最も重要な位置にある戦いである。

「お前たち自身、十分自分のスキルを知っているだろうが、お前たちは新入生の中でもとりわけ射撃適正や指揮官適正の高い物を選んだつもりだ。」

ああ、言い忘れたが生徒をどのクラスに入れるかは、そのクラスの担任の仕事でなへえ、とりなは周りを見る。

確かに、意外と頭の下さそうな顔つきが多い。学力ではない、知性の意味合いでだ。

「お前ら、喜べ。おそらくゾイドウォーリアーになろうと、戦場で活躍しようとして、どうでも生きられる、人生を簡単に選べられるよう、みっちり鍛えてやる。

まだ適性が高いと言うだけで、お前らはクソだ。クソ以下の蛆虫に過ぎん。

幸いなことに、家に変えればママのところまで泣きごとが言える学生の身分だ。

私は差別が嫌いだからな、お前らクソ学生はすべてが等しくクソ学生でしかない。

だから授業で容赦はしない、泣いたり笑ったりできなくしてやる。

それと、最後にこれだけは言っておく。

私の命令は絶対服従だ。口でゲロだのクソだの吐く前に前と後ろにマームを付けろ、  
とまでは言わないが、「はい、先生」ぐらいいは言え。

休み時間の間好きなかだけ悪態つかせるんだから、授業中は大人しくしている。

ロボットのよう、ロードゲイルの指揮下のキメラブロックスのように、大人しく従え！

いいな？」

『はい先生』

クラス全員が、この無茶に一応従う。

「声が小さい！ もう一度！」

『はい、先生！』

「お前らそろってタマ落としたのか!? もう一度、腹から力を込めて!!」  
『はい、先生!!』

よし、とどうもフィリアは納得したようだった。

何というか、すぐどこかで聞いたことのあるやり取りだった。

「時間か……どうせまだこれから、たつぷりと授業はある。」

午後はゾイドの慣らしやお披露目にグラウンドに予約は入れてやった、それまでは自由時間だ。

ああ、だが他はまだホームルーム中だろうから、ヒトニーニーマル（12：20）までは大人しく教室の中で過ごしている。

私は、少し用があるから席を外す」

以上、と言つてフィリアは一度クラス全員を一瞥する。

「起立！」

「ごそこそ、と全員が立ち上がる。」

「礼！」

バラツキのある角度でお辞儀をする。

「これで解散だ。」

それと私がいないうちに学級内の委員を決めて置け。号令係もだ。

では失礼する」

そう言つて、フィリアは教室を出て行つた。

誰からともなく、全員が鋭い緊張から解放された中、密かに持つてきていた最高級の保温水筒の中のダーズリン茶葉のレモンティーを取り出したリナは、蓋のカップに注ぎ、一口含んで嚙下してから、ゆっくり息を吐いてこう言つた。

「なんてハートマンシップにあふれた先生なんですかねえ……」

海兵隊の先任曹長の隠語から生まれたある意味での平等精神の俗称を言いつつ、こんなクラスに配属された自分にため息をついていた。



## その4

「と、取り合えずみんないいかしら!？」

一応、皆でクラススの委員を決めておきましょう!」

と、ガタツ、と立ちあがり、見た目通りの事をあのメルヴェインが言いはじめた。

「あー、そう言えば」「決めといた方がいいよなあ……」

なんて気のない返事を言いつつ、全員が立ち上がる。

「はーい、メルヴェインさん!」とりあえずあなたが委員長でいいですか?」

「いきなりね!」というか、そんなに私を委員長にしたいのかしらあ!？」

と、余りにも典型的なツツコミをくらい、余計にこれほど委員長にさせたい人間はないな、と思うリナ。性格が悪い。

「それに、仮にも一応は西方大陸、それも民主国家ヘリック共和国領の出身よ!

私は皆が認めない限り、そういうトップになる気はないわ!」

まるで、伝説のヘリック共和国大統領、ヘリック・ムーロア2世が守護霊にいるかのような言葉だった。

「だそうですよ?」

そんなわけで、全員はどうぞとどうぞと一糸乱れず委員長の座を彼女に明け渡した。

「ちよ、あなた達考えないの!？」

「考えない、というよりは考えられる人が誰かという事を見据えての判断でしょうねー。

という訳で、『委員長』！ 次の指示をお願いします!」

お願いします、と言う言葉が、メルヴィンを委員長にクラス全員が仕立てあげた事を今、示した。

「……うう、また委員長になってしまったわ……」

「仕方ないですねー、仕方ないですねー、キヤラ的に!」

まあ、安心してくださいよー、私副委員長に立候補しますし!」

え、と意外そうな顔をするメルヴィン。

「……な、なんでまた……」

「えー、だって副官ポジション、ってよくないですかあ?」

なんかこう、頭がよく見えると言うかあ?」

「そんな理由!？」

「まあまあ、ちゃんとお仕事しますからー、クラスに配るプリント持っていくのさぼったりするほど不真面目じゃありませんよお?」

「……何か釈然としないわ……あ、でも」

ガシリ、と突然リナの肩に手を置くメルヴェイン。

「あら、そう言う趣味ですか？」

「違うわよ！」

いい、あなたはどうも頭が回るようだし、正直言つて、今後の授業でも多分戦力になるのは確実よ。

こき使うからそのつもりでいてほしいわね。それだけよ」

その顔は、予想以上に真剣そのものだった。

「……………どうこき使うつもりで？」

「そりや色々ね。こんな学園に入るぐらいだもの、あなたもゾイド乗りとして名をはせたいとは思っているだろうし、腕を磨きたいでしょう？」

「うわ……………メルヴェインさん、ひよつとして案外体育会系？」

否定も肯定もしないが、視線はリナから離さないようだ。

「もう一度言うけど、3年間こき使ってやるわよ。覚悟しなさい」

「あははは……………」

ひよつとして、面倒な役回りをもらったのでは、と思うリナだった。

\*\*\*

「さて、全員良く聞きなさい！」

いい、もしも自分がやりたい係がある人間は、今から2分間だけ発言を許可するわ。

それ以降は私がすべての人事を決めるわ！ 異論は認めない！！

と、という言葉と共に、クラスの係分けが始まる。

「さあはじめ！ 発言権はそれ以降認めないわよ！！」

案外、メルヴィンはすごいテキパキと人事を決めて行った。

「よし、後の意見は無いわね！

ここからはすべて私の独断で決めるわ！」

と、程よく強行的、的確に人の意見を聴いてのクラスの役割分担を決め、なんとチャイムが鳴る10分前にすべてを片付けていた。

「では、解散！」

……ふう、疲れたわ、本当……」

\*\*\*

さて、昼休みとなった。

「リナ殿！ 図書室に一緒に行きませんか！？」

初期骨ゾイドちゃんたちの本がここにはあるそうですよ！」

「おお、良いですね〜！」

行きましよう！」

突然のオティーリエの言葉に、すぐにリナは紅茶とサンドイッチの手を止めて答えた。

「でも、一応はその前にランチだけ済ませてもいいですかあ？」

「あ、これは失敬！」

「どうせですし、一緒にいいですかね？」

「いいですよー」

では、と言って、すぐに自分の席から弁当の包みらしきものを持ってくるオティーリエ。

「隣の方、席は借りてもよろしいでありますか？」

「あー、いいよいいよ。僕もちょうどこの学食に行こうと思っていたところだから」

と、そこにいたごく普通のなんか優しそうな男子生徒に断って席を駆り、隣のリナの席とドッキングする。

「やっぱりメシはどの時代も憩いの場！ 腹が減っては戦が出来ぬ、と東方大陸の友人も言っているでありますし」

「ですねー♪ とところで、オティーリエさんは、どんなお弁当を？」

と、それに答えるように包みを開け、その中から金属製らしい銀光りする弁当を開ける。

そこにあるのは、じゃがバター2個、でかいソーセイジ2本、分厚いスパム、ホウレンソウのバター炒め。

「うわ、戦時中並に質素!!」

そして、意外と高カロリーな……太りそう……!」

「フッフッフ……あむ……ごくん。」

これでも、ちゃんと運動しているので、ぶくぶく肥ることはありませんよ」

一口スパムを食べ、キリツとした顔で笑うオティーリエ。

「へえ……フッフ、本当にそうですかあ……?」

「ん?」

次の瞬間、リナはオティーリエの胸を両手で正面からもんでいた。

いや、女の子らしい指でつかみきれない程大きい……ではなく、

「おっ、これはまたこの食事に似合うだけの」

どうでもいいが、ここに残っていた弁当勢の男子がガタツ、と立ちあがった。

「おうわあああああああ?!?!?!」

りく、リリリリリリリ、リナ殿お?!」

あわてて胸を押さえて離れるが、すでに感触をリナは完全にとらえきっていた。

「感触、手で触れた面積、ついでに言えば言葉通りの細身の骨格を見越しても、

これは、88のEとみましたっ!

いやはや、エレファンダー級の大きさですねぇ〜」

「なんでそれをおお!?」

じゃなくて、なんてことするのでありますかああああああ!!!」

あはは、と笑って謝りながら、リナは何かオティーリエをなだめようとする。

どうでもいいが、教室内弁当勢男子は、我が生涯にいつぺんの悔いなし、と言わんばかりに勝ち誇ったポーズをとっていた。

「むむむむ、じゃあ、リナ殿はどんな大きさなんでしょうか!?

大声で言っつてほしいのであります!!」

と、わざわざ指を指してまで大声で叫ぶオティーリエ。

予想を超える大胆な発言に少しだけ「やりすぎちゃいました」と舌を出しながら苦笑するリナに対し、

弁当勢の男子たちは、鋭い、まるで凶暴な野良ゾイドのような、野獣の眼光を放つ。

「まあ、しいて言うのであればあ?」

と、言っつてリナはわざと胸の下で腕を交差させる。

制服の上からでもかなり自己主張が強いのはわかりきっていたが、そうやって胸を強調されると、かなり大きいことがわかる。

他が細身な物だからこそ、よりその大きさが強調されている、二つのふくらみ。

「——ゴジュラス級、ですかねえ？」

その言葉がウソ偽りないのは、

少なくとも完全勝利したポーズのまま涙を流すこの場の男子たちが、保証するだろう。

「——ところで後ろの方たちい♪

後で私のクロムウエルちゃんのレーザーバイトの的にされたいですかあ？」

と、その笑顔の圧力で男子たちは一気に顔色を青く変え、ぶんぶんと高速で苦い表情の顔を横に振る。

フツフツフ、と笑うリナに引き下がり、男子たちは無言で涙を浮かべて食事に戻った。

「……これで、文句はないですよね？」

「リナ殿、恐ろしい人であります」

まあ、それはともかく、と言ってリナもサンドイッチを再び食べ始める。

「まずは食べてからと言う事で。」

あ、どうせですしい、こっちのニルギリ茶葉のストレートティー、差し上げます？」

「あ、アレ？ 水筒2本目？」

「嫌ですねえ、イギリス系移民なんですよ、私？」



紅茶が無かったら私の先祖は確実に干からびて死んでいるに決まっているじゃないですかあ」

と、言つて、プラスチック製のコップを二つ取り出して、片方に湯気とすつきりとした香りの立ち込める赤色の液体を注ぎ込んでいく。

「まあ、じゃあ一杯……おお、心が安らぐようなすつきりとした味が……」

「あ、よかつた。普通、ドイツ系地球移民の方つて、結構そう言うのに疎い人が多いですし」

「まあ、真面目一辺倒の堅物が多いのは認めるでありますよ、自分も人の事言えないであります」

と、言つて大きなじゃがバターの塊をフォークで刺したオティーリエは、それを一口で食べる。

「まあ、ただ。」

そう言うのであれば、イギリス系移民みたいに料理の味がまあ、食べられるほうが良かったかもしれないでありますか？」

「ちよつとお、それ酷くないですかあ？」

と、むくれるリナを尻目に、パリッ、とソーセージを噛んで咀嚼するオティーリエ。

「さっきの仕返しでありますよー、だ。」

自分だって子供みたいにムキになるぐらい精神面でできていないであります」

スパムはイギリス料理ですからね、と言っているのを尻目に、スパムと芋を突き刺して両方いっぺんに食べるオテーリーリエ。

「ん、惑星Ziの料理もいいですが、やっぱり先祖伝来の、地球産の料理の方がいいでありますなあ」

「もお、良い性格していますよー」

「そ、それはお互い様では…?」

ははは、と笑って食べている内に、二人は全部食べ終わった。

「じゃ、行きましょうか」

「了解（コピー）」

そうして二人は、気が付けば謎の友情が生まれた先程の男子たちの横を通り、教室を出る。

そうして向かった図書室で、

……まさか、あんなことが起こってようとは。

## 第2話：初めてのゾイドバトル

## その1

ミューズ学園、図書室。

いや、そこはもはやこの地域随一、いやこの大陸最大の『図書館』と言っても過言ではない。

そこにある書物は、かのロイ・ジー・トーマス氏の書いた、ゾイドと戦闘の歴史からはるか幻想の時代の神話、最新の情勢を知る資料まで、全てがそろっている。

「てめえ、謝れ!! 謝るまでやめねえぞゴラア?!」

「だーれーがー、謝りますか、このヤンキーごときがあ!!」

すべてがそろっているであろう、棚が揺れるほどのキャットファイトが勃発している。

「何が起こったこれ!?!」

とりあえず、図書室は静かに、を早速リナとオティーリエは破った。

\*\*\*

話は、二人が図書室に来る前から始まる。

「……なーんで、オレって肝心な時に運がねーんだろ」

クレールエがとぼとぼと顔をうつむかせて歩いていった。

「仕方がない。人の運命など、大きな流れの前では無意味だ」

と、そのクレールエの隣から、そんな透き通った声が聞こえる。

隣には、C組にいた、あの白い髪に仮面という、奇抜かつ妙に印象的な特徴を持った小柄な女子生徒がいた。

「お前がオレを一番不幸だと思わせる原因なんだよお!!」

「？」

「だー、何が悲しくて仮面被った変態と隣歩かなきやいけねーんだよおおおおお!!」  
仮面の下からでもわかるきよとんとした態度に対し、嘆くように大声をあげるクレールエ。

「仮面をかぶると変態なのか？」

「少なくとも恥ずかしくねえのか、チビ!」

「チビとは私か？」

「他にいんのかよ!?!」

「チビじゃない。私の名前は、シルバ・アッシュユだ」

「そう言う意味じゃねえええええ!!」

なんだよこいつ、と本日何度目かわからない言葉を吐く。

「なんでこんなのと、寄りにもよって図書委員にさせられるんだよ!」

「本は嫌いか?」

「そう言う事じゃねえけどよ……がらじゃねえよ……クソ」

はあ、とため息をついているうちに、その問題の図書室に到着する。

「本は良いぞ、歴史も軍事も、全て自身の力になる」

「知ってるよ、んなこと……でも、嫌いなものは嫌いなんだよ……」

このシルバ・アッシュとかいう謎のクラスメイトと喋るだけで、クレエの調子は狂いっぱなしだった。

そして、まだ釈然としないが図書委員の登録の為に扉を開く。

「——結局、ゾイドをどこまで手足のように扱うのが勝敗を決めるのですわー」

そして、余りにも信じられない言葉を聞く。

そのいけ好かない言葉は、これまたいけ好かない人間だと一目でわかるような、クレエが一番嫌いかにもお高くまとまった生徒の物だった。

「大体にして、人間が操縦する物の心に合わせる必要がおありですかしら?」

「ですわね、流石フツドさん!」

「やっぱり、ゾイドんて手足のように動かせばそれでいいのですわよね！」  
「さすが、ちやらちやらと、ゾイドの命は大事、だのなんだのいう輩とは違いますわ〜」  
おほほほ、だなんだと笑って、クレーエにとつて最も大事な『ダチ達』がバカにされる。

「……シルバ、だっけかあ、おチビ」

「なんだ？」

「お前は、隣にいたけど、止められなかった。

いいな」

「ふむ……主語はないが理解した」

クレーエは、腹の立つままに、ゆっくりとそれらに近づき。

「あー、ちよつといいかー？」

「はい？　なんでしょ——」

停学、退学、なんでも来い、と言わんばかりに、殴り掛かった。

\*\*\*

「——まあ、その後の話を聞く限りだと、どっちもどっちじゃないですかあ？」

「同感であります」

「誰がコイツといっしょだ（ですか）!?!」

偶然駆けつけたリナとオティーリエの二人は、図書室の机の上に二人の人物を抑えつけていた。

一人は、なぜか顔が殴られたかのように赤いクレイエ。

もう一人は、何処から見てもお嬢様な、しかし顔を大きく赤くはれさせた女子生徒だ。

「まだ、この野蛮人と決着がついていませんわ!!」

「上等だお嬢様! てめえ、ちよつと喧嘩慣れしているだけでオレにはかなわない事を教えてやらあ!!」

どうも、このお嬢様も中々、気性が荒いらしい。

とにかく、二人はもごもごと動いて、軍隊式の人のホールド状態を抜け出そうとしている。

「そのあなた! どうか放してください! 先に殴ってきたのはあつちですよ!」

「うーん……どーしましよーかねー……?」

「そこを何とか! A組のこのアリシア・フッドの誇りのために!」

「ん? ちよつと待ってください、ひよつとして、イギリス系地球移民の方ですかあ?」

「え、そ、そうですわよ……?」

「ならば、同族の好という事で♪」

ぱっ、とそのアリシア・フッドという生徒から手を放すリナ。

「いよつしやあああああですわああああ!!」

後でアツサム茶葉を差し上げます!」

「どうも〜」

「てめえ、このメガネ女2号お!! 裏切りやがったなアアアア!!」

クレーエは、より強く拘束を解こうともがき始める。

「なあ、そのの! 変な口調のお前!」

「酷い言い草でありますな、これから頼みごとをする相手に」

「うっ……」

「さて、クレーエ殿お? あなたの要望はよくわかるでありますよ?」

でも、それをかなえるためには条件があります」

「……おう、考えといてやるよ」

「んっん〜? 考えておくだけでありますかあ、これは守る気が無いと判断せざる負えませんなあ?」

「ウツ……い、いや、そんな、こと、するわけ……ないじゃ、ね、か?」

「今ここで、私の言う事を必ず聞く、と誓え。」

さもないと一生放さないし、殴られている間もずっと……」

「分かったア!! ばっくれね、誓う!!」



なんでもしてやるよ!!絶対!!」

「よくいえましたでありますよー」

ばっ、と手を放され、よっしやあ、とクレーエは再び立ち上がる。

「決着付けるぞクソアマア!!」

「体から性格を強制して差し上げますわあ!!」

バツ、とお互い殴り掛かった瞬間。

パスパス、と気の抜けた音と共に、初速が音速の小さな鉛玉が二人をかすめる。

「へ……?」

二人が振り向くと、そこには、

「よくもまあ、私が司書をしている場所でここまで派手に暴れられるものだ」

サープレッサー装着型の拳銃を構えた、我らがC組担任、ことフィリアがいた。

\*\*\*

「いやー、すみませんフィリア先生!!」

私のクラスの生徒がこんなことをしてしまつて!!」

生徒指導室、そこでA組担任の、いかにも体育会系っぽい小柄な先生、ヒビキ・ミド

リノ先生が元氣よく謝っていた。

「いえ、別にかまいませんよ、ミドリノ先生。」

問題は、この二人の決着です」

目の前には、プルプル震えながら、冷や汗をたらして正座するクレエとアリシアがいる。

ちなみに硬い床に直接である。

「さて、どうせこの部屋を出て数秒でまた喧嘩をするような気性の荒いバカども二人だ。

どう決着をつけてくれようか？」

「……」

まるで、何かを選別するような目つきで、二人を見るフィリア。

「まあ、予想していたが、どちらも反抗的な目つきだ。

いいぞ、だったら最高の舞台を用意してやる」

と、怪訝な顔になった二人に、フィリアは告げる。

「お前たち、午後は実はな、A組とC組の合同授業だ。

そこで決着をつけるといい」

え、と驚く二人に、悪魔のような笑顔のフィリアはこう続ける。

「お前らも一人前のゾイド乗りになりたければ、

「ゾイドバトルで決着をつけろ」

## その2

——キユワワワワアアアアアアアアツ!

上空を飛ぶストームソーダーの声が響く中、ミューズ森林地帯は静かに午後の授業に入っていた。

「てなわけで……すまん!!」

オレのせいで面倒なことになった!!」

パチン、と両手を合わせ、クレーエは珍しく頭を下げていた。

\*\*\*

会話だけでわかる内容なので、数分前の事を聞いてほしい。

「ふん、1対1のバトルなんて、わたくしの勝利が目に見えていますわ!」

「あ? てめえんとこの格闘バカなんざ、オレのクラスの雑魚一匹でも十分だゴラア!」

「なんですつて!! わたくしどころかわたくしの学友までもバカにする気!」

「実際馬鹿だろうよ、ええ!」

「先生、聞きました…?」

これは、2クラスによる総当たり戦で決着をつけるべきですわ……！」  
「いいだろう、面白そうだ」

\*\*\*

「オレだって、そりゃ朝から色々いきがってたけどよ、ここまでクラスに迷惑をかけるよ  
うなことは……なるべく、しないように思ってた……」

「面倒に巻き込んで悪い！ だけど——」

「いいえ、何を言っているの？」

「これはチャンスよ！」

「が、なぜか数時間前にクラス委員長に就任したばかりのメルヴェインは、一目でわかる  
ほど上機嫌だった。」

「え、な、なんだよ、委員長……!?!」

「バカね、初日からゾイドバトルに怖気づいたり、ましてや『面倒な事』だなんて言っ  
てどうするのよ！」

「いい？ 売られた喧嘩は必ず買え、売れる喧嘩は率先して売れ！」

「負ける負けなにかかわらず、とにかく全力を出して戦え、そして勝てる時は確実に  
勝つ！」

「卑怯、卑劣、怖がるな。他人の評価は賛否両論が当然！」

自分が強くなるために、手段は択ばない!

ただし、ある程度の賛成を得られること。民主的に、ね?

私の敬愛するヘリック2世大統領の、自伝の中の一節よ?

私達は、ゾイド乗りになるタメにここまで来たのよ!?

むしろ、スキルアップにいい近道じゃないの!」

と、軽くガッツポーズをしてまで声高々に語るメルヴィン。

\*\*\*

ちなみに、実は外でフィリアは、電子タバコをふかしていた。

「いつからここは共和国になったんだ……」

と、内容を聞いて小さくつぶやいていた。

\*\*\*

「で、でもよお……」

「何かしら?」

「……いくらゾイド乗りとしての適性があるからつつてもよ……あれだぜ?

オレ、そのメガネ2号、そこでずっと静かにしてるお嬢様、それぐらいしか、まともなゾイドに乗った経験ないんじゃないの?」

チラリ、とクラスを見ると、案外項垂れている顔は多かった……

「……はあ、なっさけないわね……」

そんなのじゃ、勝てる戦いも勝てないわよ、みんな！」

「勝てるかどうか分かったもんじゃないよ、委員長……」

だいたい中腹の席にいる気の弱そうな男子生徒が、そんな弱音を漏らす。

「……はー……なんでやる前からこんな弱気なのよ……」

頭を抱えるメルヴィンだが、意外とクラスの顔は重い。

まあ、この世代の人間たちに、自信を持って行動できる、と言う人間は少ないのだ……

「……」

そんな様子を、ヒルダは、静かに見ていた。

「……フム」

そして、あることを思い立ち、立ちあがる。

その様子に気づいたメルヴィンは、怪訝な顔になる。

「えつと、ターレスさん……?」

「メルヴィン殿、少々私に話す機会を与えてはくれないだろうか?」

「……それは、私にとってメリットになる事、書記?」

ちなみに、ヒルダはクラス委員の書記だった。

「それは、分からない。」

だが、それは今の状況にも言えることじゃないのか、とも私は疑問に思う」  
と、言つて、右手を仰々しく上げるヒルダ。

「諸君。今日、初めて会った者のみで構成された、全く新しい環境に慣れていないであらう、我が学友諸君。

諸君は、一体何を思つてここへ来たのだろうか？」

上げた手を、いつの間にか注目している生徒全員に向けるよう動かすヒルダ。

その動きに、妙に視線が言つてしまっている。

「皆、何か夢があるだろう。そして、自分はそれをかなえたいと真剣に思っている。

諸君、親愛なる学友諸君。

君たちは、まだこの学校の入試倍率を覚えているだろうか？」

全員、数か月前の事であり、よく覚えてる。

—— 10.4倍。

多いと思うだろうが、ゾイド乗り育成機関の倍率としては、標準的な物だ。

「思い出したまえ、その倍率を突破するために、してきた努力を。

思い出してくれ、自分の名前が合格者発表に会った時の事を。

諸君たちは選ばれた。

望みを持つて、それ選ばれたんだ。



いいかね、選ばれた君たちには、選ばれただけの価値がある。謙遜も美德だが、君たちに謙遜など必要ないのだ。

此度の戦い、不安もあるだろう。

だが考えても見たまえ、君たちは、この学校に選ばれたんだ。

それだけの力がある。それだけの価値がある。

それだけの才能が、見返りが、未来が、必ずある」

ここまでのこの言葉。この言葉だけで、全員引き込まれたように聞き入っている。

目が離せない。それは、彼女は美しい少女ではあるが……それ以上の、何か特別な魅力が、その姿に、その言葉に、あった。

「学友諸君、我が1年C組の親愛なる学友諸君。

恐れることはない、委員長も言っておられる。

負けることは恥ではない、戦うべき時に戦わぬのが愚かなのだ。

君たちは愚かか？ 違うだろう。

君たちは選ばれた人間だ。君たちは優秀な人間だ。

持てる力、そのすべてを発揮し、戦いに挑むことのできるだけの、優秀な人間なのだ」  
気が付けば、弱気そうな生徒ですら、そのヒルダの言葉に聞き入って、まるで彼女を何かの偶像のように、神聖な物のように、見入って、聞き入っている。

「諸君、恐れるな。

戦おう、わが学友諸君。

皆で誇りを持って、戦おう！」

気が付けば、全員スタンディングオベーションで歓声をあげていた。涙を流している人間も、いた。

\*\*\*

書類仕事を外の机で一枚終わらせ、フィリアは一言つぶやく。

「惑星Ziにも、選民思想があつたのか……」

\*\*\*

「はい、じゃあ、みなさん再び注もしく！」

ここからは、いかに勝つか、のお話に入りましょう？」

と、そこでリナが、そう一口、ミルクティーを飲み終えて喋る。

「……ホームルームなんだけど、副委員長？」

「あのですねー、私は何度も言いますけど、イギリス系地球移民ですよ？」

我が灰色の脳細胞は、この、グランボアシエリ・バナラフレーバーのミルクティーを欲しているんですよー。

そう、勝つために」

コトリ、とカップを机に置き、続ける。

「みなさん、不安に思う事はありませんよー？」

所詮、相手は私達と同レベル。小手先なりなんなり、とにかく相手をいかに出しぬけるか、だけで勝敗を決せる相手です」

さあて、とりなは、目はまるでキツネ狩りを行うかのように鋭く、口の端を鋭く曲げて笑う。

「皆さん、まず自分のゾイドを持っていない人には、私の指示通りのゾイドに乗ってもらいます。

——— どうせですし、手足もいで生殺与奪件全部こつちが持つような、完全勝利目指しましょう?」

\*\*\*

「……どうも、今度のクラスは、随分退屈させないようだ」

廊下で、フィリアも不敵に笑って、本物のたばこを吸っていた。

## その3

ゾイド倉庫、13時20分

A組用のスペースにて

「――総員、ゾイドへ搭乗しなさい！」

ばつ、と手を掲げ、A組の委員長でもあるアリシアは、特注の白いパイロットスーツ姿で、同じような格好の自分のクラス全員にそう叫ぶ。

ちなみに、

この学校の校則では、『ゾイドに乗る際の衣服としては、特に規定はしない。ただし、動きやすい格好を推奨する』と書いているので、奇抜なように見えて、一番校則に準じた格好だったりする。

「相手はたかが砲台、と侮るべからず！」

総員、持てる技能をすべて使い果たすつもりで行きましょう!!」

ば、と自分の腕を前に伸ばし、全ての生徒に指示を出す。

「我々は入学式でも好成績を残した者達ですわ！」

A組の名を持って、真のゾイド乗りとなるべく、正々堂々戦いましょう！」

共和国の名中型ゾイド、コマンドウルフが、

大陸を震撼させた初の高速戦ゾイド、セイバータイガーが、

金色の剣を携えた師子王、ブレードライガーが、

ガイロス帝国の黒い稲妻、ライトニングサイクスが、

そして、それを率いる、アリシアの駆るライガーゼロの格闘戦特化、ライガーゼロシユ

ナイダーが、格納庫から飛び出す。

それは、雄々しき百獣の行進。

一糸乱れぬ、メカ生体の行軍だ。

\*\*\*

「来たみたいね……」

校庭の、大体中央部にメルヴィンはいた。

彼女は、旧共和国軍正式使用型のパイロットスーツ——ほとんど歩兵の装備のよ  
うな姿で、ヘルメットのバイザー型のHMDを上にならして、彼ら、あるいは彼女らを見  
る。

ちなみに彼女は、旧ゼネバス帝国軍の開発した『小型アイアンコング』ことE Z—0  
56『ハンマーロック』の掌の上で、それを見ている。

この帝国の小型ゾイドの名機を、この学園の備品ゾイドから選んだ。

「……うわー、全機来てるんすけど……」

そして、その隣の自分のゾイドの下で、クレールが地球で言うライダーズジャケットに似た正式ゾイド競技用のスーツを、わざとフアスナーを閉めず下に来たタンクトップを見せるような格好で、両手を頭の後ろに回してそう、どこかうんざりした様子でしゃべる。

何というか、ガラの悪さに似合う姿である。

「まあ、こっちはこれだけだしなー」

「よくもまあ、こんな事思い浮かぶわねえ、私のクラスの副委員長は」

二人は、そんな緊張の少ない会話を続けていた。

「その割には、お前楽しそうじゃん？」

「あなたこそ？」

「へっ……」

お前だつて思ってたんだろ？

この戦い、マジで面白くなりそうだ、つてな？」

二人は、軽く邪悪な笑いをあげる。

が、そんなうちに目の前に、A組の全ゾイドが目の前に止まる。

そして、中央に止まったライガーゼロシユナイダーが頭を下げ、キャノピーを開く。

「——あーら、どうやらあなた達二人以外は恐れをなして逃げ出したみたいですね？」

出てきたアリシアは、開口一番で嫌みを言ってきた。

「お前一人だったら、オレのゾイドで十分だよ、お嬢様あ？」

不機嫌をそのまま喉から吐き出して、クレールは敵意をむき出しにする。

「貴女の、ゾイドお？」

クスクス、とアリシアは、そのクレールエの後ろにいるゾイドを指してか、コロコロ笑う。

そこにいたのは、赤い巨大なゾイド。

全身は重装甲、そして重武装。

その名前を示す赤い塗装、そして鼻の赤い角。

襟巻のような装甲を、野生体の時点で持つ、4足歩行型重ゾイド。

その名は、

EZ-004 レッドホーン

「あらあら、随分と重そうなゾイドですねえ？」

見るからに馬鹿にしたように笑うアリシアに、どんどん額の青筋が濃くなる。

「こんなゾイドで、私のライガーゼロシユナイダーと渡り合えるとも？」

ついていくだけで精一杯でしょうねえ、自慢の装甲もシユナイダーに劣るでしょうし？

まあ、そんなゾイドでどう戦うってわけですのお？

おーっほっほほ、グエ!？」

笑った所で、とりあえず持っていた石をクレーエは額にぶつけていた。

「ちよ、何しやがりますの、この野蛮人!」

「いやあ、うるさいハエがいるもんでついさあ、許してくれよお?」

まあ、ご自慢のゼロシユナイダーの防御力なら大丈夫かなって思ってたよお、アレそれともEシールドのバッテリー切れだったかあ? ゴメンなあ?」

ヘラヘラ笑ってアリシアに対して敵意を見せつけるクレーエ。

「……ふん!」

どうせ、ライガーゼロよりも重い機体に、負けるはずがないわ!」

「——ねえ、A組の委員長さん?」

実は、レッドホーンは94トンとそのブレードライガーと同じか、ちよつと重い程度なのよ」

と、そこでメルヴィンが前に出た上で、そう声を発する。

「それどころか、ライガーゼロシユナイダーの重量は135トン。



「ここにいるクレエエの持っているレッドホーン……えつと、名前なんだっけ？」  
「フォートだよ、フォート。」

オレの舎弟二号のフォートだ、オラお前挨拶してやれ」  
くおおおお、とレッドホーンが鳴く。

「そう、このC組のクラスメイトのゾイド、フォート君はこの重武装でも弾薬込みで11  
3トン！

ねえ？ 貴女よりスリムじゃない？」

「ちげえよ、あのライガー。筋肉ダルマなんだよ、スタイルは良いんだ。」

「ボディビル大会だったら、絶対優勝狙えるぜえ？」

「ついでに言えば、ライガーゼロの生産台数467機の中の内、シユナイダーはせいぜい  
89機。」

レッドホーンの総生産数は、4ケタを超えてから今も記録更新中よ？

扱いやすいゾイドだからねー、まあエースパイロット専用のライガーの方が強いのは  
当然だけど」

二人そろって相手のヘイトをあげるように笑い、アリシアの顔を真っ赤に変える。

「そ、それがどうしたと言うのですわ!!」

そんな事、そ、そうです、そんな事！ どうせ速度でも格闘性能でも下つ端のゾイド

と比べられても——」

「敵を知れ、己を知れ。」

その二つだけは必ずしろ、そしてどちらも欠かすな。

徹底的に解析した先に本当の勝利がある。

ヘリック大統領の有名な語録よ、知っているかしら？

ちなみに、私達はあなた達の使うであろうゾイドをあらかじめきちんと予想してそのスペックを全て頭に叩き込んでいるわ？」

な、と驚く相手に対し、メルヴィンは続ける。

「情報は、敵のであれ味方のであれ、大事な物よ？」

それをおろそかにして、どうして勝てるかと決めつけるのかしら？

まあ、弱点だけは知っているようだけどあなたはレッドホーンの性能をちゃんと知っている？

鼻から眼中にない、今私の乗っているハンマーロック君の性能は？

知らないなら知らないで、見て思わない？

レッドホーンの体当たり喰らっても同じこと言えると思うか、って？」

「まあ、お得意のEシールドで守れるんじゃない？」

ま、全力稼働で40秒の超高エネルギー障壁なら、さ！



歯をむき出しにして怒りをあらわにするアリシア。

と、その辺で、ガシガシと歩く音がする。

『うおーい!! 遅れてゴメンよー!!』

と、クレーエには聞き覚えのある、あのA組の体育会系のジャージの教師のヒビキらしい声が響く。

向こうから来たのは、ゴドスの子供、というか、子供の骨、とでも言えるゾイド。

EMZ-01『ガリウス』。

それも、背中に残りゾイドの数やら何やらを映す巨大モニター、そして両腕は青と赤に片腕ずつ塗られた、団扇に似た形になっている。

ガリウス、競技用採点及び審判仕様。

学園内愛称、『ガリウス・ジャツジマン』だ。

「先生！ 遅いですわ！」

『いやさー、このガリウスちゃんがお昼寝中で、な〜かなか起きてくれなくてさ〜？』

まあ、良いじゃん！ おー、随分そっち少なくてね？」

「そっちの生徒があまりに優秀なので、小手先の策でも練ろうと思って」

あまりの皮肉にアリシアが絶句している中、ヒビキ先生はおー、じょーとーじょーとー、とケラケラ笑っている。

『ま、とりあえず代表が顔合わせをするっていうルールはまもってるしさー、殊勝じゃん？』

でもうちのクラスも、意外と強そうだぜー？ 油断すんなよなー？

そんじやまー始めようぜー』

と、言つて、彼女は両陣営の間に立つ。

何というか、向こうも調子を狂わされたのか、はあ、とため息をついてライガーゼロに乗り込んだ。

『何はともあれ、ここからは真剣な勝負の時間！』

私は、たとえ相手があなた方のような低俗で思慮の浅い人間に対しても、正々堂々と戦うだけの誇りを持っていますわ！』

「そりや、あんがとさん。

じゃあ、こつちも手加減なしだな」

「ま、手加減して相手でできるわけないけどね、こつちも素人だもの」  
プシュン、と音を立てて、二つの帝国ゾイドの装甲キャノピーが開く。

中に二人が入り、そしてキャノピーが閉まる。

ちなみに、レッドホーンはコックピット装甲のそのさらに内部にハンマーロックの者に似たコックピットモジュールがある多重構造であり、その様子は最初期型の風格を良

く表している。

『それではー、A組VSC組のゾイドバトルを始めるよー？』

バトルモード0982、頭数は同数の総当たり戦ねー！

じゃ、全員生徒手帳代わりのゾイドギアを出してー！』

と、その掛け声と共に、全員がある小型端末を取り出す。

地球の常識はどうだったかは知らないが、一応元はこれも地球の物だったはずだ。

ゾイドギア。通信、情報検索、そしてゾイドバトルの記録や踏力を行う複合機械。

そして、この学校ではこれを生徒手帳代わりに支給していた。

『ゾイドギアを、両軍セット！』

広域無線通信に流される指示通り、コックピットの左わき外付け端末にゾイドギアをセットする。

『このバトルに参加するゾイド、全部で80機を登録中……』

80機、登録完了！ 準備は良いみたいだねー！』

両クラスのゾイドたちの間に、人に、緊張が走る。

人間は表情を硬くし、ゾイドは唸り声を上げ始める。

『あー、コホンコホン！』

A組チームVS、C組チーム！』

緊張感のない言葉、だがそれでも緊張ができた。

まるで、地球から伝わった西部劇のワンシーンだ。

『バトルモード、0982!!』

レディー、』

そして、その時が来た。

始まる、その一言で。

『ゴオオオオオオオオオツツ!!!』

鳴った。戦いのゴングが、鳴った。

今、確かに、聴覚的にも、そして場を包む空気としても。

戦いの火ぶたが確かに切り落とされた、その時、

「総員、」

A組は、一気に勝負をかけるべく動こうとし、

「突げ———!?!」

すでに動いている者に、先手を取られたのだ。

## その4

—— 実際問題、ルール上遠くから号令前の駆け込みバトルフィールド入場は認められているし、号令の時に動かないのだから別にマナーであるだけで明確に違反ではない。

だから最高時速で突っ込んできた2体の高速戦ゾイドに反応が遅れた。

「ストライクレーザークロー!!」

『足はもらった!!』

クロムウエルのストライクレーザークローが、ライジャの装甲板で覆われた脚が、大部分のA組のゾイドの、足だけを正確に壊す。

『きゃあ!?!』

『危ないッ!?!』

「危ないとかなんだ言ってるようだからこんな目に合うってわからないんですかねー?」

『別にコックピットは狙って無い。ルール以内と言う事だ』

ターンして衝撃砲を作動。2体のライオンは足並みの崩れた動物の群れの足を撃ち



ぬき始める。

C組に配属されただけあって、本当に正確に足だけを撃ちぬいている。

「足の動かない高速戦ゾイドなんて『アルミ豆腐』みたいなものですよ〜」

『えげつない言葉だ。面白い!!』

が、相手の根性だけは、称賛に価したようだった。

『こ、のお!!』

『主力だけは…!!』

『みんな、私達の屍を超えて行って…!』

動けるコマンドウルフが、シールドライガーやらライトニングサイクスやらを守ろうと必死に壁になる。

「バツカじゃないですか？ 普通逆でしょう!?!」

『なんでシールドライガーを前面に出してEシールドを展開しないのか……』  
が、これは予想以上に好都合。

そろそろ潮時と判断し、まずは撃ち方を止めて離脱に入る。

『『スカウター隊』、全機離脱!』

『『スカウター2』、承知した!』

リナの乗るライガーゼロことクロムウエルとヒルダの乗るライジャーが急速離脱を

開始。

急に砲撃を止めたことに戸惑い、後ろでは何やら混乱が起こっている模様だ。

「こちら『スカウター』。『アーチャー』、所定位置に『アーチャー隊』は展開完了しましたか!？」

隙は逃さず、相手には聞こえない周波数帯で無線を飛ばす。もちろん、中古とは言え暗号通信機を使ってだ。抜け目がないと言うか、何処でそんな備品を学校は手に入れたのか……

『こちら『アーチャー』！ 無茶言わないで、私はハンマーロックなのよ!』

「予想してました！ 『ヴォルケーノ隊』は!？」

『こちら『ヴォルケーノ』、所定の位置についた、撃つ準備はできているよ、お嬢さん?』

「よおし、うおつとを!？」

後ろからパルスレーザーライフルが飛んでくる。

もつとも、ここまで速いとリナでも外す方が多い、ましてや格闘専門クラスとなれば、これは足止めのために撃っているに過ぎない。

「むむむ、いい感じに相手のヘイトは稼げたみたいですねえ!？」

リナは、共和国仕様の分厚い歩兵装備に似たパイロットスーツの胸元に指を入れ、少

し熱くなつてきたここを冷やす。

要するに片腕の操作だけで避けている。

『ふむ、少々稼ぎ過ぎだとは思ふ。なんせ、我らが後方にはもう12以上の敵影が見える』

言われなくてもレーダーにはうるさい警告音交じりの赤い線が見えていた。

ついでに言えば前方はもうすぐ校庭の端。

「――準備万端ですね？」

ヴォルケーノ1、『スカウター3』の誘導に従い、砲撃を開始！

『パンツァー隊』!？」

『こちら『パンツァー1』、聞こえているでありますよお!？」

よろしい、トリナは悪意ある笑顔を浮かべる。

「砲撃開始から20秒後！」

進撃せよ（パンツァー・フォー）!!」

\*\*\*

ポフツ、という音と共に、柔らかい土のゾーンから、旧ゼネバス製恐竜型小型ゾイド『イグアン』が顔を出す。

『あつあー、こちら『スカウター3』く』

兄貴ー……じゃないや、『ヴォルケーノー』、聞こえるう?」

その場所は、今リナ達が走っている場所から数キロ離れた場所で、狙撃位置情報取得（スポッティング）には格好の場所だ。

\*\*\*

「こちら『ヴォルケーノー』、見えているさ」

そのさらに後方、丁度校庭の対岸。

そこにいたのは、共和国性亀型重小型砲撃ゾイド『カノントータス』。

それも、RZナンバーではない、旧型のカノントータスだ。

『んでさー、当てられるう? そんな遠いところだし』

「なあに、直撃させる必要はない」

彼、ことリチャード・k・リーマンは、アメリカ系地球移民だった。

なんでこの学校にいるかわからない程大人びた彼は、実は23歳。

もつとも、その雰囲気は『おじ様』や『ダンディ』と言った言葉が最も形容詞として似合うだろう。

それはいい。今彼は、カノントータス背部砲塔の中の射撃管制コックピットにいた。

「あー、ギリ君、ギリ君? 聞こえるかね?」

『うーっす、聞こえるっすよー? なんすか、リチャードさん?』

「いやね、現在地から11時の方向へ少し正面を向けてくれ」  
『はーい、了かーい』

ガシガシと足を動かし、カノントータスが動く。

と、この場にはカノントータスがもう4匹いるのだが、それもそれに合わせて動く。  
「よし、良い風だ。風速は0.1メートル以下、周囲の温度は23度弱……

これで、角度を……！」

カノントータスの巨大な砲塔——780ミリ突撃砲が、動き出す。

『情報送ったよー、狙撃タイミングをカウントするねー？』

カウント、24、23、22、』

来た、と彼は思う。

この瞬間だ。この緊張感、まるでかつての共和国の兵士では無いか、と。

『12、11、10、9、』

来た、と引き金に指をかける準備をする。この引き金は命の重さと同じ位、軽い。

『3、2、1、』

ファイア、と言う所で引き金を引く。

——爆音と共に、780ミリ榴弾が、空へと放物線を描き、飛んで行った。

\*\*\*

『散開!!』

リナの号令と共に、急速に2体の高速戦ゾイドは進路を変え、散らばる。  
『散開した!?!』

「何を…ハッ!」

気付いて、リーダーであるアリシアが立ち止った瞬間には、それが来た。  
初めに来たのは、爆音と爆風。

とつさにアリシアはライガーゼロ・シュナイダーの最大の武装であり防御兵器、E  
シールドを展開していた。

で、無ければ前方のライトニングサイクスのように、無様に砂に投げ出されながらシ  
ステムフリーズを起こす事態になっていたであろう。

「な……………」

ドン、ドン、と降りそそぐこの砲弾の雨。

辺りはまるで噴火が起こったかのように、炎と、黒い煙に覆われていく。  
「なんですの、これ…!?!」

\*\*\*

「いやあ、戦場の女神に微笑まれる気分は良いですねえ?」

少し離れた場所で、リナの駆るクロムウェルは旋回し、その様子を見る。

『火砲は戦場の女神と言うが……本当に女神の持つ神秘なる武器と同義な威力と光景ではないか』

ヒルダの言葉に、フフン、とリナは上機嫌に笑う。

「恐ろしいのはあれが榴弾、『範囲を持った武器』と言う事なんですよねえ？

当たらなければどうという事はないとかいうバカにはもってこいの兵器ですよ？」

なんせ、当てなくても十分に脅威なんですから〜♪」

ドン、ドン、と爆音と黒煙をまき散らし落ちる砲弾は、完全に敵の足止めをなしている。

「そろそろ、ですわね？」

『ああ、仕上げだ』

\*\*\*

『何!? なんなのコレ!?』

『え? え、え? ゾイドは、ゾイドはどこにいるの!?』

『わからない……分らない、怖い怖い!!』

「落ち着いて!! これはこちらの統率を乱す罠ですわ!」

アリシアの言葉も聞かず、勇猛果敢だったA組の戦士たちは、完全にパニックに陥っている。

——唐突に、空から何も降って来なくなる。

「え……？」

一瞬だった。

一瞬だが、確実にこの場全員の緊張の糸は切れていた。

だからこそ、煙をかき分けて巨大な影が出てくることに最後まで気付かなかった。

「なっ!？」

そこにいたのは、3体のEMZ-28『ツインホーン』、

そして、一体の巨大な親玉のようなマンモス型ゾイド。

紫のカラーリング、巨大すぎる体格。

背中にはバスタートータスのキャノンを背負っている点で、通常型と違う姿だが、そのゾイドの名前は瞬時にわかった。

「エレファンダー……!？」

型番：EZ-038、『対要塞突破・攻城戦用重大型ゾイド』、

エレファンダー。ガイロス帝国の名機だ。

\*\*\*

「パンツァー、とおつげきいいいいいつつ!!」

とりあえず、オティーリエは目の前のシールドライガーを弾き飛ばした。



130トンの重量で、吹き飛ばした。正直パイロットが心配である。

「——まー、そんな事言つてられないでしょうがなあ？」

案外、敵はピンチになると攻撃する性質なようで、近くのもう一体のシールドライガーがシールド全開で突っ込んでくる。

「あまあいッッ!!」

が、エレファンダーはそれを『Eシールドで』受け止める。

エレファンダーは、最高速度もそれなりにある上に攻守のバランスがそろった非常に優秀なゾイドだ。

もしもこれの開発が後少し早く完成していれば、ガイロス帝国の勝利もあり得たと言われている。

「このエレファンダーの正面から挑むとは、面白いでありますよッ!!」

Eシールド同士の干渉により、消えるお互いを阻む壁。

その隙を逃さず、長大な鼻のストライクアイアンクローを下から挟り込むように相手へ叩き込む。

「ゼロ距離射撃ならぬ、仰角90度射撃い!!」

本当に90度まで天を仰ぐように向けてある鼻の先端、そのAZ60ミリハイパーレーザーガンを放ち、システムフリーズを起こさせる。

「フッフッフ、これも戦いなので悪く思わないで欲しいであります!!」

そして、そのままそのシールドライガーを投げ、硬直していた別のシールドライガーにぶつける。

「ストライイクッツ!!」

さあ、次はだれでありますかあ!?!」

嬉々とした表情で、次々と獅子奮迅の活躍をするエレファンダー。

ちやうど突貫してきたブレードライガーに、背中の大口徑ビーム砲の至近距離射撃で吹き飛ばし、追撃のビームやレーザーやマシンガンの雨あられ、としか表現できないフルバーストで沈黙させる。

「圧倒的ではないか、流石重ゾイドの名機!!」

その横にいるツインホーンも、地味にこのA組のゾイドたちを全く動かさせないよう戦い、次々システムフリーズを起こさせている。

『『フォートレス隊』! 出番でありますよお!!』

\*\*\*

「こんなことが、きやあ!?!」

それで終わると思いきや、今度は別の方向からビームや砲撃の嵐がやってくる。

後ろからの奇襲に、ライガーゼロシユナイダーのEシールドを張る暇もなかった。

『何——ッ!?!』

『あそこ!!』

そこには、彼女にとっても忌々しい影。

——レッドホーン、それも重装備が3体。

そして、よく見れば可愛らしい小さなトリケラトプス型ゾイド『EMZ-16 ゲル  
ダー』が、3連ビーム砲や2連電磁砲を放ちながらこちらにやってくる。

『よお、遅くなって悪いな!』

いっちょ勝負と行こうぜ、タカピー女あ!!』

特に先頭にいるレッドホーン、フォートを駆るクレイエの重砲撃はすさまじい。

こんな量を正確にこちらに向けてくるクレイエの射撃の技量は、案外普段の彼女からは想像できない。

「くう……! ならば!!」

そこで、彼女がとつた行動は、捨て身。

シュナイダーがシュナイダーたる全身のブレード、頭部のブレード5本、両脇の7本、そのすべてを、今向かってくるレッドホーンたちに向ける。

「行きなさい、シュナイダー! 私の操縦通り正確に動きなさいッツ!!」

駆け出す獅子。イオンブースターとEシールドに火がともる。

「残っている人間は、全て私についてきなさい!!」

言葉通り、まだ残っていたブレードライガーやその他大型のゾイドが、彼女と同じように進み始める。

『げえ、まさか!?!』

「ふん、戦慄しなさい、下衆共。

セブンブレードアタック!!」

全エネルギーを持って行こう、ライガーゼロシユナイダー最強の突撃技『セブンブレードアタック』。

それが、今発動した。

「私に続けええええええ!!」

他の機体も、特にブレードライガーやシールドライガーなどは同じくEシールドを前面に張った捨て身の突撃をし始める。

\*\*\*

「おいおいおいおいおいおい?!?!」

うまく避けなかつたら、切り裂かれた右の対空ビーム砲のように全身切り裂かれていただろう。

(コイツ、なりふり構わず『コックピットにあてる気で』突っ込んできやがった…ッ!)

と、言っている間に、大部分の数のゾイドがレッドホーンやゲルダーを突破していく。

「こちらフォトーレス1、突破された!!」

『こちらスカウター1、見てれば分かりますよー?』

「畜生、嫌に冷静だな!　こちらら結構お高めの武装壊されたぜ!!」

『まーいいじゃないですかー、だってー、』

いや何がいいのかわからない。

ここでこうやって突破した場合もリナから聞かされていたが、その場合の対処の方法があまりにA組にはかわいそうだったから。

『ここを抜けて、自分から地獄の窯に入っちゃったんですよ?』

リナの声は、背筋が凍りつくほど冷酷な響きを持っていた。

\*\*\*

「はーっ、はーっ……!」

ライガーゼロのエネルギーも残り少ない。

いい加減、自分の息も切れてきた。

アリシアの視界には、同じように疲弊しきったクラスメイト達の乗るゾイドがいる。

「くう……なんで、こんなことに……!」

本当は、もっと華麗で、もっと鮮やかに、自分たちが勝つはずだった。

なのに結果はどうだ？

卑劣な手段を全てつかったような方法で、無様に地を這っている。

「くう……！」

数ももう、やっと2ケタ程度。相手には何一つ損害はない。

なぜだ？

なぜ自分たちは負けている？

「私の腕が悪いのですわ……ゾイドの性能が同じである以上……！」

が、その考えも、前から来た攻撃にさえぎられる。

『きやあ!』

ドン、と言う音と共に、隣にいたブレードライガーが吹き飛ばされる。

「前から……え？」

そして、本当に絶望した。

ソレは、ゴドス達に取り囲まれてやってきた。

ソレは、歩くごとに地を震わせていた。

ソレは、巨大だった。ライガーゼロ程度ではくらべものにならない程に。

ソレは、長大だった。長く太い尾を揺らしてこちらに向かってきた。

ソレは、共和国の象徴。



## その4. 5

形式番号RBOZ—003、またはRZ—001『ゴジュラス』。

『神のごときジュラニウムの竜』Ⅱ『ゴツドジュラザウルス』の略称であるこの機体は、かつて『ホワイドン』という名の、パワーだけが自慢の鈍重なゾイドだった。

確かに、素体である中央大陸種のテイラノサウルス型ゾイドは強力無比であり、神族やごく一部の人間にしか扱えない凶暴なゾイドではある。

それが、ゴジュラスとなったのは、地球人の超科学を乗せた箱舟『グローバリーⅢ世号』の到来。

それにもたらされた技術たち、その技術で生成された、ジュラウ地方特有の鉱石で生成した、チタニウム系合金『ジュラニウム』。

これらが、ホワイドンに組み合わされた時、

—————  
グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツツ!!!

ゴジュラスが、帝国を震わせるほどの産声を上げたのだ。

\*\*\*

「なんで…!?!」



信じられなかった。

いや、確かに、アレは、あの直立するテイラノサウルス型ゾイドは、手に入れるのは難しくはない、古いゾイドだ。

「なんで……!!?」

だが、信じられない。

学生同士の戦いで、ライガーどころかゴジュラスに出会うなんて。

アレは、戦前70年からずっと共和国の主力であり続け、

あと70年は主力として使い続けられると言われているゾイドだ。

『ここ、骨董品の化石ゾイドがっ!!』

と、ここで逸った一人の生徒の駆るケーニツヒウルフが、一気に距離を詰めその顎に電磁エネルギーを収束させる。

『エレクトリックファン』

すべて言い切る前に、突然後ろを向いたと思ったゴジュラスの、強靱な尾の攻撃により真横へと大きく吹き飛ばされる。

ビー、という音と共に、アリシアの、いや全A組チームのコックピットに、彼のケーニツヒウルフのシステムフリーズが知らされる。

「ケーニツヒが……?」

『う、うわああああああ?!?!』

とうとう、耐えきれなくなったライトニングサイクスが動く。

——が、そこに別の方向から何か飛翔して来て、ぶつかり爆散する。

\*\*\*

「弾着!」

少し離れた所で、ハンマーロックのレーダーを見ながらメルヴィンが叫ぶ。

「こちら、『アーチャー』!」

援護射撃は任せて、『FF (ファイアーファイター) 隊』!」

『こちら『FF』。任せろ、『アーチャー』。』

数体のハンマーロックたちが、背後にあるミサイルの照準、あるいは誘導パターンの組み込みを行い、敵を見据える。

「全員、赤外線照準だけはしないで、味方に当たるわ!」

レーダー照射を密にして、自分の予想と勘で当てなさい!」

\*\*\*

「ミサイル!?!」

『どこから、きやあッ!?!』

横を向いた瞬間に、ロケットブースターを点火したゴジュラスに近づかれ、一機のブ

レードライガーが蹴りで吹き飛ばされる。

「お、落ちつい……てっ!？」

この時、アリシアは致命的なミスを犯していることに気付いた。敵はゴジュラスだけではない。

「何?!? ゴドス……!？」

ゴドスが、すでにかなりのダメージがあるこのライガーゼロシユナイダーの足を執拗に強靱な足で蹴り、至近距離で右腰の大口径砲を、本当に執拗に、そう3度いうほど執拗に攻撃してくる。

「きゃあ、くっ……:シールド、あっ!?! ……くう、セブンブレードアタックのせい……!？」

今、Eシールドが張れない手負いの獅子は、凶暴なアロサウルスの群れに執拗にダメージを与えられ、

神のごとき竜に、周りの獣たちは次々と屠られる。

「そんな……:そんなことが……:きゃあッ!?!？」

「ごすつ、というゴドスの、『小型ゴジュラスの仇名を持つ』ゴドスの強靱な蹴りを脇腹に喰らい、

2分間の執拗な『集団リンチ』を耐えたライガーゼロシユナイダーが、システムフリーズを起こした。

\*  
\*  
\*

## その5

「はい、バトルオールオーバー、バトルオールオーバー。」

「ウイナー、C組………ってか、」

目の前にいるのは、つやつやした表情で立ち並ぶC組の面々と、

血涙が出そうなほどの悔しさあふれる表情、あるいは恐怖による放心状態の顔だけがあるA組の面々しかいなかった。

「なんだよ、このバトルの結果!？」

これ、そういうゲームじゃねーから！ ルール上はありだけど、だけどさあ!？」

A組担任、ミドリノ先生は、そうテンション高く突っ込む。

「いやはや、お見苦しい戦いをしました、ミドリノ先生。」

私以下、性悪クソ生徒共がもつと適切な配置取り、展開をしていけば、もつとすんなりと勝って精神的にダメージを与えないで済んだ物を」

「いや、フィリア先生。それはおかしい」

本当に申し訳なさそうなあたりに、やっぱ怖い、とミドリノ先生は思った。

「あーもう………で、両者ー、勝敗に関して物申すところはー?」

「先生！ 私には彼女らに問い詰めたいと思いますわ!？」

あんなの、あんなもの、ゾイドバトルとは言いませぬ!!」

アリシアが、とうとう我慢できない、と言った様子で、そうわざわざC組を指差して叫ぶ。

「あなた達、恥ずかしくありませんの!？」

あんな勝ち方をして、恥ずかしくないのですか!？」

ゾイド乗りならゾイドの手足で攻撃しての物でしょう!?!」

火力と数に物を言わせて、平気で人を貶めて!

恥ずかしくはありませんの!？」

と、しごくごもつとな事を言い放つアリシア。

「……だー、そうだけど、C組の生徒たちー。何かそつちからはー?」

「あるなら、だれか率先して手をあげなさい!」

あるいは、胸を張って前に出てここにいるA組を言いふせられる自信がある人は前に出なさい!」

と、ミドリノ先生に続き、メルヴィンがそうクラス全体に言い放つ。

「……ふふふ♪」

と、そこで、文字通り胸を張って出てきたのは、メルヴィンや他のみんなも予想通り

と言うか、なんというか……

リナだった。C組副委員長、リナソレーネ・アシユワースその人だった。

「……あなたは、昼間の……！」

「まずは名乗りが遅れて、淑女として申し訳ありません。」

私が、本戦闘の作戦立案者であり、参謀のクラス副委員長のリナソレーネ・アシユワースです」

「ご、ご丁寧にも……つて、あなたがこの卑劣極まりない作戦の立案者あ!？」

「でもその作戦に完全敗北したのはそちらですよね？」

ええ、まごう事なきそちらです。そちらの負け♪」

なつ、と驚くアリシアに向かい、リナは平然と続ける。

「負けた方がキャンキャン吼えようが、何しようがこちらには痛くもかゆくもないんですよ♪」

卑劣? 卑怯?

敗戦国の伝統と格式のある『負け犬の遠吠え』じゃないですか♪

いい加減それ以外に言う言葉を見つけてほしいですよね?」

「これは戦争じゃないですわ!」

「ええ、だからこちらは最大限ルールを守って、その上で、そうその上で! 勝った。」

なのになんか？ 卑怯？

貴女、ちゃんと最近辞書引いてます？」

顔を真っ赤に染めるアリシアに対し、リナの攻撃はやまない。

「だからあなた方はアホなんですよ。なんで我々みたいな『流儀も道義もなく勝つべく行動する相手に対する対処』を考えないんですか？

敵を信じて作戦立てる馬鹿はこの世からとつくに消えてますよ？

あなた達はむしろ幸運ですよねえ？ 実戦とか戦場とかじゃない、ただのゾイドバトル。

そう、命の危険が相当少ない所で知ることができたんですから。

むしろ、感謝してほしいぐらいですよお？」

というか、と言葉が続ける。

「私としてはあなたみたいなのとつきに卑怯な事するような人間に、ゾイドバトルの教示は語ってもらいたくないですね？」

「なっ!! 私を侮辱する気!？」

「それでも仕方ないでしょう？」

あそこにいるクレーエさんのコックピット、狙ったんですから」

「っ!」



と、自覚はあるようで、静かにこちらを見るクレーエを一瞥して、黙り込む。

「ああ、でもクレーエさんも『わざとじゃない』とは言ってくれているようですし、私はあなたの事を卑怯だなんて言いませんよ？」

で・も、とつさとはいえ、デスザウラーを貫通するとかほぎけるほどのセブンブレードアタックを、あなた達の乗る機体より古くて性能のひつくくい、レッドホーンに、真正面から当てようとは、私思いませんけどねえ？」

クスクス、笑うリナに、涙をにじませて悔しそうに震えるアリシア。

こうなると、どっちが悪人なのかわからない。

いやC組が悪人だ。

「まあ、まず次に戦うのなら、性能をちゃんとした意味で理解して行動してほしいですよねえ？」

ま、それはともかく、最後にこれだけ言っておきますよ」

と、言つて、リナは何の嫌みを言うのかと身構えるアリシアに、こう言い放つ。

「この学校の図書室、昼にちょっと見た時に見つけた……えっと、日本系地球移民の方が持ち込んだと思われる本『戦術と指揮』って言うのがあるんですけど、

多分、それ読めば私達みたいな烏合の衆なんて、勝てますよ？」

おススメです。ぜひ読んでください」

へ、と一瞬アリシアは間抜けそうな面をする。

「私も色々とおなた達には学ばせてもらおう所もありますしね。

そのお礼です」

「……嫌みのつもり？」

「私としては、本当にフィリア先生の言うとおりの動きが出来るはずだったのを、案外立て直しが早かったのは本当に称賛できます。

追撃に移るまでの展開の速度が速すぎて、事実ヴォルケーノ隊と共に砲撃できるはずのアーチャー隊が遅れを取りました。

予想外の中の予想の半中とはいえ、それでも予想外には変わりませんしね」

「……ずいぶんと私達のことを舐めていたようですね……!!」

ギリツ、とアリシアは心底悔しそうな顔でこちらを見つめる。

というか、さつきまで意気消沈していたような人間まで、なんだかこちらをかすかに睨み付け始めている。

「舐めてなんていませんよ。そもそもなめてかかれるほど弱い相手でもないでしょう？」

「フン……言葉通り受け取って差し上げますわ、リナソレーネ・アシユワース」

でも、と鋭くりナを、さらにその後ろのC組を指差す。

「この次は、その小賢しい作戦ごと撃ち破って見せますッ！」

「とりあえず、勇敢に正々堂々戦えばー、性能でゴリ押しすればー、自分の感覚を信じてー、仲間の力に後押しされてー、とかいう主人公気質な思考を全て捨てて、格闘戦の本当の長所、ゾイドの本当の長所を理解したうえで戦えば勝てると思いますよー？」

「まだまだそこまで強いわけじゃないですし、我がクラス」

「助言だけは受け付けますわ!! 以上！」

と、心がへし折れたのかな、とも思っていたA組は、なんとこれだけで再び闘志に火がついたようだ。

(うわ、単純)

「覚悟しなさい! 今でこそあなた達が実力的に上回ろうとも、最後に勝つのは誇りあるわたくしたちですわ!」

(しかも似たようなことしか言っていない)

瞳の奥に真つ赤な闘志を燃やすアリシアとA組を、リナはしらー、とした目で、C組は同じかあるいはコントでも見ているかのような目で見ていた。

「ですが！」

それでも一つ、あなた達には頭を下げるべきことがあります！」

と、突然、後ろで笑っていたクレーエに向くアリシア。

「クレイー……えつと名字は……」

「名前でいい、気にすんな！」

「ではクレイー！ 貴女に対しての攻撃は、こちらに非があります！」

……申し訳ありませんわ、本当」

と、言つて本当に頭を下げ、謝罪するアリシア。

「……やけに殊勝だな！」

「フン……当然ですわ」

「じゃあ、後2回頭を下げてもらおうじゃねーか！」

と、言つてクレイーは、自信の乗るレッドホーン、ことフォートを指差す。

「あなたのレッドホーン……？」

「こいつだつて恐怖を感じるんだ。あの時ビビらなかつたわけじゃねえ」

そして、と言つて、クレイーは口笛を吹く。

「？」

カシユン、とフォート背後、レッドホーンの砲座兼第2コックピットが開く。

「クウ？」

そこから、なんだか頭の硬そうな形の、黒い体表から見える発行しそうな緑の内側、と言うどこか毒々しい体表の小さな恐竜型ゾイドが出てきた。

「野生体ゾイドの子供……？」

なんとなく、あまり機械に置換された部分が見えないところから、そんなイメージがあった。

「な、なんですよ、それ……!?!」

「ああ、あそこにいるのはオレの舎弟1号のカーズだ。

お前、後少しで1人と2体の命を奪う所だったんだよ」

適当な説明だった。何人か知ってそうな顔をしていたが、とりあえずリナは知らず、なんのゾイドなのかを教えてほしかった。

「……それは、本当に申し訳ありませんでしたわ」

と、それでも改めて2体のゾイドに頭を下げる。

「わたくしだって、ゾイドが生き物だと言う事を忘れたつもりはありませんわ」

「嘘付け。道具とか言っていたくせに」

「ゾイドを道具のごとくあつかえてこそそのゾイド乗り。」

愛情とはまた別の問題ですわ!」

「なわけねえだろ、ちよつとはゾイド頼れよ。」

一番いいのはセミオートじゃねえの? ゾイドの感覚は人間様なんざかなう訳でもねえだろ?」

なんですって、とアリシアがいい、続きをやるか、とクレエエが自分の袖をめくり腕を振り上げる。

「——お前ら、そんなに体力が余っているのか」

今にも、という所で、フィリアがその二人の間に割って入る。

「だったらちようどいい、片方は図書委員だ。」

放課後二人とも、図書室の整理を行ってもらう」

い、と二人が本当に嫌そうな顔をし、がつくりと肩を落とした。

「ふう……」

さて、全員本日の授業は終了だ!!

明日から、双方座学、実技、共に精進していくように!!

以上、解散! 全員戻って着替えて帰りのホームルームへ向けてすぐに用意しろ!!」

と、フィリアの一言により、全員がアリシアとメルヴェインの二人のクラス委員長の号令と共に礼をし、解散する。

こうして、長かった1日が終わる。

## 帰宅閑話：アシユワース家の日常

\*\*\*

帰りのホームルームを終え、リナは帰りの道路の交通整理も飛び越え、帰宅する。

「ただいまー♪」

「お帰りー！ ちょうどよかった、すぐに着替えて手伝ってくれー！」

と、厨房からそんな声が響き、リナの父親、『エリック・アシユワース』がバーテンダー姿で顔だけ出してそう答える。

実はリナの家、一階が『喫茶&バー ライオン亭』になっている。

一応、今のところは父であるエリックとリナの二人だけが、この店の従業員だ。

「——よっっー！」

と、フリフリした可愛らしいウエイトレス姿になったリナは、お盆を片手に今日も接客を始める。

学校が終わった後の、何時もの光景だ。

「いらっしやいませー♪」

「あ、ウェイトレスさん、コーヒー」

「残念ながら当店ではそんな腐ったマメの泥水はお出ししておりませ〜ん♪

紅茶か、それ以外でしたらなんでも出せますよー？」

「……あ、はい」

\*\*\*

「ふいー……」

ピークが過ぎれば閑散としたもので、それなりに人はいる物の、大体は雑誌の編集に煮詰まっているか、何か考え事にふけているかという人だけが残る。

時刻は、7時少々。もう後は、仕事帰りにお酒を飲みに来る人ぐらいしか来ないだろう。

「リナ、学校帰りにお疲れだったな。もういいぞ？」

「はい、この床磨いたら上がりま〜す」

と、モップで床を吹くりナに、エリックがそう声をかけた。

「初日はどうだった？」

「いい感じですねー。楽しい学校生活始まります♪」

「それはよかった。お前も、まともなゾイド乗りの道に行けそうだな？」

「えー、まー……外道だとは他のクラスには思われそうですけどー」



と、言つて床を磨き終わり、そそくさとそこを去ろうとする。

「ふむ……どうだ、リナ？」

「何がですか？」

「ゾイド乗り、特に最近はウォーリアーも盛んなご時世だ。

あれでも目指したらどうだ？」

と、店内のテレビを、キザつたらしく指差す。

『——今年もやってまいりました。もうすぐエウロペ・カップの季節ですね？』

ここ西方大陸では4年に一度、資格・経歴不問、大陸最大規模のゾイド競技大会『エウロペ・カップ』が開かれます。

4年前に優勝に輝いたのが、何と大陸のゾイド養成学校のチームだった事には驚きだった記憶もあると思います。

このエウロペ・カップは、かつての大陸紛争からできたガイロス、ヘリック両国間の関係の改善を目的とした祭典でもあり——』

「なしなし！ そんな面倒くさい！」

「なんでだ、いいんじゃないか？ 予選でも通ればいい思い出になるぞ？」

もお、と嫌そうな顔をするリナ。

「冗談じゃないですよお、お父さくん……そりやいい思い出にはなるけど、大変ですしい

?

文系の私は成績が落ちるのが嫌なんですよ〜」

「どうせオールAだろう?」

ぶー、と言うリナの頬を指で突き、余計にリナを膨らませる。

「もお……まー、その内って事にしましょうよ、その内って」

「その内か。」

出たら見に行くからな」

「出るかどうかはわかりませーん」

と、言っつてリナは部屋に戻っていった。

\*\*\*

後は、お風呂に入り、軽く明日の予習をし、『激戦! レッドリバー』を読み進めて、眠りについた。

こうして、長い一日はひとまず終わった。

### 第3話：アイドルはピーキー性能

#### その1

オテイーリエ・V・カリウスの朝は遅い。

「お嬢様、お目覚めの時間です」

「ん〜……後、開戦するまで寝かせて〜でありますう……」

かなり裕福な方の家の生まれである彼女は、今日もベッドの中で芋虫かサナギかと言う状態で寝ている所を、メイドに起こされる。

「もう、そう言っている時も遅刻するのですか、らっっ！」

「おあ〜」

布団を引つpegがされ、こまのようになると子供っぽいパジャマ姿で回転するところを、さらに別のメイドに掴まれ、パジャマをエビ剥きか何かのようにひつpegがされ、椅子に座らされそのまま鏡へ。

「あー、結構ギリギリな時間でありますな〜」

「だから夜は早くするように、と奥様も旦那様も言われておりますでしょうに……」

まだ寝ぼけた様子の子の彼女の頭が、別にいいと言っているのに周りのメイドに櫛ですか

れ、もじやもじやで無造作そのものの髪が、くせつけを生かしたおしゃれなゆるふわストリートに変えられる。

「あー、制服だけは自分で着るでありますよー?」

と、言つてすぐにオティーリエは、自分で制服に着替え始める。

Yシャツのボタンをほぼ留めたまま、すぽっとYシャツを着る。

「できればその要領で自分で朝起きられるようになっていただければと」

「あ、では言つてくるでありますよー。朝ごはんは自分で何とかするでありますー」

小言は聞きたくなかったので、着替え終わるやいなやすぐに祖父の代よりも前からこの家にある帽子をかぶり、自分の部屋のテラスへと出ていく。

「フェルディ〜! フェルディナント〜!」

ばおーん、という声を震わせ、のそのそとオティーリエの駆るエレファンダー、『フェルディナント』がやってくる。

ドスン、と地に響く足音に似合わない軽やかさで照らすまで近づき、長い鼻を伸ばす。

「よつとー!」

鼻に乗り、そのままコックピットへといぎなわれる。

「今日もいい子であります」

などと言つて、オティーリエは素早くコックピットへと潜り込んだ。

『じゃ、行ってくるでありますよー!』

そんな言葉と、フェルディナントの声を残し、彼女はミューズ学園へと向かって言った。

「いくでありますよお、フェルディ!!」

こんな図体で出せる130キロの本気を見せるのであります!!」

\*\*\*

大体の場合、遅刻する人間は的が絞られているのだろうか、

「……まさか、湯浴みに時間を割きすぎるとは」

最高時速で走るライジャーをゾイドその物の動きに任せ、ヒルダは髪をタオルでまだふきながら走っていた。

「全く、我ながら湯浴み好きを自重せねばいけんな……む?」

と、前方を見ると、見知ったゾイドがいる。

重い体を、予想以上の速さで突き進めさせるそれは、背部に巨大な荷電粒子ビーム砲を取り付けた、コマンダータイプ頭部のエレファンダー。

「あれは、まさかオティーリ工殿か?」

『——む! 後ろにいるのは、ライジャー!?!』

と、そこで、聴きなじみ始めた声が、通信装置から聞こえる。

「やはりオテーリーリ工殿か。私と同じか？」

『ええ、遅刻すれすれでありますよ〜』

「ふう、どういう訳か学生の朝の時間は想像以上に短いようだ」

『それもゆつくりしたい時に限って、でありますな〜』

はっはっは、と笑う二人。

「その上昨日はフィリア女史のレポートが、かなり分厚かったものだからな、風呂に入れず朝ぶろで遅れたのだ」

『楽しかったけど、分厚いですよね〜、あれ』

「好きな物には天国だが、私はこれで勉強が嫌いだな」

談笑をしつつ、エレファンダーの最高速度でミューズ学園に向かう二人。

この速度なら間に合うはずだ。

「——む？」

が、そこで二人は、変わった光景を見ることになる。

『あれは……！』

道の先、そこには珍しいと言えば珍しいゾイドが、へたり込んでいた。

背中のパックにあるのは、2本のクロー、あるいはドリルとも呼ばれる武装『バスタークロー』。

薄く紫がかかった真珠色の装甲の体は、素体がゴジュラス以上にティラノサウルスだと示している。

このゾイド、名前を『E Z—49 バーサークフューラー』と呼ぶ。

ライガーゼロと並ぶ『完全野生体ゾイド』の一機であり、ジェノザウラーの系譜に位置するティラノサウルス型ゾイドだ。

「なんだか、随分大人しいな……完全野生体だろう？」

『ゾイドコアが別物のまがい物か、あるいは……』

チラリ、と、その横たわったバーサークフューラーの足元を見る。

何か、4人ほどの人間、内一名は自分たちと同じ制服の少女だ。

それが、何やらバーサークフューラーの足元で何か騒いでいる。

「ふむ、何かありそうだな。」

おもしろそうだな、どうせなら関わって遅刻しようかと思うが？」

『意見が合うでありますな〜』

と、言って二人は、そのバーサークフューラーの前で自分たちのゾイドを止めた。

## その2

ミューズ学園へ至る道の途中、ミューズ森林地帯に存在するゾイド用バイパス道路。

「うゝん、車と違つて全然何かわからねえな、こりゃ〜」

一番背が低い、なんだか胡散臭そうなサングラスの男が、バーサークフューラーの足の開いたCAS装甲の内側基盤を見ながら、そう情けなくつぶやく。

「兄貴い、それまじい気がするんだなあ」

その横で工具箱を持つ大柄だが気の弱そうな雰囲気な男が、その言葉に対して至極ごもつともな意見を出す。

「いやゝ、こりゃ参つたつすね〜」

そして、出っ歯が特徴的な細長の男も、二人の横でお手上げの様子で、なぜかカメラを構えてそうつぶやく。

何というかこの3人の人相、

すごく胡散臭い。

「……あの、みんな?」

そして何よりも問題なのが、その胡散臭い3人に話しかけたこの人物である。



小柄な少女だった。

左右にちよん、とリボンで結ばれた髪型がとてもしっくりくる、小動物らしい可愛らしさを自然に出しているような。

顔立ちと黒い髪の色から、おそらくは日本系地球移民の人間だろう。

制服は、ミューズ学園のシルバーのブレザーだ。確実に学園の生徒ではある。

ただ、なぜかどこことなく普通の生徒とは一線を画すような雰囲気がある。

近寄りがたいと言う訳ではないが、どこことなくだ。

「お嬢、どうしたんですかい？」

と、その女子生徒をお嬢と呼んで、背の低いサングラスの男が訪ねる。

「やっぱり、この子の修理は難しいですか……？」

「難しいっすね〜」

「難しいんだな」

「難しいからこうしているんだよなあ、俺達」

うんうん、と3人がうなずくのに合わせ、シユン、としおらしく少女は顔をうつむかせる。

「……ごめんなさい、迷惑かけちゃって」

「い、いやいや！ こっちとしては良いハプニングだと思ってるし、あ痛ッ!？」

「バツカ野郎！ ゾイドだって怪我してりや痛いんだぞ、考えろ!!」

出っ歯の男の失言に、小柄な男がすぐに頭を叩いた上でそう言う。

「こいつ、さつきまで動き回っていたから……動けないのがつらいのかもしれないんだな……」

うーん、と3人は唸る。

「……でえええい、大の男が3人うなだれてどうすんだ!!」

お嬢の為にも、『番組』の為にも、

何より大人しくいじらせてくれるこいつのためにも、俺達が何とかしなきゃいけないえ!!」

「「そうだそうだ!」」

バツ、と3人は再びバーサークフューラーの足元で、急いで外したりつけたりの修理作業を始める。

「まってるよ、お前! 生意気な奴だが、恨んじやいねえ!」

「絶対直してやるんだな!!」

「そうつす!」

「あー、でも、それだと治らないでありますなー」

「マジかよ!?

「どうすりやいいんだ!」

「ほらそこだ。そこにあるプラグはバーサークフューラー脚部基盤のパーツの中でも得に長い奴で、よく長さのせいで引っかかってプラグが抜けるのだ。

だから5センチほど切り詰めて刺せば、もう抜ける心配はない」

「おー、ありがとう!」

……つて、」

そこでようやく、3人は謎の金髪少女と褐色オレンジ髪少女が隣にいることに気付いた。

「ど、どちら様で?」

「通りすがりのミューズ学園女子生徒でありますよ?」

「覚えていただければ嬉しい、なんてな」

\*\*\*

「本当にありがとうございます!!」

ば、とその日本系地球移民の少女を先頭に、3人の胡散臭そうな男たちも含め、全員がヒルダとオティーリエに頭を下げる。

「いや気にすることでもないでありますよ」

「バーサークフューラーは繊細な部分も多いと聞いていたのでな」

まさか我がクラスの参謀の知識が生かされるとは、とひそかにヒルダは思っていた。

「でもすごいですね！ ミューズ学園のみんなって、こんな風に自分で整備が出来るんですか!？」

「……まあ、授業の一環でやらされたであります……」

「う、うむ……」

二人は、その質問にお茶を濁すような答えを返す。

入学式から2週間、フィリアの授業は熾烈を極めた。

体育が遊びのレベルの身体訓練。

『ゼネバス時代の戦力で共和国に勝つ』を考えさせられる座学。

緊急時用のゾイド整備訓練。20分以内に解体状態から組み立てをやらされる。

ハンドサインを覚えさせられる。モールス信号を覚えさせられる……

「どうしたんですか?」

「いや、ただ配属されるクラスを間違えた気がしただけだ……」

「むしろ、我々は軍に入隊した気分であります」

「はは、と疑問符の浮かぶ顔をよそに、遠い目でそう笑ってごまかす二人。

「……それはともかく、このバーサークフューラーは、誰が操縦を?」

「あ、はい！ 私です!」

と、あの少女が手をあげ、そうそうと後ろの3人がうなづく。

「はあ……マジですか？」

「え、結構驚いてます？」

本当に怪訝な顔をしてしまうオテイリエに、その少女も同じような顔になる。

「いや、正直、失礼ながら偏見かもしれないと前置きを置いてから言うであります……

何というか……なよなくしそうな少女が、この整備費と勇名だけを多くとるような誰も乗れない兵器としてアレな、騎士とかいうのがある時代まで逆行したような、火力は良いけど乗れなきや意味がないみたいなのバカっぽい機体を動かせるのか、と思うと……」

「オテイリエ工殿、ゾイドに失礼過ぎると思うのだが」

あまりの言い草に目の前の少女の目は点のようになり、さすがにヒルダはそうツツコミを入れる。

「いや、だって、バーサークフューラーでありますよ？」

狂気の総統閣下でありますよ？ 狂気過ぎて誰も乗れないような——」

と、そのオテイリエの頭上に、黒い影が迫る。

「へ？」

そこには、さつきまで倒れていたバーサークフューラーの頭部があった。

ゆつくりと、オティーリエの方を見て……というか、睨み付けている。

「……あー、これは言いすぎたカモでありますな……十分凶暴そうな……!」

ガシイン、とそのバーサークヒューラーの足元で轟音が響く。

よく見ると足のアンカーが設置され、尻尾をピン、と伸ばしている。

「げえ、この動作!?!」

ガシンガシンガシン、と断続的に尻尾の装甲が開き、放熱の準備が行われていく。

「荷電粒子砲!?!」

「え!?! ちよつと!?!」

「あー、はい。今理解しました。」

あなたは確実にいいゾイド乗りでありますよ、だつて!?!」

バスタークローは開かない。

だが、その口にはいつも、あの砲塔が伸び、荷電粒子の光が集まっていく。

「ここまで沸点の低いゾイドを乗りこなせているのでありますからアアアアアア!!!」

その時、森に一筋の光が走った。

\*\*\*

## その3

時間は進んで、本日朝のホームルーム。

「——そのせいでこの校舎の端が吹き飛んだと言う訳か。

大体理解した、オティーリエ・カリウス。

とりあえず原因であるお前は今日中にここを自分とゾイドの力で修復しておけ。

異論は認めん」

綺麗に角の取れた校舎を指差し、非常にもフィリアの『生徒指導』が下される。

「はい……すみませんでありますう……」

うるうると泣き出しそうな目で力なく言うオティーリエの肩を、ぽん、と隣にいたり  
ナが手を置く。

「ドンマイですよ。ドンマイ」

「うう……死ぬかと思ったのにこの仕打ち……」

「まあ、そんなことはどうでもいい。

さて！ 本日はC組の最後のクラスメイトを紹介する！」

と、酷い切り捨て方をしたうえで、正面玄関に集めさせられたC組全員に向かって言う。

「ミツキ。自己紹介をしろ」

「はい！」

みなさん初めまして!!

ミツキ・カリンです！ 入学式に出られなくてごめんなさい！

皆さんと仲良くなれるとうれしいです！ よろしくお願いします！」

ペコリ、と頭を下げるしぐさも可愛らしさ満開である。

この日本系地球移民らしき少女の名前を、ようやくオティーリエは知った。

「そう言えば全然名前聞かなかったでありますな……」

「ミツキ・カリン殿か……」

「——え、ミツキ・カリン？」

と、そんな疑問符を浮かべる横で、そんな男性の声上がる。

今声を上げたのは、ジョン・ベルーガ。C組の男子生徒だ。

クレーエと同じくレッドホーンに乗っている、ミーハーな感じのする普通の生徒であ

る。

「？」



「おや、アレはジョン殿では……」

「……ああ!？」

あああああああああああつ!!!」

と、若干失礼ながらも、ジョンは指をさして、近隣の男子生徒に目配せして叫ぶ。

「え?」

……あ!!」

今声を上げたのは、丸々肥えた体にメガネが特徴のフジオ・カーター。地球系クォーターの風族出身である。ハンマーロックに乗り、おそらくクラスでも有数のミサイル誘導経路設定の速さを誇る。

「ああ!!」

そしてその隣で、イタリア系地球移民ハーフの海族出身のブリツイオ・ボナツコルティが驚きを上げる。

ちなみに補足だが、彼もジョンと同じくレッドホーンに乗り、女性相手への援護防御に定評がある。

「ええええええ?!」

そのさらに隣で、砂族出身のゴドス乗りの女子生徒、マリージア・マルが驚きの声を上げ、

「ありえねえ!?!」

黒い肌が特徴の、カノントータスの砲手を務める虫族女子生徒、テイリー・リコモも同様の声を上げた。

ちなみにこの5人、昼休みによく集まるミーハーな集団だったりする。

「5人とも、なんでそんなに驚いてるんですかあ?」

「「「知らねーのか、副委員長(サブリーダー)!!?!」」」」

綺麗にハーモニーして叫ぶ5人。

「おいおい、サブリーダー、せめてテレビはよく見ろよお? 彼女はウチの村ですらすつ

げえ有名人だぜえ?」

と、身振り手振り大きく、テイリーは妙なりズムでリナに言う。

なぜか褐色の肌とその部族出身らしいヘアスタイルが、その動きに似合う気がする。

「というところ?」

「副委員長、彼女は!」

このミツキ・カリンさん、は、マジもんの『アイドル』なんだよ! なあ!?!」

「今週の『月刊アイドル検定』の表紙を飾ったはずなのに……クツ、余りの事に気付くのが遅くなりました……!」

大仰に驚いて大手を振って指すジョンの横で、冷静にメガネを直し語るフジオ。

「へー、アイドルですかー。

すごいですねー、勉強しなくてもお金稼げる職業じゃないですかー」

「相変わらず言いぐさが酷い副委員長だった!!」

じゃなくてさー、もつと驚こうよ!! こう、アイドルだよ!? アイドル!!

もうスツゴイ有名人だよ!? 雑誌にもテレビにも載ってるほどだよ!!

あ、カリんちゃん! わたしい、ファンクラブ会員番号78番だよ!! 最初期メンバーと言つてもいいレベルだよ!! 仲良くしようねー!!」

と、テンションの高いマリージャに、流石のカリんも少々苦笑いだった。

「何という事だ……ただでさえ、レベルの高い子たちがそろつていると言うのに……目移りしそうだな、本当。誰からお茶に誘うべきか迷うな」

その横では、ブリツイオが少々キザったらしく髪をかきあげ、そんなどうでもいい悩みを吐いていた。

「落ち着け、雑魚共。とりあえずは、事情をまず聴いてやれ」

と、フィリアが気になる単語を出して、そんな事を言う。

「……ところでジョンさん。冗談抜きでカリんさんって、どんなアイドルなんですかー?」

「え? 『純粹ゆるふわ系』アイドルの筆頭だけ? めっちゃファンサービスもいい

し、どんな外回りも必ずやるんだって」

「いつぞやの部族を見よう的な企画でも、本当に芋虫を食べたことで有名です」

へー、とリナは、なんとなくこれから起こるであろう出来事が予想できてしまう。

「えつと、みなさん！」

まずは、ある意味で、その、本当にごめんなさい!!

私は、このクラスに番組の企画で、入ることになりました！」

「あ、やつぱり。なんだ、予想通りでしたね」

ああ、とクラス全員が納得した声を上げる。

こんな、ゾイド乗りを育成する機関の中でも、まあ、そこそしか有名になれない場所に有名人が来る理由など、そのぐらいいしかないだらう。

「で、でも！ 受験は私が本当に、テレビの圧力なしで、実力だけでここに入りました！

ほ、他のところが落ちちゃったけど……でも、実力で入りました！」

「あのく、とりあえずクラスの副委員長としても、一応カリンさんに質問いいですか？」

と、リナは手を上げて言うと、フィリアは、くい、と顎だけで良しと伝える。

「じゃあ、カリンさん？」

「はい！ えつと……」

「おっと。私はこのクラスの副委員長と作戦参謀を務めているリナソレーネ・アシユワースです。」

さて、聴きたいことはただ一つ。

あなた、どの程度ゾイドを動かせますか？」

と、リナの質問に小首をかしげるカリン。

「どの、程度……？」

「まあようするに、バーサークフューラーが動かせるとしたらどう戦闘するんですか？」

他のゾイドに乗っても戦法が似ているのはどこですか、と」

えっと、と困惑するカリン。

「ば、バーサークフューラー……えっと、私は『ココロ』って呼んでるんですけど……」

ぶっ、とクラス全員が吹いた。

なんか可愛くて似合わねえ……と言いたかったが、まずは続けて、と手で示す。

「その……一通りは、動かせます……でも……」

「でもっ？」

「……他のゾイドは……乗れないんです」

「はい？」

と、予想の斜め上の答えが返ってきた。

「動かせない、ってどういう事ですか？」

「その……えっと、コマンドウルフだと、乗った途端に勝手に暴れちゃって……カノン  
トータスは動かなくて……モルガは……コックピット空けてくれなくて……もつと  
小つちやいのも、変にみんなにいやがられて……」

「ここまでもじもじと告白するカリンに対し、

リナ、まるで目の前に宇宙人がいるかのような目でカリンというアイドルを見る。

「はあ？」

「あ……ごめんなさい……」

「いやいや、冗談とかキャラづくりで言っているのなら、カメラ回さないところで詳しく  
聞きますよ？」

え、まさかマジで言ってるんじゃないですよね？」

「お、大マジ……です……」

リナは、顔面が自分でもひきつるような感覚に陥る。

「……カリンさん？」

「はい……？」

「あなた、〇〇系アイドル、って名乗るなら、ゆるフワ系アイドルより絶対に合う言葉が  
ありますよ？」

ピーキー系アイドルとか、変態性能アイドルとかっていう」  
「ふえ!?」

「いやね、悪いとは言いません!! バースークフューラーは、そりゃあ、色々と問題もあ  
りますけど、でも!

優秀な性能をもつ、最高級のゾイドであることに、疑う価値はありませんよ?」

でも、とリナは言い放つ。

「あなた、ピーキー過ぎるでしょう?!」

「……私、いけない子ですか?」

「そうじゃないんですよ……ちよつと、ちよつとなんかおかしい気が……あー、ごめんな  
さい。」

ちよつと私の中の常識が崩れているんですよ……」

リナは、理解できるが理解できない事に、頭痛を覚えた。

いや、周りも、一部はすごく頭痛を催している。

「なんで、この世にこんなよくある頭の軽い小説の主人公気質がいるんですかねえ……」

「え、えつと……?」

「リナ殿、まあ、その辺にしてやるといい。カリン殿は困惑気味だ」

と、そこでヒルダがそう肩に手を置いて、語る。

「ふむ、まあ、あれだ。こういう場合、絵になる映像もそろそろあのスタッフたちも欲しているだろう。」

この困惑を解消するためにも、少々いい余興がある」

と、うまく一言でこの場をまとめ、ヒルダはそのままファイリアに向かう。

「先生。1時限目は、ゾイドの慣らしだったでしょうか？」

「ああ。今日は一週間に一度の全科目ゾイド実習の日だ。忘れたか？」

「ならちようどいいでしょう。」

——私、カリン殿に一騎打ちを申し込む」



## その4

さて戦闘、と言う前に、リナはカリンを実験にかけてみた。

「テスト1ー、コマンドウルフ行きまーす」

『きやああああああ?!?!』

カメラ越しでもわかるほど、カリンの乗った学校備品のコマンドウルフ——大人しいはずの——が大暴れしている。

「テスト2ー、ハンマーロック行きまーす」

『きやああああああ?!?!』

大人しいはずのハンマーロックもダメだった。

「テスト3ー、カノントータ」

「あゝ?」

「なんですかあ?」

「……」

カノントータスが、乗せる事を拒んで頭を引っ込めている。

\*\*\*

「ポンコツですね、本当。」

あなた、ゾイド乗りとしてここまで酷いのは稀ですよ?」

ガン、とシヨックを受けるカリンはさておき、トリナはカリンが乗れる、と『豪語』するバーサークフューラーに向き合う。

「型番、型番……まったく、こんなクソパイロットを乗せるだなんて、何処の贋作バーサーク（笑）なんだか……」

「うううう……」

「ごめんなさいね、ウチの副委員長。齒に衣着せないし、舌には猛毒があるのよ」

と、メルヴィンになだめられる涙目のカリンなど知った事ではないと背中を言いながら、バーサークフューラーの脚部、内部の基盤近くの型番が書かれた部分を見る。

「あれ……?」

「どうしたの?」

「なんで、ココロが暴れないんだろう……? 私以外に懐かないのに……?」

「あー、あのねー?」

あそこのリナの一番恐ろしい事はね、戦術だけじゃなくて、

ほとんどのゾイドをそこそこ乗りこなせるっていう、結構便利な才能あるのよ」

ええ、と驚きの声を上げるカリン。

「あいつ、レッドホーンみたいな重いゾイドから、ライトニングサイクスみたいな高速戦、射撃適正が高い癖して、格闘機まで乗りこなす、とんでもないマルチロールゾイド乗りなのよねー。」

完全野生体も、手懐けられるほどのねえ？」

すごおい、と素直にカリンは感心する。

「……それに比べて私は……」

そして、シユンと項垂れてしまった。

「き、気にすることもないわよー。ホラ……3年は通うんだからね？」

徐々に腕も上がるわ！ 後ろ向きな発想は忌避すべきよ？

逃げるなら、後ろを向いても前向きな心で、とかのヘリック大統領も言っているわ！」

と、そんなことを二人がしている内に、リナが帰ってくる。

「うーん……」

「どうしたの？」

「いや……あ……」

まあ、ひよつとしたら今日の勝負、カリンさん勝てるんじゃないかな〜って」

突然、リナがあまりに驚くべきことをさらりと言う。

「ええ!？」

「いや、可能性の話でしょうけど、もしもカリンさんが本当にあの、『あそこの』バーサークフューラーを自在に動かせるのなら、ですけど」

と、言つてリナは、頭を押さえる。

「どういう事ですか…?」

「まさか、あんな型番のバーサークフューラーが残っていたなんて」

\*\*\*

『ヒルダ殿へ、言われたものを持って来たではありませんが……』

『本当に、これを積むのか…?』

フツ、とライジャーの中で、真紅のパイロットスーツのグローブ部分を直すヒルダは笑う。

「ああ。セイバータイガーも乗っていた物でな。この武装が、一番いい」

ライジャー両脇に立つのは、右にオティーリエのエレファンダー、左にシルバの乗るゴジュラスがいる。

そして、二体の鼻と腕に支えられているのは――

長大なビームキャノン、そしてミサイルポッドとセンサー、それらが一体になったウエポンラック。

空力用スタビライザーとスラストターが一体になった、予備ジェネレーターユニット。

同じ装備を付けたゾイドがいる。

旧名：グレートサーベル。

セイバータイガーアサルト、とでも言えば通じるだろうか？

帝国高速戦部隊の、エース級にのみ与えられる武装だ。

『ライジャー用アサルトユニット……！』

いや、まさかこんなものをお目にかかれるとは……！』

「ライジャーは元はセイバータイガーの随伴機として生まれた。

このぐらいいは考えられていたとわかるだろう？」

『どうやって手に入れたかが、疑問』

「フツ、嫌みな貴族階級の特権とは、オーダーメイド程度は朝飯前と言えるものだ」

すつげえでありますな、と嫌みかどうかはともかく、貴族階級に該当しそうなオ

ティーリエがつぶやく。

知ってか知らずか、ヒルダはなおもゾイドと武装の調整をし、口元に笑みを浮かべるのみ。

「相手方は腐つてもバーサークフューラー。

弱かろうと、降ろしたてのライジャーの戦闘用ドレスの言い慣らしになる。

そして、強ければ強くても、負けても笑う事が出来るであろう？」

『負けたら元も子もないでありますよー？ かつてのゼネバス・ムーロアなんて負けた挙句にガイロスの人質として軟禁され続ける結果だったではないでありますか』

「……まったく、耳が痛い」

と、なぜか含みのあるような返答をし、意識を今度はライジャーに向ける。

「さて、ライジャー。名前を付けてやるほど気の利いた主人ではないにしろ、アサルト状態のお前が負けるのは、いささか我が心に不快感が残る。

お前は敗北主義者では無かろう？」

グルルル、と低く唸るライジャー。

その声をどう受け取ったかは知らないが、フツ、とヒルダは笑う。

「さて、先方も待っているやもしれぬ。

待たせるのはいい女の特権だが、ゾイドを駆る騎士としてはいささか面目ない。

いくぞ」

フルフル、と体の動きを確かめるかのようにライジャーが動き、グオオ、と一つ吼え、そのまま進む。

向かう場所には、すでに相手が鎮座している。

\*\*\*

『ハロー、エブリワン！ みんな元気い？』

この度い、ステルスバイパーちゃんに乗り換えたC組の情報通り、セドゥーサ・リーマンとは私のことだあ〜！」

頭をもたげた蛇型ゾイド『ステルスバイパー』の上で、小柄な中々の美少女がそうマイクに向かって叫ぶ。

「帰れー！」

「実験と称してはめ殺しやがってー！」

「クソ蛇女！ イグアンに乗り戻せー！」

「おうゴラア、ステルスバイパー相手によつてたかつてレイプまがいの集団攻撃した癖に何言つてんのよ男子共！」

なにおう、と喧嘩つぱやく答える男子をフン、と言つて無視し、彼女は続ける。

『おつとつと、まあそんな事は良いとして〜。』

早速！ C組内きつての大勝負始めるよお〜!!!』

いええええええええ、と歓声が上がリ、校庭に2体のゾイドが並び立つ。

『う赤コオナア〜!!』

知る人ぞ知る、知らない奴は誰も知らない悲しい高速戦ゾイドオ!!

しかあし、これぞ高速戦機の名機！ ライトニング何とかさんもジークどうたらさん

もこいつの評価には負けること確実!!

我らが騎士っ娘、ヒルデガルド・ターレスが操るそれこそお!!

E H I — 09、ライジャー!! そのアサルト仕様だあああああ!!!」

わあああああ、と言う歓声を浴び、ヒルダのライジャーがサービスとばかりに天高く吠える。

『あ青コオナア〜!!!』

本気かな!? それとも演出か!?

実力はいい意味でも悪い意味でも未知数のルーキー!!

みんなのアイドル、ミツキ・カリンちゃんの『ココロ』こと!!

E Z — 49、バーサークフューラアアアアアアツ!!!」

ドシン、と一歩前に踏み出し、こちらも天高く吠える。

『バトルモード、001!』

一対一、ルール無制限、フィールド有限の、いわゆる『決闘モード』!!』

ガシン、ガシン、と2体のゾイドは向かい合う。

『カリン殿、あつて間もない身で失礼だが、勝たせてもらおう』

グオオオン、とヒルダの言葉に反応し、バーサークフューラーへ立ち向かう意思を見せるライジャー。

『お、お手柔らかにお願いします』



それに答えるかのように、バスタークローを展開して威嚇するバーサークフューラーのココロ。

『では、いつくよお〜!!』

レディイイイイ……!!』

そして、始まる。

『ゴオオオオオオオオ!!!』

かあん、とステルスバイパーの尻尾で、学校備品のゴングが鳴らされた。

\*\*\*

## その5

『先手必勝!! とらえきれるかっ!』

『えっ!?!』

その瞬間、ライジャーアサルートの爆発的な突撃がバーサークフューラーを襲う。

『クツ……!』

だがその時、バーサークフューラーは信じられない動きをした。

右のバスタークローが、妙な鋭さと『柔らかい』動きを持って前に突き出され、

『なあ!?!』

ギイイン、と言う音を響かせ、ライジャーを逸らしたのだ。

『に……!?!』

いや、驚くべきはその後だ。

ヒルダの腕は知つてのとおり、この受け流された動きを殺さず、ターンを決めて射撃に移ると言う事を平然とできる。

この程度の驚きでも、冷静に後ろがとれる。

逆に、先程も分かった通り、カリンはまともにゾイドが動かせない。

ただ暴れさせるだけで制御が出来ていなかった。動かせても、それに反応できるのは無理だ。

だから、先程の流れのままに反転し、バスタークローとライジャーアサルトのビームキャノンの銃口と向かい合う形になるその様子は、

ありえない事だった。

『反転できた！』

『見事ッ!!』

当然起こる事だが、ビームキャノンは放たれ、バスタークローは展開してEシールドがそれを防ぐよう張られる。

『なるほど、これは面白い!』

撃った衝撃で後ろへとステップで下がり、再びライジャーは走り始める。

『っ、強い……! ココロ、行くよ!』

あわててカリンは、ココロことバーサークフューラーを飛ばし始める。

\*\*\*

「なんて動きを!?!」

「ライジャーに反応しきった……!?!」

その様子を見たC組の面々は、驚きの声を口々に上げていた。

「普通の場合、あの突進をEシールドで受けるのがパターンです」

と、リナが冷静にみんなに聞こえるよう、解説を始めてくれる。

「でも、その場合だとライジヤールの胸の複合シヨックカノンの餌食です。

ガンブラスターのローリングバスターほどじゃありませんが、連鎖的にタイミングをずらして攻撃できるシヨックカノンとEシールドの相性はけっこう悪いですしね」

「それだけじゃないでありますよ、リナ殿」

と、ここでC組解説役二人目である、オティーリエが口を開く。

「ライジヤールのアサルトユニットを見る限り、あのビームキャノンはゼネバス系企業『Ziアームズ』の高貫通パルスレーザーライフルでありますし、今のように一発でパークフューラーのシールドを貫通とはいきませんが、シヨックカノンの応用で破ることも可能だった、でありますよ?」

「ですよねえ……でも、あのパークフューラーのココロちゃんはソレをしなかった」

と、妙に的外れな事を言うリナ。

「まるで、一度そのパターンを見ていたかのように、それをしなかった。

あのココロちゃんだから出来たんじゃないですかね?」

「? カリン殿がしなかった、ではなく?」

「ええ。ぶっちゃけ、カリンさんが出来るのは、百歩譲つて、まだ『バーサークフューラーの闘争本能の動きに合わせる』操縦だけだと思っただけですよ。」

ただ、それができるのもすごいですし、あれが私の考えてる通りのバーサークフューラーならそれでベターなんです」

つまり、とリナは続ける。

「これではつきりしましたね。」

これ、カリンさんのココロちゃん、ライジャーに勝てますよ、条件さえそろえば」

\*\*\*

(この動き、妙だ)

ミサイルをランダム誘導パターンに設定し、蛇行しながらターンして後ろに放ち、再び走る。

『くう……!』

それを、バーサークフューラーはジェノ系テイラノサウルス型ゾイド特有のホバー移動を駆使し、右へ、左へ、と避け、稀にEシールドやバスタークローで迎撃する。

(素人の動きなのに……的確過ぎる)

ここで、すこし罨にはめるため、急に右後ろへステップする、という芸当をして後ろを取ろうとする。

『あ……』

が、空中でまだビームの照準をしよう、という段階で相手も反転し、こちらへ撃たせまいと突進してくる。

「だが反応は良い。素質はあると言わせてもらおう！」

バスタークローを壊すつもりで、胸の複合衝撃砲を放つ。

4門のビーム、1門の大口徑衝撃砲は、しかし奇妙なほどの反応の良さに回避される。

「回転……!？」

バーサークフューラーは横へ大きく回転し、そしてその尻尾を開くのが見える。

『っ、こうなったらー!』

「何い!？」

まさか、といまだ衝撃砲の反動相殺に四肢が動かないライジャーの中、その光景に驚きを隠せないヒルダ。

首を下げ、尾と水平にし、口を開き砲塔を露出させる。

空中でやっているその動作は、余りにも有名な攻撃の前準備。

「荷電粒子砲……!!」

『っ……!』

まさか、と思い気付く。

ジェノザウラーの系譜の一体、ジェノブレイカーは空中でも、どこでも荷電粒子砲が撃てた。

単に安全のために、地にアンカーを打ちつけて撃つバーサークフューラーの設計でも、準備だけなら空中でできるはずだ。

「……………くくつ、これは面白い!!」

動け、とライジャーに意思を込めて操縦幹を動かす。

まずは回避だ。フルチャージをする気はなさそうだが、それでも十分な破壊力はあ  
る。

だが、避け方も重要だ。

バーサークフューラーの荷電粒子砲の俯仰角は+25度／-12度、左右へのふり幅は真正面から約36°Cずつ。

意外と広い。避けるのも難しい。

「荒野の決闘とは、良い展開だ!!」

チャージの間に後ろへ回れば、勝てる。

まわれなければ、消し炭……とまではいかないだろうが、嫌な思いはするだろう。

「ライジャー! 私について来れるか!」

吠えるライジャー。

荷電粒子砲は発射寸前だ。

「来いッッ!!」

一気に踏み込む。

この場を抜ける最短距離は——あのバーサークフューラーの真横だ。

『速い!?!』

「行くぞライジジャーッッ!!」

バスタークローの迎撃も考えない。まずは避ける。

シンプルに、背後を取る。

『くっ、』

「そして勝つ!!」

一歩目で、バーサークフューラーの顔の前に踏み込む。

もう撃たれてもおかしくない距離だ。

だが、相手は撃ってこない。

(ふみだせッ!!)

横を抜ける。ライジジャーの速度を、バーサークフューラーはとらえきれない。

空を切り、地面をうがつバスタークローを一瞥しながら、バーサークフューラーの尾の先端をかすめるほどの場所で着地をする。



「もらったあッ!!!」

旋回し、そして。

逆さづりとなつたバーサークフューラーの頭を見る。

「何い!?!」

バスタークローが地面に『2つとも』刺さっている。

そしてそれを基点に、180℃回転してバーサークフューラーはこちらに向いていく。

「しま————」

威力を下げられているとはいえ、

その荷電粒子砲の光は、ライジャールを包むほど強力だった。

\*\*\*

## その6

「いやはや、見事な勝負であった。」

まさか、バスタークローをアンカーにするとは……いや、言い訳はよそう。

私の完敗だ。だが本当にいい勝負だった」

と、ヒルダに言われ、あはは、とはに cand 答えるカリン。

「そ、そんなことないですよ……私は、ただココロの動きに合わせただけで……」

「それがすごいんですよ、あそこのゾイドの場合」

と、カリンの言葉に横からリナが口を挟む。

「まず、あんなゾイドに動き合わせられるなんて普通じゃできませんよ?」

「あ、何ですか……?」

と、その言葉を待つてたと言わんばかりに、リナは「オティーリエさん、ちよつとあのココロちゃんの型番見てくださーい」と叫ぶ。

言われたとおり、「りよーかーい」と言ってからバーサークフューラー、ココロの元へ近づき、噛みつき攻撃を避けて型番を見る。

「あ、危ない!」

「大丈夫ですよー、あの程度で死んだらそれはそこまでだった、っていう事で」  
「ひ、酷すぎますよお！」

まあまあ、とカリンをなだめたところで、その型版を見たと思われるオティーリエが「げえ!？」と大きな声を上げる。

そして、戻ってきたながら「なんちゅーもんに乗っているんでありますかカリン殿おおおおおっつ!!」と叫び、二人の前で止まる。

「ど、どうしたんですか？」

心配するカリンの横で、

「ね? アレはやバいでしよう?」

とリナは心配など微塵も思っていないかのようにそう質問する。

「ぜーはー……や、ヤバすぎて久々に叫んだでありますう……」

「オティーリエ殿、どうした? 貴殿がそこまでになるとは」

と、今まで黙って見ていたヒルダの言葉に、ぐ、と顔をあげてオティーリエは答える。

「『アルティメットX』……ご存じで?」

「む? いや、今初めて聞いた」

「お、オーガノイドシステム限定型の一種で……完全野生体ゾイドコア自体に、学習能力を備えるもので……」

相当息絶え絶えに言うオテーリーリエに、リナはアイステイー、微糖ストレートを渡す。  
「どうも……んぐつ、ぷはあ……」

その、でありますよ、アルティメットXは、使いこなせれば強力でありますが、

まずゾイドの動きを完全に御せるだけのすさまじい実力、最適化された動きについて  
いけるだけの技量がない限り、まず機体に振り回されるのが目に見えるでありますよー

……

そもそも、気性の荒い完全野生体に勝手に判断させるようなシステム組み込むわけな  
んでありますから、当然であります」

ほお、とヒルダは感嘆のつぶやきを漏らし、再びカリンを見て笑う。

「なるほど、つまりカリン殿は将来有望なゾイド乗りの才を持つと言う訳か！

はっはっは！ これは私も相手が悪い！ 負けて当然か！」

全く臆面なく、そうほめたたえるヒルダに、隣でカリンは顔を真っ赤にして照れる。

「まあ、こんなゾイドを動かせて、コマ犬（コマンドウルフ）一匹動かせないのはどうか  
と思いますけどねー？」

「うっ！」

「ところで、他のゾイド動かせるでありますかあ？ カリン殿お？」

「うぐう……！」

そこですかさず、リナとオティーリエが追撃とばかりに痛い部分を突いていく。

「二人ともよせ。それもまた才能だ、それ以下では決してない」

と、ヒルダが止めて初めて、二人は舌を出しながら「はーい」と言って止める。

「さてー、とじゃあ、」

そして、リナが口を開く。

「次の授業へ行きましょうか」

\*\*\*

「撮ったか!? 音響のチェックは!？」

「いやあ、すげえ映像だったっすよ!!! 撮れたのが奇跡かも!」

「音響、何とかクリアにしたんだな!」

そんな頃、テレビスタツフ3人衆は、ありあわせのチェック用機材の前で慌てていた。

「予想以上だぜコレ! 低予算の企画だったけど、こりゃあ!」

そこに映し出される画像を見て、リーダー格の低い男はつぶやく。

「この番組、化けるぞ!!」

\*\*\*

「総員、傾注!!」

「これより、ランダム戦を行う!!」

フィリアの号令に全員が一挙して整列し、その言葉を聞く。

「ランダム戦……?」

「アシユワース! ミツキに簡単に説明を行え!」

はい、とリナが答え、カリンに説明を始める。

「まあ、簡単に言うと、本当にランダムでチーム分けして、実戦形式で戦うと言う事です  
よっ。」

「あ……! なんだ、結構普通だった……」

と、カリンの安堵の瞬間、目を光らせ「ふふふー♪」と妙に含みのある笑みを浮かべるリナ。

「……『本当に』ランダムで選ぶんですよ……?」

「???」

と、そこまで言った所で、フィリアが再び声を発する。

「よおし、理解したようだな。」

では、チーム分けだ!! 委員長!!」

了解、と言ってメルヴィンが前に入る。

「全員、お手を拝借!!」

と、その言葉と共にクラス全員が手を上げ、あわててカリンが続いて手を上げる。

「せーっのっ!!」

そして、次の瞬間、

「ぐーうっ、ぱっ!!!」

その言葉と共に、グーとパーだけの手があたりを埋め尽くした。

——ちなみに、パーなのはカリんと、クレールエ、そして以下生徒2名。

「チーム分けは終わったようだな」

「え!？」

そして理解する。

その重大な意味を。

「……ど、同数でやるんじゃないんですか……?？」

「だくから今その性悪副いいんちよが『本当にランダム』つつつたるろ? ルーキ―」

続けて「クレールエだ、まあよろしく」と握手を求めて言うクレールエに、握手をしつつ

もきよとんとした顔のままのカリン。

「……え? え?、私達つて……」

「そつちは4人チーム。」

「こつちは36人チームです。」

「ふええええええええええ」

「?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

リナの説明に絶叫するカリン。  
この後、滅茶苦茶悲惨な戦いが発生した。



## 閑話：放送

\*\*\*

『きやあああああああ?!』 死ぬ、死にます! 死んじやいますう?!』

『死なばもろともお!! 撃って撃って撃ちまくれえええええ?!?!』

ミューズ学園1年C組名物『本当にランダム戦』は、ここエウロペ大陸!全土に流れた。寄りにもよってゴールデンタイム放送である。

『いやいや、コレ学校じゃないでしょ!』

『カリンちゃん、部族体験どころか、とうとう軍隊に入隊しちゃった、これ!』

番組の司会者の人気芸人たちが心底驚く中、カリンが恥ずかしそうにはにかんだ笑顔を見せる。

『ほ、本当ですよ……でも、すごくいい経験になりました!』

みなさん、本当にゾイドで戦ってるんだな、って!

それに、みんな意外と親切で、チームワークがあって……

あ、さつき撃ちまくれて言ってた人、クレーエさんって言ってますね?』

と、カリンのコメントにふーん、やどこ撮ったのかクレーエの写真、そして彼女の

乗るレッドホーンが映し出され……と番組が進んでいく。

『へー、強いんだねー、まだ1年なのにー』

『そうなんです、本当に強くて、私も強くなれそうです！』

『ちなみに、司会者的には、ここに居る先生の方がものすごく気になっていると言うか……』

と、言つて芸人があのフィリア先生の写真を見て言う。

『……え、でもすごく怖い先生、ですよ……？』

実際、フィリア先生の喋るシーンは全カットである。放送禁止用語を連発したため。

『まあ、でも、色々な意味で当たり引いたかもねー、カリンちゃんは。』

俺、これでもゾイドバトルマニアだけど、このクラスは強いよ？ ゾイド選びも通つて感じで』

などと、バラエティー特有の雰囲気の中番組が進行していき、

そして、そこでテレビが切られる。

\*\*\*

「はっはっはっは！ 面白い学校があるものだな！」

我々以外にここまでの確にゾイド雲耀ができる者どもがいるとは！」

そのテレビを見ていた『彼女』は、そう声を上げて笑う。

「ミューズ学園は、あれでも大陸最古の部類に入る由緒正しいゾイド乗り育成所と聞いております。」

まだ、1年生とはいえ、かなり『ゾイド偏差値』も高いと聞いています」

脇にいたもう一人の少女の言葉に、『彼女』はより喜んだように口の端を曲げて笑う。

「よおし、決めたぞ!!」

バン、と机を叩き、立ち上がる。

「我が『シユバルツ高等育成学校』、『黒の竜巻（シユバルツエス・シユトルム）』が直接、彼らに勝負を申しこもうではないか」

そういつて、彼女は夜の空に笑っていた。

## 第4話：初めての他校試合

### その1

「いつかの汚名を雪ぐ時!! 勝負ですわ!」

「あ、丁度良かった♪ 的役お願いしまーす♪」

「むきー!!!」

という訳で、今日もA組とC組の模擬選である。

\*\*\*

『何をしているのジークドーベル隊!! 囲みなさい!!』

『了解!』

A組は、C組でもたまに負けるほど強くなった。

『ハウンドソルジャー隊は右に回って!! ライトニングサイクス・シャドーフォックス  
混成部隊は回り込んで相手を囲む!!』

ライガー体全機、わたくしに続けええええええええええええええええ!!!』

目に見えて、戦術的な動きが出来るようになってきた。

そもそも、高速格闘戦機主体のA組は、機動力においてC組に負けるはずがない。

分散と集合を迅速に行えるだけでも、その戦闘力は全く違う。

まして、格闘兵装は『一撃必殺』が基本。射程こそ酷いものだが、それはそれでその使い道さえ間違わなければ、確実に相手と戦える。

『見えました、どんくさいレッドホーン3機と新顔、デイメトロドン2機!! このまま倒せませす、囲みましょう!』

『……いえ、全機、追撃止め!』

おかしいですわ、なんで揺動役があこのライガーじゃない!?』

そして、C組の卑怯極まりない実戦的な攻撃の前に、A組のリーダーである彼女、アリシアの勘も鋭くなった。

だが、忘れてはいけない。

C組も、今も成長している。

\*\*\*

『気付かれたぜ、クレーエ!!』

元ゲルダー乗りであり、電子戦機改造型砲撃ゾイド『デイメトロドンL』に乗る男子生徒、バルトが声を上げる。

『十分だ、全員円陣組め! 砲撃開始まで時間がない!!』

クレーエのレッドホーンを先頭に、2機のレッドホーン、2機のデイメトロドンLが

方向転換し、全ての火器を起動させる。

『急げよお!! 絶対に相手の機動力を奪え!!』

足潰せ、足潰せ!!』

すべての火器が立ち上がり、デイメトロドンの電子戦支援を受け、正確な仮想未来位置が出る。

『オープンファイヤだあ!!』

そして、移動要塞の異名のあるレッドホーンと、重電子戦ゾイド改造の砲戦ゾイドによる砲撃が始まる。

\*\*\*

C組のクラスのチーム分けは、かなり細分化されている。

今初めてA組に砲火を交えたのが、クレール率いる『フォートレス隊』。

おもに重ゾイドによる防衛ライン構築、他の隊の防御を目的にしたチームであり、意外かもしれないが敵との電子戦を担うチームである。

通常の目的は、主力部隊の防衛がもっぱらだが、それだけをするわけではないのがC組の強みなのである。

\*\*\*

『えー、こちらスカウター3。』

フォートレス3、および4の誘導電波受信中。

アーチャー隊、出番でっせー？」

『了解したわ！』

グラウンドに掘った簡易塹壕から、ハンマーロックが顔をのぞかせる。

ハンマーロック、これは一見格闘戦機に見える。

だが、その実これは頑丈な足を持ち、うまく衝撃を逃がせる『ミサイル発射機』であると言う事をご存じだろうか？

そもそも、ハンマーロックの原型たるアイアンキングが、『近接戦では誰にも勝てないゴジユラスを遠距離から屠る物』だった事を知っている人間が何人いるだろうか？

『全機、ミサイルを照準。誘導方式はセミ誘導、残りの誘導周波数はフォートレス3、4の誘導電波に合わせて！』

アーチャー隊は、主火力部隊の一角である。

ミサイル、ロケット兵器の火力を持って、敵に大損害を与える物である。

『リーダーを照射！ 同時に紫外線レーザーポインターで狙いをつけて！』

ガシオン、とハンマーロック背部、高威力大型地対地ミサイル『ウエザビーマーク4』が動く。

『照準完了。しかし勘のいい組だ、いくらか逃げ出し始めています！』

『構わず、塊の部分へ打ち込んで！』

カウント3で撃つ！ 3、2、1、』

ファイア、という号令で、地上に咲く花火が発射される。

\*\*\*

『来ましたわ！ ライガー部隊、円陣になりEシールドを展開!!』

共和国の流れをくむライガーには、大体的場合『Eシールド』が存在する。

元はエネルギー兵器しか防げなかったが、気が付けば物理攻撃を防ぐことが可能と判明したこれは、半端なエネルギー武器よりもエネルギーを使う反面、半端な装甲では出せない強度を出す。

これにより、アリシア達A組はこの砲撃を防ぐことを決定した。

\*\*\*

『今です!!』

それがリナの罠だとも知らずに。

\*\*\*

『上!』

『!?!』

その時、上から何かがふつてきた。



いや、一瞬でそれが何か理解できた。

ページされた、使い捨てロケットブースター。

そしてその影を隠すほど巨大な——テイラノサウルスの姿。

『ゴジュラス?!?!』

ドシン、!?!?! という音と共に着地するゴジュラスに、彼女たちは見とれてしまった。

それとは別に、シールドすれすれを乗り越えて着地する5機のゾイドに気付くのに遅れる。

『な、バーサーク、きやあ?!?!』

一瞬で、バーサークフューラーのバスタークローに弾き飛ばされる一体のブレードライガー。

『こっちはゴドス…じゃない?!?!』

そして、その脇の同じくブレードライガーが、帝国製小型ゾイドの名機『イグアン』の蹴りに足をつぶされる。

『あ、足を…きやあ?!?!』

流れるようにそのイグアンに腕の4連グレネードランチャーを叩き込まれ、一瞬にしてブレードライガーがコンバットシステムフリーズを起こし、沈黙する。

『おのれ、よくもおお?!?!』

『バカ、シールドを張って!!』

一人、近くにいたシールドライガーが反転した隙に、シールドの外で待っていたゴドスが、ゴドス最大の武器『蹴り』を後ろ足に叩き込む。

『があっ、あぐうっ!!』

さらに流れるように、右わきにある長砲身120ミリ砲を叩き込み、衝撃でシステムフリーズを起こす。

『くそお——っ!!』

その場は混沌の戦場と化した。

怒りに冷静さを失った獅子が、また最初の戦いの再来のように、恐竜たちに駆られ始める。

冷静な物たちも、もしこの場で逃げ出すのが罠なのでは……と動けない。

実際に外では、よく見ればカノントータスをはじめとした砲戦ゾイドがこちらを照準しているし、今にも来れ、そして相手から見えにくい場所でエレファンダーをはじめとする機甲部隊が突入の準備をしている。

『らちが明かない! まずは攻撃あるのみですわ!!』

全機、ゴジュラスに集中して!!』

ここで、本日もつとも頭のいい判断が下される。

ゴジュラスを囲むように、A組の残存する高速戦ゾイドが、走ったまま、うまく間隔を開けて包囲機動を取り始める。

『気を付けて！　ゴドス、イグアンの足は移動力がある上に、それそのものが強力な武器ですわ！』

常に間合いに気を付けて、つかず離れず、動かさず!!』

そう、まずは近づかずに動く。

動かなければ、良いのだ。動けばこちらの機動力の高さも生かせる。

動けば、いかに射撃技術の高いC組でも、当てるのは至難の業だ。

『きゃあ!?!』

『ユリア!?!』

くつ……ごめんなさい、今だけは許して!』

一人、それでも機動力で追従できるバーサークフューラーに掴まるシャドーフォックスを見て、つらい決断をする。

まだまだ。まだ幸い、全滅ではない。数も少ないわけではない。

『この借りは返します!』

まずは、ゴジュラスを狩る!!』

先程から両腕のビームガン、リニアレーザーガンを放ち、こちらの足を止めようと弾

幕を張るゴジュラス。

間合いを見る。格闘戦では、アリシアのライガーゼロシユナイダーが負けるはずはない。

『間合いと、』

有名な言葉だ。ゾイドウォーリアーを指す人間なら、必ず聞く格言。

『気合っ!!』

レーザーブレードを開く。

跳躍して狙うは、システムフリーズ。

『はああああああ!!』

肩とゾイドコア上部に位置する胸部。

だが、その狙いは外れ、より速く振り向いたゴジュラスの尾がブレードをとらえる。

『切り裂く!!』

斬、と尾を切り裂き、地面へと舞い降りる。

『一度目がダメでも、二度目がああっ!!』

すぐにターンし、再び相手へ向き直る。

その時、ゴジュラスの背を踏み台にして、こちらに白い影が舞い降りる。

『え?』

ライガーゼロのストライクレーザークロウを真正面から受け吹き飛んだ。

『きやあああああ?!?!?』

いや、まだシステムフリーズはないし、踏み込みが甘いために致命傷にならない。

転がり、衝撃を相殺して起き上がれば――

『きやあつ!!』

と、言う所で、ショックカノンを装甲の隙間にぶつけられる。

『クツ――――――卑怯ですわよ、一騎打ちに横槍とは!?!』

いや、それをあのライガーゼロ――――――クロムウエルのパイロットに言っ

ても、無駄な事だろう。

『はあ? 一つ一騎打ちなんて認めたんですかあ?』

ぷくぷくすくす、と笑うリナの言葉は、全くその通りだった。

くくくくくつ、もお、悔しいですわああああああああつ!!!!』

そして、時間をおかずに、今日はC組の勝利に終わった。

\*\*\*

## その2

昼休み、学校の解放されたベランダ

「まったく、あなた達も卑怯極まりないですわね、本当!!」

「いやいや、それほどでもないですよ♪」

「褒めてません!!」

いつも通り、そこではリナとアリシアが言い合いをしながら昼食をとっていた。

「いや、でも一騎打ち挑むとか、どの時代の帝国兵ですかそれ？」

私が共和国兵士なら情け無用、ファイヤー!! で周囲の部隊ごと更地にしますよ?」

「あなた、一体どこまで外道なんですか…?」

「いやだなあ、外道だなんて♪ 私が外道だったら、かつての共和国の首脳陣だなんて悪

魔、いや大魔王の集団ですよ♪」

「あなた、本当ゾイドバトルをなんだと思っっているんですか…?」

その質問に、ウフフ、と言ってリナはこう答える。

「ゾイドバトルの醍醐味は、

こっちゃんの損害を0にして相手に手も足も出ないように殲滅することですよ♪」

「……あ、あなたって人は……」

ガクリ、とアリシアは項垂れる。

「私はこんな人間に戦術や戦略を学んでいるんですのね……」

「いやいや、それはそれでいいんじゃないですか？」

『謀略を学びたいのなら、詐欺師に学べ。』

戦略を学びたいのなら、ケチであくどい商売人に学べ。

戦術を学びたいのなら、逃げ足の速い犯罪者に学べ。

結局、戦闘と言う最低の行為を学ぶには、最低な人間こそふさわしい。

戦いに美学を求めるような戦闘凶（バカ）に学ぶことが悪いとは言わないが、正直私はお勧めしない。

ああ、でも彼らに学ぶときは、それなりにこちらから利益を上げなきゃダメだよ？

だって、悪者は市民をむしり取る物じゃないか』

って、かつてヘリック大統領が言っていた、って委員長が話していましたし」

「それって、わたくし以下のゾイドウォリアー志望を全否定すると言う事かしら……？」  
なんだか涙が出てくるアリシアだった。

困ったことに、こうやって学んでいるアリシアが強くなっているのが事実なだけに。

「まあまあ、私はこうして自分達の踏み台、

ゲフンゲフン!! 練習相手がいるだけでもいいのに、こうやって紅茶の味が分かってくれる人がいて助かっていますし」

「今踏み台って言いましたわね? 今確実に踏み台って言いましたわよね?」

まあま、とりなは持ってきた超保温性水筒(セラミック製)の抽出口を開く。

「すんすん……あら、この香り、又ワリエリヤですの?」

今日のリナの紅茶は、又ワリエリヤ茶葉のストレートティーである。

中央大陸亜熱帯部分に位置するズイーセイロン半島中央部産の茶葉で、さわやかな香りにしつかりとした味が特徴の、ストレートティー向きの茶葉である。

「はい。ちょうどいい茶葉が手に入ったので……淹れるのに苦労しましたよ、本当」

と、言いながら、ゆつくりと持ってきたティーカップ(中央大陸有名磁器メーカー製)を取り出すりな。

「ええ、中々香りを残したままに入れるのが難しいですものね……幸い、ニューリバプールのお水は軟水だから、紅茶には適していますから安心ですわ」

目の前でそそがれる紅茶を見ながらも、そうアリシアは感想を漏らす。

「おまけに、ニューリバプールは『西方大陸美味しい水道水100選』の上位一ヶ台を常にキープしていますしね。浄水器から組んだ物ですけど、一応3分の煮沸をしておいたんですよ?」



「まあ、分かっていますわね？」

私の周りだと、あろうことかアイスティーに煮沸していない水道水を使うんですの「うわ、マジですか？　いくらなんでもないですよそれ」

はい、と言つてリナは紅茶を差し出す。

「ありがとうございますわ……ああ、いい香り……♪」

「ありがとうございます♪」

でも、ポッドで少しおいていた物ですし、劣化が激しいかもしれないです」

しかしそう言いつつ、特性ポッドの中の紅茶は、まだ湯気を立てている。

「……すす……ふう……そんな事を言いつつも、美味しさだけはわたくしが知っている中でも一番なのですわね？」

「ふふつ、私のクラスじゃ、誰もそのことをわかってくれなんでしょうよ」

二人は、静かに笑いながらも、香り立つ最高の紅茶を味わう。

ふと校庭を見ると、自主的にやっているのか、B組とF組らしき人間数人が、模擬選をしていた。

なんで組が特定できたのかと言うと、片側が『BZ—018　デイスペロウ』『BZ—019　エヴォフライヤー』のブロックス2機と、『RZ—070　凱龍輝』という、ブロックス—チェンジング・アーマー・システム（B—CAS）を持つゾイドだからであ

る。

そしてもう片方が、共和国性飛行ゾイド『RZ-029 ストームソーダー』1機と『RZ-010 プテラス』2機だった。ちなみに片方はガチガチのボマー武装であり、もう片方は背部にワイルドウィーゼルユニットを装備している。

凱龍輝がデイスペロウと合体（Ziユニゾン）をした瞬間を狙い、プテラス、ストームソーダー混成の3機航空ゾイドが空襲を仕掛ける。

だが、放たれた爆弾を、急降下したエヴォフライヤーが飛行形態から地上形態へ移行し、背部のアサルトライフルで爆弾を迎撃。

合体した凱龍輝デストロイの一斉掃射を、3機が弧を描くように回避し、宙返りする要領でストームソーダーがブレードで攻撃を行う。

が、凱龍輝デストロイの砲塔が切断される瞬間、あえて合体を解いてそれを回避する荒業が展開され、宙返りするように凱龍輝が飛燕を分離させエヴォフライヤーと共に空へと上がる。

「平和ですねー」

「ええ、本当に」

二人は、お互いに紅茶を口に含む。

「おっと、忘れていましたわ。スコーンをどうぞ、手作りですのでそこまで味は保障できませんが」

「あ、ありがとうございます♪」

と、アリスシアの出したスコーンをもらい、リナは笑顔で受け取り、はむ、と口に含む。

「あ、美味しいですよこれ！」

「ふふふ、ありがとうございます」

二人は、笑い合つて優雅な昼休みを過ごしていた。

「おーい、副委員長!! 大変だ! マジで大変なことになったよ!!」

と、その時、

バタン、と屋上のドアを開けて、C組スカウター3、あるいはクソ蛇女、ことセドゥーサが駆け込んで来た。

「どうしたんですかあ、セドゥーサさん？」

今、遥かな魂の故郷、地球の英国の風景を思い浮かべながら優雅にお茶していたのに「いやいや、これを聞いたら、お茶なんかしてる場合じゃねえ!! ってなるよ!!」

と、いつになく慌てて、セドゥーサはこう言い放つ。

「C組ご指名で、練習試合の申し出だよ!!  
果たし状だよ、他校からさ!!」

## その3

「緊急参謀会議でーす」

リナの言葉に、数人の生徒が集まる。

時刻は、昼休み後半。

昼食の時間に、リナはある生徒たちを呼び出していた。

C組参謀会議。

委員長であり、最終的な判断を下すC組の最高司令官であるメルヴィンを補佐するために、副委員長であるリナを筆頭に、戦略・戦術に長けた各部隊の副官ポジションを集め開く会議である。

リナソレーネ・アシユワースの戦術眼、戦略のスキルは強力だが、巨大な能力を持った個人に依存するのは、集団として危うい面を持つ。

ここには、少なくともそう判断でき、なおかつリナも認めるだけの能力を持った『参謀』が集まった会議なのだ。

「さーてね、他校からの果たし状がウチの指名付きと言う異常事態なわけだぜ。

どうも午後は仕事でないあのアイドルさんの番組の影響じゃないかね、とも思ってるけど、

あたしたちは何すりゃいいんだい？」

パンツァー隊副官、重装強行突撃ゾイド『ガンブラスター』を駆る鳥族女生徒レイン・フォールナーが、何時もの調子で軽く、そして的確に今の状況をまとめる。

「何する、と言われてもまずは相手のデータ収集並びに勝つための戦術を取るべきだと思います」

フォートレス隊副官、氷のような美女と言った顔立ちの、日本系地球移民と神族のハーフであるユキカゼ・コールドが、何時ものごとくタカ派に発言を返していた。

「いやいや、果たし状うけても、決闘に答える義理は無いと思うんだけどさ？」

「レイン、あなた、随分と弱気なんですね」

「お前、一応はこうやって誰か否定的にならなきゃいけないだろ、突入バカはすぐに死ぬんだぜ？ 突撃担当が言うんだ、間違いはないと思ってる聞いてくれよ」

パンツァー隊の使命は『突破と制圧』であるために、スカウター隊の次に突入することが多い。

ゆえに、オテーリエの副官のポジションにしているレインは、言動の割に慎重派だった。

ゾイドの愛着と、仲間への思いもあるゆえに。

「まあ、でもね、私は受けるつもりなのよ、悪いけど」

しかし、当の最高司令官ことメルヴィンは、そう言つてレインの意見を却下する。

「受けるなら受けるでユキカゼたちの意見通りに進めてくれよな、委員長」

「まあ、それでも情報は五里霧中ですが」

と、レインとユキカゼの言葉に、メルヴィンはユキカゼに説明を促すような目配せをする。

他の皆もおなじく、情報参謀でもあるユキカゼを見る。

「……では、一応今のところ私が知りうる限りの情報をば。」

ただし、まだ調べて5分ほどですが」

と、言つて彼女は、私物のタブレットパソコンを見やすいようにこちらに向け、立体映像モードに切り替える。

「今回、我々になぜか宣戦布告してきた学校名は『帝立シユバルツ高等育成学校』、チーム『シユバルツエス・シユトルム』。

ネーミングセンスに関しては、私も似たような物なのでここでは言及しません」

帝立シユバルツ高等育成学校のホームページを全員に見せ、その後別タブでひらかれた黒い暴風をアート風にしたエンブレムを全員に見せる。

「どんな学校なんですか、ユキカゼさん」

「はい。」

元は、ガイロス帝国の至宝と名高い『カール・リヒテン・シュバルツ名誉元帥』が自身の要望の元、ガイロス皇帝ルドルフ・ツエツペリン陛下に頼み込み作ったゾイド乗り養成所が元の学校です」

ひゅー、と参謀会議の外、聞いているだけの人間たちから口笛がなる。

「それほどなら、有名な学校なんじゃないんですか？」

「いえ。確かに名門ではありますが、西方大陸内ではさほど知名度はありません。」

どちらかと言えば、ガイロス帝国内部で有名と聞いております。

ええと、パンツァー隊長、オティーリエさんは知っていますか？」

「知っているでありますよー。ガイロスの方じゃもう、ここなんかくらべものにならない名門中の名門でありますよ。」

まあ、自分はそう言うネームの強みが嫌なんでありますがー」

肩をすくめてそう言うオティーリエは、肩をすくめてそう答える。

「ええ、まあ大体そんな所です」

「で、そのシュバルツエスなんちゃらとやらは、どんな相手なの？」

「それがいまだに情報がつかめません。」



情報も公開されている分だけでは十分とは言えず、

「んなもん簡単だろうがよお？ 見に行きやいいじゃねーか、ったく」

と、机に突っ伏している男子生徒——くせ毛が特徴の褐色の男、本人いわく出自不明の男子生徒リング・リンクス、FF隊参謀がそんな気怠そうな声を上げる。

「リンクス、あんた一応参謀がだれててどうするのよ」

「だってよお委員長、情報もねえ、話は簡単、周りはいいい女だけどアク強すぎでもうやる気おきねえんだよお、寝かせてくれよお……！」

「つーか、もう面倒だし学校乗り込もうぜ？ 練習見せてもらおうぜえ？」

「簡単じゃねえか、どうせ情報なんざ2割知れば御の字なんだぜえ？」

「けだるそうに机でグリグリ頭を動かして、そんな風に正論をつぶやく。」

「そうですねえ、まずは見た方がいいと私も思いますよお？」

「じゃあ、俺言いだしっぺだし副委員長にさんせー、つーか見に行くなら俺は留守番にしてくれー、眠い」

リナの賛成を得た途端に、そう無理やり話を終わらせようとするリング。

「あわわわ、そ、それだけはダメですわっ!!」

と、さらに続けて、メルヴェインを挟んでリナの対岸に座る女生徒、これまたA組のアリシアのようなお嬢様風な、それでいて真逆のふわふわした感じの女生徒——アー

チャー隊参謀、ドイツ系地球移民のイングヒルト・ラムシュタインがそう慌てて声を上げる。

「どうしたんですか、会計さん？」

「会計ー、あわててどうしたんだよお？」

ちなみに、イングヒルトはクラスの会計委員だった。

「そ、そのですわっ、あの、その学校までの旅費が、どんなに安いルートでも今計算したらクラスの月予算の約半分です……」

と、言いながら彼女は続ける。

「数は一人でもいいわ？」

「一人でもそのぐらいかかるんですのっ！」

その、と言って急いでそろばんを取り出し、途中で手から落ちそうになるところを「あわわわ」と言って持ち直し、そろばんをはじく。

「単純に長距離バスで一人送っただけでも6789ガロス、途中水分補給なしの場合、約時間は6時間として……」

空は問題外、まず高すぎますの……地上でライガー系を走らせた場合でも仕様レツゲル金額は70000円越えて問題外……

そもそも、我々はクラスのゾイド近代化費に今月度の半分12万ガロスと来月度の分

すべて使う予定で、この時点で6789ガロス×2を消費した場合、単純に一人当たりの配分金が減ることで近代化や新ゾイド導入の予算が足らず、配備予定のカノンフォートが予定数の半分、メルヴィンさんの提案した『3機のアイアンコング導入』の予定が2機に削られた挙句にミサイル兵装は1機分の物しか買えず、仮にこちらに予算を回したとしても今度はパンツァー隊配備予定のエレファンダーASが揃えられない上に、カノントータス近代化セットをあきらめざるを得ませんの………」

「ここまで聞いた上で、全員がハア、と声をそろえてため息をつく。

「間もなく『お買いもの』が解禁になると言うのに、その出費は痛いですねえ……コツコツためて、クラスの住み心地を犠牲にして、我々の一生の宝物を買う努力をしてきたのに……」

「うう、わたくし、もうもやし生活のさらに下を行かなければいけませんの……!」

さらにちなみにだが、イングヒルトは没落貴族だった。

だから会計をさせる事にリナはした。

そもそも、予算は大切なのだ。

お金があれば、お金で買えないもの以外は大体ほぼすべてどうにでもなるのだから。

金策は度の世でも重要な要素なのである。

「だあ、心気くっせえせえ!!!」

……いや、会計を責めてるわけじゃないんだけどよお、学生はお金が無い事がつらいよなあ……」

「あたし、バイトの面接2回落ちたぜ……」

「リナさん、一応今のところかなりポケツトマネーをこちらに工面していただいているので、あなたには足を向けて寝られませんか」

「そりゃ、ゾイドバトルで勝ちたいですしね。変な携帯ゲームに課金するよりは有効だと思ってますし」

「場外からすまないであります。自分ももつと出せればいいのでありますが」

「私もすまん。こちらはこちらで女磨きにも金がかかる物だな」

はあ、と皆がため息をつく。

「……あの、ネットには彼らの戦いは公開されていないんですか?」

と、静かに手を上げる人物がいた。

ヴォルケール隊参謀、カノントータス4号機車長である、女子よりも背が低く童顔な美少年なクリス・ストリガーが、そういうも通り幼さ残る声で意見を出す。

「クリス、あなたの意見ももつともです、ですが……今も探しているのですが、相手も情報を徹底的に隠しているのか、全く引っかけりません」

「ふむ、厄介ですね、それは……直接も見れず、関節でも不可能となると……」

ヴォルケーノ隊参謀として、プランBを思案するべきだと進言します」

「プランB? ああ? ねえよ、んなもん」

「テンプレはやめましょうねー、リンクス君?」

そうですね、これ以上幽霊を探す話はやめて、プランB……

いえ、プランD『見えない軍隊に用意する』を選択することを進言します」

「あれ、副委員長、あたしの記憶だと、それピンチなんじゃねえの?」

まあまあ、トリナはレインを抑える。

「でも副委員長、それまでこちらのゾイドは、あちらのゾイドよりも弱い事は確かですのに……」

「でも、勝率はあります。

100%に近い99.99%ではないだけで、おそらく8割は出せるはずです」

さて、トリナは続ける。

「では、今回は負ける可能性が20%と言う大ピンチな状況です。

みなさんで、それでも勝てる、あるいは全滅覚悟の引き分けには持ち込める作戦を立てましょう」

その時、リナの顔は珍しく真剣だった。

いままで、どの相手にも笑っていたリナが、真剣な顔つきだった。

「これ、ひよっとしてヤバいんじゃないか?」  
リンクスの言葉は、しかし真実に一番近かった。

## その4

西方大陸北部、ニザム高地の一角、旧ニクシー基地が見える場所、

そこに、帝立シユバルツ高等育成学校が存在する。

まるで、そこは重々しい要塞のような場所だった。

広大な敷地は、全て頑丈な壁に囲まれ、その奥に立つ校舎はまるで帝国の城塞をそのまま学び舎に改造したかのような雰囲気を持つ。

——グワアアアアアアアツツ!!

『うおおおおおおおおおおおツツ!!』

ガシン、と金属のこすれ合う音が、その広大なゾイド演習場で響く。

片や、ぶつかるは共和国重突撃ゾイド『デイバイソン』。

片や、ぶつかるは帝国の堅牢なる移動要塞、『ダークホーン』。

そんな、重ゾイドを筆頭に、お互いが頭を突き合わせ、押し合い、ぶつかり合い、火花と金属音を散らしていく。

「——やあああめええええええいツツ!!」

と、そのゾイドの咆哮ですら、一瞬で黙らせる怒号が響く。

「全員、傾注!! 総長の言葉である!!!」

一人の男子生徒が姿勢を正してそう叫ぶ。

途端、その場のゾイドのコックピットがすべて開き、姿勢を正しその人物へ顔を向ける。

その場にいる者達と同じ、この高校特有の黒い、軍服にも見える制服と帽子をかぶるその人物。

意外にも、可憐な容姿の少女は、二つにまとめられた黄砂のような金髪をなびかせ、鋭く全員を見つめていた。

「我が『シユバルツエスシユトルム』の戦友諸君、まずは訓練に励みご苦労と言おう。

ここに私が来たのは、先方の『ミューズ学園』が、『我々に来い』と言ってきたことに  
ついてだ」

その紡がれた言葉に、全員が驚きの声を上げる。

「こちらが……我々が出向けと!」

「そうだ。先方はそう言ってきた」

「我々が折れろと言うのですか!」

「そうだ! そう言ってきた!!」

ぴしやり、と言い放ち、彼女は続ける。



「この伝統あるシュバルツェスシュトルムに対し、彼らは『お前から来い!』と言ってきた!!」

私は、これを挑発として受け止める!!」

一度そこで彼女が見回してみれば、周りは皆闘志を燃やしたように拳を握りしめ、この言葉に聞き入っている。

「よかろう、そこまで言うのなら行つてやろうではないか。

彼らがどんな勝算をもつてこのように挑発をして来ようとも、我がやることは一つ  
!」

『正面から叩き潰すのみ!!』

その通り、と腕を大きく振り上げて彼女は叫ぶ。

「我らにの辞書に迂回とか撤退とかいうまどろっこしいものはない!」

圧倒的な突破力を持ち、策略、謀略、小難しい敵の思惑すべてを切り抜ける!!

それこそ、シュバルツェスシュトルムの名を冠する意味であり、それこそが守べるつえすシュトルムなのである!!」

おお、と全員が拳を握りしめ、彼女の言葉を聴き入る。

「諸君!! 我が同胞諸君!!」

敵はミューズにあり!!!

来いと言われたからには、行ってやろう!!

否!! 奴らの敷地を怪人にした後に、中央大陸まで駆け抜ける勢いで突入してやろうではないか!!」

うおおおおおおおおおおおおおつつつ!!!

その歡喜の雄たけびが、校庭を埋め尽くす。

誰がどう見ても、士気は上々。

「……………」

そんな様子を一人、

皆と同じ制服を着た女生徒が、鋭い目で見ていた。

\*\*\*

シュバルツ高等学校、部室の一つ。

「さて、ツバキ! お前の意見を聞きたい」

バン、と先程の金発の少女が、腕を組みながら目の前の少女へと言い放つ。

「私は今回の遠征に反対です。こちらが費用を出してでも向こうをこちらに来させるべきだと思えます」

その彼女、視た所日系地球移民らしき、長くつやややかな黒髪と人形のような白い肌の顔を持っていた。

「なるほど、お前の心配は大体分かっている。

だが却下だ！」

「ええ、もう答えは知っていました」

その言葉はもはや予定調和なのか、特に諦めた風でもなくツバキと言う少女は答えた。

「ただ、エルさんこれだけは言います。

私は、何も怖いからだとかそう言う恐怖心で言っているわけではなく、」

「100%でも戦いは負ける、だから勝率を1000%とし、限りなく100に近い99.99%の作戦を立てる、だったか？」

お前の言葉は長すぎて覚える気になれんと言うのに、お前が何度もいう物だから暗記をしてみましたぞ？」

と、不機嫌そうに顔を膨らませ、エルと呼ばれた彼女が言い返す。

『石橋をたたいて渡れ』と言うのは私の先祖の言葉なので」

「橋が怖くて川が渡れるか!!」

崩れたら崩れる前に渡ればよからう、落ちても生きていれば対岸に泳げるだろう？」

「……はあ……」

その返答に半眼になって、これ以上に無いほどわざとらしくため息をつくツバキ。

「失礼ですが、我がシユバルツエスシユトルム1年総長、エルフリーダ・V・ブリッツエ  
ンどのは、アホの子なのですね」

「今頃気付いたか、このアホめ」

明らかに侮蔑の言葉に対し、エルことエルフリーダはそう答える。

「ええ、私もアホでした。」

アホの単細胞総長に頭のいいことを言つて1割でも理解できるなどとアホな想定を  
してしまいました」

「まったくだ。だが言つとくが、お前の言う事は他の人間でも難しいと言う事だけはア  
ホの私でもわかるぞ?」

「で、おバカ脳筋総長? 助言は意味がないと解釈しても?」

「はっはっは、こいつめ。目上の者にも辛辣だな」

と、ジトジトと視線を送る相手に笑いながら答えるエルフリーダ。

「その答えはイエスだ。」

私の辞書には『高尚な考え』の項目がすべて抜けているからな!

胸を張つて答えるエルフリーダ。

ドスン、と制服の下で揺れ動く。

「……多分、そこについた栄養が脳に回れば、辞書に追加されると思いますが?」

「ああ、だからお前は胸がないのか！」

「死ね」

はっはっはっは、と胸を張って答えるエルフリーダに、ただ静かに睨みながらそう答えるツバキ。

「気にするな！　そこまで胸が無いわけじゃないだろう？　うん、貧乳ではないと言う事だけは私が保証してやる」

「黙れ脳筋ホルスタイン総長」

「ああ、私の辞書では『黙る』の項がよだれを垂らして誰か寝ていたかのようにぼやけていてな！」

「やっぱり死ね。死んでください」

まあまあ、落ち着け、とそこでエルフリーダはツバキを制する。

「どのみち、お前は私に『突破』『突撃』『攻撃』の3文字以外に期待していないだろう？　なら話は簡単だ、お前の武器はなんだ？

その高尚な脳みそだ。おそらくこの大陸の中で、お前の考えと戦術眼、戦略眼にかなう人間などいない。

ならば、私と私以下勇猛なるシユバルツェスシユトルムの皆がどこに突破すれば勝てるのかを示してやればいい。違うか？」

「……………簡単に言うあたり、全く能天気と言うか……………」

「うむ！ 幸い、私の頭は今日も日本晴れだ！ これもお前の祖先の言葉だったな！」  
ため息をつくエルフリーダに対し、なおもはっはっは、と笑うエルフリーダ。

この光景、

この場所ではもはや日常とでもいえる物だったりする。

「ふう……………で？」

ふと、そう切り出すエルフリーダ。

「で、とは？」

「お前が弱気すぎる理由だ。それを知りたい」

ふむ、とツバキが顎に手を当て、考え込むしぐさをする。

「……………先の放送で、敵の機体編成を見ました。」

あれが学生の考えた編成だと知ったときは、正直信じられませんでしたね？」

「ほう？ なんでだ？」

「あまりに、ハイ・ローミックスが完璧だったから、ですよ」

何だそれは、と言う顔をするエルフリーダ。

「我々のゾイドたちは値段や性能を見ても高い物ばかりです。財力とはすばらしいものですね。」

ですが、通常はそんな事出来る学校は限られてきます。  
そんな混成が当たり前な中、相手は」

「話が長い!!」

「ええ、じゃあとりあえず相手が私と同じ頭元、

あなたみたいな思考しない人間がいなく言う事だけ覚えていてください」

……二人とも頭を抱えていた。

取り合えず、お互い同じ理由だった。

「……だがまあいい！」

お前がそこまで言う相手、こちらも楽しめそうだ！」

「ですが、負けるかもしれませんよ？」

「お前は何回同じことを私に言ったか覚えているか？」

そのたびにその言葉を覆してきたのは誰だ？」

「私です」

「その通り！」

「今回も同じだ！」

「よし、とエルフリーダは机を叩く。

「お前の心配はわかった!!」

だが、私は行くぞ！ お前もついて来きて存分に頭を働かせろ！！」  
「……まあ、いつも通りですね」

はっはっはっは、と部屋にはエルフリーダの声が響いていた。

\*\*\*

そのころ、ミューズ学園では。

「—— やっぱり、これを使うしかないですよねえ〜？」

と、リナが不敵に笑いながら、D組に頼んで学校の備品から引っ張り出してグスタフで検診してもらった『ある物』を見ていた。

「え、リナ、何する気〜？」

「簡単ですよ〜？」

—— 歓迎の花束の準備に決まっているじゃないですかあ〜？」

いつも通りその笑みは、不敵そのものだった。

「フフフ…♪」



そう、いつも通りの意地の悪い笑みだった。

## その5

そして、試合当日の早朝。

『ホバーカーゴコントロールより、ライガーゼロ、クロムウエルへ。

セッティングデツキへ移動するであります!!』

ミューズ学園学校備品でもある巨大カタツムリ型母艦ゾイド『ホバーカーゴ』。

戦史において、対ガイロス軍との戦時中、共和国主力機を務めた『ライガーゼロ』のCAS、チェンジングアーマーシステムの意味でもう一つの中枢でもある。

タイプと同じ野生体のマルダーも持つ、丸い殻型部分がある種のエレベーターと回転式ドッグにし、区画ごとに必要なパーツ収めることで、

出撃の際、その任務に合わせて素早く、ライガーゼロを換装することができる。

むろん、そのキャパシティからライガーゼロのみならず、ほかの機体のパーツも使えるの言わずと知れず、共和国の設計がいかにも『汎用性』と『発展性』を重視していたのかがわかる。

『リナ殿・言われた通りのパーツは用意したであります、塗装が完璧にできなかつたのですがいいんでありますね?』

「ふふふ、いいじゃないですか。まるで共和国戦線でさすがに高価だったゼロのCASがなくてつぎはぎ出陣した兵士の気分みたいで。

まったく、下手に鹵獲したのをそのまま主力機にしちやうからそうなつちやうんですよ〜♪

——でも、そういう兵器って、個人的にはだあい好きなんですよねえ？」

『ふふ、以下同文であります!!』

そのライガーゼロは、クロムウエルだった。

そして、そのコックピットには、当然リナも乗っていた。

「行きますよ〜? 前から試してみたかった、新カスタム!!」

『ライガーゼロ、セッティングデツキに固定完了!!』

リナの握る操縦桿が、ゆっくり両脇に倒され、引かれる。

それと同期し、セッティングデツキ横から延びる換装用アーム。

それらが、俗に『ゼロアーマー』と呼ばれる白いアーマーをつかみ、ライガーゼロから外していく。

ライガーゼロが、素体となったタイミングで、リナが不敵な笑みを浮かべる。

「これを言わなきゃはじまりません！」

ライガー、インストレーションシステムコール!!

クロムウエルRS（リナスペシャル）!!」

その言葉とともに、リナは回していた操縦桿を戻し、奥へ押し込む。

同時に、両脇のパーツ収納部分が回転。

別のコンテナが開き、新しいパーツを換装用アームが運ぶ。

それは、鋭角なウイングを多数持つ、青いCAS。

そう、基本は、軽量・高速移動用のアーマー『イエーガー』。

しかし、この装備のメイン……というか、本体としか言いようのないともいえる可変式大型イオンブースターは、付けられない。

代わりに、赤い色の小さなイオンブースターが——別CAS『シュナイダー』専用のブースターが取り付けられる。

そして、その両脇には、黄金色のブレード、そしてその脇から枝分かれするように伸びる大型キャノンに似たユニット、

ブレードライガーのブレードと、アタックブースターが取り付けられる。

「お、クロムウエル、ようやく目を覚ましたね?」

換装と同時に、ライガーゼロのOSが連動、コックピットは高速戦でのパイロットのG不可軽減のために、背もたれが後ろに下がる。

そして、リナの調整の通り、射撃戦にあわせ多目的情報モニターが両脇から現れ、様々

なセンサー情報がこちらに映りこむ。

『ライガーゼロ、CASコンプリーテッド!!』

換装完了と同時にセッティングデッキが上昇。

ホバーカーゴ上部、ライガーゼロやその他高速専用ゾイド発進口が開く。

そこへセットついでデッキが固定。

発進ランプが赤より、青に変わる。

「ゴー!! クロムウエル!!!」

電磁カタパルトが起動し、強くクロムウエルが押し出される。

着地、噴煙を上げて、走る。

「つとお!!」

ほう、着地して数秒で、もう250キロ!!

クロムウエル? ずいぶん飛ばしますね!」

「グオオオ♪」

心なしか、リナに答えた咆哮は、雄々しくも語尾が弾んでいた。

「重いのは嫌ですものね?

安心しなさい、倉庫に合ったもの寄せ集めとはいえ、すべてあなたの好み通り!!

今日必要なのは『足』です! 存分に走りなさい!!」

叫ぶクロムウエルが、弾丸のように進む。

現在速度、毎時285キロ。

『ずいぶん飛ばしますのね！ リナソレーネ・アシユワース！』

と、無線から、いつもの『本日の練習相手』の声が聞こえる。

追いつくは、赤いボディに長大な7本のレーザーブレードを持つ、『ライガーゼロ・シユナイダー』。

そう、いつものアリシアの駆る、愛機だ。

「どうもー、アリシアさん♪」

今日もやられ役、お願いしますねー？」

『ふっ、まさかわたくし』『達』であなた一人で勝てると思つていいのかしらね？』

と、後方から迫るは、2機のゾイド。

両方ともライガーゼロ。それも、高速線特化型『ライガーゼロ・イエーガー』。

現在でも、その速度に魅せられる人間も少なくない、ライガーゼロのバリエーション機だ。

「あらら、『獵犬（イエーガー）』ならぬ『獵獅子』とでも言う感じですね〜？」

『わたくし、『仕立て屋（シユナイダー）』だけじゃ、さすがにあなたの相手は心細いのです』

『C組のレオマスター、直に話せて光栄だ』

『よくアリシア様が言うものでな、『卑怯ばかりの人間だが、本当の実力は底知れない』とな』

どこか男勝りな女子生徒二人の物言いに「いやそれは言い過ぎでしょう?」とリナは冷や汗交じりに反論する。

「ま、これは性能テストですし、さっさと気楽にやりましょう」

『ああ、語るなら口じゃなくて、』

『ゾイドバトルで、だ!!』

とたん、2機が一気に速度を落とし、こちらの背後をとろうと動く。

「来ましたね!?

ブースター、オン!!」

リナは、イエーガーの頭部バルカンを恐れ、すぐにブースターを起動。

背後の、アタックブースター上部にも取り付けられているブースターも含め4つとも点火し、全身のばねを利用しどんどん加速していく。

「現在風速西から1. 2メートル、ちょうどいい向かい風、地表温度は25. 8度、大気中粉塵濃度は34. 8%、ライガーのストレス、マイナス5……」

映し出される情報をもとに、最適な戦術プランをすぐに頭で立てるリナ。

「まあ、前哨戦にもならない稼働テスト……なのに気楽にいきますか、とも言えないですねえ……」

と、背後から小刻みなリズムとともに、バルカンが放たれてくる。

「牽制ですか……!」

リナは、尾に装備されたレーザーバルカン『LMG-62F』を向け牽制。

相手はゾイドバトル特化クラスらしく、尾にある武器からの攻撃を想定しておらず、一気に両脇に広がってしまう。

「あらあら、実戦だったら死にますよ〜?」

だがリナは気を抜かず、最も最良で確実な攻撃パターンに映る。

「相対速度は今のところゼロ、お互い現在時速は330キロ、MAXスピード……」

なら、曲芸やりますよ! アタックブースターをとパルスレーザー起動!」

と、言った途端、ストライクレーザークローを起動。

一機に減速し、2機の背後をとると同時に、ブレードライガー用レーザーブレードに取り付けられたパルスレーザーとアタックブースターのキャノンを前方へ向ける。

「レプティカルコーン（致命的円錐）がから空きです!!」

引き金、そして放たれる4筋の光。

『『なんのお!!』』



が、直後目の前にいたライガーゼロイエーガーが、消える。

「げえ!? この予備動作!!」

わかつていたから、すぐにアタックブースターを引っ込めた。

わかつていたから、ブースターを全開にした。

『ミラージユフアングクラッシュ!!!』

直後、残像が交差するがごとく現れたゼロイエーガー2機の牙が、クロムウエルのいた位置の残像をかみ砕こうとする。

『な!?』『ミラージユで返された!?』

かつて閃光師団に所属した『ウイナー・キッド』少佐は、ライガーゼロイエーガーの余剰排熱を利用し幻影を見せる戦法で勝利を収めた。

その戦術は、のちの世にも使い手を残すほどには有効なものだった。

「大部分イエーガーのパーツ流用じゃなきゃ死んでいましたよ!!」

リナは、前方約200メートルの位置で最高速度をたたき出しながら叫んでいた。

『あら、前方不注意ですわ!!』

「いや、ピンチでした!!」

が、その前方から、アリスアの乗るシュナイダーの5本の剣による突進、『バスターズラッシュ』が迫る。

「なんのお!!」

リナは、操縦桿を引き倒し、横へ曲げる。

アタックブースターの基部たる、ブレードライガー用のレーザーブレードが展開。その金色の刀身が輝く。

「格闘適正低くても!!」

そして、消える。

『ミラーージュ!?!』

「——機体特性に合わせた操縦は、出来ませぬ!!」

リナは、横倒しになったアタックブースターの可動により真横へ移動。

そして、ブレードを相手に確実にあたる位置においていた。

『ふっ、間合いと、』

だが、直後、目の前のライガーゼロシユナイダーが飛ぶ。

『気合ですわっ!!』

「ええ!?!」

なんと、クロムウエルのレーザーブレードを踏み台にして、躲した。

「ぐっ、左に荷重が…!!」

ぼふうん、とレーザーブレードが地面をえぐる。

『地面に埋もれなさい!!』

「クロムウエル!! 右のアタックブースターを全開にしなさい!!」

だが、直後リナは信じられない行動に映った。

『何を!?!』

「折れないで下さいよおおおおおおおおおおおおつっつ!!」

左のレーザーブレードを起点に、すさまじい速度で反転を始めるライガーゼロ、クロムウエル。

『——っ?!?!?!』

「この距離で後ろをとればEシールドは張れません!!」

すでに、アタックブースターを戻し、片方を砲撃形態に変えている。

『っ、シュナイダーアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

だが、そのとき、

アリシアはとっさにシュナイダーの右のブレードを展開、突き立てて片側のブースターを全開にした。

「いや、冗談でしよう!?!」

『貴女にできてわたくしにできぬ道理でもあるとでも!?!』

こちらは、もうすぐ射撃できる状態になる。

だが、ぎりぎりまで相手が反転しきり、Eシールドを張れるようになるかもしれない。そして、忘れてはいけない。

ここで倒れなくても——まだ二人残っている。

(よし、ここをしのいだら参った、って言いましょう)

リナは決めた。だがここだけは決着をつけることにした。

「撃ってくださいクロムウエエエエエエエル!!」

「防げ、ライガーゼロシユナイダアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

そして——

\*\*\*

ちょうどその時、上空にシユバルツ高等育成学校のホエールキングがやってきていた。

## その6

ミューズ学園、校庭の端。

「いよいよね」

そこで、その肩から誘導ビーコンを放つハンマーロックの隣で、腰に手を当てたまま真上のホエールキングを見て言い放つ。

「あ、あわわわ、おつきいです…!!」

と、その横で『エースパイロット代表』という名目で連れてきたカリンは不安そうにつぶやき、バーサークフューラー（ココロ）は今にも荷電粒子砲でも発射しそうなほど吠えていた。

「まあね。でもホエールキングなんて、ただの強襲揚陸艦。」

ああ、要するに前線に荷物を届けるためだけの船つてところね。本体自体に戦闘力は皆無よ。

——ただ、中から鬼が出るか蛇が出るかがわからないだけの、ね」  
ドシイン、とホエールキングが着陸し、校庭の土を多く巻き上げる。

「お、鬼は怖いです……!」

「いい、カリンちゃん？」

鬼で済んだら御の字、とヘリック大統領は言ったわ。

ホエールキングの腹には魔獣が宿るとも、ね」

震えるカリン、対して堂々とホエールキングを見据えるメルヴィン。

そして、着陸したホエールキングのハッチであるその口が、開く。

「——ひっ!?!」

「……あらあら」

ドシン、と踏み出す巨大なる足。

その姿は、まさに恐ろしき竜と書いて、『恐竜』。

むき出しの歯は破壊、赤く細い目は悪意。

黒き体表は恐怖、そして駆動する音は戦慄。

あれこそ、帝国が開発した、最凶のゾイド。

またの名を、『死を呼ぶ巨竜』。

「あ、ああ、で、で、でででででで?!?!」

『RZ-021 デスザウラー』ね!」

ほら、ヘリック大統領の格言に間違いはないじゃない」

ホエールキングから出てきたのは、デスザウラーだった。

いまだに帝国でも主力機の座に君臨する『魔竜』にして、惑星Zi最大最凶のゾイド。  
「それが3体ね」

そして、その後ろから現れたのは、さらにもう2体のデスザウラー。

「で、デスザウラーって、今でも最強のゾイドじゃないんですかあ…!？」

「(こらこら騒がない)。」

「ここで恐ろしがつては相手の思うつぽよ」

あまりの出来事に、戦慄するカリン。

それは、バーサークフューラーですらデスザウラーと戦って勝てるかどうか怪しい。

実質、デスザウラーはそれほど強いのだ。

しかし、メルヴィンは、案外冷静だった。

「これは、一種のプロパガンダね。」

相手はまずは私たちの士気をそごうとこうやってきたみたいね」

それどころか、こんな相手を目の前にして——ゾイドの腕前でも、乗るゾイドでも勝てないとわかるはずのメルヴィンは、しかしむしろ恐ろしいぐらいに笑っていた。

「フツ、こういう相手の鼻っ柱を折るのが私の仕事よ」

「で、でも、勝てないような相手が3機もいるんですよ!？」

「この世に無敵は存在しないわ。」

「デスザウラーが最強であるのなら、なぜ帝国は負けて今じゃ傀儡同然の扱いなのかしらね？」

「そ、それ問題発言じゃ……」

「いい、カリンちゃん？」

「私は戦術もゾイドの扱いも下手だけど、」

と、言つて、近づいてくる一体のデスザウラーを見据えるメルヴェイン。

「私は、クラスを率いる委員長なの」

と、言つてメルヴェインは笑つていた。

\*\*\*

デスザウラーのハッチが開く。

中から、敵の高校のリーダーと思わしき雰囲気金髪少女が、こちらを見据える。

「失礼、あなた方がミューズ学園の迎えの物か!？」

「初めまして、シュバルツ高等学校の方ね。」

「今回戦うC組の委員長、メルヴェイン・リッツ・フィールグッドよ？」

よつと、と言つて下げられたコックピットから飛び降りた金髪の女子生徒に、右手を差し出してメルヴェインは名乗る。



「エルフリーダ・V・ブリッツェンだ。

シュバルツェスシュトルムの1年総長をしている」

「あら、よかったわ。私たちもまだゾイドに乗って日が浅いの。

これなら勝率がだいぶ上がるわ」

一瞬、笑顔の二人の間に、不穏な空気が流れる。

「はっはっは、お手柔らかに頼みたいものだな。

こちらこそちらと戦うのが怖くてデスザウラーを3体も用意したほどだ」

笑って会話しているが、なぜか隣のカリンは二人が怖かった。

「デスザウラーはいい機体よね。

いまだに現役ですもの、これは苦戦しそうね」

「あっはっはっは、そちらこそハンマーロックとは、素直で扱いやすい名機ではないか」

遠まわしにだが、完全にお互い貶しあっていた。

カリンは、泣きそうだった。

「ええ、電子線装備を積んで指揮機に特化させても大人しいもの。

凶暴で扱いづらい機体は苦手なの」

「指揮官機か、生き残ってもらっては厄介そうだな。

失礼だが、先にたさせてもらうことになりそうだな、小さくて当てにくい」

お互い笑いあう。

後ろには、何か恐ろしい影がうごめくのがカリンには見えた。

「まあ、デスザウラーだなんて優秀な機体ですもの、

心してかかるわ、負けたくないもの」

「はっはっは、蹂躪などという状況は勘弁願いたいな」

「ふふふふふ、さすがにそんな展開にはならないわ？」

……さて、物は相談なんだけど」

と、一瞬真顔になるメルヴィン。軽く眼鏡を直し言う。

「こちらとしても、呼び出しておいて恐縮なのだけど、

ゾイドバトルルールを『コマンドタクティクス』ルールでやらないかしら？」

と、その提案に、相手が虚を突かれたような顔を向ける。

「……………ほう、なかなか面白いルールをご存じだな？」

ふむ、いいだろう。「面白そうだ」

ふふ、と相手の笑みに笑みで返すメルヴィン。

「ありがとう、ブリッツェンさん？」

「貴殿と話せて光栄だ、ファイールドグッド殿？」

と、言って、エルフリーダという名の敵の大将は背を向ける。

「——こちらも全力で、正面からそちらと戦おう」

「あら、後ろを気にしなくてもいいの？」

「フツ、

我がシユベルツェスシユトルムに迂回と撤退の2文字はない」

「じゃあ言つてあげる。

——迂回しなきゃ死ぬわよ？」

はっはっはっは、という笑い声を放ち、頭を下げたデスザウラーに乗り込むエルフリーダ。

「死なばもろとも。

——存分にそちらをつぶす!!」

「つぶせると思つて?」

私たちは足裏から食い破るわよ!!!」

ふ、という笑みのみを残し、デスザウラーのハッチが閉じる。

そして、ゆったりとした足取りで、デスザウラーは戻つていった。

\*\*\*

「~!!」

ドサツ、とその時点になってカリンは地面にへたり込んだ。

「な、なな……なんだったんですか、い、今の……？」

「まあ、小学生レベルの『外交手段としての宣戦布告』ね。

——ここで重要なのは、何があろうと余裕の態度を貫くことよ」

&、と言ってカリリンを見る。

「&、わかりやすい弱点を見せること、よ？」

「え……？」

「いや、ごめんなさいね、カリリンちゃん？」

ほら、C組で一番弱々しそうで肝が据わっていないのはカリリンちゃんだけだったから

ね？」

「へ？」

言われてる意味が分からなかった。

そんなカリリンを見ながら、こう言葉を紡ぐ。

「相手に、私以外が弱いと少しでも思ってしまうきっかけがほしかったの。

単純でしょ？ でもどうしても引っかけやすいのも事実。

ゾイドは間違いを起こさないが戦術と戦略は立てられない。

人間は間違いを起こすけど戦術と戦略を立てられる。

だったら話は簡単だ、敵のトップの間違いを誘発してやればいい。

そうすればゾイドが間違わなくても、こちらが勝てる。  
ヘリック大統領の格言ね」

「え……?」

え、あ、えええ?!?!」

ようやく、メルヴィンの言っていることが理解できた。

「で、でも私一人で油断だなんて…!!」

「そうね、しないかもしれないわね?」

でもする可能性も、ある。ならばやるの。

リスクは回避するものだけど、リスクだけ考えて進むのは愚の骨頂よ?」

これもヘリック大統領の名言、とメルヴィンは続ける。

「さて、これで大分相手の大将の性格がわかったわ。

まあ、おかげで相手の大将にこちらの性格がわかってしまった。

5分5分だけど、ようやく5分に持ち込めたと喜ぶべきね!」

と、言って納得し、メルヴィンも踵を返す。

「バトル開始は1時間!!」

帰ったら30分の参謀会議よ!!」

メルヴィンは、隣のカリンの不安をよそに、笑っていた。

カリンは、それが妙に頼もしく感じていた。

\*\*\*

「……………とところで、そこに隠れているカメラマンさん！

良いの撮れた!？」

「はい、ばっちり!!！」

と、メルヴィンは最後に、実は後ろで番組に使う映像をとっていたあのカメラマン達3人に声をかけた。

「いや、デスザウラーのアップだけじゃなくって、なかなか絵になる会話が見れましたよ！

これが半分はドキュメンタリーなんだから、恐ろしいっすね！」

「委員長、声の張り良すぎなんだな、本当、助かるんだな！」

「ま、こつちだつてカリンちゃんの番組のためでもあるんだもの。」

無様なのはいけないでしょう?」

と、言うメルヴィンを見て、カリンはひそかに（ひよつとして委員長、テレビの才能あるかも…!）と思ったのは、特に今日のこれからの戦いとは関係がなかった。

\*\*\*

「ツバキ、聞こえるか!？」

いい展開だ、まさか我々と同じ方法を相手が挑んでくるとは思わなかったぞ！」  
デスザウラーの中、エルフリーダはそう叫び声を上げる。

『敵も『コマンドタクトイクス』ルールを!?!』

「ああ。」

—— さあ、我々の嵐が吹き荒れる時だ!!」

エルフリーダも、勝利を確信し、同じように笑っていた。

戦いのときまで、あと少し。

## 第5話：バカの戦術、マジキチの戦略

### その1

ゾイドバトルと一口に言っても、その形態はさまざまである。

だが、大体的場合1対1の決闘、4対4の集団戦、多対一、1対多がおもだろう。

「さて、A組はまあそれ専門だろうから説明など不要だろう、常識だ。覚えていないヤツは覚えろ、教えはしない。」

さて、その上で『コマンドタクティクスルール』を知っているまだまともな頭のヤツは手を上げろ」

今回、観戦するついでにフィリア女史の特別授業を受けることとなったA組は、一応学年でも上位の成績のアリシアですわ、答えられなかった。

「……いやいい、期待しすぎた私がバカだった。」

と、なると1からの説明か……面倒だが、教師である以上は教えるべきだな」

さて、とガラガラとホワイトボードを横から持つてくるフィリア。

「さて、先ずは「コマンドタクティクスルール」の概要を説明するべきか。」



ゾイドバトルの主なルールは、まず『小規模な団体戦』である『ノーマルルール』。こちらがなじみ深いだろう

次に「限定空間における1対1のデスマッチ」である「フルメタルクラッシュ」。

こちらはこちらで、お互いが碎け散るまで戦うというシビアかつ時代錯誤な中世のコロシアムのようなルールで有名だ。

だが、まだこのコマンドタクティクスに比べれば生易しい」

ホワイトボードのこの二つを説明した図柄から、その下のコマンドタクティクスの絵に移るフィリア。

「このルールは、基本としては「大規模集団戦」がメインとなる。

広大な土地を使い、お互いにフィールドの端と端にまずは「陣地」を形成し、最低40対40で戦うことになる。

勝敗は二つ、どちらかの殲滅か、あるいはどちらかが敵陣地を一定時間確保したか、だ」

「あら、なんだか簡単そうに聞こえますわ……ひっ!?!」

と、アリシアがつぶやいた瞬間、一瞬、フィリアが獲物を見つけた肉食獣のような目と笑みでそちらを見た。

「そう思うか、チャンプ？」

いや、何も言うな、そう思ったから言ったのだらう、それでいい。

お前は直情的だ、下手に何か考えて動けないヤツよりはマシだ、それでいい。

だが無知ではいたくないだろう？ この場の人間もそうだろう？

なら聞け。

このおぞましく暴力的で、最も死人が出てもおかしくないゾイドバトルの真髄を、だ。

軍出身の私が言う。これは戦争に限りなく近い」

と、フィリアが珍しいほどに笑って言うその恐ろしさに押され、A組全員が聞き耳を立てる。

「いいか、コマンドタクティクスルールは以下の通りだ。

最低40対40の集団戦。

勝敗は一方の殲滅か、陣地の確保か。

広大なマップの地図は戦う前はお互い知らないこと。

指定マップから出ないこと

後はない」

と、あまりにも簡潔な、そして最大の恐ろしい言葉が紡がれる。

「……後は、無い？」

「そうだ。」

このコマンドタクティクスルールはな？

4つしかルールがない」

と、全員の度胆が抜かれた。

「ちよつと待つてください、頭部損傷ダメージの禁止は!？」

「ない」

「荷電粒子砲使用制限は!？」

「ない」

「武装数制限は!?!」

「ない」

「飛行ゾイドレギュレーション調整は!？」

「ない」

「光学迷彩使用禁止は!？」

「勝てるのならつかえ」

「ゾイドダメージ判定は!？」

「コンバットシステムさえフリーズしなければ片足が吹き飛んでも続行可能だ」

「大型ゾイド使用レギュレーションは!？」

「ないな。」

言っただろう？ 3つのルールを守っていれば、後は何をしようと勝手だ。

デスザウラーでもギル・ベイダーでもなんでも使用してよし。ルール無用じゃない、戦場のルールを作ったヤツが勝利だ」  
 こともなげに言うフィリアは戦慄するA組をみて言い放つ。

「まあ、見ておけ。」

未熟者共でも、面白い戦いはするとは思っているからな」  
 そう言って、フィリアも校庭へ向き直る。

\*\*\*

ズドオオン、と音を立て、広大な平野と言える広さの校庭に、それが落ちる。  
 円柱状の物が落下個所よりせり上がり、開く。

↑———あー、コホン！

このバトルは！ ゾイドバトル連盟青少年部の管轄となる！！

出てきたそのロボットこそ、惑星Zi『ゾイドバトル連盟』の公式審判こと『ジャツジマン』。

何十年も前からその見た目の変わらない彼こそ、この惑星Zi最大のエンターテイメ

ントバトルの、名ジャツジである。

へさあて、久々のコマンドタクティクスルール、まさか君たちのような青春をかける少年少女たちが行うとは、私も驚きである。

しかあし!! 他校試合だからと、ましてやほぼルール無用とはいえ、わ・た・し・が  
! いるからには! 公平かつ的確に、この場のゾイド乗りの卵たちを、ジャツジする  
!>

ドオン、と胸を張り、ジャツジマンは声高々に宣言する。

へでは諸君、これより私から半径50キロ以内への無断侵入および無断離脱を禁止する。

両者、陣地への集合をこれよりスキヤンにて判定する<

ピーン、と目が光り、このバトルフィールドのスキヤンが始まる。

\*\*\*

『緊張してきたあ……!』

『ああ、もう、震えてきやがったぜ……!』

『はいはい、皆さん、落ち着いて?』

作戦どおり行きましよう?』

皆の声をリナは聞きながら、通信にて指示を飛ばしていく。

「まず、私たちスカウター隊が先行し、この場所の半分の精確なマップを製作します。

地図がなきや戦場じゃ生き残れませんか。5分を目安に考えていてください。

マップにてスナイプポイント2か所にその後ヴォルケーノ隊、アーチャー隊が配備、中央付近の『防衛ライン』にパンツアー隊以下全員が集結し、ここで戦闘を行います。

まあ、デスザウラーぐらいの緊張感がある方がやる気が出るでしょうし、気負わずがんばりましょう♪」

『デスザウラーぐらい、つてなんだよ参謀!』

はっはっはっは、と通信機に笑い声が起る。

「さて、みなさんもうすぐですよ?」

\*\*\*

「諸君! 戦友諸君! いよいよその時だ!!」

我ら『シユバルツェスシユトルム』の勇名がこの地に吹き荒れる時だ!!

用意はいいか!?

エルフリーダの言葉に、通信機から「ヤー!!」と掛け声上がる。

「我らシユバルツェスシユトルムは!?!」

『最強!』

「行く手を阻むものは!?!」

『粉碎!!』

「その名譽の地平線に刻むものはなにか!？」

『勝利!!』

「よろしい! 諸君、いよいよ進撃の時だ!!」

うおおおおおおお、という雄叫びが、通信機の意味をなさないほどに上がる。

\*\*\*

〈半径50キロ以内のスキャンを完了。〉

〈これより、この区域内はゾイドバトル連盟青少年部の管理下に入る〉

それでは、とジャツジマンは声を上げる。

〈チーム、シユバルツェスシユトルム!〉

V S、

チーム、1年C組!

バトルモード、2035。

レディー……!〉

ジャツジマンの赤と青に塗られた両腕が振り上げられ、

〈フアイツ!!〉

カアン、とそのゴングが、鳴った。

\*\*\*

## その2

「スカウター隊発進!!」

リナの駆るライガーゼロ・クロムウエル以下、ライジャーアサルトとステルスバイパーが走り出す。

『イグアン・デサンド』 お願いします!!」

『了解!!』

と、途中、軽やかな動きで、2機のイグアンがクロムウエルに乗る。

——グオオオオオ!!

「おっと、ちよつと重かったですかね?」

『おっと、わりわり、相棒が重くつてよ!!』

『ちよつと、聞こえてるわよリンクス!?!』

一方は、リング・リンクスの愛機、イグアン軽量突撃戦カスタム「イグストライカー」。

一方は、レーザー兵器ガン積み（C組談）カスタム「レザアン」。

乗っているのは「メリツサ・タカオ」。地球移民クォーター神族のゼネバス帝国人であ



る。

「気にしないでください、クロムウエルに文句は言わせません♪」

『へへっ、ライガーに文句を言わせないだなんて、レオマスターの言葉は違うねえ!』

『それで、参謀? 言われた通り『アレ』をガン積みしているけど、本当にやるの?』

「勝つために手段選びますか?」

『『選ぶわけではない!!』』

「じゃあやりましょう♪ 斥候は全部つぶすつもりでお願いします」

2体のゾイドを乗せたライガーゼロが、この砂漠地帯を駆け抜ける。

\*\*\*

「こちらライジャー。絶好のスナイプポイントを見つけた。

敵方面を向いてE-3の場所だ、カノントータスでは無理だが、ハンマーロックなら

おそらくは足場を気にしなくて済む」

『こちらアーチャー隊。了解、E-3ね? 見つからないように行くわ』

「了解。到着まで場所の監視をする」

砂漠地帯の巨大な岩、そのくぼみ部分に隠れたライジャーが、わずかに顔をのぞかせ

てあたりの様子に気を配る。

「……レーダーには反応なし……だが、この砂丘が厄介だな……」

この、元校庭だったこの場所、今現在ミューズ学園1年D組の劇的ビフォーアフターにより、砂漠地帯と化している。

砂漠。

流砂もまねに起きるほどの設置性の悪さ、そして砂丘による視界のわるさとリーダーの攪乱が恐ろしい。

地表の砂丘は、絶好の隠れ蓑。

飛行ゾイドがない限り、視界の確保は難しいのだ。

「……………ライジャー、上にあげてくれ」

と、ヒルダはライジャーに岩の上へとコックピットを上げ、急いで岩の上に乗る。

「……………地味とはいえ大役、戦わずにしる戦場。」

念には念を入れるべきだな……………」

地面を這うような姿勢となり、岩の端すれすれまで来て双眼鏡を取り出す。

「……………」

砂丘の影、そこに、今敵が来ているかもしれない。

ここは戦場。借りとはいえそれを模している。

「……………」

予感の中でした。

遠く、役2キロ先、その一団が見える。

「あの足……………成程、グランチュラか……！」

そこには、黒い配色に雷のエンブレムを持つ、共和国旧型ゾイドながら決して侮れない存在、

RMZ-04「グランチュラ」が、いた。

「不整地では確かにグランチュラが……?!」

そして、一瞬、再びとんでもない影を見かける。

「……………偵察にそんなゾイドとは、ずいぶんと金をかけているようだ……！」

一瞬見えた黒い影。

ガイロス帝国産、高速戦ゾイドにして、隠れたステルスゾイド。

「やはり……………ライトニングサイクス……！」

A組相手では何度も合いまみえているとはいえ、

以外にも正しい使い方のゾイドが、グランチュラを引き連れていたのだった。

\*\*\*

「オアシス発見……！」

砂丘に隠れ移動していたライガーゼロが、砂漠の中のオアシスを見つける。

『いや、参謀、川だ！ 川が流れてる、かすかだけど！』

と、真上で顔を砂丘からのぞかせたリンクスの駆るイグストライカーから、そんな通信が入る。

「こちらスカウター1、D-5地点で河川を発見。地盤が安定している以上、ここがバトルフィールドに最適と判断」

『こちらアーチャー1、了解。スナイプポイントにつき次第確認するわ』

『ヴォルケーノ隊、第2スナイプポイントより確認。広い川だ』

『こちらスカウター2、第1スナイプポイントより入電。』

C-5直情から敵斥候舞台と思われる影を確認。

グランチュラ2、ライトニングサイクス1、計3機』

わお、と0リナはつぶやく。

『3機編成？ 分散させないのか？』

「おそらく、バトルフィールド確認組でしょうね。」

そこで主力と鉢合わせた場合、逃げ切れる編成でしょう。

私なら左右に斥候を1つずつ置いてまんべんなく、マッピングしているのでしょうたぶん、と付け加え、リナは考える。

（でも他に理由もあるかもしれない………だけど、そんなことを考えるよりも……）  
ちら、とイグアン2体を見る。

「……わかりました。フォートレス、パンツァー両隊をここへ集結させてください。私が、相手を誘い出します」

『了解。予定通りだな』

「ええ、ここまででは、おそらくお互いに」

さて、トリナは緊張をほぐすよう軽くストレッチする。

「お二人は予定通り、設置を優先させてください」

『相手に見えるかもしれないけど、言いの？』

「報告させるつもりはないので」

瞬間、クロムウエルが飛出し、高速で走り回り始める。

\*\*\*

『いたぞ、敵だ!!』

『ライガーゼロ!? だが、負けるわけには!』

瞬間、3機のゾイドが一齐に射撃をはじめ、その青いライガーゼロを追いかけはじめる。

『急げ! グランチュラなら機動力が上だ!!』

『斥候より本体! 我會敵セリ!』

敵が本体へと通信をした瞬間、ライガーゼロの背後から長大なキャノンが展開。

敵の真上の砂丘に放たれる。

『しま——』

直後、大量の砂がグランチュラとライトニングサイクスの上へとなだれ込む。

『くっそおおお…!!』

だが、一機のグランチュラが砂に巻き込まれる直前で飛び出し、ライガーゼロへと飛びかかり、足で拘束する。

『この距離では対応できまい、大型ア!!』

大型ゾイドは、この至近距離の対応に弱い。

グランチュラは小型かつ旧型だが、戦術次第ではライガーゼロでも屠れる。

だが——それでも相手はライガーゼロ。

グオオオオオオン!!!

直後、拘束し足で攻撃を繰り返すグランチュラごと回転し、地面にグランチュラを叩きつけた。

『ぐわあああああ?!?!?』

直後、グランチュラのコンバットシステムはフリーズ。

一度に3機のゾイドを行動不能にした。

「よし、斥候戦は制しました!!」

間もなく主力がこちらに来るはずですが、用意を整えて!!」  
リナは指示を飛ばし、続いて方向を変えて走り出す。

「スカウター隊は引き続き敵の動きを把握!!」

攻め込む準備をします!!」

戦いの火ぶたは、切つて落とされた。

\*\*\*

## その3

現代戦においても、はるか昔の戦いにおいても、川を渡るといふ行為は、かなりの労力を要する。

『隊長、もうすぐ到着します』

シユバルツエスシユトルムは超攻撃型チームのように見えるが、そんな川の対処のために、ある4機のゾイドを有する。

一つ、前線までに様々なものを運ぶ『RPZ-002 グスタフ』の改造機『グスタフワーカー』。

二つ、水陸両用ワニ型ゾイド「RZ-003 バリゲーター」の改造機、背中に橋を架ける装置を付けた『クラフトゲーター』。

そして、最後に見えるは、やや重装型の中型戦闘工兵ゾイド——『スピノサパー』。そう、彼らこそ、『戦場の勝利のカギ』戦闘工兵部隊だ。

「もう間もなく、川に到着します。

そこからは戦いです」

それらを見やり、ツバキはただ同胞である彼らに言った。



「いいですか？　ここの砂漠は起伏が多いとはいえ、ただ広く隠れる場所の少ない地形であることは相違ありません。

現在、お互いに半分あたりまで地形の把握が終わっているでしょう。

つまり今いる位置から先は相手の罠の宝庫。そう考えて行動してください」

『ですよね……………しかし、相手は何をするつもりでしょうね……………』

警戒しつつ、クラフトゲーターの前に陣取るスピノサパーの一機がつぶやく。

「無駄口は叩かないように。通信傍受の恐れもあります」

『おっと……………失礼、隊長』

『隊長、川が見えました……………げ!』

と、瞬間、すさまじい声を上げる、もう1機のスピノサパーの乗り手。

「……………!」

いや、その反応は、先ず適当な反応だった。

川が、煮立っている。

いや、正確に言えばゴポツ、ゴポツ、と何か音を立てながら、なんと表現していいかわからない色の川が、煮立っているように泡立っているのだ。

「の、の……………!」

『濃硫酸の……………川……………!?!』

戦慄した。

相手は……ミューズ学園C組の人間の思考は、どうやら学生のそれを通り越していた。

「……確か、川を濃硫酸にするふざけた薬品が昔、ありましたね」

『隊長、原理はわかりませんが、自分もその話は聞いたことがあります。』

となると、渡河するには、やはり……」

「中和作業か、あるいは回避ルートか、でしょう」

ふむ、と少し考えるツバキ。

「……いえ、ここは相手の思惑通り「渡河しない」を選択すべきでしょうね」

『えっ?』

と、ツバキはそう判断をする。

「ここまで来ておいて癪でしょうが、これは相手側の考えを「こちらの足を止めること」とまずは考えましょう。」

濃硫酸という防波堤に、斥候の破壊。

まずこれで考えられるのは、足止め組と攻略組の分散、でしょうね」

と、ツバキは考察を周りに語る。

「成程……」こちらを濃硫酸の川を防波堤に足止めし、すでに川を渡っていた本体がこち

らの本体を挟撃する。

いい作戦ですね。久々にまともな相手と戦えて光栄です」

『おお、なんとなくわかりますぞ？ いやはや、知能の低い私共でも』

ふふ、とツバキはつぶやく。

「……反転して、主力部隊に合流しましょう、そして、挟撃組を……」

と、突然、けたましいアラートが鳴り響く。

「!? 主力部隊に攻撃……!」

瞬間、ボン、ボン、という砲撃音が、自分たちの陣地の方向から聞こえる。

\*\*\*

「ヴォルケーノ、ポイントG-87へ砲撃。目標、全長32.2メートル。毎時22.5ノットでF86方面に移動中。フレシエツト弾を推奨します♪」

『了解、スカウター1。今日は晴れのち槍だな』

姿勢を低く、這うようにすすむクロムウエルのセンサーが、砂漠を進む巨大な影をとらえていた。

デスザウラー。

まともに戦えば、勝てないほどの相手。

「お……!」

高速飛翔対反応。

そして、それが降り注ぐ。

「さて、先ずはセオリー通り。砲撃で削りましょうか♪」

\*\*\*

『総番!! 真上!!』

はじけ飛んだ砲弾から、大量の槍のような金属が拡散する。

!?

総員、防御姿勢! デスザウラーの荷電粒子ファンは死守、ぐっ!!」

直後、断続的な衝撃がデスザウラーを襲う。

惑星Ziトツプクラスの重装甲ゾイドの装甲はそれだけではびくともしないとはいえ、フレシエツト弾の貫通力は、当たれば痛い。

「クツ……真つ先にデスザウラーの弱点を狙ってくるか……!」

エルフリーダは即座にFCSを起動。

「だが、位置はとらえたあつ!!」

デスザウラーのミサイルハッチを開き、迎撃を始める。

———グオオオオオオオオオオオオツツ!!

咆哮とともにミサイルは放たれ、撃った相手のいるであろう位置へと飛んでいく。

ズオドン、と大地が震える。

「ツ、被害報告!!」

『こちらのデスザウラーは無事です!』

『こつちも!』

『あ、足元の小型ゾイドたちも、何とか軽微!』

「この程度で相手が満足するか!? 我々は攻撃を受けた!!」

報復だ!! 速やかに次の攻撃から相手へ反撃を始める!!」

了解ツ、と威勢のいい返事が来た。

士気は、まだ落ちていない。

『総番!! 東方向、来ます!!』

ぐるりとデスザウラーの頭部を向け、その方向を見る。

——土煙を上げて、エレファンダーを筆頭とした、重ゾイドたちが、全速力でこちらに来る。

「来たぞツ!!」

戦闘を始めよ!! 奴らの勢いに負けるな、暴風諸君!!」

うおおおおおおおおおおおおおおツツ  
!!!!

そして、今、

二つのゾイドの群れが、ぶつかる。

## その4

先陣を切るは、エレフアンダー1機、ガンブラスター2機、デイバイソン2機の重装甲ゾイドを筆頭とした『パンツァー隊』の面々。

『しゃおらあああああツツ!! デスザウラーが何ぼのもんだぜえええ!!』

『うるせえ副隊長! こちとらこんな任務なんて聞いてないんじやー!!!』

デイバイソンの中で叫ぶ『アスカ・ソウタ』——突撃担当の生徒。

当然の反応である。彼の場合気弱で有名だが。

『うるせえ、黙って突撃しろ!! ハイパーローリングキャノンはまだ装填積みなんだ

よお!!』

『後ろから撃つ気か!?! 俺ごと撃つ気だ!!』

『はいはい、黙って突撃!! 我々が壁でありますよお!!』

ぎゃわあああああ、という叫びとともに、デイバイソンの17連突撃砲が火を噴く。

\*\*\*

『デイバイソンだ!! 装甲の厚いゾイドは前に出る!! 火力の高いゾイドは隙間から弾幕を張れ!!』

瞬間、デスザウラーの足元にいたダークホーン4機、小型重装甲ゾイド『ブラックライモス』10機がダークホーンを中心とし縦陣となり前へ。

続いて、その重装甲ゾイドの横陣の両脇に巨大な砲を積んだゴルドス2機、そして13機の重砲撃型イグアンを配置する。

中央に3機のデスザウラーが布陣し、全体がこちらへ向けじりじり進撃を開始する。『荷電粒子砲を使う!!』 チャージ中は間違つてもあのガンプラスターに攻撃をさせるな!!』

\*\*\*

「な!! この状況で縦陣!? 防御ではなく攻撃をするつもりでありますか!?!」

パンツァー隊長であるオテーリエの驚きも無理はない。

通常、『縦陣』とは玄人向けの攻めの陣形であり、普通は横陣という防御用のやりやすい陣形を作るのが、このコマンドタクティクスルールでは一般的だ。

『しかもこの数!! ほぼ全機いるぞこれえ?!』

『オイ、大丈夫かよ!? 半分もこっちはいねえぞ!?!』

『だから言つたんだよお、無茶だつてえ!!』

『うるさあああああああいつ!! ガタガタ叫ばないッ!』

瞬間、背後から走ってきたハンマーロックの群れ、アーチャー隊とその背後にゴドス



2機、そしてバーサークフューラーことココロが向かってくる。

『このぐらいは想定範囲内よ!! 何!? コツチは損害覚悟で勝利をつかむつもりなのよ!?!』

ガタガタいうな! 文句は死んでから受け付けるわツ!!』

『むちやくちやだよこの人お!?!』

『ここまで無茶言われると逆にすがすがしいわ!!』

メルヴィンの通信に叫ぶC組の面々。

「はいはい! とにかく、現在こちらは数で不利!!」

さつそくであります、後ろのアーチャー隊とカリン殿はミサイルなり荷電粒子砲なり叩き込んで相手の数を減らし、ほかはぶつ放しながらこのド平原に見えて起伏のある地形を利用し攻撃する!

相手は、強力なゾイドの反面、起伏の利用できないデスザウラー!

ならまだこちらにもやりようはあるであります!!」

オテーリリ工は、エレファンダーに積んだ大型砲を照準し号令を出す。

「アーチャー隊は絶対に攻撃を喰らわないように! 全機、起伏は最強の壁と心得よ!!」

壁は、重戦車の役目!!

パンツァー隊、全機ゾイドともに壊れて死ぬまで火力を保って撃ちまくれ!!」

瞬間、叫び声をあげて、走り、先ずは当たらなくてもいい、邪魔になるように派手に撃ち始める。

\*\*\*

「全機、暴風を噴き上げろ!!」

号令とともに、ゴルドスの背後の連装41センチ砲2門が、イグアンの持つ様々な火器が、戦闘の重装ゾイドの群れの火器が、一斉に放たれていく。

噴煙とともに、戦場に砂煙がもうもうと上がり始める。

「荷電粒子砲、発射準備!」

重厚な足音とともに、デスザウラーが両足を大地に構える。

背後の荷電粒子ファンが、惑星Ziに満ちる荷電粒子を吸い込み始め、

その巨大な口の中の荷電粒子砲が、唸りを上げ始めた。

\*\*\*

「ぎゃああああああ、もうぶつ放すつもりかあの速攻バカどもはあああああああ  
!?!?!」

その様子を見たオティリーエは、涙を交え叫ぶ。

『こちらガンブラスター、ことレイン! 撃つぜ、黄金砲!!』

「許可はいいから撃つてでありまあああああす?!」

エレファンダーの巨大な砲が、デイベイソンの17連突撃砲が、そしてかつてその砲

撃の色と威力をなぞらえて「黄金砲」と謳われたガンブラスターのハイパーローリングキャノン——驚異の20門複合砲、可能な限り破壊力のある砲をとにかくつけまくったと称されるこの兵器を向ける。

『こいつを使うと電磁シールドが晴れねえ、クツ…！ くそ、盾よろしく!!』

「了解!! いっちよ、対ティーター戦でのファイヤフライ戦法をやってやりますか!!」

『地球の歴史はお前から移民にしかわかんねえよ!!』

オティエーリエの号令とともに、一機のデイベイソンがEシールドを展開しガンブラスターの斜め前に出る。

同じく、オティエーリエも同じくEシールドを展開、斜め前へ。

「射線に入らないように！ ケツに黄金砲で掘られるのは御免でしょう?」

『俺はケツ掘りたい方です!!』

「よし変態、奴らのケツを掘ることを許可するであります!」

『下品極まりねえな！ 好きだけぞういうの!!』

ガンブラスターのハイパーローリングキャノンを打たせまいと来る砲弾をEシールドで受け止め、その時を待つ。

「速くう!! ガンブラスターちゃんいい子だから、早くしないと荷電粒子砲発射しちゃうでありますよお!!」

遠くからでも、あの怪獣の口に光が収束しているのが嫌でも見えていた。

『しゃおら、チャージ完了！ 行くぜえ!!』

その言葉の瞬間、重装甲とはいえゾイドらしい横ステップでガンブラスターの前から避ける。

『見せてみる、惑星Ziを震撼させた火力を!!』

瞬間、このアンキロザウルス型ゾイドの咆哮とともに、黄金の光がほとばしる。

\*\*\*

『きたぞおおおおおおおおおおおおおつ!!』

対シヨック耐性。しかし、それでも抑えきれない衝撃が、ダークホーンたちを襲う。

おそらく、彼らはDNAに刻まれた、かつての暗黒大陸の先人たちの戦いを思い出して震えているだろう。

たとえ知らなくても、再びダークホーンの群れに黄金砲は放たれた。

『うわあああああああああああ?!?!?!』

『システムフリーズ!! そ、装甲が…!!』

『うろたえるな! ぐっ?!』

すさまじい衝撃とともに、一步前にいたエルフリーダのデスザウラーがダメージを追う。

強固なデスザウラーの装甲が抉られ、肩から胸にかけての装甲がはがれおちる。

『総番?!』

「うろたえるなど言った!! 黄金砲だけに気をとられるな!!」

とはいえ、と彼女は思う。

今、前線を支えるゾイドが、かなり削られた。

やはり黄金砲は、厄介な代物だ。

「しかし、まだ我がデスザウラーは立っている…!」

口を開く。再び光が収束していく。

\*\*\*

「荷電粒子砲——っ!!」

総員、回避および防御姿勢!! 奴ら一気に削る気があります!!」

やっべ、の通信機の声とともに、放火の中ガンブラスター2機が寄り添い、その背後へ残りの3体の大型ゾイドが集まる。

『オラオラオラア!! 17連突撃砲もおそろしいんだぜえ!』

『いやだー! こんな近くで荷電粒子砲なんて喰らいたくなああああいい!!!』

『(ゴーン)』

通信機に、もう一機のガンブラスターに乗る生徒のマイクの叩く音が聞こえる。

おそらく、「うるさい、ガンブラスターの電磁防護壁に任せろ」とでも言いたいのだろう。

——一切、一度は耐えられる。だが、

(おそらく、たとえこちらの戦力を大して削れなくても、向こうのデスザウラーに致命傷を与えるガンブラスターを始末する目論見！)

「ガンブラスター2機は電磁シールドを展開!! 火力部隊、後方支援要請!

はよ撃つてくださいでありまああああすつつ!!」

ならば、と一番近い指揮官であるオティリーエは指示を飛ばし、考える。

(……までは想定範囲内……!!)

\*\*\*

「お待たせして悪かったわね!!

アーチャー隊、全機配置完了! ミサイルを撃てえつ!!」

瞬間、ほぼすべてミサイルポッドで武装したハンマーロック達の全身から、すさまじい数のミサイルが放たれていく。

『うううううううう、一発、一発600ガロスがああああああ……!!』

『泣くなー! 泣かないで、撃てー!!』

「いえ、撃ち方やめ!! 奴らの火砲が当たる前に逃げるわ!」

火力担当が同じ場所に居続けるのは愚の骨頂である。  
相手の火砲が飛んでくるのだ、すぐに移動するのが定石。

『着弾確認！』

動きつつも、今放ったミサイルの行方を見る。

\*\*\*

『ミサアアアアイルツツ!!』

敵の言葉とともに、飛来したミサイルへの迎撃に対空攻撃を開始する。

『敵への砲撃を緩めるな!! だがミサイルにも気をつけろ!』

『くそつ、対空兵器も持ち合わせていれば…!!』

迎撃しろお、と激を飛ばすものの、迎撃しきれないミサイルが降り注ぐ。

『うわああああ?!』

『くそつ、やはりミサイルは厄介な——』

そして、その一発が、デスザウラーに向かう。

「しまっ——」

荷電粒子砲発射寸前のその顔面に、ミサイルが着弾した。

\*\*\*

着弾、爆発——誘爆。

「まさか……!」

一瞬、相手の砲火が止まる。

まさか……と思いい煙が晴れる。

一機のデスザウラーの、荷電粒子砲が、破壊されていた。

「ひやつはあああああああああッツ!!!」

やったぜ!! 大戦果!! 大、大、大、大、大・戦・果ツ!

全員、呆けている場合でありますかあ!?

作戦通りとはいえ、ここに乗りない手はないでありますツ!!」

瞬間、通信機から活気づいた声とともに、周りの砲火が強くなる。

ミサイルの第2弾も、敵へ放たれていく。

「い、一応言っておきますけれども! 作戦は忘れぬよう、忘れぬよう!!」

うー、でも、でも!!

このファインプレー、今回の勝敗の行方をかなりこちらに向けましたよお!!」

攻撃の手が加速するC組の面々。

そう、状況をかなり有利に変えた。

\*\*\*

『クツ……調子に、乗るなああああああ!!!』



崩れ落ちるデスザウラーの背後で、残り2体がふたたび荷電粒子砲を放つ準備をする。

「つ、全軍、次は私のデスザウラーの二の舞はさせるな!!」

だが熱くなりすぎるな!! 相手方は想像以上の強敵だ!!」

しかし、荷電粒子砲の発射口が破壊されても、エルフリーダのデスザウラーのコンバットシステムは、フリーズしない。

『そ、総番、しかし…!?!』

「うろたえるなっ!!」

シユバルツエスシユトルムはうろたえない!!

このぐらいはまだかすり傷だ!!」

明らかに大嘘だが、この場合こういうのが正しい。

指揮官機であり最強のゾイドなのだ。決して弱みを見せてはいけない。

「だが、数はまだこちらが有利!! 一気にけず、」

『デスザウラー隊、避けて!!』

ところが、そうも言っていられない事態が起こった。

ズドン、という爆音とともに、一機のデスザウラーが崩れ落ちる。

「!?!」

瞬間、咆哮をあげ、システムフリーズするデスザウラー。

—— 背後の荷電粒子ファンが、煙を上げていた。

「後ろだと…!?!」

背後を見て、戦慄する。

\*\*\*

重厚な足音を立て、進軍するのは、20の機影。

レッドホーン、デイメトロドン、そしてゴジユラス。

随伴するは、イグアン、カノントータス、そしてステルスバイパー。

両脇には、ライガーゼロとライジヤーがいる。

\*\*\*

「まさか……この数は…!!」

いくらバカでも、そう自分を称していても、

エルフリーダには、この面子がなんなのかわかった。

\*\*\*

「時間がかかってごめんなさい?」

でも、「

リナは、につこり、とひそかにコックピットで笑う。

「包囲殲滅の準備ができました♪」

## その5

『つ、つまり奴らはすでに渡河を果たし、そのうえで退路を断つて、我々を包囲殲滅する  
気にいると!?!』

その通りです、と舌打ち交じりにツバキは言う。

「気でいるんじゃないやありません、していません!」

計画を変更します。我々は反転し、敵の片側へ攻撃を仕掛けます。

まだ数と質で上ですが……クツ、」

言いたくない、そんな苦虫をつぶした顔で、ツバキは言う。

「勝てるかどうかわからなくなってしまった……!」

\*\*\*

『で、デスザウラーが、システムフリーズ!?!』

『探索班、何をしていた!?!』

『わかりません、レーダーに突如、ガツ!?!』

一機のレッドホーンのバックパックが砲撃でつぶされる。

『イーハー!! 見たかよお、このアタシの射撃テク!』

『いいねえ！ 最高だ、リコ君!!』

断続的な音を立て、移動しながらカノントータスは榴弾を叩き込む。

『隊長、しかしも目標にはかすり傷一つついていませんがあ?!』

『当たり前だ！ 移動しながら撃って撃って当てられる奴は、まぐれか、』

ズドオン、と爆音を立て、なんと2機目のデスザウラーの荷電粒子ファンに榴弾が叩き込まれる。

『あ、当てちゃった……』

こちら2号機、なんか当たっちゃったよー』

というどこかやる気のない声上がる。

『……いるんだよなあ……こういう、天に恵まれたスキルを持っている奴が……!』

\*\*\*

「嘘でしょ!? え、本気ですかこの展開!？」

そして、参謀であるリナは、その様子を見てやらせた本人としても驚いた。

デスザウラーの装甲は分厚く、カノントータスの780ミリ榴弾砲では貫けない。

ただし、唯一荷電粒子ファンだけは、榴弾砲で破壊ができる。

しかし、弾速の遅い榴弾砲では迎撃能力の高い背部のビーム砲で破壊されるが……

『こちらフォートレス隊、フォートレス2。』

スカウター、指示を乞います』

「了解!! 状況は好転しています、敵の中核であるデスザウラーの荷電粒子砲を沈黙させました!」

いや、起きたことをいちいち考察する場合ではない。

砲弾飛び交う戦場で、間違っても装甲の薄いクロムウエルに当たらないよう注意深く避け、砂丘を立てに止まり、背後のアタックブースターで砲撃する。

「ただし、敵の主力は健在です。

かといって下手な小細工は隙を生みます、6秒後、支援砲撃をやめて一気に突撃!! 損耗の激しい側はどこですか!」

『こちらパンツァー隊!! 今穴はあけるであります!!』

それに関してリナ殿以下スカウター部隊!! 着いてきてほしいであります!!』

「ちよ、私反対側ですよ! 何する気ですか!」

『今指示を出したでしょう!』

突撃でありまああああすツ!!』

\*\*\*

「この距離からがっ!!」

敵正面、ダークホーンとブラックライモスの群れに、エレファンダー・フェルディナ

ンドが突撃し、一機のダークホーンにぶつかる。

グオオオオオオオオンツ?!?

パオオオオオオオオンツツ!!

「パンツァー隊、とつとと突撃でありまああああす!!」

鼻でダークホーンの腹部へ叩き込み、その94トンのボディをハンマーのようにして豪快に振り回す。

『ぐわあああつああああ!!』

『突撃だオラアアアアア!!』

『い、行くしかないのかよおおおおお!!』

まさかの攻撃に、隊列が乱れたそこへパンツァー隊すべての機体がなだれ込む。重量級の突撃に反応し、そこへゾイドが集中し始める。

\*\*\*

「そう来ましたか……いろいろ予定をすつ飛ばしてくれませよね、でも!!!」

リナは、ロケットブースターのスイッチを入れ、突撃する。

「全体、この流れに便乗!!」

「私に足の速いゾイドは着いてきてください!」

そして、目の前の敵を見る。

「今あの部分はがら空きです!!」

そう、エレファンダーの乱入により手薄になった側へ。

\*\*\*

『だめです、このエレファンダー、ガッ……!』

『バケモノか!? この数で押しても……!』

『装甲ははがれてきている、何とかしろ!!』

「いや、何とかするな!!」

その時、シュバルツェスシュトルム全体に、その声が響く。

「うろたえるな諸君!! たかがデスザウラー2機とダークホーン数体がシステムフリー

ズしただけだ!

まだ、反撃の余地はある!」

エルフリーダは、そうコックピットで腕を組み、言い放った。

『しかし総番、方法は!』

「私はこの状況の打開策は一切方法は知らんツ!!」

と、信じられない一言を放つエルフリーダ。

しかし、それでもまだ死んでいない目で、彼女は次の言葉を叫んだ。

「だが!!」



「打開できる奴はまだいるだろう？」

\*\*\*

すこし、その戦場から離れた位置にて。

「不意をつかれましたようで、どうやら我々の戦力がかなり削られています。

もつとも、斥候がやられた時から、嫌な予感はしました」

そう、凜とした声が響く。

『どうしますか…？』

「安心してください。」

まだ、打開できません」

そして、ツバキは、あくまで平静に言う。

「まだ暴風は止まっていない、とあの人は言うんでしょうね」

## その6

「……きつと、この指示は受け入れられないと思うんです」

と、梯子を上り、その場所へ向かうツバキが、つぶやく。

「そうでしょうね!! まず普通は受け入れません!!」

下にいた一人の生徒——シユバルツエスシユトルムの一人が妙な笑みを浮かべて答えると、下へ視線を向けたツバキも、同じ顔をした。

「でも、それは他の学校の人間や、ほかのゾイド乗りたちの話なのでしょうね」

そこは、コックピットだった。

こぎれいな電子機器に、両脇には申し訳程度の視界で有名な透過型装甲。

それを覆うように閉じる黒い装甲式キャノピーは、間違いなく帝国製。  
「さて、指示を出しましょうか。」

『敵の一番装甲の厚いゾイド部隊に突っ込め』、と」

\*\*\*

『通信です!! 傍受を恐れ、遠距離短波電文!!』

『ツバキからか!? 内容は!!』

放火にさらされる中、その内容が酷く言いずらそうに読み上げられる。

『内容は……はい!』

敵の最も装甲の分厚いゾイド群に突っ込め、です!!!』

一瞬、すべての味方が沈黙した。

言っている意味が分からない、という具合に。

その時、最初に動いたのは、

『ええい、うろたえている場合かツ!!!』

全軍突撃こそ我々の神髄である!!』

荷電粒子砲の使えないデスザウラー。

『行くぞ!! ついてこい!! これこそが!!』

エルフリーダの乗る、総指揮官の機体。

『我々の戦いではないかあああああああああああああツツ!!!』

デスザウラーの突撃に数瞬遅れ、後続がその後ろへ付き、突撃を始めていく。

\*\*\*

『げえ、やられたア!?!』

防御ガン無視ですか、あの方々!?!』

崩れた場所を完全に無視し、逆にパンツァー隊の方角へ進撃を開始する相手を見て里奈が叫ぶ。

包囲された場合、防御に回るのは愚の骨頂であり、逆に一点に向かい突破した方が、損害は少ない。

経験則や、戦術家、戦略家も皆が口をそろえてそう言う。

「——なーわけねーでありますからあ?!」

その場でとどまって援軍を待つという選択肢だつてあるのにツ!!」

だが、はつきり言って、それをまともにやろう、と思う人間は、名将か、バカかだ。オテーリーエには絶対にやらない。やろうとは思わない。

人間には恐怖もあるし、損害を考える脳みそもある。

自分でできて、ほかの人間にできないことはある。

(しかし、あのデスザウラーにはそんな物を感じない!!

直観だ!! それも野生の勘でしかない!!)

こちら側に来た手前、結構なピンチだった。

こつちにあるゾイドは、比重でいえば小型ゾイドが多い。

中型までなら対応できるゾイドばかりだが、

重突撃、重装甲ゾイドばかりの相手で、しかも戦闘は荷電粒子砲がないだけで、ま

もに動けるデスザウラー。

格闘性能だけで、ゴジュラスを蹂躪できる、帝国の『死を呼ぶ巨竜』。

(迷っているわけにもいかないでありますなあ……)

ならば、

「カリン殿お!!」

荷電粒子砲をぶっ放せでありまああす!!」

『え!?!』

「とにかく撃てえ!!! 目標は先頭のデスザウラー!!!」

そのあと全員でリナ殿たちと合流であります!!」

『りよ、了解!!』

自機であるフェルディナントの後方、カリンの乗るC組最大戦力のバーサークフューラーが、足の固定アンカーが下り、伸ばした尾の廃熱フィンが開く。

「バスタークロー部分からは撃たなくてよし!! 威力も4割程度で大丈夫であります!!」

『撃つたらすぐに移動だよね!? わかった!!』

\*\*\*

「させるか、わがデスザウラーは簡単に止まらんぞ!!」



マンと実用性を兼ね備えた逸品、

アンキロサウルス型ゾイド、ガンブラスターの攻撃だ。

『チツ、相手方はほぼ『半荷電粒子リコイル』装備だ!!!』

ビームの通りが悪いぜ!!』

実弾とは別に、ビーム砲やレーザーがイグアンなどに当たる瞬間、不自然な曲線を描くさまが見えた。

「贅沢なやつらだ!!」

17連突撃砲薄いぞツ!! 何をやっているツ!!!』

『砲としてしか見てねえのかよお!!!』

しかし、デイバイソン2機の凶悪なまでの弾幕は、イグアンに次々傷を負わせ、ブラツクライモスすら退けていく。

そこへ、エレファンダーが火器を乱射しながらツツコミ、防御に回れば後ろからガンブラスターの黄金砲が光を放つ。

\*\*\*

「ぐっ…!？」

……成程、なかなかやる…だが!!」

この攻撃を、相手はものともしなかった。

「この私の駆るデスザウラーが、超重装甲ツツ!!」

再び放たれたハイパーリングガンノ雨に、その装甲が傷つき、焦げつつも、まるで無傷かのように歩みを止めない。

「そう簡単に、抜けると思うなあああああつっ!!」

それどころか、素早く反転し、尾を薙ぎ払うように敵へたたきつける。

\*\*\*

「ゲツ?!」

とつさに、全員姿勢を低くしたり、後ろへ飛ぶ。

動物型だからできる芸当だ、がそれでも先頭にいたデイバイソンがやられる。

『うぎやあああああ?!?!』

ずさあ、と砂を巻き上げ、ぼこりとでた岩砂漠の入り口のような場所に叩きつけられる。

ブモオオ、という声は断末魔か、バチバチとショートしたような音と共に動かなくなる。

「はうあああああああ、あ、あ、アスカ殿おおおおおツ?!?!」

パンツァー隊一機システムフリーイズ!!!」

『ごめんよお、マジでごめんよお…!!』



通信機越しにオテーリーエとディバイソンの中にいたアスカは、泣きながら誤っていた。

しかし、今は止めた、とでも言わんばかりにデスザウラーが再び顔を向けるタイミン  
グだ、かまっている暇は無い。

「カリン殿おおおおおおおおおおおおつっ  
!?!?!」

『お待たせッ!!』

だが、まだパンツァー隊に運は向いていた。

バーサークフューラー、ココロの口から、

光が、その時ほとぼしった。

\*\*\*

『荷電粒子砲————ツッ!!』

『反荷電粒子リコイル最大出力————ツッ!!』

前衛にいたゾイド群の周りに、丸い光の膜が浮かび上がる。

反荷電粒子フィールドが最大出力になった際起こる現象だ。

だが、それは気休めだった。

存外、空気を振るえるほどとはいえ、砲撃音よりは小さい音と、そんな物感じないほどの光を放つ荷電粒子の線は、その膜を容易にえぐり、デスザウラーへ直撃する。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!  
胸部へ直撃した、バーサークフューラーの収束荷電粒子砲。

その威力、そしてその痛みに、デスザウラーが吠える。

「ぐううう……!!」

衝撃で、コックピットが揺れる。

「も、持て……デスザウラー……!!」

死を呼ぶ巨竜……我が、愛機よ……!!」

操縦桿が重い。今にも手放しそうだ。

だが、ダメだ。

これを放した瞬間、エルフリーダの誇りが、デスザウラーの闘志が消える。

「システムフリーズなど……するかあ!!」

耐えきった。

超重装甲は誘拐し、いまだその熱で赤熱化し、融けて内部機構が見える程だ。

だが、そのデスザウラーは耐えきった。

「ッ、生き残りはあ?!」

『え、A班生存報告!!!』

同じく、同じく、と続き、

『E班全機システムフリーズ!!』

『B班、2機を残し戦闘続行不可能!!』

と、数秒の内に被害報告が上がる。

「相手は……!」

ようやく、視線を相手へと向けた。

そして、驚く。

「いない…!?!」

\*\*\*

「邪魔よ!!」

カリンが撃った瞬間、いや、撃った前から、静かに、

アーチャー隊……ハンマーロックの一団は動いていた。

『委員長さ〜ん! 突出し過ぎちゃだめですわあ〜!!』

隊長機が撃ち落とされてもルール上は問題ないですけども、』

「なら問題は無いわ!!」

目の前で突進してきたブラックライモスに対し、フレア（対ミサイル阻害熱源）を散布して虚を突き、横腹に拳を叩き込み、叫ぶ。

『士気に影響もあります!! 何やかんやで、一番みんなを引つ張っているんですから!!』  
「いい!!? 指揮官だから前に出ない、は言い訳でしかないわ!!」

前に出るデメリットは、時として前に出ないデメリットを下回るのよ!!  
今がそうよ!! ヘリック大統領の言葉通り!!」

敵の重装甲イグアンの放ったビームを回避し、近づいて蹴りを喰らう前に殴る。

「もうすぐ、パンツァー隊が合流するわ!!」

「ここまでこそそ動いて、電子妨害もちよつとして穴を掘つたの!!」

『もうちよつとでふさがりそうな小さい穴ですけれどもねえ!!』

相手の数は多い。何せ、敵陣の真ん中を通っているようなものだ。

すでに包囲されていると同義なのだ。

「相手と同じことをしようとしただけよ!!」

それに、破城槌はもうすぐ来る上に!」

と、すぐ近くで爆炎が上がり、敵が吹き飛ばす。

『弾着!! カノントータスの780ミリ榴弾です!!』

「味方の射程に入った!! 近いわ、きつとりナなら状況を理解してくれるって信じてたわ!」

そして、直後時期のすぐ近くに榴弾がやってくる。

『きやあ!?!』『近い、近いって!?!』

「……だ、弾幕で防御するから早く来いってことにしろ、死んでもいいかぐらいに思っていないかしらこれ……!?!」

しかし、案外有効だった。

破片やら粉塵やらもあるだろうが、このハンマーロックはミサイル攻撃をメインに置くよう改造されており、センサーの感度はなかなかだ。

敵も、ひるまず撃ってくる。特にダークホーンがやたら多いためその弾幕は、気を付けるべき密度だ。

だが、榴弾と動じない胆力とちよつとのゾイドのダメージで守られたハンマーロック達には、まだ当たらない。

「まだなの。パンツァー隊……!?!」

『ちよつと、委員長さあん!! 私の所のエースの心配は!?!』

「それも含めてよ!」

と、隣で奮戦するゴドスからの通信に軽口をたたく。

メルヴェインにはまだ、勝機が見え、余裕があつた。

『——アーチャー隊のみなさあああああん!! 遅れたでありますあああす!!』

そして、待ちに待つた声と共に、ゾイドを蹴散らす重厚な足音が聞こえた。

「来たわね!」

一瞬、注意をそちらに向ける。

だが、次の瞬間、

『ですがあ!! ピンチです!!ピンチであります、うぎやあ!!』

その不穏な通信と共に、エレファンダーの姿が見える。

「何があつたの!」

『ココロの右腕が!』

じゃ、じゃなかった、どど、ドリルの右が壊されちゃいました!!』

『さつきやられたディバイソン以外は何か無事だが、マジでやべえぞ!!』

と、不穏な通信と共に、味方の一団が小型、中型ゾイドからなる壁を壊して進んでく  
る。

殿を務める、はバーサークフューラー。

みると、ココロの右のマグネーザーが、半ばから消えていた。

(何…?!?)

瞬間、何かが、バーサークフューラーの背後からやってくる。

『クツ…!?』

見事な操縦で、その突撃をよける。

しかし、瞬間、煌きと共に、

スパン、ともう一方のマグネーザーが、半ばからずり落ちた。

「何!？」

ドスン、と音を立て、エレファンダーとこちらの間になんかが下りる。

それは、黒いゾイドだった。

サイズは大型、形はバーサークフューラーと同じ——テイラノサウルス型。

「ジエノザウラー…?」

いや、違う…!」

ジエノザウラーに酷似したそのゾイド。

しかし、背部にあるのは、パルスレーザーライフルではない。

その背部にあるのは、二振りの『剣』。

まるで、騎士を思わせる兜とでも言い表す頭部装甲から、赤い角と鋭い視線を見せる、恐竜型ゾイド。

「ジェノリッター…!!」

なんて趣味的な…!!」

\*\*\*

「合流などはさせませんよ？ ミューズ学園の方々」

敵を見据え、ジェノリッターの操縦桿を握るツバキは静かに意思を向ける。

「ここが、あなた方を飲み込む『渦』だ」

シャラン、と二振りの大剣「ドラグーン・シュタール」を向け、言い放つ。



## その7

「……………これ、やばくないですか？」

リナは、冷や汗交じりに現状をそう評した。  
状況は最悪だった。

分断された半分の戦力に敵戦力が大集中し、包囲はすでに崩れ撤退中だ。

しかも、ドコゾノシマズ（地球人のスラング。敵の中央を突破して逃げ去る事）状態だ。

危険な撤退方法だが、まさかあんな趣味的なゾイドで追ってくるとは思わなかった。

「ジェノリッター……………もう飛べよ、と言いたいマグネッサーステム搭載型、そこまで格闘戦にこだわるかと言わんばかりの近接武器を持つ魔装竜の騎士……………」

発想が時代遅れながら、機動力でいえば惑星Zi最高クラス……………！」  
ぶつぶつ、コクピットでつぶやき、短い時間で思考をまとめる。

(このままじゃ我々のうち半分が死ぬ。

いや、こちらに戦力が集中していないだけ、片方のデスザウラーの荷電粒子砲が火を噴く状況になれば、全滅は必須。

かといって、あそこに突っ込めばジエノリッターに……もう一体のデスザウラー……)

ふと、リナの視線が変わる。

……ほかの部隊の動き。

敵の他の奴らは、今何をしているかを見る。

委員長以下が、頑張って持ちこたえている中殺到する、敵の動きに。

「……………ああ、そういう事ですか。

……………まだ、チャンスはある！」

につ、と笑って、リナは座席の下から、水筒を取り出す。

紅茶だ。今、脳と体がタンニンとカフェインを欲している。

「……………全部隊、聞こえますか？ 副委員長のリナです」

そして、蓋に紅茶を注ぎながら、リナは言う。

「打開策を思い浮かびました。

F F 隊、確かEMP発生器とチャフありましたよねえ？

私以下スカウター隊のゼロとライジャラーの2機にちよつと貸してください」  
『こちらリンクス。何する気だよ、参謀閣下?』

すす、と口いっばいに広がるアールグレイの柑橘の香りを楽しみながら、こう続ける。  
「勝つための、作戦です」

\*\*\*

『ぐう……?!?』

「カリン殿ツ?!」

その状況を見ていたオティーリエは、思わず叫ぶ。

『このゾイド……!!』

カリンは、見た目通りか弱いアイドル少女でピーキー性能なパイロットだが、その代わりバースークフューラーを乗せた場合の戦闘力は、とてつもない。

C組だけじゃない、全校を見ても指折り、リナ曰く、3対1じゃなきや戦わないと言わせるほどのゾイド乗りだ。

今だって、片方しかない上に折れたマグネーザーを起用に動かし、尾でも相手の攻撃をさばいてはいる。

だが、相手のジェノリッターは、格が違った。

『おのおの!!』

折れたとはいえ、いまだ敵装甲を引き裂く威力はあるマグネーザーを、大剣を起用に動かし、そらし、もう片方の刃を首元へと放つ。

一瞬のこの動きは、あまりに洗練されている。

『くうッ!』

避けようとしたが、装甲の一部が引き裂かれる。

内部が無事なだけで、事実命中しているようなものだ。

『つ、強い……! 今までの中でも、誰よりも……!!』

心の声が表に出る程、相手は強い。

動きが、技が、そのすべてが、

格上のはずのバーサークフューラーを上回っている。

\*\*\*

「いい腕です。性能に頼りすぎていない」

だが、とツバキは、己の愛機たるジェノリッターをバーサークフューラーの目の前まで移動させる。

相手が反応し、尾による格闘を仕掛ける。

バーサークフューラーの尾は、小型マグネーザーともいえる武器を装備している。

「だが……機体性能を引き出しきっていないッ!」

首を捉えたはずのその攻撃に対し、頭部のブレードを当てて防ぐ。防がれた、と驚くその一瞬を付き、横ばいに体当たりを叩き込む。

鉄のきしむ音、ひしゃげる嫌な音があたりに響き、バーサークフューラーが吹き飛ばされる。

「ゾイドは人馬一体。

心で動かすものです……心で！」

\*\*\*

『う、あ……！』

バチバチと各部にスパークが見える。

バーサークフューラーは、まだシステムフリーズを起こしていないのが不思議な損傷だった。

「……………なんてことだ……………なんてことでありますか……………!!」

エレファンダーでいまだ戦いつつも、パンツァー隊指揮官として、今現在孤立した自分の参謀として、自分が情けなるオティリーエ。

『ぼさつとしないで!! まだこっちもピンチなのよ!!』

ハツとなって、周りを見れば、孤軍奮闘、四面楚歌の自分たちだ。

荷電粒子砲を警戒し、あわよくば敵を盾とすべく敵中を突っ込むこの作戦だった。

だが、結果は、エース機の蹂躪により、思うように運んでいない。

(負ける……!?)

最悪な形で負ける…!!)

デスザウラーの位置を見る。

もう近くだ……荷電粒子砲発射可能な位置に一体、先ほどまいた、ボロボロでもまだ動く個体が一体。

目視できる程度には近い。

「カリン殿、もういいこちらへ!! 我々も援護するであります」

だが、動揺だけしている場合ではない。

バーサークフューラーにはまだ仕事がある。失うわけにもいかない。

幸い、こちらはまだ一機しか失っておらず、最大火力のガンブラスターは無事だ。

『オラオラ、他にもいんだよゾイドはなあ!!』

『……』

援護、と言わんばかりの集中砲火がジェノリッターを襲い、回避したすきに、バーサークフューラーが起き上がり、こちらに来る。

『ご、ごめんなさい!!』

「気にしない!! まだ仕事は残っていますよ!!」

そうだ。まだ戦いは終わっていない。

それに、そろそろだ。

そろそろ、リナが何か仕掛けてくれるはず。

\*\*\*

「……………成程、ならば……………」

ズン、とガンブラスターの砲撃をよけ、味方機体のEシールドに守られつつ、ツバキはジェノリッターのアンカーを下す。

「全軍、相手の足を止めて退きなさい。

撃ちます」

尾を伸ばし、廃熱フィンを展開。

頭部をおろし、前へ向かい口を開ける。

荷電粒子砲の、発射体制だ。

\*\*\*

『距離を放し始めたわ!!』

『クツ……………もう、弾幕もかなりの物に……………!!』

「くっそ、せめて道連れ一機でも……………!!」

気が付けば、一か所にまとめられていた。

しまった、と思う間に、敵の荷電粒子砲が向く。

\*\*\*

「終わりです」

そして、荷電粒子砲のチャージが完了する。

「少しは楽しめましたよ、ミユーズ学園さん」

収束した光が、一層の輝きを放つ。

守っていたゾイドがEシールドを解き、両脇へ急いで退避する。

そして、凝縮された荷電粒子のエネルギーが解き放たれる。

その瞬間、

『ずおおおおおおあああああああああつっつっつっつ!!!』

「?!」

何かが、すさまじい速度で突進したと思った瞬間、コックピットがあらぬ方向へ向く。

「ぐっ!?!」

とっさに出た荷電粒子砲は、大きく右側に向かって放たれた。

\*\*\*

不幸か、あるいは狙ったのか、



なんと、無事なデスザウラーへ向かい、荷電粒子砲が放たれていた。

『うわあああああああああ?!?!?』

いくら超重装甲と言えど、荷電粒子砲を完全に防ぐことは難しい。

システムフリーズを起こしはしなかったが、当たった場所の装甲は完全に融解してしまふ。

\*\*\*

「クツ…!?!」

ずうん、という音を立て、顔の真下の何かが膝をつく。

「これは……!?!」

そこには、ライオン型小型ゾイド——ライジャーの姿があった。

\*\*\*

「よくやった、ライジャー……今日の仕事は、ここまでで、いい……!」

全速度で突進し、その勢いで荷電粒子砲の発射方向をずらす。

最高速度340、ライトニングサイクスを超える速度を持つライジャーには……それだけでシステムフリーズを起こすほどの衝撃になる。

「あとは、頼んだぞ……!」

そして、その背後から、本命が跳躍し、現れる。

\*\*\*

「!?」

瞬間、黄金色の煌く4つの線が見えた。

(ストライクレーザークロー!?)

とつさに、いまだ荷電粒子砲の影響残るジェノリッターを回避させ、ドラグーンシユ  
タールで迎撃。

一瞬の拮抗と共に、相手が大きく後方の跳躍した。

「ライガーゼロ…!!」

振り返り、その視線の先には一機、

イエーガーユニットベースの改造ライガーゼロがいる。

「!?」

そして、あたりには銀色の何かが降り注ぎ、周りを舞っている。

「チャフか…!?」

それは、電磁波を阻害するための金属片。

レーダー、通信、そう言ったものをダメにするものだ。

「全軍、応答を!」

とつさに、通信機のスイッチを入れる。

ノイズだけだ。

「まさか、彼女らは、」

「ずがあん、と衝撃が走る。

ライガーゼロからの、砲撃だ。

「クツ……『気づかれた』というのか……?!」

それは、とても予想外のことになった。

\*\*\*

「フォートレス及びFF隊は、フォートレス隊を中心に弾丸陣形成。適当に突っ込んでかき回してください。

ヴォルケーノ隊は小型の火力を利用し敵内部へ浸透し、パンツァー、アーチャー両隊、残りのFFとの合流。後に引つ掻き回した部分と合流し、ガッチガチに防御を固めてください」

以上が、リナのまず言い出した作戦だった。

『で、参謀閣下は何を?』

「あのジェノリッター、あれがあちらの私ポジションです。

そして、それ以外にまともな戦術を立てられる人間は相手にはいません」

と、リナの言葉に全員が驚く。

『副委員長。断言するのなら、確証はあるのですかね?』

「動きを見ればわかりますよ。相手の隊長以下にいるのは、突撃を恐れない勇敢な兵士だけです。」

でも、それだけじゃあ、コマンドタクティクスは勝てませんって!

問題は……:相手は将とエースが同じという事。」

さて、と半分の部隊に、リナは最後に伝えた。

「全力で防御。そして全力の砲撃。」

これだけ守れば五体満足とはいいいがたいですが、この戦い、今からならなんとか勝てます。

私を信じてください。

ま、失敗しても、何とか相手の参謀とは刺し違えますから♪」

『突入後のこちらの指揮の引継ぎは、私ことユキカゼ・コールドが引き継いでも?』

「私は異議なしですが、こちら側の参謀各位に異議のある方は?」

『ヴォルケーノ隊、こちらは異議ありません』

『美人には従うさ。だろう?』

『フォートレスの隊長さんなんだけどよお、

なんで隊長差し置いてこいつなんだよ、オイ』

『あなたには、存分に暴れて暴れて、戦ってもらいます。そのためです』

矢継ぎ早にそんな確認事項やら気の抜けた掛け合いが始まる。

まあ、士気は上場という事だろう

「はいはい、異議なしってことでよしですねー？」

ヒルダさん、行きましようか？」

『準備はできているさ!! ライジャーもいつでも走り出せる!!』

「壊れてほしくもないけど……修理が大変そうですね、レアゾイドちゃんだし」

と、リナは軽口と共に、自身の乗るクロムウエルのコックピットを撫でてやる。

「頑張ってくださいよ〜？ 働きによつては、いつものライガー批判を少し減らしてあ

げますから……!」

ライガーゼロは本来気性の荒いゾイドのはずだが、クロムウエルは「はいはい、わかったわかった」とでも言わんばかりの薄い反応だった。いつものことだ。

さて、とリナは左右の操縦桿を握る。

「レオマスターっぽいこと、しちゃいますか!!」

\*\*\*

## その8

そして、現在。

『突撃だあ!』 もう一方が突っ込んで、ぐううっ!』

前衛のダークホーンを押し上げるように、レッドホーンの群れがなだれ込む。

もはや、特殊鉱物「ディオハルコン」の存在しない惑星Ziでは、この違いなど色ぐらいなものだ。

ダークホーンとレッドホーンをつばぜり合いは、互角。

『クソツ、小型ゾイド群は何を…!』

そして、それらに交じり、もつと恐ろしいものが迫っている。

レッドホーンに隠れ、イグアンが迫る。

『この距離なら装甲も意味ねえよなあ!』

どおん、と爆音が上がる。

ほぼ接射ならば、頑強なダークホーンでも小型ゾイドの火器は抜ける。

抜けさえすれば、あとはシステムフリーズだ。

『しゃおらー!! 次だ次!!』

『いやいや、2機しかないんだけどよお!?』

『他のも出ろや!!』

『ではここで私が』

レッドホーンに押されたダークホーン達に、次は惑星Z-1最悪の武器が叩き込まれる。

濃硫酸噴射砲。対人火器である。何を言っているのかわからないが。

そしてこれは、別名『ゾイドをダメにする兵器』である。

具体的に言えば、これのせいで電子機器が融けるのである。

『え…う、あ、さ、酸だー?!』

無論それ以外もだ。この兵器は対人火器であると同時に、装甲破壊用、電子機器破壊用ときわめて使い勝手のいい兵器なのだ。

環境汚染がー、という輩ももちろん溶かせる。今では中和技術もあるので試合でも使えるのだ。

さて、こんな状況で来るはずの小型ゾイドは、今何をしているのか？

\*\*\*

『虎の子のミサイルを、使わせるなんて!!』

孤軍奮闘状態のパンツァー隊、アーチャー隊、そしてカリンのいるFF隊の片方も、いまだ粘り続けていた。

『委員長！ 気づいているでありますかあ?!』

『何によ!』

いまだ私たちが無事なこの状況のこと?!』

と、あちこち焦げ跡の付くエレファンダーからのオティーリエの声に、メルヴィンは興奮気味に答える。

相手もなかなかのゾイドとゾイド操縦であり、なぜ粘れているのかが謎だ。

『デスザウラーもトラブルか、まだ来ていないであります!!』

合流は……!』

『うおあああああ?!?!』

『!?!』

と、近くで味方のハンマーロックが吹き飛び、スパークしながら動きを止める。

『アーチャー4、システムフリーズ!!!』

『カーター殿お!! せめてミサイルはもうちよい撃ってほしかったでありますよ!!』

『もらうからね、武装!! いいわよね!』

『ルール上ありだから早く!! デブ一人にかまうな!』





『来たのね!!』

そして、その隙間を縫い、見た目に反した速度と共に、丸い紳士達がやってくる。  
『安心したまえ!!』

我々が来た!!』

共和国重砲撃小型ゾイド、カノントータスが5機。

ヴォルケーノ隊が、爆炎を上げた敵の間からやってきた。

『着たあ!!! 780ミリ突撃榴弾砲おおっつ!!』

余裕の火力とはまさにこのこと!!』

『あまり褒めないでくれたまえよ?』

立派なカメだなんて、ねえ!!』

ズドン、ズドン、とこの場でも桁違いな大音響が響き、敵の周りや敵の避けた先の後ろにクレーターが出来上がる。

『カノントータス。』

それは、この惑星Ziにおいて、陸戦火力の王。

足が遅い。不格好。格闘ができない。

そんなデメリットなど、この威力!! それですべて帳消しにできる!!

くうく………ヒヤッハー!!! 共和国は最ツツ高だぜえええ!!!』

しかあし、と、その砲撃の合間に、一際強く走り出し、手ごろなブラックライモスを弾き飛ばす。

『このガイロス帝国重ゾイド!! 負けていられないであります!!』

言うねえ、という後ろからの通信に、テンションの上がった笑い声で返す。

『ほらほら、ガンブラスター!! 共和国ゾイドだろお!? 弾幕どうしたあ!!』

『別方向に撃ってるって!! 砂丘が邪魔ですよ!!』

『地形変えてやればいいんでありますよ!!!』

砲撃だ!! ここからは攻勢の時間だああああああ!!!

リナ殿は嫌いでしょうがパットンのやり方だああああああ!!!』

『地球ネタ、惑星Zii人、わからねえ!! 分かったか移民!!!』

徐々に、苦しい言葉よりも、軽口が飛び交うようになる。

余裕が、出てきた瞬間だ。

\*\*\*

「聞こえますか、全軍!!」

総番、エルさん!! エルフリーダ!! 他の者は!？」

ジエノリッターの中で、通信機に叫ぶツバキ。

しかし、周波数帯を調節しても、叩いても、反応はない。

これほど近くにいなながら、ノイズしか聞こえてこない。

「クツ……かくなる上は……!」

『——信号弾なんて、考えてませんよねえ?』

はっ、と突然通信機から響いた声に驚く。

『言つときますけど、逃げてでも追いかけますし、信号弾は撃ち落とすつもりですよお?』

できないはず! とか……言うつもりですかあ?』

おそらく、目の前のライガーゼロ。

そう理解したころには、目の前の相手をにらみつけていた。

「……チャフだけじゃない……電子的妨害装置で、こちらの通信のみを……!」

大型ゾイド、ましてライガーゼロの電力なら、このレベルならば……!」

『解説ご苦労様でえくすつ!』

いや、敵にもちゃあんと、頭の良い方がいてくれて、まあくうれしいですよ?

直感で突撃するようなバカばかりじゃあ、興ざめじゃないですかあ、いろいろ準備

したのに!』

極めて、不快な言動。

人を子バカにするための声、言葉、間、そう言った不快を煮詰めた言葉が、笑いが通

信機から流れる。

——ここまでは、まあ予想はできる。

「なぜ、気づいたのですか？」

この機体、確かに目立ちますとはいえ……我らの参謀の乗るものだ、と」と、ツバキは、簡潔に尋ねる。

『んん？ 知りたいですか——』

「もちろんツ!!」

そして、相手・の返答を待たずにジエノリッターを突撃させ、ドラグーン・シユターの刃を放つ。

薄いいエーガータイプの装甲、当たれば、真つ二つ。

キーン!!

——そして、バチバチという音を立て、そのライガーゼロから伸びた金色のブレードが、ドラグーン・シユターを受け止める。

!?!

ほう………小物の言動に似合わぬ腕です……!」

『小物で結構。』

「それでも、自分から全体を見て動いている奴と、命令に従うしかない忠実な兵士君達の違い位ッ!」

わかるッ!!

と叫ぶとともに、お互いが反発するよう後ろに飛び、着地する。

\*\*\*

「ふい〜……いやいや〜、でも名将とエースが同じっていうのも考え物ですよ〜?」  
頭を潰せば、全体の動きが止まる。

これは致命的ですよ〜♪ねえ?」

ライガーゼロを握る手に、汗をにじませながらも、余裕たつぷりに言うリナ。  
いや実際、今の一瞬で分かった。

(あ、この人、マジで強い……)

『そちらは、案外頭のいい人材、人望もある人材に恵まれているようで。

ゾイドはバラバラでちぐはぐ、魔改造しかないようですが』

嫌味まで一級品、と冷や汗交じりに思いつつ、慎重に歩を進める。

間合いが……相手のゾイドとの戦いには重要なのだ。

「ゾイドで判断するようじゃ二流ですよ〜?」

こっちは、デスザウラーを1機、確実にシステムフリーズさせてるんですからね!!」

まぐれですけどね、などとは死んでも言わない。

言葉は常に余裕に。相手に底を見せないように。

『驚きましたよ。ゲリラにやられた正規軍の気分です』

「あら、知ってますかあ〜？

かの中央大陸の覇者、ヘリック共和国は、ゲリラにおいても超一流!!

真正面から戦うだけの、そっちのガイロスだかゼネバス帝国とはわけが違うんです

よお？」

怒らせろ、少しでも冷静さを削れ。

もつと言葉を考えろ。自分の頭は、はつきりと動かせ。

『怖いものです。』

これは、ちゃんと叩き潰してあげないと』

相手が一步踏み込む。

威圧感が、桁違いだ。

「安心してください。」

ぶつ潰そうとしたその足に深く噛みついてあげますから♪」

勝てる確率は少ないなら………

徹底的に嫌がらせを、するのみ。

「では」

「勝負と、」

「行きますかツツ!!」

瞬間、二つの機体が大きく跳ね、爪が、剣が、激しく火花を散らす。

\*\*\*

『えええい!!! これしきの傷がなんだ!!』

『デスザウラーはまだ立っている!!』

『装甲はボロですが、荷電粒子砲は無事です!!』

『まだ戦えます!!』

ずうん、とボロボロのデスザウラーが2体、己が戦場を目指し歩く。

『来たあああ!!』

『デスザウラーが2体!!』



やったぜ、超重装甲の再生が追い付いていないッ!!』

その姿を見たC組の面々は、迎撃態勢を取る。

『装甲の隙間を狙うであります!!』

『私が、前に出る』

『ココロはまだ荷電粒子砲撃てます!!』

そして、温存していたゴジュラスが、満身創痍だがまだ動くバーサークフューラーが前に出る。

『おおっと!! 黄金砲は必要だろ!?!』

『……』

ガンブラスターも、まだいる。

『ほう、そろい踏みか!!』

『ならば、あいさつ代わりだ!!』

まだ使える荷電粒子砲を持つデスザウラーの背後、荷電粒子吸入ファンがうなりを上げる。

『来るでありますよお————ッッ!!』

『了解!!』





『お望みどおりにツ!!』

しかし、瞬間バーニアが激しく炎を吐き出し、マグネツサーシステムの光が強く輝いたかと思つた瞬間、横に消える。

『んなっ…!?!』

『ジェノブレイカーの真の原型機は、』

瞬間、姿勢をこちらに向けたその姿が、ザウラー系列機の象徴たる、荷電粒子砲発射態勢へ変化する。

『このジェノリッターだあああああああああああッツツ!!!!』

わずかなチャージ時間を許した一撃が、リナに、ライガーゼロ・クロムウエルに放たれる。

\*\*\*

——ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……ン……

ズドオン、と音を立て、煙を噴き上げあちこち焼け焦げ漏電する、それはそれは傷だらけのデスザウラーが崩れ落ちる。

『やった……!!』に、2機目……!!』

しかし、喜んだオティリーエの隣で、ドシンと崩れ落ちるような音が響く。バーサークフューラーが……カリンの乗るココロが倒れ、うめきながら震えていた。

『カリン殿ッ!?!』

『ごめんなさい……ココロ、まだシステムフリーズしてないけど……!』

『もういいであります!! カリン殿、ココロにシステムフリーズするよう命じてください!!』

無理強いをさせた。あとは、我々が……!』

と、オティリーエの言葉に、一瞬ためらいの声が通信機から聞こえる。

『……うん、ありがとう。』

ココロ、もういいんだよ……今日は、もうここまで……ここまで……!』

と、一瞬その言葉に反応するよう口を開け、

やがて、フン、と鼻息でも出すかのように、どしんとその頭を地面に落とした。

『……システム、フリーズです……!』

その言葉と共に、フェルディナンドの中から、静かに感謝をささげる。

『……委員長殿!! どうやらここからが我々の正念場のようにあります!!』

『知ってるわよ、何せ……!』

そして、すぐ横にいたハンマーロックが、敵を指さす。

『まだだあ……まだ私が立っている…!!』

そこには、装甲は穴と焼け焦げだらけ。

さしずめ傷だらけのデスザウラー、とでもいうべきものがいた。

『……ふははははっ……ここまで、追い詰められたのは初めてだ…!!』

だが、その足は力強く大地を踏みしめ、その眼光は、死を呼ぶ魔竜の名にふさわしい鋭さを保っている。

『総番!! まだ生き残りは数多くおります!!』

その足元には、あるいは満身創痕なダークホーン、そして、いまだ数多くのイグアン  
やブラックライモスがいる。

『相手もこちらも苦しいのなら!!』

『我らシュバルツ高等学校、シュバルツエス・シュトルムは引かず!!』

『その先に活路を見抜くのみです!!』

『指示を!! ここまで来て、引くとは言いますまいな!』

にやり、と口の端を曲げる。

『私には、引くとか負けるとかいう言葉が体に合わないからな。』

——全軍突撃だ。

突撃だ!! それ以外はするな!!!

デスザウラーが吠える。

そして、そのほかのゾイドたちも。

『ここが正念場よね!!!』

もう、ここまで来たら総当たりよ!!!』

『異論無し!!』

ただし!! 頭使って戦わないと、みな死ぬでありますからね!!』

了解、とC組の機体すべてのメンツが答える。

数は上。だが、相手は荷電粒子砲がないだけ、ボロボロなだけ。

ただそれだけの弱体化しかしていない、デスザウラーだ。

『『『行くぞおおおおおおおおおおおッッッ!!!』』』』

試合は、最後の段階へと入った。

## その9

ズドオン、という音と共に、砂を巻き上げて、ジェノリッターが落ちる。

「ぐッ……………!?!」

その体中に火花が散り、右足のマグネツサーシステムから爆発と黒煙が上がる。

(あの瞬間に……………!?!)

ジェノリッターの荷電粒子砲空中発射は、チャージの短い低威力ながら、ジェノブレイカーほどのブースター出力の無いがために姿勢を崩す結果となった。

だが、ツバキもゾイドの操縦に自信はある。

それでも地面に打ち付けられたのは、直前飛んできた光弾が右のバーニアを貫いたからだ。

(あの瞬間を正確に狙ったと……………!?!)

驚きだ。

射撃、砲撃特化クラスとは聞いていたが、そこまでの腕とは……………

—————  
グルルルルルル……………!



と、自分の乗るジェノリッターが、低く唸り声をあげる。気づけば、傷ついた右足で大地に強く踏み、いまだスパークする関節を痛めつけてでも、立ち上がる。

「どうしましたか？ まだ不服ですか？

もつと戦いたいのですか？

何の唸りなのかを答えなさい、ジェノリッター」

グワアアアア、と一つ唸り声をあげ、いまだ砂煙の上がる位置を見る。

——ズシン、と煙をかき分け、

あちこち焦げ付いたように汚れた、しかしいまだ輝く金色の爪が大地を踏みしめる。

ぬつ、と右のブレードアンテナの折れた顔が出てくる。

そのまま、壊れた片肺のアタックブースターをパーズしながら、ゆつくりと歩みこちらに近づく。

『——いやあ、死ぬかと思いましたがよ……まったく』

プルプルと、全身の砂でも落とすように体を震わせ、ライガーゼロ・クロムウエルが一つ吠える。

チツ、と思わず舌打ちする。

はしたない、と口元を抑えてしまう。

「そのままシステムフリーズしていれば、こちらは無駄な労力を使わずに済んだのです  
が」

『こつちだつてちゃんと狙い通り足の付け根を打ち抜いてれば、一発で道連れにできた  
のに！』

フン、と鼻で笑う。

嘲るのではない。これは安心だ。

バーニアに当たつて、まだ運が良かったという事なのだ。

『ま、過ぎた話はおいておきましょうか。』

それで、その言い方だとまだ戦いを続けるつもりですかあ？』

「当然」

と、壊れた右足を踏み出し、答える。

まだジェノリッターは動ける。

バーニアの損傷など、愛機は気にも留めていない。

\*\*\*

「ちえーっ！」

機動力がお互い落ちや、アドヴァンテージなんてなしじゃないですか？」

などと口には出すが、実はリナにはまだ余裕がある。

幸いなことに、犠牲になったのはたかが片肺のアタックブースターにセンサー一基。バランスが左寄り程度になったぐらいだ……なんて軽微なんだ！

(まだ動ける。)

相手の足がつぶれたのなら……ようやく勝利ができる……!!) にい、笑ってしまいうりナ。

——とても、これからまともな戦いをしようという顔ではない。

知っている人間は、こう称する。

またりナが何かたくらんでいる。

「ここまで来て、他の人間にかまう余裕はなし。

付き合っていたいただきますよ？

貴女には、ここで果てていただきます」

「どーぞ、どーぞ!!」

その代わり、そっちも地獄の道連れですから〜♪

仲良くいきましようよ〜?」



その足は、後ろへ向かい、じりじり下がっていく。

『フォートレス及びアーチャーの皆さま!! 交代であります!!』

と、前に出てきたエレファンダーから、オティリーエの通信が入る。

そして、ガンブラスターの砲撃とカノントータスの砲撃が始まり、他のレッドホーンやハンマーロック達が後ろへ下がる。

『チツ……こんなのただの我慢比べじゃねーか!!』

『そうよ!!』

無理やり突っ込んでくる相手には、本気の我慢比べが苦手なのよ!!

見なさい!! はやる気持ちを持った人間から……!!』

今、こちらの砲撃によって、2体のゾイドが吹き飛んだ。

『うお……?!』

『ほらね!! さすがにリナの指示の通りなのは不気味だけど、

それでも、この守りに全力を注いだ陣形なら、勝機はある!!』

さあ、休憩よ、と無理にクレイエのレッドホーンを後ろに追いやる。

\*\*\*

「ぐうううう、何なのだこの異常なまでの硬さはああああ……!!」

エルフリーダは、見てわかる程苛立ちを募らせていた。

なんだ、この異常なまでの硬さは。

こちらにもダークホーンはいる。荷電粒子砲がないだけで、自分のデスザウラーも健在だ。

しかし、攻めきれない。

抵抗？ 火力一点集中？ いや、自分の語力に該当する物はない。

だが、感覚で言うならそう、

まるで、デスザウラー3機分の装甲を、素手で殴っているかのような、圧倒的硬さ。

「うが——っつ！！

もつと突っ込めばいいのだ、どうせ!!!」

硬いのがどうした！

蹂躪してやればいい、とにかくそう思い、一層足を速くする。

『うわ、またこのデスザウラー突っ込んで来ようとしている!?!』

『超重装甲がだいぶ傷んでるのに、まだ突っ込めるのか!?!』

さすがに、恐怖を覚える。

愚直すぎて、その愚直な行動に翻弄される自分たちがいて。

『落ち着けええええええええええッッ!!!』

落ち着きなさい!! とにかく守りを固めなさい!!』

『了解!!』

しかし、ここで行動を変えてもだめだ。

散り散りになった瞬間、各個撃破がオチだ。

\*\*\*

『ぐわあッ!?!』

『総番、すみません…!!』

「気にするな!! 相手がなんだか硬いだけなのだ!!」

しかし、とエルフリーダのデスザウラーは、より早く、相手への距離を縮めようと動く。

「すぐに、この硬さを何とかしてやる!!」

「この身、この魂、砕け散るまで突撃だ!!」

『総番…!!』

『どこまでも、ついていきます!!』

\*\*\*

『クツ……弾幕薄いわよ!! まだまだ守りなさい!!』

『突っ込め——ツツ!!!』

両者、いまだ譲らず。

\*\*\*

そして、ここでも譲らない戦いがあつた。

『ストライクレーザークロオオオオオオオオツツ!!!』

『切り裂けドラグーン・シユタアアアルウウウウウツツ!!!』

金色に輝く爪と、白銀に光る剣とがまじりあう。

拮抗を破つたのは、リナのクロムウエル。

『——ほいつ、』

『!?!』

ぶつかつた瞬間、気が抜けるような感覚で、当てたストライクレーザークロウをそらす。

一瞬間の間、瞬間、

『とおつ!!』

跳ね上がった右のブレードが、ドラグーン・シユタールの真横からぶち当てられ、びきつ、と嫌な音が響く。



しまった、と思つた瞬間、着地と共に駆け出す要領で、後ろ脚のストライクレーザークローが煌く。

『きやあああああああああああ?!?!』

バキーン、と片方のドラグーン・シユタールが折れる。

『よおしっっ!!』

ずぎぎ、とドリフトする勢いで、ドラグーン・シユタールを折ろうとした衝撃で壊れたブレードをパージする。

残りは、アタックブースターともども残る左側だけだ。

『ッ、調子に……!!』

しかし、瞬間相手は足のアンカーが下り、荷電粒子砲発射形態となる。

『乗ってやりますともッ!!』

瞬間、残つたブースターを起動し、一門だけのパルスレーザー砲を撃ちながら近づくクロムウエル。

『ぐうう……ですが、ここでッ!!』

しかし、あと少し、の所で、最低発射チャージが終わる。

(当たる……!!)

(当てるっ!!)

眼前に迫るライガーゼロ・クロムウエルと、発射態勢を負えるジェノリッター。

瞬間、ライガーゼロのブレードが、横に展開される。

だが、その基部を貫くように、荷電粒子砲が放たれた。

クロムウエルの左側の神に等しい空力カウルが融け、しかし、本体に届く前に装甲をすべてパージし回避し、

瞬間、ジェノリッターの損傷した右足に、点火したままだったアタックブースターが直撃する。

「ぐっ!!」

右足に、ミサイル同然の速度で叩き込まれた物体の衝撃はすさまじく、バーニアだけではない、確実に各坐するほどの衝撃だった。

ばきやあん、と音を立て、崩れ落ちるジェノリッター。

システムフリーズではないだけ、むしろ幸運なのだろうか？

これでは、荷電粒子砲は撃てず、格闘戦も満足にできない。

『……うわあ、ぎ、ギリギリ……!!』

通信機から、相手の本音が少し聞こえた。

相手もひどいものだ……左側の空力カウルのような装甲は、すべて消えている。

『……だが……!!』

『ま、五体満足、つてとこ、ですよねえ〜?』  
にひひ、と笑いながら、相手は近づく。

『クツ……まだ、まだ……!』

残ったドラグーン・シユタールを構え、しかし、動かない足には力はいれられない。  
『ふう……やめなさいつて……さすがにこれ以上ゾイドをいたぶるのは本当は趣味じゃないんですから。』

機械の体、治せるとはいえ……そのジエノ君を無理はさせないでくださいよ』  
『残念ながら、その言葉をうのみにはできない!!』

ドラグーン・シユタールの切っ先を向け、ジエノリッターと共にリナを睨む。

『………はいはい、騎士道騎士道。』

………あきれれる程、まっすぐな感じで………』

と、その瞬間、

ライガーゼロが、一際呑気に伸びたかと思えば、腹ばいになってだらけたように手足を伸ばす。

『………!?!』

それは、戦闘意欲をなくしたような。

いや、完全に戦闘意欲のない状態だ。

『コンバットシステムを、切った!?』

その目の前で、コックピットが開き、一人の少女が出てくる。

「——おい!!」

そのまっすぐすぎな——! あきれるほどの騎士道に免じて——!!

紅茶でもどうですか—— つ!!」

\*\*\*

渡されたカップには、柑橘のような独特の香りが漂う。

程よい独特な香りはアールグレイ。

コロン、と音を立てた氷で冷やされた、アイスティー。

「……なんで、こんなことを?」

一口、香りと共に紅茶をいただき、改めて尋ねる。

「こちらの戦術目標は達成済みですし、

何より、敵とはいえ学生同士、他校の参謀には興味ありますとも」

相手も、この香りを逃がさないよう相当努力したアイスティーを飲みながら、そうあっけんからんと答える。

「リナソレーネさんと言いましたね?」

卑怯者で変わった人間……なのに、紅茶はなかなか美味しいです」

「英国人は、お菓子と紅茶で失敗はしません。

ほとんど惑星Ziの人間と同化しても、紅茶にかける力だけは抜きませんよ？」  
なるほど、とうなずく。

日系とはいえ、地球移民。

流れる血の性は、理解ができる。

「……どちらが勝つと思います？」

そして、ふと、そんな質問を、ツバキは投げかけてしまっていた。

「……そーですねー……分かりませんね、結構真面目に」

相手は、当然そちらと答えると思いきや……なんと、自分と同じ答えを出した。

『こちらパンツァー3、もう駄目だー!!』

『総番、本当にすみません、うわあ!?!』

通信機は、復旧していた。

『駄目よ！ まだ耐えるの!!』

『突っ込め!! 片腕ぐらいなんだ!!』

ノイズ交じりに聞こえる戦況は、どちらも苦しい物だった。

「……………そちらの硬さに、こちらの突破力が追いついていないようです。

なんてキチガイじみた防御戦術だ」

「私自身、防御型な思想な物です」。

でも、それにかまわず突つ込むそちらは……………正しいけど、バカじゃないですか？」

「ええまあ」

ふふふふ、とお互い笑ってしまふ。

「……………改善点は見つけられた。十分です」

「こちらでも……………敗北しても、まだ得られるものがあるだけマシ、でしょうね」

「まあ、負けませんが」

「こちらこそ」

もう一杯、香りの強いアールグレイをいただく。

砂漠の太陽の下、それはとてもおいしく感じられた。

「いい戦いだった。結果は散々ですが」

二人は、その戦いをそう言い表した。

——気が付けば、放火は止んでいた。

『バトル、オールオーバー!!』

バトル、オールオーバー!!!

ウイナー……!!』

ジャツジマンの、判定が響く。

## その10

——ズドオン……!!

その音は、ゴジュラスの右手の吹き飛ぶ音。

『ぐっ……やはり、デスザウラーは……強い、か……!!』

ドシン、と音を立て、C組最重量のゾイドが落ちる。

『ふ……当たり前だ……デスザウラーは、最強の……』

そのゴジュラスを倒したゾイドは、死を呼ぶ魔竜デスザウラー。

だが、その姿は……あまりにも、痛々しい物だった。

前面にあった装甲は、見る影もないほどにえぐれ、フレームにも損傷が見える。

頭など、機銃は折れ、装甲はすべてが剥がされている。

さしずめそれは、そびえたつ屍。



事実、コアが無事なだけで、コンバットシステムは完全に機能を停止している。もう、この戦場で動くことも、鳴くこともない、死を呼ぶ魔竜。

しかし、その足元には、敵、味方、それらの入り乱れた屍とでもいうべきゾイドたちが散らばっていた。

激戦だったのだ。

守った。突撃した。陣を構築し、入り乱れ、撃ち合い、殴り合い……

そうしてできた、ゾイドたちの墓場。

残されたものは、沈黙。

砂漠の太陽の元、無数の戦闘機獣が何一つ言わず、ただただ倒れ込む。

もはや、両陣営に生き残りなどいない。

誰もかれもが、疲れ、倒れきっている。

この戦いに、勝者はいない。

——ボコッ！

土が盛り上がり、ひよっこりと顔を出す、蛇の頭。

プテラスと共通のコックピットを四方に向け、もう、敵も味方もいないことを確認する。

『……ふいー、こりや戦場は地獄だったんだろうねえ？』

大人しく土の中にいて正解だー！』

ステルスバイパー。

スカウター3、セドウーサの乗るゾイドだ。

偵察に徹していたからなのか、いやずつと土の中にいたからなのだろうか、

そう……

バイパーが一機、生き残った。

『バトル、オールオーバー!!』

バトル、オールオーバー!!!

ウイナー……!』

ミューズ学園、C組!!!』

パンツ!! —— いよっしやあああああああああああッ!!!!

途端、C組の機体すべてのハッチが内側から蹴破られるように解放され、大きな歓声が沸き上がる。

「んなッ!？」

ふざけるな貴様ら——ツツ!!!

そんな勝利ッ、意味があるのか!?!」

たまらず、浮かぶ廃墟同然のデスザウラーのコックピットから、怒り心頭の様子のエルフリーダが出てきた。

「あなたの言う事にも一理あるわね!! 確かに、納得はできない面もあるわ。

けど!!! 勘違いしないでほしいわツツ!!」

ダンッ、とハンマーロックが『イテッ!?!』とでも言わんばかりにうめく勢いで足を縁にかけ、腕を組んだメルヴィンが得意げな顔を見せる。

「このルールは殲滅戦ツ!!」

追加で陣地をとるのもあるとはいええ、結局『先に全機システムフリーズした方が負け』よツ!!

一機でも、生き残り、他全てを道ずれにすれば、

ちやああと、こちらの勝ちなのよ!!!」

よっ、委員長! という声を皮切りに、その身もふたもない事実を肯定するヤジが飛

ぶ。

「んなあ?!」

ぐうううう……ルール上正しいだけに反論できないではないかああああ……?!」

対し、エルフリーダは、こぶしを握り締め、何処にどう発散させるべきかわからない怒りに震えていく。

「貴様らあ?!」それで恥ずかしくないのかあ!!」

とうとう、シュバルツェス・シユトルムの生徒が、ヘルメットや帽子を投げて憤りの言葉を投げつけ始めた。

「ここにはいない参謀の言葉を借りれば!!」

対し、C組のメンツは、笑って胸を張る。

『勝てば官軍、負ければ賊軍!!』

虚しかろうが、何だろうが、勝利しなけりやすべてが無意味!!

勝てばよからうなのだあ——つっ!!』

この卑怯者どもめー! 鬼ー、ケダモノー! やんのかコラー! スツゾコラー!

始まるは、ゾイドを置いてけぼりの大乱闘。ただの子供の喧嘩である。

『はーっはっは!!』元気があってよろしい!!

しかあし、もうすでに決定はついている!!

青春まつさかりな喧嘩は、遺恨が残らない程度で、ほどほどに止めておきたまえ!!!  
「ジャツジマンがそう全通信機とスピーカーカーに流すものの、大体血気盛んな組がもう、笑いながら殴るような状態である。」

「ええええええええええいッッ!!!」

シユバルツエス・シユトルム総員ッッ!!!

これ以上、みつともない真似はやめるオオオオオオオオオオッッ!!!」

びしやり、とエルフリーダの怒号が響く。

『ハッ!! 失礼いたしましたッ!!』

途端、シユバルツエス・シユトルム側全員の姿勢が改まり、胸の前に片手を添える(。・

ω・)ゞの形となる。

「……ほら、C組の全員も引きなさい!!」

勝つて浮かれるのはここまでよ!!」

ちえー、とでもいう顔も多いが、追加できたメルヴィンの言葉に、しぶしぶC組の面々も下がる。

そして、二人の指揮官は、改めて向き直る。

その視線は、二人ともまつすぐ射抜くようなものだ。

「ふむ。負けは負けだ!!」

諸君に舐めさせられた辛酸の思い、当分は忘れはしまい。

次も、当然受けてはくれるだろう?」

エルフリーダは、そう言葉を紡ぎ、小さき相手に対し高みから言い放つ。

次——その言葉に、実は胸が少し高鳴っていた。

「こちらもね、本当は戦略的大敗なのよ。

3割の損害で全滅、この時点で勝つたとは思えなくなつたわ。

次もやってくれるのね? うれしい限りよ」

対し、下から相手を見据え、いつでも撃てるとも言いたいような余裕の表情——

実際はかなり冷や汗を流している——で答えるメルヴィン。

「メルヴィンと言つたな!」

その名前、ミューズ学園C組の名は心に刻んだ!!

また会いまみえようぞ」

「こちらこそ。

次は、完全で完璧な勝利を目指すわ」

フツ、とお互いが笑う。

目標（是が非でも倒したい『敵』）が、目の前に現れたから、

お互いを、好敵手と認めたからだ。

『よろしい！』

これにて、ゾイドバトルを閉幕とする!!

次のバトルも!! 楽しみにしてくれっ!!』

それでは、とジャツジマンの乗る大気圏突入ポッドが閉まる。

再び、ロケットエンジンが起動し、ジャツジマンは空へと帰っていった。

本当に、終わりだ。

\*\*\*

さて、ここです。

バトルにおいて各坐したり、足が壊れたりしたゾイドはどうなるかを説明しよう。

ゾイドバトル原則第3条第2項

「バトルにおいて行動不能になった、あるいはシステムフリーズしたゾイドは、専用の整備改修班の手によって応急修理の後、各チームの母艦やピットに戻り、速やかに本格修理を受けること」

補足

「その専門班は、ゾイドバトル連盟に加盟している専門チームでなくとも、資格と申請さえあれば各チームの所属であっても構わない」

『オーライ！ オーライ！ そこ、止まって!!』

ミュージズ学園D組は、別名「縁の下の力持ち」「学校のアイドル」。

ゾイドを含めた整備、整地や建設、輸送を専門に習う組の面々は、他の組のバトルの際はこうして地味に活躍をしている。

『アツコー！ ワークトータスのワイヤーもつと上!!』

『あいよー!』

カノントータスの、ある意味本来の姿である、クレーン作業用ゾイド「ワークトータス」につりさげられた補強用パーツ。

その位置を修正し、腕につけられた溶接用の特殊機器で溶接するのは、『五感と頭脳を兼ね備えた特殊工作メカ』の名を持つ歩兵用24ゾイド「ゴーレム」。

『バリ子ー、溶接用の機器限界でしょ？ 代わり持つてきたー!』

『あながとー!』

同じく24ゾイド『シヨットウオーカー』が、クモらしい足を動かし、機銃の代わりにつけて持つてきた特殊機器をゴーレムに渡す。

『ここを……ちよい、ちよい……と!!』

その場所の基盤の修復を終え、ゴーレムは離れる。

『はい、ジェノ君一機応急修理完了ー!』

と、その言葉と共に、ジェノリッターは立ち上がり、一つ吠える。



『いや、大した回復力だなく君！ さすがは天下のジェノ系列！』

ガン、と小突いたジェノリッターが、一瞬「壊すぞ？」という視線を送る。

『バリ子ー！』

終わったらさつさとこつちのページしたCASの回収手伝ってよお!!』

と、周りのゴーレムや虫型ゾイドの『バラツツ』達が、リナのまき散らしたCASを回収している中、一体が作業を終えたゴーレムを呼んだ。

『ええええええ?!?! それもやるのおおお?!?!』

『当たり前でしょ!! あたしら裏方、縁の下のパワーファイター!!』

あるいは、幕裏のファンタステック・テクニクなのよ!!』

『言いたい意味は分かるけどさあ〜……はあ、ジェノ君フル整備の方が燃える〜……』

『帝国ゾイド整備なんて、それでこそ地獄でしょうに』

『あつち楽しい地獄なの〜！ ややこしくってクソみたいで、でも伝統工芸品などころがいとおしいのー!!』

『共和国のブロック工法多用の方がマシだつて！ 部品流用物凄く楽し』

『はあ!?! つたく、わかってないなあ〜?!』

そんなことないよー、と言いつつ、そのゴーレムがCASの散らばる場所へと向かっていく。

そんなゴーレムをひとしきり見たジェノリッターは、己の主と、その横にいる敵だった人間に視線を移す。

\*\*\*

「……これまでにない酷い勝利おめでとうございます。

虚しいですまない、ここまでの結果で恥ずかしいとは思わないのですか？」

「恥ずかしいですよ、だって敵の『殲滅』に対して、こつちまで『壊滅』ですから」

腹ばいにグルルと鳴くライガーゼロ、ことクロムウエルの影、砂漠にできた日陰で、二人は紅茶を飲んでいた。

優雅なティータイムだ。

「その口ぶりだと、『全滅』で済ませる気でしたようですね？」

「自信過剰もいい加減にした方がいいですよ？」

無論の事、こちらはほぼ無傷で相手を殲滅。

そーれーが、第一目標です♪」

「どつちが自信過剰ですか」

「確かに」

と、リナは静かにクロムウエルの顔を見る。

「まだまだ、こちらは戦力も戦術も、未熟ですわねえ……」

今回は、代償が大きいとはいえ、いい勉強にはなりました」

その横顔が、いつもの余裕たっぷりの笑みではなく、真剣な引き締まりを形作る。

「……言っておきますが、そのセリフは私の物です」

そのリナを追うように、ツバキが言葉を放つ。

「この編成、この物量、それで負けた。」

代償が大きい。それでも、改善点はすべて見えた」

「……」

聞きながら、リナも口の端を曲げる。

「……次、いつやりたいですか？」

「……ほう？　心が折れるほど謙虚ではないですか」

クルリ、とリナはツバキと向き直る。

「次は負けない」

「覚えていなさい」

「ぶっ潰してやる!!　完膚なきまでに!!」

ふっ、と飲み終わったカップをリナに投げる。

キヤッチしたリナも、笑みをこぼす。

「次はきちんと偵察しなければ、こちらはいけないみたいですけどね。」

事前情報なしでデスザウラー3機は、正直キツイでしたよ」

「どうぞ？　情報は漏らさないよう気を付けていますし。」

「こちらは戦法を変えるつもりはありません。」

もつと早く、そちらの防御を抜く。私共の総番もそれしかできないですし」

「それが厄介なんですけどねー。嗅覚のいいバカは怖い」

「扱い注意ですが」

ふふ、と笑う。

「なんだか、妙に馬の合う相手だと。」

「じゃ、そろそろ行きましようか」

「ええ。今日の反省会は長そうですね」

「同じく」

「ではまた、次に戦うときにでも。えっと……？」

「ツバキ・クロガネです。ツバキで結構」

「そういえばあなたは？」

「リナソレーネ・アシユワース。地球移民同士、名前でもいいですよ？」

「覚えておきましょうか、リナ」

「こちらこそ♪」

そうして、二人は別れた。

そして、バトルが完全に終わった。

\*\*\*

一方、観戦席代わりの一角で

「以上の観戦で分かったと思うが、陣形には今でも意味がある。ここがわからず突撃するとただ死ぬだけだが、先ほど敵の行った戦闘を硬く強力なゾイドに、そこからピラミッドないし弾丸のような形で構成する『弾丸陣』は、単純だが攻撃向きであり、お前らが完璧に陣形を覚えればたとえ格闘特化のクラスでも——」

「(((((((ば、バトルが終わったのに、授業が終わらない!!!))))))」

密かに、もう一つの戦いが繰り広げられていたのは、授業を受けた物しか知らない。

## 閑話休題：生徒会長のイオナ

### 前編です!

季節は、春の終わり、夏の始まり。

とはいう物の、赤道直下の北エウロペ大陸は、毎度毎度の摂氏30度越えである。ここ、グラム湖のすぐ近くのミューズ森林地帯は、まだマシとはいえ気温は高い。さて、この時期とは、地球でもおなじみなアレが学生に襲い掛かる。

それこそ、春の終わりの悪夢。

またの名を、中間考査。

ミューズ学園は、通常の学業である、中央大陸標準語、数学Ⅰ、ガイロス帝国標準語、社会、物理、ゾイド基礎操縦技術、基礎整備技術の6つと、家庭科を履修したうえで、各クラスごとの専門のカリキュラムのテストがある。

A組は『ゾイド公式戦基礎Ⅰ』、『基礎戦術理論』、B組は上に加え『ブロックス基礎構

造』と少ない——しかし内容がかなり難しい上に覚えにくい——が、他の組は本当の意味で地獄のカリキュラムがある。

C組は、通常の数学Ⅰだけでなく、『数学Ⅱ、及びⅢ』までみっちりやらされた後、『戦術と指揮基礎』『戦略基礎』と、文系を殺す、バカは確実に殺すかのような内容が続く、ついでに作戦立案上必要な『地理』もやらされる。

D組は、『電気基礎』『機械工学』『設計基礎』『電子回路』等のすさまじいまでの専門教科が続く、

E組は、『通信技術』『プログラム基礎』『プログラム応用』と、こちらも文系を殺す内容が続く。

F組も、C組の内容と共に、『航空力学』や『空戦戦術基礎』、さらに『航空機免許』までやらされて、中間の内にミューズ学園の敷地外の惑星Zi上の空を飛べる免許まで取られる。

凡人は死ぬ。ここで果えていただく。

そう、言われているに等しい。

そして、N組などは、C、F組の授業も全部やらされた上で、『海戦戦略基礎』『海上戦術基礎』と、優等生どまりもすらも死ぬと言わんばかりの内容のオンパレードである。

試験の帰還は5日間。そのうち4日間でこれらの内容をみっちりやらされる。

しかし、本当の地獄は、脳が疲弊しきった後の、5日目。  
その日は、実技試験。

要するに、紅白に分かれての全校ゾイドバトル。

別名『春の終わり砲火後作戦』。などと誰かが言ったらしい。

\*\*\*

試験期間4日目、午前12時30分、少し早い昼の放課後。

この周囲のゾイド用周波数帯、そして校内放送に、明るいBGMが鳴り響く。

『はあい！ ミューズ学園のみんなあ!!』

つらない試験中のお昼だけど、ちゃんとご飯食べてるう!?

え、私? ダイエットしてたのに、イライラして甘いもの食べちゃうんだよね……

そんな私こと、E組委員長兼放送委員なDJサオリンちゃんによるう?

ミューズ学園お昼の放送、つまりは『ミューラジ』! 今日も元気に行こうか!!』

流れるのは、この学校らしさのかけらもない放送。もはやラジオ番組。

これぞ、始まって数か月ですっかりおなじみのお昼の放送である。



『てかさー、みんなどうよ？ 私の所もかなり教科多いけどさー、A組とかB組は無事？ やっぱり難しい？』

私はもう、平均点より+5を目指すとかいう意識微妙に高い感じに頑張ったけどさー、難しいよやっぱり。

特にフィリア先生の家庭科問題、アレ地味に難しいんだよね。

お料理できればいいかなー、みたいな感じにはいかないね!! 鬼畜先せ——ああ、やっぱり何でもなーい!!! 私死にたくなーい!』

そんなラジオじみた放送を、あるゾイドの通信機がとらえていた。

ガシン、ガシン、と一歩一歩踏みしめるよう森の中の道を歩き、長い首を学校の本校舎に向ける。

大型ゾイドだ。ゴジュラスと同等の大きさの。

フレームむき出し、と言っても差し支えない首長竜型ゾイド、

その名は『ビガザウロ』。

惑星Zi初期の大型ゾイドであり、今では生きた化石ともいえる程古いゾイドだ。

いや、生きた化石という表現は、少々語弊がある。

確かに一時期、見ることもなくなったゾイドだが、ある理由により現在も、『Mk-II』として活躍している。

この機体も、上部にガンスナイパーなどに使われる『ワイルドウィーゼルユニット』が鎮座し、その貧弱に見える足も、よく見れば踵にブースターかスクリューのように見えるものが付いている。

尾部の関節部分から、ミサイルポッドらしいものが連なっているその姿は、まだまだ現役と言わせる気迫すら漂う。

この機体こそ、ビガザウロMk-II。

ある理由により復活した、巨大ゾイドの始祖。

「あわわわ、やめてビガ君!? あう、それ大事な書類、あ、そこ届かない、

もう!! 首振っちゃダメ——ツツ!!」

その、ゆったりとした広いコックピットの中、キャノピーへお尻を向けるはしたない格好で、歩くたび動く首の影響で散らばったプリント達と悪戦苦闘する女学生がいた。

短いショートカットの髪の下から、柔らかな顔をいかにも慌てたように表情を作る彼女は、まあ美人だがどちらかと言えばかわいいタイプだ。

もしもこのビガザウロのキャノピーをのぞき込む不届き者がいれば、きつと彼女のスカートから除くお尻と、ピンク色のパンツが見られるだろう。

その覗こうとした君、ビガザウロの顔の脇にはマクサー30ミリビーム砲があると  
いう事だけは覚えておきたまえ。

「ううう、クリップ、クリップ……つとー！」

ようやく広いコックピットでプリントすべてを集め終わる。

えへへー、と安堵のかわいらしい笑みを浮かべ、今度は飛ばないよう書類をうまく固定し、操縦席にきちんと座る。

「もおー！ ビガ君!! 水平だったからいいけど、首を振らないのー！」

そう、この巨大な首の主にはほほを膨らませて言うが、ビガザウロは相変わらずゆつたり首を動かしながら歩いていた。

「……マイペースさんだなあ……はあ……」

はあ、と彼女は言いながら、無線機から流れる学校放送に耳を傾ける。

『さて、前置き長くなっちゃったけどねー、今日は私、西校舎の屋上でミュージ、お届  
けしてるよー！』

西校舎と言えば、最近はあるクラブ活動の本拠地となっちゃってるよね？  
そうだよ、そこにお邪魔してるよ〜!」

「あ、もう始まつちやつてる!？」

「まずい、と彼女は焦る。

何せ、『そのクラブ』は、自分から見て右わきにあるケースに入った物がなければ、今日の活動ができない。

「ビガ君、急いで!!」

「幸い、西校舎は近くだ。

しかし、歩みが遅いビガザウロが間に合うか？」

\*\*\*

「みんなも知ってる、妙な趣向家達!!」

長い髪を三つ編みのようにし、あえて首に巻くという謎めいた髪型と、実はドが入っていない大きなフレームのオシャレ眼鏡。

そんな見た目の彼女が、DJサオリンだ。

「コーヒーとか炭酸とかじゃ、満足できない!!」

「そう、彼女らこそ、ミューズ学園『紅茶研究部』だー!!」

そして、常日頃からのハイテンションその物で語るDJサオリンの身振り手振りの先に、彼女ら、あるいは彼らがいた。

「二人目！ 『荒獅子の姫のバトル後はアイステイ！』 こと、A組委員長にして地球移民4世のアリシア・チャンプ！」

ふん、と髪をかき上げる優雅なしぐさで、アリシアが答える。  
忘れられてそうだが、彼女も地球移民だ。

「二人目！ 『実はコーヒーが飲めない気弱の強面』 こと、B組のエース、また地球移民かよ、東方大陸出のユウジ・イツカ!!」

ギロリ、と睨むような顔を向ける、確かに人を殺してそうな暗い視線だが割と整った顔の少年がいる。

だが、この場誰もがそれを「あ、緊張してるんだ」と理解される彼が、ユウジ・イツカだ。

「三人目!! 『ライジャーとかいうマイナーゾイドのエース』 こと、C組、地底族のヒル

デガルド・ターレス!!」

「今、ライジャーが地味と言ったかな? 小一時間ほど話があるのだが?」

と、ヒルダは額に青筋を浮かべ、努めて笑顔を作りそう怒りをあらわにする。

「次が四人目! お前何してんだよ、と『ウチの組のマスコツト』のオラージュちゃん!」  
「何をしてるって、紅茶愛好家だからじゃないんですか……?」

と、小柄な体の愛くるしい少女の、オラージュという女生徒が苦笑で答える。

ちなみに、地底族の血が入っているのか、髪の色がオレンジ色をしている。

「五人目は、すっごいイケメンだね!」

『制空権の覇者』ことF組参謀のレキ・バスタール君! 火族だっけ!」

ふ、とサングラス越しでもわかるほど美しい顔の長身の少年が笑う。

それだけで、大体の女は落ちそうだ。現にDJサオリンもキヤー、と黄色い声を上げる。

「そして、この集まりの中心人物その1!」

地球の文化好きは分かるけど、まさかその地球ですらはるか大昔の国の文化が大好き

すぎるってのも変人だよね!!

そんな自他ともに認める変人は、地味に校内美少女ランキング5位以内のすごい子!

つーか、スペック高杉!! どういう事なんだ説明しろ!!

そんな女の子こそ、

「説明が長——い!!

30分の内もう、6分使ってますけど、大丈夫なんですかあ?」

と、最後の一人こと、リナが自分の説明をさえぎって声を上げた。

「えー、いいじゃーん、『性格以外100点満点美少女』のリナソレーネ・アシユワース  
ちゃーん!」

「はいはい、ダイアナ・ジェライト・サオリンさん。

どうせ私い、腹の中に茶渋ため込んでますし〜?」

「フルネーム禁止!! DJサオリンで通ってるんだから!!」

「ダイアナって名前が一番似合わない顔ですしねー」

「一言多いー!」

このやり取りだけで、学校中の人間が笑っていた。

「お嬢さんたち!

そろそろ話を進めてはどうだろうか?」

と、レキの一言に、おっとと、とDJサオリンは話を戻す。

「そうだよね、さすが誰かより性格いいね〜♪ 今度デートしようってのはおいておいて、

で、リナちゃん、今日の紅茶はー?」

「言い方だけでダメ出しして追い出してやりたいですけど、そうしたら掲示板であることないこと書かれそうですし、

とは、いう物の、

しかし、実はまだ出せないんですよ」

はいー?という落胆の声を上げる相手に、案外素直に申し訳なさそうな顔をするリナ。

「実は、茶葉が到着していないんですよ。」

お湯はこの通り最適で、水も軟水の質のいいやつはそろえたんですけれどもね」

「なんでだよ〜! 一番重要な物を、」

それは、と言おうとした瞬間、この場の人間すべての頭上に、巨大な影が落ちる。

『!?!』



全員が、真上を見上げる。

そこには、丸みを帯びつつも空力を考えたような『頭』があった。その頭を、長い首が支えていた。

『みなさああああん!!』

遅れちゃいましたあああああああつ!!』

そして、搭載スピーカーから響く声。

その場全員が、その声を聴いた瞬間、意味は同じ別の言葉を発し始める。

「会長?!」「え?会長?!」「部長……!!」「イオナ様?!」「生徒会長!!」「イオナ会長?!」

そして、最後の一人が叫ぶ。

「イオナさああああん!!!」 お待ちしてましたあああああつ!!!」

リナの言葉に、そのビガザウロがコックピットのキャノピーを開き、中から一人のかわいらしい女生徒が現れる。

「必要書類はすべて終えてきました!! 明日の編成も全部全部!!」

今日は存分に、ティータイムです!! 夕方までお出かけもできちゃいます!!  
俗に、ドヤ顔と言われる顔を見せる彼女、

そう、この学園の生徒会長こと、『イオナ』その人だった。

\*\*\*

「さてまあ、ラジオもなんだか半分切っちゃってるけど……

ベタ塗にベタに聞こうか、この紅茶は何かな!?!」

と、マイクを片手に、そう尋ねるDJサオリン。

「その説明、『地球の紅茶市場掌握者』こと英国の血を引く私が説明しますか!?!」

「そ、それとも! 『中央大陸の紅茶は制覇した』こと、私が言いますか!?!」

と、謎のポーズと共に、リナと若干顔の赤いイオナが我こそは、と声を上げる。

「二人ともお、今これがライブ映像だったら、と思える程キマってるよお?」

対し、DJサオリンは笑いをこらえきれない。

というより、周りも微笑ましい、や可愛い、という視線を送っていた。

「あああああああああああ?!?!?!」

「イオナさん、言っておきますけど、打ち合わせ無しで合わせてきたのはあなたですから

ね〜?」

「リナちゃん酷いです!! ここは合わせるべきだつて感じだつたじゃないですか、もう!!」

すかさず、こういう時まず最初に弄る人種ことリナがいじり、イオナがポカポカとぐるぐる腕を回す攻撃と共に真つ赤になって反論する。

ちなみに、このやり取りからわかるだろうが、

二人は、仲がいい。図書室で会つたらしい。

「言つてないものはやらなくてもいいのですよ?」

「そういう事言つちやいますかあ!」

生徒会長にも言つちやうんですかあ!?!」

「生徒会長だろうと何だろうと、弄つてかわいい子には言うでしょう?」

「むううううううううううう!!」

「もうやめて……ッ! 二人とも、校内今きつと、も、萌え死に、多発……会長、止めて、リナちゃん煽らないでえ……っ!!」

心なしか、校舎が騒がしい。きつと気のせいではない。

このイオナ。生徒会長に決まるだけあつてまあ、能力は高い。

それはおいておいて、

彼女は、校内かわいらいランキングで堂々の第1位に輝く少女だった。

見た目だけではない。

基本的に、小さなドジが多い。

運んでいた山のような書類を、誰かとぶつかってばらまくは序の口、

生徒会長の言葉の最後、礼をしてマイクにぶつけるは、皆の記憶に新しい。

登校で急ぎ過ぎて、頭にナイトキャップをかぶったまま気づかなかった、はなんと今

朝で12回目。

そして、そう言った部分を弄る場合の表情が……これで校内でファンクラブができたともいわれる。

ああ、生徒会長。

彼女こそ、たぶん

ミューズ学園のマスコット。

「むう~~~~~~~~…………!」

「じゃ、会長であり我らがこの部の部長でもあるので、どうぞどうぞ♪」

「……これで機嫌治すわけじゃないですからね……もう……！」

コホン、とそこで咳払いし、イオナは顔を引き締める。

「では改めて、本日の紅茶を」

そして、事前に適切な温度で茶葉を蒸らし、淹れたばかりの紅茶を冷たい氷のグラスで一気に冷やす。

「今日は、『フライハイト』。」

西方大陸でのフレーバーティーの代表的な物です♪」

そして、ことりとアイステイーを差し出す。

「ありがとう……スンスン、いい匂い……じゃあまずはいただきまーす……！」

とりあえず、といった様子で、淵に口をつけ、ススくと一気に、

「あの、紅茶を一気に飲むのは、ちよつとはしたくないですよ？」

「ん……え、それは」

と、顔に笑みは浮かべている物の、どこか迫力のある声音を出すイオナに、手を止めるDJサオリン。

「はしたないですわね」「……やめた方がいいな……」「まあまあ、初心者なのだから」

「はあ……委員長……」「まあ、これも起こりうる事とかか」

口々に言うセリフに、一瞬針の筵のようなものを感じる。

「う……なんかごめん……」

「初心者だから今回はいいですよ？」

「初犯は見逃すものじゃないですか♪」

「それ次は無しつてことじゃん、リナちゃあん……」

彼女の気持ちももつともだが、

「ここにいる人間は、割と紅茶のマナーにうるさいところがあるので仕方がない。

「じゃ、真面目に味のレポートに戻りまーす」

「次は一気になんてできないように氷大目にしときますね」

「会長が一番怖いよ!？」

「じゃなくって、レポートだよ、レポート!」

「さて、と強引に話を進める。」

「………これ、なんだか懐かしいというか……アレ、あれ何だっけ……」

「果物の匂い………なんだっけ、すごく懐かしい香り……」

「よかったですよお、舌だけはマトモで♪」

「一言多いぞー! 校内美女ランキング上位なのにそれ以上上がれないやつー!」

「別にそこそこの顔だと思われればいいですし」

「負け惜しみじゃないのが悔しい……じゃなくって！」

と、顔をリナから生徒会長に向ける。

「先生、お願いします！」

「はい♪」

この「フライハイト」は、『レオマスター伝説の英雄』バン・フライハイトの苗字から取られた、彼の愛した果物「パパオ」の皮に、香りに癖の少ない「ニューダジュール茶葉」と組み合わせてできた、独特の香りに定評のある紅茶なのです」

先生、と言われてちよつとうれしいのか、ほわほわと上機嫌な様子で話すイオナ。

しかし、説明がわかりやすい。

「あー！　パパオだ〜!!」

アレ最近食べてないな、美味しいよね〜？　匂いもこ

「か・お・り、

もパパオその物でしょう？」

ずい、とりナとイオナの二人が、笑みを浮かべたまま物凄い迫力で言葉を修正する。

「か、香り、ね、う、うん、いい香り……」

「でしよう〜？」

いい香りでしょう? 英雄の愛した果物の香りでしょう?」

「こんなにいい香りなのに……スカンクモドキを表現するような言い方はふつうしませんよ……ね?」

今、自分の中のロックオンアラートが物凄い音を成り立たる。

バーニングビックバンでもくらう寸前。

そんな途方もない緊張と絶望が押し寄せるDJサオリンに、二人はジェノブレイカー・ジェットやミラージュフオックスも真つ青の連携で攻めてくる。

「……ごめん……ちゃんと言葉は選ぶ、選びます……!!」

「……よろしい!」

なんで紅茶でここまで追い詰められるんだ……そう思うしかできないDJサオリン。

「……まったく、無作法な人ですわ……」

「あの二人はまだ、温厚に怒ってくれるはずなんだけど……」

「我々紅茶研究部の中でも、まだ大人しい方だからな」

「これが、私達だったら多分……」

「……なあに、跡形もなくせば証拠は残らん」

なお、残りの人員がもつと物騒なことをつぶやいていた。

「うう、なんだこれ……最後の最後で、『戦場!』 D組はエナジードリンク漬けなのか!?!」



回より怖いじゃないか……

あ、あ、やった、放送、放送の終わりの時間だああ……!!」

と、戦々恐々の顔で腕時計を見るDJサオリンは、いそいそと変える準備を始める。  
「じゃあ、みんな、今日も付き合ってくれてありがとう!!」

紅茶研究部は怖いけど紅茶はうまいよ!! 顔出してみればなんかもらえるかもね!!」

「……サオリンさん、スコーンどうぞ」

「ありがとう、顔怖いけど優しい君!! ちよつと惚れかけたぜ!!」

じゃあ、みんな、お先に失礼~~~~!!」

びゅーん、とユウジからスコーンだけ受け取って全速力で逃げるように消える。

そんな後姿を見て、紅茶研究部は仕方ないような笑みを浮かべる。

「ふう……やつちやいましたね、部員を増やそうと思つたのに!」

「いやでも、アシユワースさん……きつと、ここマニアックだし、来ないんじや……」

「おう、それは禁句でお願ひしますよ、もう何回も思う事なんですから」

と、ユウジの至極ごもつともな意見に、リナはむくれ顔で答える。

気のせいか、表情の乏しく怖い顔のユウジの表情が柔らかくなったかのようなこともあつたが、そこはおいておいて。

「まあ、このメンツでも一応活動できますからいいでしょ」

「わたくしはもちろん!! 英国の流れをくむものとして!」

「……………俺、アシユワースさんについていきます…………」

「私も紅茶は好きだ」

「同じく」

「息抜きにはちようどいい」

ポンポン、とテンポのいい返事を聞き、一通り満足する。

「それに、部長さんにとてもいいお方がいますしねえ〜?」

その上で、リナはすぐ横にいるイオナにそう言葉をかける。

「え?」

「そんなあ〜 わ、私なんて…………」

「まさか、あの生徒会長共がこんな道楽じみた部活を承認してくれるばかりか、自分で所属してしまうとは。驚きではあるかな」

と、レキの言葉に、えへへ、と笑みをこぼす。

まんざらでもない表情だが、茶葉の用意の良さ、部費の管理やらなにやらに気が回り、それを生徒会長の役職の合間にできるイオナは、実際有能だった。

「まあまあ、そんなに褒めてもイオナさんが可愛くなるだけですし、その辺で」

「もう、始めたのはリナちゃんじゃないですかあ〜!」

と、お互いに仲良く小突きあうリナとイオナ。

仲がいいというか……波長でも合うのだろうか？

「……ところで、そろそろ明日の準備にD組が校庭を改造する時間だ。

グラウンドがどう改装されるかは、会長も直前まで知ってはいけない。

ここは、グラウンドが見える位置だから……そろそろ移動しなくてはいけないのではないか？」

と、ヒルダの言う通り、ここから見える平野部にあるグラウンドから土煙が上がり始める。

「おっと……！」

じゃあ、みなさん早いですがここまでにしましょう！

撤収です!!」

はい、と皆が片づけを始める。

さすがに優雅なティータイムとはいくまい。

「……リナちゃん、ところで」

「はい？」

「この後、時間はありますか？」

と、そこで、

イオナは、リナをある誘いをした。

\*\*\*

## 中編です？

ミューズ森林地帯、学校の見える一角。

『——SPコマンドより、SP3。』

護衛対象の移動を確認したか？コピー？』

そこには、何もいなかった。

『コピーザットSPコマンド。』

こちらの護衛対象は、ビガザウロ搭乗後同校友人のゾイドへ送る模様。

その後の予定は不明。コピー？』

いくら、森林地帯と言えど、大型ゾイドが通れるほど大きく広く育った木の生い茂る場所だ。

舗装路もあるために、誰が見てもそこには何もいない。

『コピーSP3。』

SPコマンドよりSP各機、これより、SP3からの情報を元に護衛対象に追従する。

『コピー？。』

『『『コピーザット!!』』』

しかし、何かいる。

極めて小さい音だが、何か歩く音が聞こえる。

だが……だれも、その存在を知らない。

\*\*\*

ミューズ学園ゾイド用格納スペース、その『E組』と書かれた一角にて、

「……丸聞こえだなあ……私がテロリストだったら大変ですよ？」

誰にもなく、狭いコックピットの中、オラージュがつぶやく。

彼女のいるここ、つまりこのゾイドのコックピットは、ひどく狭かった。

狭いのだが、目の前のコンソールと計器以外が外の様子を映すほぼ周囲モニターとなっており、狭さを忘れてしまいそうになる。

この技術を地球ではコフィン（棺）システムというらしい。言いて妙だ。

ともかく、そんな強烈なコックピットの中、通信機がとらえた暗号通信を解読し、そのまま再生したものを彼女は聞いていた。

「ふくむ……やつぱり、「あの軍」の電子機器の弱さは泣き所だよなあ……

妨害電波とか索敵は一級品なのに、通信の暗号化が下手だよなあ……

電子戦は、帝国ゾイドが今じゃ一級品だよな？」

び、び、と電子機器を弄り、『光学迷彩な上に赤外線・レーダー波処理装甲で見えない

相手』への愚痴をこぼす。

と、その視界にふと、大きな赤いハサミが見えた。

「……あら、君もそう思うのかしら？」

そのハサミの主にそう問うと、ハサミがカチカチとならされる。

彼女の乗るゾイドは、見た物に強烈な印象を与える姿だった。

丸い。

丸いと言えない、平べったいゾイドコアのような、いやこれはガンズナイパーWの後ろの円盤というか、

そう、まるでレーダードーム。派手で真っ赤なレーダードームだ。

そこに、足が数本後ろから生え、丸い胴体の下に、車輪の付いた車体があり、正面には実は高性能センサーな大きなクリアカラーのお目めが存在感を見せ、両脇には中にガトリング砲をもつハサミがある。

お分かりいただけただろうか？

カニである。カニ型ゾイドなのだ。

このカニ型ゾイド、地球では食べば死ぬといわれた自然濃縮毒のデパート『スベスベマンジユウガニ』の野生体を元にした、帝国製SSゾイド。

その名を、「EZ-061 キラードーム」という。

「まあ、電子戦ゾイドだものね〜？」

キラードーム君は頭がいいものね？ 誇りという言葉をわかるくらいには」

この言葉に、そのレーダードームそのものの胴体をくるくる回すキラードーム。

喜んでいるようだ。

と、そんなキラードームが突然その顔を左に向け、ある一角を見る。

「ん？」

そこから、ガコン、ガコン、と、言う足音と共に、ビガザウロが歩いてくる。

「会長さん、こんなところでまた会うだなんて奇遇ですね？」

と、オラーージュはすぐに通信を入れる。

『あ、オラーージュさん!! そして『ご神体様』も!』

「キラードーム教徒でしたか、会長さんは」

『可愛いフォルムですしね〜、キラードーム君』

クウ、と鳴きながら、首をキラードームへ向けるビガザウロに、大きくハサミを上げ



て横に右往左往するキラードーム。

食われるとても思つて威嚇しているのだろうか？ ビガザウロは口がない上に、草食だが。

そんな様子にも、二つのゾイドの主はアハハ、と笑う。

ズシイイン、とやたら重い足音が来たのはこの時だった。

『——ふいー、ようやく追いつきましたよ』

「あら、リナさん……あらら？」

と、通信機からは、同じ紅茶部の友人ことリナの声が出た。

しかし、ゴジュラスに匹敵する足音をリナのライガーゼロが……と疑問に思い見れば、ああ成程と納得できる姿をしていた。

背中に背負うは、巨大な大砲。

2問の砲——レールガンとビームの2種を同時に撃つことから『ハイブリットキャノン』と称される砲を支える胴体は、所狭しと、四角く分厚い緑色の装甲を持つ。

装甲の中にちりばめられた、ミサイルハッチらしき意匠、その数の多さだけで一瞬

あつけにとられる。

顔の両脇、センサーや放熱板に混ざり見える、やはりミサイル。

これがライガーと呼べるのか？

まるで足の生えた弾薬庫。

その名を、ライガーゼロ・パンツァー。

実に共和国らしい、詰め込み武装っぷりを見せるC A S換装状態だ。

『重いんですよねえ、この競技用『黒プリン』C A S!!』

材料代ケチってんじゃないですよ、もう…!!』

愚痴をこぼしつつ、どしんと動くライガーゼロのクロムウエルとリナ。

クロムウエルの足の可動部分、キャップと呼ばれる丸い部分から、すでに軽く蒸気が出ている。

「黒プリン…?」

『地球に、パンツァーの元、いやなんていうか…ともかく！』

戦車、つていう兵器があつて…!!

私の、故郷の奴に、黒くて重くて、遅くて硬くて火力がある!!

『ブラックプリンス』っていう戦車が!!』

そこまで説明して、クロムウエルがもう駄目と言わんばかりに腹ばいになる。

『うおっ!!』

……ああ、重すぎ……と言いますか、外も暑いのにここもめちやくちや熱いじゃないですかあ……!』

しゅうううう、と足の駆動部から、見てわかる程危ない雰囲気の水蒸気が出る。

『リナちゃん、無理して競技用パンツァー着る必要もないんじゃない?』

『わかってます、わかってますとも!!』

でも、今日は慣れのために着て帰ります!』

と、リナの言葉に、二人は気づく。

「……リナさん、もしや……『アレ』、お買いになるおつもりで?」

『ちよつとお高めでしょうけどね、『お買い物の日』はテスト後1週間ちよいです。

制動距離も基礎構造もほぼ同じ。

なら、着といて慣れておくべきです』

という言葉足らずな説明に、通信機越しに理解する二人。

そういうつもりなら……

『でも、リナちゃん?』

『はい？』

『今日、気温36度だった』

『……………』『N組航空隊チーム』気象観測班情報？』

『『ふかひれ君チーム』の気象予報は当たるとよ？』

『その妙に美味しそうな名前何とかありませんか？じゃなくって、なら8割7分でまあ、そうなるって感じじゃないですか……………』

うわあ、と悲痛な悲鳴を上げる。リナも、クロムウエルも。

そして、つい苦笑を浮かべるオラージュ。

『これから湖の対岸の美味しいステーキハウス『BIGザウルス!!』に行くんだよ？』

大丈夫？』

『言っても40キロは巡航出せますよ、黒プリンなクロムウエルでも！』

『リナちゃんは耐えられるの？』

『そつちは精神論マシマシでも、無理ですよ!!』

なぜでもという接続詞を使ったのか。まあ、それはいいとしよう。

「お二人とも、ランチを一緒に？」

私もいいですかしら？」

オラージュは、ここまでの会話でわかった二人のここからの予定に興味を持ち、そう

提案する。

『おお！ ちようどよかったです♪』

一緒に行きましょう!! リナちゃん、今日は思いつきり精神論を使っちゃいましょう!!』

『ちえー、まあ頑張りますよ。』

あーあー、なんでレオマスターじみたことを私が』

『ゼロ乗れるだけでもう、レオマスターじゃないですか!』

はははは、と笑いあい、ささとパンツァーが立ち上がる。

『いきましようか!! ほらほら、クロムウエル!! とりあえず今日へばってたら、明日はもつときついですよ?』

『がんばれー、クロムウエルくん!!』

「さてさて、なかなか珍道中なメンツですね?」

先頭の歩幅に合わせ歩くビガザウロの後ろから、ゆっくりついていき始めるキラードーム。

ふと、そのレーダーに、何もいない場所の機影を捉える。

『こちらSP3。対象の移動を確認！ 追尾する！ コピー？』

『コピーザットSP3。逃がすなよ？』

「逃げませんよ」

静かに、通信は開かずに、オラージュはこの『謎の相手』に答えた。

\*\*\*

遥かなる上空を、サラマンダーが飛ぶ。

眼下の大地では、24ゾイドやワークトータス、ワーカーゴドス達が、アリのように学校の近くの開けた大地を改造していく。

そして、反対側の湖、そして周りの木々に囲まれたゾイド用の道には……

\*\*\*

ガシン、ガシン、と、ビガザウロ、ライガーゼロ・パンツァー、キラードームの順に移動していく。

その中に、なんとも気の抜けた、ウクレレ調なBGMが、通信機越しに流れる。

「わたつしは〜♪ 荒野の〜♪ 運び屋さ〜ん♪」

突然、3人はきれいに声を合わせ、気の抜けた歌詞を口ずさみ始める。

「おもっしろいこと♪ なーにつかー♪ 無いかなー♪」

その歌と共に、少々ライガーゼロ——クロムウエルの足が悲鳴を上げる中、それなりの速度で進み続ける。

「わたつしは〜♪ 荒野の〜♪ 運び屋さ〜ん♪」

もうすぐ、湖も半分を超える。

目的地も見えてくるあたりだった。

「おもっしろいこと♪ なーにつか〜♪ 探そうかな〜♪」

そこでも歌はやめずに、ひたすら歩を進める。

この歌、かつて惑星Zi上にいたとされる「伝説の運び屋」が、危ない場所から辺鄙な場所まで制覇しつつ広めた歌らしい。

らしいというのは、歌詞が適当な部分があり、各地で伝わってる歌が微妙に違う事と、その謎の『伝説の運び屋』の存在自体、伝説以外聞かないためだ。

「「私は〜♪ 荒野の〜♪ 運び屋さ〜ん♪」」

そんな歌を歌いながら、3体は目的地のステーキハウス『BIGザウルス!!』に到着する。

\*\*\*

「いらつしやい!!」

お、なんだお嬢ちゃんまた来たのか……つて、お連れさんも随分美人ぞろいじゃねえか!!



うれしいねえ、花があつてよお!! よっしや、全品10%引きにしてやるよ!!!  
禿げ上がった頭、筋肉質な体と黒い肌という姿の威勢のいい声と笑顔に歓迎され、  
人は湖の見えるテーブルに案内される。

「いつもごめんなさいです」

「むしろいつもありがとうございます!!」

お嬢ちゃんはいつものでいいか、お二人さんは? おつとゆつくり決めるかい!?  
と、リナとオラージユに言う店主に、二人は苦笑してしまう。

「うーん、みんなちよつと量が多いかなあ……」

あ、私1ポンドコロコロステーキセットで!! ソースは東方大陸風で!!

「美味しそうですけど、あんまり食べちゃいけないかな……」

1ポンドコンボ、リブとハンバーグ、ソースはネギ塩とデミグラスで」

「あいよ!! ライスは1ポンドまで無料だがどうする!？」

「1ポンドで!!」

「よっしや、わかった!!」

オーダー入るぞー、と去っていく店主を見ながら、ふと二人は向き合う。

「食べますねえ、随分?」

お互い、可笑しくなって笑ってしまった。

「ふふふ……いや実はもう、黒プリンな競技用パンツアの操縦でだいぶ体力持っていかれましてねえ……朝も割と簡素でしたし」

「私は実は朝ごはん抜いちやっけてまして……」

「二人ともちゃんと食べなきゃだめですよ？」

私は朝ごはんは、スパゲッティとベーコンエッグでした！」

「それは食べ過ぎでしょう！」

はははは、と3人は笑いあう。

「……それで、会長？」

ふと、待ち時間もそこそこに、リナがそう声をかける。

「はい、では、

そろそろ本題に入りましょうか」

そう、二人は、イオナに呼ばれてここまで来たのだ。

「イオナさん、なぜ私達をここへ？」

と、尋ねると、イオナは視線を窓へ……湖へ、つまりはその先の学校の方向へ向ける。

「……いま、学校の方では、残ってる方たちにはメルヴィン副会長の元、全校へ向けて明日の『春の終わり砲火後作戦』に向けて、紅白の発表がされています」

あ、と二人はすぐさまゾイドギアを取り出す。

共通規格という名の昔から変わらない姿の、しかし中身はもつと使い勝手のいいこの端末の、

立体映像に触れソーシャルネットワークサービスのアプリを起動する。

学校のアカウントから、すでに学校を離れた人間へ向けての緊急メッセージが届いている。

一応、昨日のうちに彼女から「直に発表もするがどうしても早く帰る場合はSNS経由で知らせる」とは言っていた気がする。

「……不真面目な人間にはキツイことをしてくれませぬえ、委員長」

「いや、真面目に見せかけて、これは見事に、こちらの組を罠にはめたようですね」

「ええ、メルちゃんはあるで結構頭が回りますしね。」

昨日の内に赤と白の組分けが完了した内に、生徒会内に知らされるや否や、自軍用のグループをSNSで作成、『我が軍は学校へ居残り、直ちに作戦会議を』と号令を出したのでしょうか」

「普段の指揮やら作戦立案は私にお任せしておいて、こういうことするからあの委員長

は委員長できるんですよ。ただの真面目ならだれもついていきはしませんし」

「ふふ♪ でも、真面目だから、会議中のこっそりお菓子は駄目なんですって」

「それは、もう校則違反では？」

なんて言ってしまうと、私も休み時間にお菓子を食えることができなくなりますね？」

確かに、と笑みをこぼす。

そして、これらの情報の意味を、答える。

「……成程、この3人は同じ組ですか」

「ええ。」

私も先に知る立場となったので、行動を開始したんです」

静かに、まるで「ゴキブリが出たからすぐに逃げました」かのようなニュアンスで語るイオナ。

しかし、内容はその比ではない。

「なるほど、通りで」

と、オラージュはそういうとおもむろに、ゾイドギアに何かの機器を取り付け、ボタ

ンを押す。

パチン、と感電したような音が近くから響き、何かが落ちる。

3人がふと見るとそこには、小さなクワガタムシが——いや、クワガタムシ型ソイド「ダブルソーダ」に酷似したものが、ぴくぴくと動いていた。

『『ブルーデビル』……!』

盗聴、いや盗撮されてたつてところですか……!』

「きつとE組の敵の誰かですね。あらあら、私も同じ組だというのに、気づかないと思っていたのでしょうか?」

び、ともう一度同じボタンを押し、今度は少し離れたテーブルに墮ちたのか、きゃあ、と悲鳴が上がる。

「……念のため、が効いたみたいです。」

これ、バッテリーを消費するのであまり使いたくないのですけれどもね」

と、ゾイドギアの画面右端のバッテリーゲージが赤いラインに達するのを見て、オラージュは謎の機械を外す。

「つかぬことを聞きますけど、それは?」

「自動追尾型指向性ジャミングウェーブ発生装置ですよ♪」

「うへえ……?!」

……E組って、やっぱり我々C組とは相性悪そうです。N組とは別方向で、戦いたくない」

「でしよう？」

まあ、我々は『きわめて弱い』ゾイドが多いですし、まともに戦うととても誰にも勝てませんが」

「E組がまともに戦うという状況を詳しく問いただしたいです」

ふふふふ、と3人は笑う。

意味が分かると、相当穏やかではない内容だったが……

「……さて、じゃあもう盗聴の心配はないでしょう。」

リナさん、そしてオラージュさんにはまず編成表を見てもらいます。

それで、一緒に作戦を考えましょう！」

イオナの言葉に、二人は静かにうなづく。

それで、と言って、イオナは明日の編成表を広げる。

——今日はここも混んでいるせいか、それとも時間がかかる物のせいか、まあ、大まかな概要を考える時間の間に、注文の品はこなかった。

「——やはりここは、ルール上問題はないですし、明朝の奇襲が第1段階ではベストでしようねえ」

「明日は、相手方に隙を与えたくないのです、リナさんはクロムウエルをいつもの高速形態でお願いしますね？」

場合によってはイエーガーCASで高速部隊を率いてもらいます」

「了解♪」

「私が前線でスカウターもしなきゃいけないですね……うわ、E組のえげつない方々がだいぶ赤組に……」

『『アカ』は抹殺しないと、民主主義の白としては♪』

「ふふふふ……♪」

と、そんな会話をしている横に、

「ふふ、いやまったく酷い暑さよね〜」

「そうツスね〜、テストやってらんないツスもんね〜!」

「ペツパー氏、その様子では捨てるでござるね、今日は〜」

何やら騒がしい一団がやってくる。

いつの間にか隣が開いてたのか……などと思ううちに、見ない制服の女子高生3人が

座る。

はしたないとと言える粗暴な座り方だ……………

「……………どこでしたっけアレ？」

「この先のレッドコロニーの『公立アレキサンドル高等学校』の制服ですよ。

若干オツムが残念ですが、全学生ゾイドバトルランキングだけ上位中堅の」

「ああ……………いた気がしますね……………そんなの」

ひそひそひそ、と聞こえない声でしゃべる3人に、その集まりの中心にいたツインテールの女生徒がこちらを見る。

「あれ？ あんたたち何処高？」

「うお!! クロエ氏!! アレレアキャラですよ!!」

「ミューズ森林学園の制服でござる!!」

と、度の強そうな眼鏡に長い髪をわざわざ三つ編みにしている『いかにも』な生徒が答える。

「ミューズ、って学校あったっけ？ ニューリバのDガルド高校じゃないんスか？」

「ペツパー氏い、そりゃ知るはずないですよお！」



「3年に一回しか生徒募集をしていない、いまいち実体のわからない高校でござるよ〜?」

「これが、ネットなら、草でも生やしそうな声だ。」

「なんじゃそりゃ!?! 学校としてやっていけんスか〜!?!」

「髪の短い快活そうな女性とも、まあ、軽い言動なのは見て取れる。」

「関わりたくない。」

「3人とも一瞬でアイコンタクトで語る。」

「二人とも、こちらのミューズ何とかの方々ビビってるわよ〜? その辺にしといたら

〜?」

「しかし、レアでござる〜! 写真、写真を1枚いいでござろうか!?!」

「……あの、見世物ではないので困ります……」

「と、ゾイドギアのカメラ機能を使おうとする相手に、そう言葉で制するイオナ。」

「え!?! ダメ!?! なぜ!?!」

「いいじゃないのよ、地味で目立たないあんたらの写真の一つや二つぐら」

「自分が有名になりたいからと言って他の人間も有名になりたいわけじゃないんだつて、

「気づくだけの脳みそがあなた達にはありますか？」

そして、イオナは、その3人にそう辛辣な言葉を困ったような顔で紡ぐ。

「ほら、そういう浅はかな考えじゃ、後々、もつと酷い目に」

「はあ!?! バカにしてんの!?!」

「え、はい」

と、激高したツインテールの少女に、「なんで気づかないんだろう」と言いたげな言葉を返すイオナ。

そして、ふとハツとなる。

「あ…!?!」

おつと……ですよね、気づきませんよね。ええ……自分を顧みない人だっていますし、こんな大きな大陸の中ですし」

「んなっ……!?!」

わーお、と表情のこわばる相手を見て、後ろのリナたちは面白そうに様子を見ている。「でも、今日気づいていただきたいんです！」

あなた達は馬鹿です。プライバシーの侵害や侮辱を自分もしていいと思いがつてしまっているんです。

でも、世の中には礼儀は必要なんです。とくに初対面の人間に、そんな場所あったかどうかだの、レアだから写真撮ろうだのはしていけないんです。

今日あなた達に教えてあげられるような人がいてよかったですね！

明日から治していきましょう♪」

その言葉の途中から、プルプルと怒りに震えた相手は、とうとう最後の言葉で、きつとイオナをにらむ。

「喧嘩売ってるのよねえ?!」

「え? わ、私はただ、その気の短いところを直した方がいいですよ、とか、

決めつけるには知識も知恵も足りないと言ってるだけで……」

「その喧嘩買ったああああああああっつっつ!!!」

表出なさいよお!! ゴイド乗ってるんではよ!! 勝負よ、勝負!!」

とうとう、噴火するかのような剣幕で、イオナを指さしてそう声を荒げる。

——一瞬、イオナが笑う。

「ああ、はい……仕方ないですねえ……」

だが、直後やれやれと言った表情でそう、弱弱しい言葉を紡いだ。

絶対嘘だ。

「喧嘩…!?!」

「ゾイドで喧嘩するってよ…!」

「おい、誰か賭けねえか!?!」

と、周りもなんだか騒がしくなり、

「待てエエエエエエエエエエい!?!」

と、あの威勢のいい店主が出てくる。

「話は大体聞かせてもらったぜ、お嬢ちゃん方!!」

よっしゃ!! ちようど店の前の砂浜が広いからよ、存分にやってくんなあ!!

ここの所暇だったからなあ、ちようどいい!!

オラどうした、客共お!?! どっちに賭けるか決めねえかあ!!!」

おおおお、とその場の客もなんだかヒートアップする。

「……どうします?」

ふと、オラージユがリナにそう尋ねる。

「……肩慣らしにはいいんじゃないですか?」

「いえ……多分、『勝負になりません』よ?」

ああ、とその言葉を理解するリナ。

「だいじょーぶ、大丈夫♪」

その時は素直に軽い運動してステーキ食べて帰ったつてだけですよ。

明日に影響もないでしょうし」

「ああ、それもそうですね!」

にひひ、と笑うリナに、優雅にほほ笑むオラージユ。

「あんたら負けたら、全裸土下座でステーキおごりなさいよ!」

「じゃあ、こちらがもしも勝ったら、ちよつとしたお願い事とステーキをお願いします」

そうして、些細なことから始まった、喧嘩の時間が幕を開ける。

\*  
\*  
\*

## 後編ですよ♪

ステーキハウスのよく見える位置

『隊長!! じゃなかった、SPコマンド! こちらSP3!!』

まずいですよ、喧嘩で野良ゾイドバトルです!!』

『うろたえるな!! 学生の青春時代だぞ!! このぐらいの一つや二つは起こる!!』

何もいない場所で、怒号が飛び交う。

『しかし、護衛対象……イオナフェルト氏はあのム——』

『待て!! 始まるぞ!!』

って、何だとお?!?!』

『げえ?!?! じよ、冗談だろ?!?!』

と、驚きに満ちた声を上げる、見えない何かの視線の先には——

\*\*\*

湖を見下ろすステーキハウス。

その下、大体ゴドスの身長程の崖に面した、広い砂浜。

ステーキハウスから、いやその脇の駐車場から、

いやいや、その周りの道路から、まるで祭り騒ぎのような人だかりができています。その視線の先は何か？

片や、何とも言えない構成の3体。

『大きな老竜』ビガザウロ。そのMk-II。

『赤いご神体』キラードーム。

『歩ける』ことが奇跡の弾薬庫』ライガーゼロ・パンツァー（競技用装甲型）。

こちらは、さほど注目されるものではない。

完全野生体も今では、相当の数を取り戻している。ゼロはもう見慣れたゾイドだ。

問題は、相手。

そいつらは、見た目からして『異質』だった。

両脇でうなり声を上げる2体。

それは、4足歩行ながらも、奇妙な形だった。

カエルのような、しかしぎらつく歯はそんな野生体ベースではないことを物語る。

長く太い尻尾、扁平な印象を与える手足、カエルともいえる一体成型めいた大きなク

リアキャノピーのような頭部。

そして、その背にそびえる、ビーム砲——その名も、『ロングレンジアサルトビーム



砲』。

「ヘルデイガンナー……い！ 可愛い……じゃなかった、以外だなあ……い！」

静かに、ビガザウロの中でそう心情を漏らすイオナ。

ヘルデイガンナー。

見た目がどこか間抜けで、他のゾイドにない異質な印象を持つ、イグアナ型旧ガイロス帝国軍主力の一体。

実際、砂漠や湿地帯など、起伏こそ少ない物の、歩きにくいこの地形においては今でも強いゾイドであり、水中もある程度なら適性がある。

つまり、この場所はホームグラウンドと言えるだろう。

『でも、もつと意外なお相手がいますね？』

通信機から聞こえるオラージュの声の通り。

驚いたのは、そこではない。

その、3匹のヘルデイガンナーを従える、3体目。

その体形は、アロサウルス、というよりはその型のゾイド『アロザウラー』に似ている。

だが、そのゾイドもあまりに、既存のゾイドと見比べて異常なほど異質だった。

全身に伸びるチューブ。不気味に光る眼。

頭部をクリアキャノピーのようなもので覆うそのゾイドは、毒々しい、あるいは不気味な配色の、蛍光グリーンと漆黒のカラー。

このゾイド、知っている物は悲鳴を上げる。

知らないものは、異質さを強く感じる、特殊なゾイド。

『なんで……!』

グルル、とうなるライガーゼロことクロムウエルをなだめつつ、隣のリナがつぶやく。『なんで、『デッドボーダー』なんかがこんなところに……っ!!』

その黒いゾイド——ガイロス帝国製タルボサウルス型ゾイド『デッドボーダー』は、不気味に吠える。

『どーよ、ビビっちゃったかしらあ?』

『ふひひ、こっちはこれでも、ゾイドも腕も一級品なんでござるよお?』

『オタクからも珍しいゾイドっすけど、なんか役不足な奴らばっかりじゃないツスカ?』  
ゲラゲラと余裕の笑い声を上げて挑発する相手。

余裕の声音も、しかし当然だ。

『……暗黒軍の恐怖、ここグラム湖に現る。』

ゾイド史を語るにおいて外せない『バトルストーリー』の初代作者様が生きてこの光景を見たら、なんていうでしょうかね?』

『今、情報を入手しました。』

2体のヘルディガンナーの右側面の型番から、Mk-2G型と判明。

まずいですね、限定OS搭載の戦後型です』

「デッドボーダーはあの色から察するに『人工デリオハリコン』搭載型ですね。

パイプから察するに戦後復活型初期でしょう。初期でも強敵ですね」

藪をつついてデッドボーダーとは、ステルスドラゴンの方がマシと思える状況ではある。

一瞬、平謝りする選択肢もよぎるが……

「……——ア家が、そしてヘリック共和国が戦うときは、完璧な勝利を目指せ。

……ひいお祖父ちゃんの言葉だったな……」

静かに、自分を奮い立たせる言葉をつぶやき、通信を入れる。

「役不足ですか。」

うーんまあ、ガイロスみたいな超兵器思想が売りな中、堅実で地味で花のなーい、できるのに人口デリオハリコンが装備されなかわいそうなヘルディガンナー君や、

……あれ、その黒いゾイド、名前なんでしたっけ？

どこの国のゾイドですか？」

『『んあ?!』』



「リナさん、ここはお願いします!!」

『ちえっ……』

瞬間、パンツァーの重い機体を無理やり斜め前へ跳躍させ、自ら重力砲に当たりに行く。

一瞬、空間がゆがみ、どんよりとした力がクロムウエルを包み込む。

『つぶれなさいよお?!』

『……生憎、重力砲はどんなに強くても、ある一定の重圧以上は条約で出せないんですねえ』

しかし、その重力で腹ばいになったクロムウエルは、しかしその足を起用に曲げて、伏せの体勢で耐える。

『オラオラア!!』 先につぶれるライガーさんよお?!』

『卑怯というか!?! 勘違いするなでござる!!』

喧嘩にルールもクソツタレもなああああ!!』

ズドンズドン、とビーム砲もやってくる。

それを、リナのクロムウエルはただ耐える。

(先に一体の敵を火砲で囲んでつぶしますか……セオリー通りでA組より『やる』じゃないですか……!)

密かに、相手へ評価を送りつつ、リナは味方を見る。

——気が付けば、2体とも、ひたすら湖を目指し、ただただ移動している。

『つて、どこ行くんでござあある?!?!』

『あいつら、味方をほっぽって何してんスか?!』

酷い言われようだが、確かにこの所業は酷い。

——と、相手も思ってくれている。予想通りだ。

ところで、ここにいる3人、広域周波数帯に思考を垂れ流しだがいいのだろうか？

『こちらキラードーム。予定の位置まで……2分ぐらいでしょうか?』

「了解。

うーん……抵抗もしておいた方が無難でしょうね」

ガンガン、とビーム砲やら小さな重力の塊が当たるパンツアーユニット。

だが、重い鋼鉄とその他でできた合金は、案外びくともしていない。

「よしよし……アンカー、セット」

まずは、少々つらいが立ち上がる。腹ばいだと、余計なダメージが出てしまう。

次に、両足を少し広げ、爪を広げた状態で接地する。

そして、背部の武器を起動させる。

「よしよし、

ウイーンと背部座席から伸びてきた『アイマウントレイル』で片眼を隠す。

その片目で照準を付け、エネルギー路を開放。チャージを開始。

『こいつ、アレ撃つ気!?!』

『撃たせるかああああ!! 弾幕薄いぞ、何やってんの!?!』

『嫌、だから撃つてるッス!!!』

ここまで、撃たれ続けているが、案外深刻な場所は外れているため事実ノーダメージだ。

硬いって良い。

当たらなければどうという事もないも事実で、もちろん速度も大事だが、

硬さも安心する要素の一つだ。

硬いって、素晴らしい。

「——なにせ、こうやって照準がしつかりできますしねえ?」

目標は、左のヘルディガンナー。

「ハイブリッドキャノン!!」

ギユウウウン!

背中の2器——『AZ216ミリレールガン』『AZ108ミリビームガン』が並列する2つの『ハイブリットキャノン』がチャージされ、唸りを上げる。

「Shooooooooooooooooooooot!!!!!!」

ファイア、と言わないのは遠い先祖の故郷の血か、

ともかく、自身と同じ身長分後退するほどの衝撃を立て、

ビームと、電磁加速された弾丸が、

光の筋を伴って放たれる。

「よ、避け、」

直後、「うきやあ!？」と奇妙な悲鳴を上げたパイロットともども、ヘルデイガンナーがビームで貫かれ、オーバークイルその物の実体弾が大きく浮かんだヘルデイガンナーをぶっ飛ばす。

「い——や——……………!!」

数秒遅れて、ドシン、とその方向の砂浜に着弾する音が聞こえる。

まあ、ゾイドバトル用だ。死ぬことはありえない。

「カナア——————ツツ?!?!?」

『カナつちい——————ツツ!!!』

相手の、広域通信越しの悲鳴を聞きながら、はあ、と疲れたようなため息を漏らすり  
ナ。

「……………熱うい……………」



もう駄目だ、と夏服の胸元のボタンを外す。  
手で仰いでも暑苦しい空気は変わらない。

なにせ、外にいるクロムウエルの足から、上手になにか焼けそうな煙と熱が出ていた。  
そして背後のハイブリットキャノンの強制廃熱機構が作動する。

「黒プリンじゃなくてカヴェナントターつて呼んでやりましょうか、この何やつても乗員を焼き殺す悪夢のメカニズム」

パタパタ、と豊満な胸の谷間を仰ぎ、そう言葉を漏らす。

『この、よくもカナをやってくれたわねえ?!』

『もう射撃戦はやめッス!!』

格闘でボコるッス!!!』

と、油断した隙に相手が一気に近づく。

片や、ヘルデイガンナーは、型式で言うなら尾に実体ブレード装備型のはず。

なにより、もう片方は全盛期にウルトラザウルスをジャイアントスイングした化け物だ。

「っ、」

ハイブリッドキャノンを背後へ向ける。

直後、レールガンを後ろへ放ち、反動のすさまじい勢いでデッドボーダーに体当たり

する。

「くっ……!?!」

『うぎやわあッ?!?!』

無理な一撃は、確かに相手をひるませる効果はあった。

しかし、勢いの乗ったこの鉄塊がうまくコントロールできるはずもなく、あえなく転倒したまま一回転し、砂浜をえぐってようやくやむ止まる。

「とと……ああ、ダメですねこれえ……」

やはり、競技用パンツァーで格闘戦はやめるべきだ。

今は無事だが、最悪フレームに深刻なダメージが起こる。

『こおんのお?!?!』

ズドン、と背後からすさまじい重圧が襲い、この重い機体がさらに砂浜にうずもれる。

「うお、立ち直り早い……!」

もうこちらに重力砲を撃てるのか。余裕だ。

(まずいなあ……他の二人の『準備』はまだですかあ……!?)

こちらは、この重いライガーをケツを向けた状態にしたままだ。

もう相手は何かわめきながら向かってきている。

内容は聞き流すが、だから広域無線でそんな核心を突く話をするな、と言いたいリナ

だった。

それはいいとして、つまりだ。

囿はやっておいた。

罫の完成は、まだか？

その時、パンツアーのセンサーが高速で向かってくる飛翔物体を感知する。

おまけに、自分を含めたゾイドへの『レーダー照射』も確認。

——作戦第二段階開始合図を確認、つと

すぐさま、左脇のコンソールを操作する。

いわゆる、お尻と言つて差し支えない、腰より下ともいえる位置に並ぶミサイルポツ

ド。

そのハッチが開く。しかし、ミサイルを放つわけではない。

カシュン、という音と共に、最後尾にあったミサイルにたつつが、長く伸びる。

『何?!』

『なんか伸びた?!』

言う暇あつたら、これを折るのが正解だ、と思いつつも、通信機は使わない。

代わりに——真上にある『その装置』のスイッチを入れる。

びー、と音が鳴り延びた部分の先端が、赤く点滅し始める。

『!? クロエちゃん、ミサイル!?!』

『え?』

あ、ああ、レーダーに何か!?!』

電子線性能低いな、と思いつつ、ライガーのシュツとしたお尻の上のミサイルポッドから伸びたそれを高く向ける。

こちらにやってきたミサイルは、6つ。

それが、こちらのすぐ近くで急激に上昇し、大空高く昇ったと思えば、外装が剥離する。

展開したのは、大量の細長いミサイルたち。

『た、』

『多弾頭ミサイル!?!』

気づいたころには、それらが、こちらに向かって降り注いでいた。

『『にやあああああああああああああああああああ!?!?!』』

通信機をそろそろ切ろうかとも思っているリナの耳にも届く悲鳴。

あまりにおかしくって、そして振り向けばコミカルな動きであたふたし、拡散したミサイルたちが降り注げば恥も外聞もなく動き回り、避けまくる姿を見ただけで大満足だった。

『『びぎやあああああああああああああつっつっ?!?!』』

そのミサイルというのが、爆発しない弾芯のようなもので、降り注いだ各所で突き刺さり、まるで槍が降ってきたような状態になっている。

「…………この悲鳴だけで、数日思い出し笑いきえますよ…………ふくくつ…!!」

密かに、リナはこの哀れな二人を笑っていた。

しかし、これほど無差別な攻撃の中、リナは一步もクロムウエルを動かさないのはなぜか？

装甲が厚い、とはいう物の、当たればただじやすまなそうな攻撃のはず……

いや、それは不自然に、クロムウエルを避けて、地面に突き刺さっていく。

正確には、突き出したお尻の、アンテナのようなそれを避けて。

やがて、槍の雨が収まると、その砂浜は針刺しやハリネズミ、あるいはガンブラスターの頭のような状態になっていた。

『あ、せ、せ…………セエエエエエエツフ…………!』

ぜ、全部よけきつてやったツスよおく…!?!』

『た、魂が抜けたみたいいな声出すなあ!!』

こ、こんなの、ビビる程のものではないじゃないのよッ!』

と、デッドボーダーとヘルデイガンナーのパイロットたちは、そんな声を上げる。

「ビビってんじゃないですかあ〜？」

声がチワワみたいいに震えてますよお〜？」

『なツ……!?!』

『何だとコラア?!?!』

すかさず煽るリナに、面白いように反応する。

『ビビってるわけじゃないじゃないのよお?!?!』

『震え声って言った奴が震え声ツス!!!』

ほらほら、チビってんのはそっちじゃないんすか!?

チビってんじゃないんすか!? チビってるって、絶対!!

チビってるっすよ、そっち『も』!!! チビらないほうがおかしいツス!!!』

『……ちよつと、ペツパー? あんた、まさか……う?』

どんなに相手がすごんで見せても、酷い新事実を暴露しても、今のリナの感想は一つ。

(チヨロイ!!)

その一言に尽きていた。

さて、と仕込みは上場、と後ろのポッドから生えたそれをしまう。

周りの棒状のパーツはきれいに円形を描きすべてが外れている。

さあて、とゆっくりした足取りで、重たい機体を反転させていく。







——『海戦・沿岸戦闘仕様改修駆逐艦型』のそれに乗るイオナは、腰から尻尾にかけての『VLS』を起動して言う。

『はい、もちろんです生徒会長』

おそらく、沿岸のどこか水の中で相手を見ているオラージュのキラードームから送られる情報を元に、ミサイルの誘導を切り替える。

座標指定型半無線誘導後に、セミアクティブ。

弾頭は、『エルパポップコーン』。

VLSは6番から12番まで。

『アータリンク』

「アータリンク確認。」

6番から12番まで、行きます！」

途端、ビガザウロの尾の付け根あたりから順に、ミサイルが空へ向けて放たれる。

ある程度の高度で相手へ向きが変わり、まっすぐと飛んでいく。

『またミサイル!!』

『撃ち落とせえッ!』

ヘルデイガンナーたちのアサルトビーム砲がミサイルを打ち落とすべく放たれていく。

しかし、ミサイルは多弾頭タイプだったのか、うち漏らしたミサイルが分裂し、大量のミサイルが3機を襲う。

『多すぎイ?!』

『ぎやああああああ?!?!?』

半狂乱に撃ち落とそうと努力する中、それをあざ笑うように、さらにミサイルが割れ、何か丸い物が大量に降り注ぐ。

高性能爆弾の雨だ。

『『『うわああああああ?!?!?!』』』

あたり一面が、爆炎に包まれる。

それは、リナのライガーゼロパンツァーも例外ではない。

『味方ごと殺す兵器かよお?!』

『うわああああ、ま、ママー!!!』

『ぐう……こんなのでえ?!』

しかし、3機の悲鳴を聞くリナは、涼しい顔で3機を見ていた。  
なにせ、ここには爆弾の雨が降らない。

いや……よく見れば、当たらないはずの位置に堕ちる爆弾が、あの筒のお近くに着た瞬間不自然な力が働いたように、3機に吸い寄せられていく。

「電磁誘導システム、相変わらず強力ですね」

そう感想を漏らしながら、胸部のグレネードランチャーをおもむろに放つ。

狙いはつけていない、だがそのグレネードは不自然な曲線を描き、この棒たちの合間をすいすいと進みテッドボーダーに当たる。

『きゃあああああああ?!』

『一方的じゃないツスカこんな?!』

『卑怯とかそういう次元超えてるでござるう?!?!』

一方的過ぎる展開に、そんな声を上げる相手。

言うと思った、そんな感想と共に意地の悪い笑みが浮かんでしまう。

『——こんな格言を知っていますかしら?』

と、右側面から突然の弾幕と共に、そんな通信が入る。

『何?!』

キュラキュラと音を立てて、赤いレドームがやってくる。

『恋と戦争において、あらゆる手段は許されます。』

あなた達は喧嘩に卑怯も何もあるかと言いましたが、それは違います。

喧嘩は仲裁が入ればそこで終わり。決して相手を滅ぼすまではしない』

キラードームから、余裕のある声でオラージュは言う。

『我々ミューズ学園に戦いを挑むのは、喧嘩として成立は絶対にしませんのよ？  
常在戦場。』

売られた喧嘩は戦争まで昇華させる。

我々は勝負なんてする気はありません。

目指すは、圧倒的勝利。

後に残るのは、我々の旗だけです』

先ほどの会話の『勝負にならない』という意味、

オラージュは、その言葉に込められた意味を、さすがにすぐに分かりやすく、あの種の傲慢を同然のように説明する。

『な…!?!』

何よそれ、意味わかんないわよ!!!』

「言葉通りですよ〜?」

喧嘩を売ったのはこちらですが、まあ、

戦う以上は、圧倒的勝利か、戦略的勝利以外に認めるつもりはないんですよね」

ポロポロながらも戦意だけは立派な相手に、そう軽く言い返す。

『ふざけんじやないわよ!! そんな簡単にできると思うの!?!』

『——ええと、まあ、難しかったかな、とは思いますが』

と、さらに通信に、困ったかのような声が聞こえる。

気が付けば、イオナのピガザウロが、目視できる距離から顔をのぞかせていた。

『正直、デッドボーダーにヘルデイガンナー、両者ともいいゾイドですし、

何より、案外使い方もうまいので、リナちゃん、ああそのライガーゼロに乗ってる子が、やられちゃう可能性も大きかったんですけど、

ギリギリで間に合ってよかったです。

強敵でしたよ、あなた達は』

お気づきだろうか。

すでに過去形で話を進めている。

『その言い方ア!?!』

『既にやられてるみたいじゃないッスかあ!?!』

先にキレたヘルデイガンナーが、ビーム砲を放つ。

瞬間、そのビームが不自然な機動を描き、撃つたはずのヘルデイガンナーに命中する。

『ぎゃわあ!?!』

『ああ、言い忘れましたが、もう重力砲以外まともに当てられる兵器はありませんよ？

電磁誘導システムは優秀ですから』

ずうん、と自分の攻撃の重さに、うづくまるヘルデイガンナー。

ぐ、とテッドボーダーのパイロットがたじろぐ。

『さて。』

さすがにそろそろ可哀そうですから、お開きにしましょうか』

『了解』

と、イオナの指示と共に、リナはこのCAS最大の必殺技を起動する。

後ろ足のアンカーを下し、全身に配置された、信じられないカズのミサイルポッドすべてをあげ放ち、コックピット内のFCSがそれらの照準を相手一か所につけていく。

おそらく、キラードームも、ビガザウロも、ほとんどの火器を相手に向けている。

『ぐっ、ぐっの、』

『おっと』

瞬間、重力砲を撃とうとした瞬間、そこにビームが叩き込まれ、火器を沈黙させる。

あの距離で、とリナは相変わらずの『生徒会長閣下』の腕前を驚きと共に見ていた。

『重力砲が…?!』

『これで、チェックメイトです』

すでに、準備は終わっている。

『う、う、』

『まだやりますか?』

『な、何よ!!』

こつちにはまだ、爪と牙もあるのよお!!』

まだやるようだ……と、近くで見えていたリナは、こちらに飛び掛かる相手を見て鼻を鳴らす。

「その気概は嫌いじゃないです」

なら、と引き金に指をかける。

「バーニング、ビッグバ——」

その、デスザウラーですら行動不能にする攻撃を、一体のゾイドにぶち当てようとした、

瞬間、

そう、その瞬間、すこし高い位置から、バルカンのように何かが斉射され、さえぎられる。

『?!』

その場だけれども、突然のことに驚いていた瞬間、

『双方其処まで!!』

喧嘩で投入する火力をすでに超えているぞ!!』

と、大音量の通信と共に、ひゅん、と真上の道路に何かが突然現れる。

空間から湧きだしたように、黒と金色の、犬に似たゾイドが、背後に装備したバルカンのような武器を向けている。

「シャドーフォックス!？」

『わあ……!』

『シャドーフォックス、だと…!？』

『シャドーフォックスって、何?』

『なんだっけ……コマンドウルフっほいけど……』

『……オコーネル少尉……?』

それぞれ違った驚きの声を上げる中、そのシャドーフォックスから再び声が放たれる。

『その3人、君らの負けは確定している!!』

続けるだけ止めるべきだ、ゾイドのためにもな!!』

そしてそちらのミス・イオナフェルト含め3人!!』

やり過ぎだ!!』

そうして、謎のゾイドたちによって、この喧嘩は止められた。

\*\*\*

RZ—046 シャドーフォックス



共和国、ステルス高速戦中型ゾイドであるこのゾイドから出てきたのは、なんと全員が共和国軍の制服を着たもの達だった。

「まず、ミス・イオナフェルト！ あなたにはご自分の立場の自覚があるのですか？」

「……はあ、えつと……ごめんなさい中尉」

その中でも、指揮官らしき若い男性に、イオナは怒られていた。

「まったく……護衛する身にもなつてくださいい!!」

現在、共和国は、キダ藩主国連邦の内戦干渉で、ただでさえテロ行為の懸念があるというのに、まったく

「あうあう……」

ガミガミと言う彼のお叱りに、何を返していいのかわからない顔で困り果てるイオナ。

「……どゆこと？」

と、それをとお目に見ていたあのクロエというデッドボーダーのパイロットが、リナたちに尋ねる。

「いや、その……」

「うーん、言っつていいのかわいのか……」

しかし、リナたちは、その事実を言っつていいのかわからなかった。

それだけの案件なのだ。

「いやいや、これはどういうことか説明すべきでござるよなあ……?」

「別にいいじゃないツスカ、なんスか? 負けた相手に言葉もないんスか?」

と、やたらにらみつける他の二人も相まって、なんて言っつていいのかいよいよわからなくなる。

「うーん……」

「というか、オコーネル少尉さん、ずっといたんですね?」

「当たり前です、任務ですから!」

と、向こうの声がこちらまで聞こえてくる。

「私は大丈夫ですよ、お姉ちゃんとかの方が優先で」

「そういうわけにはいきません!」

なにせ、

と、次の瞬間、聞こえた内容にほぼ全員固まる。

「あなたは!!」

ヘリック共和国初代大統領『ヘリック・ムーロア』直系の子孫であり!!

現在の西方大陸共和国領の統括知事である『マリーナ・ムーロア』のご息女であらせられる、



加えて、容姿も整っている方とはいえ、普通な顔立ちのイオナ。まさか、誰もそんな家計の人間とは思わないだろう。

どうでもいいが、彼女のひいおじいさんにあたる大統領は、

実は容姿から名前を当てる問題最難関と言われるぐらい普通の顔である。

「……す、」

そして、3人は突然、

「すみませんでしたア

—— ツツツ!!!」

そう言っつて、土下座したのであった。

\*\*\*

結局、3人は離れた席に言っつてしまった。

なんだか謝りまくっていたが、イオナのある種毒のない笑顔と柔らかい対応で、遺恨は残らなかった。

まあ、きつちり当初の約束は守らせたが。

「はい、3ポンドステーキ「ウルトラザウルス」お待たせーっ!!」

どおんと、信じられない分厚さのステーキがやってくる。

「やった〜! これです、これ♪」

イオナは、それを目を輝かせて、上に載ったチーズと東方大陸風ソースに味付けされ

た肉塊を切っていく。

「はむ、はむ……んんん、幸せ〜♪」

まるでハムスターのようにほほを膨らませて食べる姿は……

可愛いのだが、かの共和国初代大統領直系、つまりは旧ヘリック王家の血筋とは思えない。

「ああ、他人のお金で食べるステーキ美味しいですよ〜♪」

「うーん、3人に悪いと思うからこの……♪」

そして、少々問題のある言葉と共に、やや上品にステーキを食べるリナとオラージュ。

この3人、いまの状態こそまさに、『勝者の余裕』だ。

「しかしまあ、我らがムーロア生徒会長殿も、すごいことしますよね〜?」

「あー、リナちゃん! 苗字言うの禁止ですー、生徒会長権限でー」

「職権乱用気味ですね、それ」

「それはともかくとして、それでも生徒会長なりの考えがあるのです」

と、イオナは若干むくれた顔で、そう言葉を紡ぐ。

「というところ?」

「まず一つは……明日の為。」

実は、離れている隙に、E組の放ったブルーデビルを全部破壊していたんです。

オラージュさんにハッキングしてもらって、一か所に集めて」

おお、とあの短い間によくやると感心する。

知らせなかったのは集中してもらったためか、という配慮も含め。

「もう一つが、今後の為に」

す、と人差し指を立て、不敵な笑みを浮かべながら語る。

「今後……?」

「我々の噂を、もうちよつと広めたくはないですか?」

C組のカリンさんの活躍や、この前のシユバルツ高等学校相手の勝利だけじゃ薄いです」

と、たくらみをを隠さない鋭い目で、そう語るイオナ。

しかし、その言葉に、リナは苦い顔を見せる。

「う……完璧な勝利ができないからって責めないでくださいよ……」

「あらあら、やつぱり気にしてましたか」

「リナちゃん、あの勝利方法は確かにひどいよね。」

陣地占領もあつたはずなのに、なんであの方法を?」

「私も気になります。何ですか?」

と、意地の悪そうな笑みで聞くイオナと、横でやはり柔和だか意地の悪い笑みで迫る

オラージュに、自分の汚点の理由を尋ねられる。

知ってる癖に、とは思うが……

「……陣地占領は言うほど簡単じゃないですよ。

私なら、あの濃硫酸の川の先に地雷原を敷いたうえで、陣地の周りに大型自動砲台を2門、そこも地雷原を敷いて、余裕があれば小型砲台を取り付けておきます」

「……え、ええ……??」

と、イオナは、もはや困惑、と言った顔をする。

「……相手の陣地も、そうだと?」

「もちろん、違いますよ!」

相手なら、この2倍は用意しているはず!」

「……石橋をたたき割って新築して通っているみたいですよ……」

「気持ちはわかるけど、リナちゃんフルモンティだなあ……」

「全裸みたいに言わないでくださいよ。バーナード・モントゴメリー閣下、地球の偉大な軍人の中では優秀な砲じゃないですか!」

自分のファンである地球の偉人をたとえに出され、軽く頭にくるリナ。

「まあまあ。」

でも、虎穴に入らずんば虎兇を得ず、も地球の格言だよ?」

と、イオナは語る。

「私ね、今年の内にもエウロペカップに出ようと思うんだ。

学校のみんなで、優勝を目指すの」

その、ある種途方もないセリフに、思わず二人は目を見開く。

「言うのは簡単だけど、難しいのも分かるよ？」

でも、今年の活躍はまだ来年にも生かせる。3年に一回の募集校だからだけど、そこも武器にできる。

だからまずは、周りにどんどん練習試合なりなんなり挑まなきゃ。

さっきの人たちには申し訳ないけど、そのための下準備に使わせてもらったんだ。

まずは北エウロペ大陸最強を目指すそう？

そして、西方大陸1のゾイド乗り高校に、そして次は全大陸制覇！

大丈夫。今年は一クラス規模でも、強豪校相手にぎりぎり勝てる程、優秀な子たちが集まっています。

……欲を出せるときに出さないと、後でする後悔がより深くなる。

でしよう？」

と、屈託のない笑みで問う。

ふむ、と思わず、問われた二人は考え、顔を見合わせ、笑う。



「じゃあ、まずはその素材を生かす準備でしようね。

来るお買い物解禁から、備蓄する弾薬やパーツ、各々の能力とそのクラスやチームの運用にあつたゾイドを選んで、早めに完熟訓練を済まさない」と

「各クラスの連携も強化しないといけませんね。」

役割が違つても、お互いカバーしあえるように」

二人の言葉に、何か核心を突いたような感触をつかむような笑みを見せる。

「そこは、私に任せてください。」

ひいおじいちゃん程、とまではいかないけど、

少なくとも、一つの学校をまとめ上げるだけの自信、あるんですよ?」

にこ、と笑うイオナ。

嘘は言っていない。そして慢心もない、そんな言葉だ。

「そのまま卒業後は、政治家の道に行つてまた大統領になつちやえばいいんじゃないですか?」

「それは、また別の人のお仕事♪」

私は、その別の人が安心して大統領ができるような国防大臣クラスの役職か、

じゃなかつたら、パン屋さんになりたいなく♪」

「落差が激しいです!」

ははは、と笑う3人。

と、

「なら、まだまだゾイド乗りとしては問題があると言わせてもらおうか、3人とも？」

そんな声と共に、あのオコーネルという軍人が歩いてくる。

「オコーネル少尉さん！ 護衛でここに？」

「ついでに、誰かさんの吹っ掛けた喧嘩のせいで披露した部下たち含めての慰労ですよ、護衛対象殿」

す、と軽く敬礼し、オコーネルは語る。

「3人とも頭はいいようだ。だが、まだまだと言っておこうか。」

明日は、実技テストと記憶している。

ミス・イオナフェルトも、その2人も、戦術や戦略は及第点だが、明日のテストでこの動きならば、苦戦は必須だろうな」

「……ズバズバ貴重な意見言ってくれますね……」

「しかも、間違いではないんですよね……」

「オコーネル少尉は固い人ですし」

「そういう家系の人間でしてね。生粋の共和国軍人。」

祖父の代からゾイドを駆り共和国要人を守ってきた。

まあ、だからまだまだ青い子らを見ると、口出ししたくなるのさ」  
さて、とオコーネルは3人を見渡す。

「おそろく、我々が唯一の観客となるだろう。

相手側も今の君らと同じレベルなら、君らがどう戦うかを楽しみに見ているよ。  
それだけが言いたかった」

きざったらしー、と漏らしても、はは、と笑うだけで、大人な対応だった。

「では、護衛任務を継続します!!」

失礼」

そうして、オコーネルは踵を返すように振り向き、足早にその場を去る。

「……こりゃ、」

と、リナはつぶやく。

「明日は波乱の日になりそうですね……」

その言葉は、

しかし、どこか楽しそうな感情を含み、周りも其れをくみ取って笑みをこぼす。

「……さて、どうなる事やら」

イオナは、そう言ってステーキをほおぼる。

明日の為に、精を付ける。

さて、結果だけを言うのであれば、  
\* \* \*  
次の日の『春の終わり砲火後作戦』は、白組の勝利だった。  
\* \* \*

## おまけ、です!!

ZAC2179年、『豊稷月』18日目

早朝、西方大陸北標準時4:45

「……………」

シャコシャコシャコ……と歯を磨くりズミカルな音が響く。

寝ぼけ眼という言葉をこれでもかと表現した顔で、メルヴィンは歯を磨いていた。

場所は、これが校舎なのか、と思える程に鉄板となにやら膨らんだ四角い何かで装甲化された校舎の屋上だ。

「ガラガラガラガラガラ……くちゅくちゅ、プツ!!」

近くのバケツに、口を漱いだ水を捨て、メルヴィンは朝もや漂う森林を眠たげな眼で見ろ。

「……………もう少し、つてところかしらね……………ふあ……………」

欠伸まじりにそう言って彼女は、森の先を見る。

朝もや交じり、西のまだ霧の濃い方角。  
湖。

おそらく、敵の攻めてくる方向を。

「委員長さーん！ できましたー！」

と、背後からそんな声が聞こえる。

す、と服のえりに刺していた眼鏡をかけ、すつきりした視界の先にいる一団を見る。

そこには、ジャージ姿にも拘わらずナチュラルメイク済みのカリン。

そして、いつもの番組スタッフ3名。

その足元には、大鍋で何かが煮込まれている。

「リナさんに教わった「本格派はプチギレるロイヤルミルクティー」できましたよー？」

「味はどう？」

と言いつつ、お玉ですくってマグカップにそれを注ぐ委員長。

「リナさんみたいにうるさくないから、甘くておいしいですよ♪」

「よろしい。朝は甘いものとカフェインに限るわ。」

ブラックコーヒーは苦手だけどね……恥ずかしながら」

ふーふ、とすこし表面を覚まし、慎重に一口。

……熱い。だが、それがいい。

朝の目覚めの一杯は、これでいい。

「今回は、リナさんが向こう側なんですね〜」

「大問題ね。」

それだけで相手の脅威度がぐんと跳ね上がるわ」

と、カリンの言葉に、そう答えるメルヴィン。

いつになく、険しい表情だ。

「ところで、相手さんの大将であるイオナ生徒会長、だっけ？

番組の為に聞くけど、強いんですかい？」

と、ディレクターのいつもの胡散臭い男……名前は何だったか……がそう尋ねる。

「そうですね……まあ、番組さんとしては面白くないことを言えば、

確実にこちらが負ける程度には強いでしょうね」

え、と3人のスタツフ以上に、カリンが驚く。

「そ、そんなに……?？」

「強い強い、かのムーロア家の血筋をいかに発揮しているわ。」

ゴジュラスに乗せれば一騎当千、普段乗ってるビガザウロですら別格のゾイドのように動かすわ。高速戦ゾイドや飛行ゾイドは苦手らしいけれどもね？

ただ、それ以上に、

イオナフェルト・ムーロアは、この学園最高の知将で、政治的手腕も学生のレベルを超えているわ」

と、面白くなさそうに言うメルヴィン。

「そ、そんな……あの、生徒会長の言葉のお辞儀でマイクに頭をぶついたり、家庭科の実習でみんなからクッキーをもらってうれしそうに完食してたりする生徒会長さんが……？」

「あなただって、可愛い顔のアイドルでもバーサークフューラーのパイロットとして優秀じゃないの。今回も頼んだわよ？」

そして、そんなマスコットみたいな生徒会長でも、

この学園最強のN組の委員長、指揮官を務める人材なの」

ふん、と忌々しそうな声を出すメルヴィン。

「彼女が悪いわけじゃないけど、王族の身分でさらに優秀なんて嫉妬しちゃうわよね。」

民主主義と言いつつも、ある部族しか惑星Zi最大の共和制国家のトップに立てないとも言う感じで」

「……委員長さん……??」

「おっと、ごめんなさいね。ちよつと個人的な話になったわ。」

ともあれ、あの会長は侮れない。



最悪に最悪を重ねた状況になることは必須よ」

と、敵の来るであろう方向を見据え、その言葉を紡ぐ。

「……こちら側からくると思えますか？」

えつと、詳しいことはまだわからないことだらけですけど……防御の薄い方を狙うのが当然じゃ？」

「そのためには、厚い側がある必要があるの。」

逆を言えば、厚くしておけば必ず、薄い方向に行く。

……でも、こうも考えられるわ。

何らかの方法で厚いことを無理やりぶち抜く」

え、と思わずカリンは疑問の声を上げる。

「でも……この前の授業で、『強点突破は愚の骨頂』だって、」

「そこが、強点たりえたら、の話よ」

と、至極もつともな意見を、不穏な言葉で一蹴するメルヴェイン。

「……!？」

カリンは、思わずこの校舎の周りを見る。

霧に覆われたこの装甲化した校舎、その壁に空いた穴から、ダブルガトリング使用で

たたずむ、レッドホーンが5機。

E組のゴルドスを、ロングレンジバスターキヤノン使用にしたものが、8機。

イグアン、重装型ゴドス、ハンマーロック、それなりの数。

ゴジュラスが、バスターキヤノン装備2機。

——そして、N組揚陸部隊最強戦力『デスステインガー』が一機。

「こ、これ……相手は、どうやって突破するんです……??」

乾いた笑みが漏れる程、すがすがしい戦力投入。

普通なら、余裕の火力です、とでも言いたいほどで、実際テレビクルーの皆さんも、絵になるなあなど言うほどだ。

だが、メルヴィンは、まったくもって不安な表情のままだ。

(幸い偏つてこちらにいる航空爆撃部隊は薄い方にもすぐ行けるよう飛行場を配置している……そちらから機動部隊が来るはずとはいえ……)

ふと、霧の先にある湖を見る。

(敵編成は、A組が偏ってしまったせいで機動力はある物の、火力に関しては若干不安要

素がある……かといって、先ほどから『電波が届かない場所、レーダーが反応しない場所』が増えているのは、中々小型でも強力な電子戦部隊がいるため、そしてもう活動を始めているため。

そして、あちらには、主に護衛戦闘機部隊とはいえ爆走もできる万能機がそろつていて、航空支援もしてくると踏むべきでしょう)

一口、紅茶を飲む。

甘いはずのその味が、だんだんわからなくなってきた。

(何より、相手はセイスマサウルスが一匹いる。N組の最強火力ね。

デステインガーも強力とはいえ、射程においては向こうが上。

随伴は駆逐艦仕様のいつものピガザウ口数機ね。

この大艦隊は、この森を抜けざる負えないはず。

ここまで集中した戦力は観測しているはずだから、侵攻されてはまずいもの。

——普通ならそう思うから、薄い部分にセイスマを送ることはできない)

長い考察だが、どうしても、ある接続詞を付けざるを得ない。

「——でも、相手はかのムーロアか」

不安だ。

よりにもよって、部隊配置や運用に長けたリナが向こう側だ。

自分も能力で劣っているとは思いたくないが、しかしその優秀な参謀を扱うトップは決して侮れない相手なのだ。

「どう出る？　イオナフェルト・ムーロア生徒会長殿？」

そろそろ、地平線から太陽が顔を覗かせるころだ。

襲撃は近い。

\*\*\*

『じゃあ我々、高速戦部隊は、『セイスモサウルスの随伴』として頑張ります！』

「リナちゃん、お願いね？　ゴルヘックス一機とグランチャー4機だけの電子戦編成で  
ごめんね？」

『イオナ！　私とセイスモをこっちに向かわせるんだから、精々その『おんぼろ大統領』  
で足を引つ張らないようにね！』

「頼りにしてます、ミリシヤさん。『タコライス君中隊』頑張ってください♪」

『『そのうまそうなネーミングなんかならない（ですか）？』』

び、と、最後の言葉には反応せず、通信を切る。

ふう、と、ため息まじりに、今いるこのコックピット——というよりは、戦闘指揮所である『斜めになっているために、本当は横だが真上の』眺望を楽しむ。

「……………霧が深いなあ……………でも、静かで好きかも」

あたり一面、水と霧。

ある種、自分がどこへ向かうべきか、どう進むべきかわからないこの光景を、そうと一言で片づける。

——まるで、道は自分が作るとでも思うかのような、自信の表れだ。

『会長、冗談はよしてください。』

さつきからレーダーの乱反射に、位置情報特定の衛星電波も届かず、困ってるんですから」

と、そんな男の声が聞こえる。

「トシキ副長、二つ訂正があります。

一つ、会長ではなく、艦長!! と呼びなさい。艦長、ですよ? 艦長。かつこいいでしよう?」

二つ、このN組の情報、諜報を一手に担うトシ君副長が、そんなわけありませんよね?」

と、自分の戦闘指揮所の正しい角度から見て前方、

その、斜めにそびえたつ影の中腹に在るであろう、相手にそう問いかける。

『……では、艦長殿！』

自分だって、E組に入るか否かなほどの適性はありますが、決して万能ではありません。ん。

この霧の上、E組班のジャミングウェーブも乱れ飛んでいて、とてもじゃないが……。「しかし、電子戦においてあなたの力の比重が大きいのも事実です。」

E組から空白周波数帯パターンのデータはもらっているでしょう?」

不確定要素を排除したいという副長の言葉を、しかし笑顔でさえぎるイオナ。

『く!!』

……つまり、やれってことですか……ツ!

クツ……人使いが荒すぎて、胃が痛くなってきた……!!』

『ハイハイ、一人ともそこまでだよ?』

トシ君はお腹が弱い上に貧血なんだから、いじめすぎると倒れちゃうよ?』

と、さらに上の位置からそんな語尾の伸びた声の通信が入る。

『っ!?!』

……コユズ・ミノワ航海長、余計なことは言わなくていい』

『いいじゃない、トシ君〜♪』

お互い長い付き合いなんだから〜。もういつそ、付き合っちゃおう?』

『おいユズ!! お前、お前なあ!?!』

『私も今ならトシ君もありかも〜♪』

『そういうことは、もつと、こう……』

『……ふーん、私じゃダメなんだー』

『あーもう、俺にその気はない!!』

いや、お前に魅力がないわけじゃないが……だがなあ!?!』

二人の男女の、なんだか青春の香りのするいつものやり取り。

微笑ましそうに、ついでに意地の悪い笑みを浮かべて、黙ってイオナは聞いている。

どうぞどうぞ、続けて続けて。

『——ヒューヒュー!! お暑いデース! お二人さん!!』

『東方大陸に伝わる幼馴染の会話は最高ダツゼ!』

しかし、そんな茶々が入るのも、まあお決まりだ。

正しい向きとすれば両脇は、黄色いキャノピーに守られた、ガンナーコックピットであるはずの一課荒響く、陽気な掛け声。

そこに、小柄な二人の、同じ顔——は失礼だが、9割9分にた顔の小柄な女の子た

ちが、そうマイクを使う必要があるのかという身振り手振りを見せる。

霧でうつすらと、なのにそんなシルエツトが見える動きだった。

「キリエ、キリノ、両砲雷長！」

こういう聞いててハッピーなやり取りに茶々を挟むのは、個人的な権限で許しません  
!!

『なんデスと!?!』

『怒られたツゼ!?!』

な、とついでに副長の声も響く。

『そんなことに権限を使わないでください、会長!?!』

「今は艦長と呼びなさい、副長！」

そして、却下です!! 存分にイチャイチャしてください!!

『やったー、公認だよー!』

『こんなの認めてたまるかあ——ツツ——!!!!!!』

と、叫び虚しくも、周りの女子たちは笑っている。

『——あー、こちら尾部機銃の機関長だがー』

と、その言葉と共に、真後ろの方角にそう声が聞こえる。

「ブライ機関長、こちらC I C（中央戦闘指揮所）。



機関チェックが終わったのですか？」

『おう、艦長殿！』

この艦、いや『ゾイド』に乗る唯一の男のダチがいじられちまう程度に手間取ったが、ま、俺もD組の連中と話し合う程度にやメカいじりが好きだからな!!

補機動力源（サブジェネレーター）、1番から8番までチェック完了だ。

勝手だが、アイドリングは始めさせてもらったぜ？

あとは、ゾイドコアに——主機関に目え、覚ましてもらおうだけだあ!』  
その年齢に似合わない野太い声を聴き、不敵な笑みが自然に浮かぶ。

「——機関長、もう一度報告求む。」

補機動力源、チェックどうだ？」

そして、言動を正し、改めてそう相手へと問う。

『補機『反荷電粒子リコイルジェネレーター』、1番から8番までチェックよし！  
補機始動済み、主機『ゾイドコア』へ動力伝達準備よろし!!』

報告を聞き、す、と座るシートの脇から、一つある物を取り出す。

それは、白い官帽。軍や警察などが制服着用時にかぶる物とでも言えばいいか。

白く、頭頂部とつばの間に黒いラインが入り、真正面にこのミューズ森林学園の校章が入る物。

何のことはない、制服の一部の帽子だ。

だが、これをかぶる時、イオナは普段の状態から変わる。

ただの、ほんわかした女学生から、

この学校を統べる生徒会長、そして、指揮官へと。

「主機ゾイドコア始動!!」

全艦、電磁砲雷撃戦用

——う意ッッ!!!」

『全艦！ 電磁砲雷撃戦用

——う意ッッ!!!』

『電磁砲雷撃戦用

——う意ッッ!!!』

『主機、ゾイドコア始動!!』

直後、腹の底から鳴り響く、鼓動のようなけたましい音が鳴り響く。

ゾイドコアが、活性化を始める。

——クオオオオオオオオオ………!!!

この、ゾイドが鳴く。

それは、目覚めのあくびのような、そして戦意の表れのような、甲高い声。  
「傾斜復元!!」

船体を起こせ

ツツ!!!」

『船体起こせ』

せ

ツツ!!!』

『船体、左斜め30度より急速回復』

ツツ!!!』

ゾイドコア、そしてそれを補うサブジェネレーターの唸りに負けない声で、指示を飛ばし、報告する。

長い首が、湖に沈んでいた体が、ゆっくりと戻っていく。

「ハイドロジェット始動!! 推力上昇、1160トン!!」

行きます!!

ヘリック・ムーロアII!! 抜錨!!!」

——クオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!

その、巨大な影を持つゾイドが、完全に目覚める。

『ヘリック・ムーロアII、抜錨——ツツ!!!』

『4番、5番、動力伝達切り替え——!』

ハイドロジェットへ出力!!』

『ヘリック・ムーロアII、抜錨!!』

おーもかーじ!! 40!!』

そして、湖を進みはじめ、目的の場所へと向かっていく。

「……これが急に出てきて、対応できたら、

メルヴィンさんの評価あげちゃいます……!」

その、不敵な笑みを乗せてすすむ。

\*\*\*

午前5時半

『——緊急警報!! 総員起床!! 戦闘配置につけ!!』

敵襲だ!!! ビガザウロ4機と、未確認の超大型ゾイドだ!!』

けたましく鳴り響く校内放送、まばらながら急いでいることのわかる足音、起動する

ゾイドの声、喧噪、移動を始めるゾイド群……

「それで?

未知の『超』大型ゾイドっていうのは?」

学校の備品である、大型電子戦ゾイド『ゴールドス』。

その、大型ミサイルポッドなどで改造した機体に、メルヴィンは乗っていた。

『報告によれば、機体側面に大型火砲を4門搭載した首長竜型ゾイドだつてさ！』

ジャミングと霧の濃さ——つーか、これうちの『ジャミングミストシステム』だよ！

ゴルヘックスでもジャミング変遷パターン解析しなきゃ、有視界でもそれ以上のことは分からないやつ!!

けど、これって……!』

「『大統領』だつて言いたいわけ？」

E組、DJサオリンの報告に、静かにデータリンクシステムを確認し、目標を現す表示された画像をにらむ。

『マーム、発言の許可を、マーム!!』

そんな会話を割り込むように、別の相手から通信が入る。

「N組のエイル・マリニコフさんだったかしら？」

「ゴジュラスマリナーの子よね？」

『イエスマム!!』

「それで？ 発言を許可するから簡潔に言いなさい」

と、メルヴェインの催促に、勢いよく『ハッ!』と答えるエイルという生徒。にしても、まだ幼そうな気もする高い声音のわりに、勢いのいい声だ。

『マーム、自分たちは常々、『最悪の事態を想定し、それでも勝利し生き残る事』を信条、そして行動指針にしております!!

今回も、あの我がN組が提督、いや生徒会長が!!

何らかの方法で『大統領』を改修!! 旗艦にしていると思われまます!!』

『——横から失礼だけど、それは難しいはずだよ?』

しかし、その意見に反対の声も上がる。

それは、近くにいたハンマーロックよりも小さなゾイド——ゴーレムからだ。

「D組の……?」

『ヒバリ・ウエリントン。バリ子でいいよ、副生徒会長。』

それより問題は『大統領』さ、

あんなバカでかい機体、サブジェネレーターそろえるにしたって何使えばいいんだ? ゴジユラス用でも、まだ足りないぐらいだ。

普通に考えて、今の大統領は瀕死の狸さ!』

D組は、ゾイド整備、輸送のプロだ。

『大統領』というゾイドも、彼らにかかれば、詳細なスペックまで把握される。

「そうなの……」

でも、本当に不可能なの？ 全く可能性がない。そう言い切れるの？」

しかし、それでも尋ねる。

何せ、来ているという確信があった。

悪い予想は9割当たる物なのだから。

『ゴジュラス用サブジェネレーターでも足りないとなると……』

それでこそ、ハイパーリンググチャージャーでももってこいつて感じだよ!!』

と、ゴーレムを器用に肩をすくめさせ、そう答えるヒバリ。

……それもそうだが、やはり不安だ。

(ここうやって不安にさせるのも相手の策略よね……)

なら、攻撃的に『撤退』するのみね)

その判断を下し、命令を出す。

「前期傾注!! 攻撃を開始する!!」

デスステインガー、及びレッドホーンを中核とした機甲部隊は、前面に出て敵を迎撃。

航空支援は別動隊の高速戦部隊及び、後方にいると思われるセイスマサウルスを迎撃

するために望めない!

小型群はビガザウロのミサイルを迎撃することに専念!! ゴルヘックスはジャミング解析よりも敵ミサイル攻撃のパターンを小型群に送り、同時に火力支援を絶やさないと!!

ゴジュラスも火砲支援よ、今は前に出ないで!!

その後の予定は、『プランD』よ!! 深追いは禁物と肝に銘じておきなさい!!  
了解、と各部隊からの返答が来る。

「全部隊に、火気使用自由!!

攻撃開始!!」

直後、自身の乗るゴルドスのロングレンジバスターキャノンから砲弾を放つ。

まずは、火力を叩き込む。大まかな場所しかわからずとも、『射撃』ではなく『砲撃』であるのでいいのだ。

これは地ならし。あくまで『整地作業』だ。

\*\*\*

『私に続いてツ!!



レッドホーン部隊は、ビーコンの届かない距離以上離れず、近づかず、散開隊形で進んで斉射!!

ミサイル来るわよ、小型たちは迎撃お願い!!」

デスステインガーは、頭部のAZ35ミリバルカンを斉射しつつ、進む。

『オラオラア?!?!』 出てきやがれこのクソ臆病首長共があ?!!』

『こんだけ斉射しても、霧が深くても見えないな…?!!』

『いるはず!! ノイズだらけでも、もうレーダーに反応している!!』

進む一団は、この霧の海ともいえる森の中、未知なる敵に警戒し、恐怖する。

何がいる……?」

いや、おそらくは、ビガザウロの一団。

旧式の中でも旧式、しかしそれを改造し、駆逐艦とした大型ゾイド。

だが、まだいる。

何か……得体のしれない緊張が、無作為に発砲する一団を襲っている。

まるで……ここは魔の海域（トライアングル・ダラス）。

何がいても、おかしくはない……

と、その時、デスステインガーの足が止まる。

『どうした!? 切り込み隊長さんよお!!』

問いかけに代わりにこたえるよう、突如デスステインガーは荷電粒子砲を起動させた。

『おいおい、暴走でもする気か?』

『そうかもね。』

でもおかしいわ? この子、おびえてる』

低く唸るデスステインガーは、おもむろに荷電粒子砲を放つ。

一瞬、霧が一直線の光によって晴れ、円のような穴から青い空が見えた。

『……………』

光も収まれば、その穴も霧に押しつぶされるように消えていく。

……………何も、いない?』

『前方!! 高初速移動体確認!!』

『しまっ…?!』

しかし、直後、霧を穿つ巨大な砲弾が、デスステインガーを襲った。

\*\*\*

『きやあああああああ?!?!』

『デススティンガー、頭部損傷!!』

動けるか!?!』

『大丈夫!!』でも、向こうの攻撃が来てる!!』

『おいおいおいおいおいおい?!?!』

無線は大混乱だった。

光が、ビームや、砲弾や、ロケット、ミサイル、そんな砲火が霧から見え、そして巨大な影を映して消えていく。

「第2次火砲支援開始!!」

前線、下がちなさい!!!」

『了解!!』

ゴルドスをはじめとした重砲撃部隊が、ようやくレーダーにとらえたそれを、撃ち始める。

「悪い予感はある物ね…!!」

すでに、小刻みな自身に似た揺れがここまで来ていた。

ようやく、レッドホーンの赤い色が、あちこち破損した部隊たちが、そして、頭部装甲がむき出しになったデススティンガーが、霧の中から後退してくる。

ドシンン………ドシンン………グウウン、ドシンン………!

その音が、こちらに近づいてくる。

もはや、その、姿が巨大な影になり、見え始めていた。

「姿が見えた!! 撃って撃って!! 小型群は装甲陣地の後ろ側に!!」

やはり、悪い予感は当たる物だ。

その、上に長く、横に太く、大地を踏みしめ、ゆつたりと歩く姿を見て、思う。

ドシンン、と何度目かの足音と共に、その姿が霧の中から出てくる。

————クオオオオオオオオオオオオ————

ツツ!!

その頭、共和国伝統のクリアキャノピーに覆われた頭部は、丸く突き出た角のない竜の頭。

草食竜独特の四角い歯を覗かせ、長く、途中にコックピットが埋め込まれた首を伸ばす。

大きい。

C組として、この前戦い、辛くも撃破したあの、デスザウラーよりも。

その4足の胴体だけで、ゴジュラスが小さく見える。

その、巨大な胴体の脇に、4つの巨砲を乗せ、力強く進むゾイド。

惑星Ziにおいて、ホエールキングを除き、長らく最大級の巨体を誇り、

その戦闘能力は、デスザウラー出現まで無敵時代を築き上げ、

今も、『海戦無敗』『大艦巨砲主義』を貫く、共和国超ビガザウロ級竜脚類型巨大戦闘艦艇ゾイド。

ある時は、陸上をも支配する大戦艦。

ある時は、戦場の総指揮をつかさどる移動大本営。

ある時は、けん引する甲板に飛行ゾイドを乗せた、巨大空母。

その名は、

RZ-037 ウルトラザウルス

旧ヘリック共和国海軍所属戦後型第2世代ウルトラザウルス『プレジデント級』一番艦ネームシップ・現行ミューズ学園N組練習艦及び総旗艦

『BBG-09 ヘリック・ムーロアII』

『艦長!! 敵要塞化校舎、射撃可能距離に入りました』

副長の言葉に、静かに帽子の下から鋭い視線をイオナは見せる。

「目標、敵要塞化陣地。」

350ミリリニアキャノン全自動射撃!!」

『目標——う!! 敵要塞陣地ツ!! 350ミリリニアキャノン、全自動射撃——キツ!!』

4門の巨砲が、その要塞に向かい、その砲口を向けていく。

『方位盤、目標を補足。全自動照準、手動にて誤差修正!!』

『リニアキャノンに動力伝達、速力、低速にまで下げ!』

3番、両舷リニアキャノンへ動力集中!!』

『!!』

観測より艦長へ報告!! 敵デススティングァー、荷電粒子砲チャージ確認!!』

しかし、敵も黙っているわけではない。

頭部を破壊されても——いや、破壊された怒りからか、

すでに、デススティングァーの荷電粒子砲はチャージがなされ始めている。

「機関長! 1番、2番予備動力、『シールド』へ回せ!!」

しかし、イオナは表情を変えず冷静に命令を下す。

『艦長!! 防げるのはこれで一回ぼつきりかもしれないんですけど?』

「デスステインガーと言えど『量産型』」

真オーガノイドでもなければそれで十分です」

『了解…!!』

イオナの普段を知っている人間は、きつと驚くだろう。

彼女の、ここまで不敵な自信にあふれた笑みを見れば。

\*\*\*

『落ちろッ!!』

ヘリック主義者の牙城があッ!!』

共和国でいえば問題発言待ったなしの言葉と共に、デスステインガーの荷電粒子砲が放たれる。

まっすぐ飛んだそれが、ウルトラザウルスを真正面から襲った瞬間、

白く、球形な半透明のフィールドが、荷電粒子を拡散させ本体を守る。

『!?!』

『Eフィールド!?!』

「違うわ!!」

あれは、『反荷電粒子フィールド』!!!

あのウルトラザウルス、反荷電粒子リコイルを、それも内部動力として『ミニمامローリングチャージャー』を装備している物を搭載しているのよ!!!」

『うえ!?!』

まさか……アレ全部こつちが使つたはずじゃ!?!』

「やられた……そういう事……!?!」

その装備の意味に気づき、メルヴィンは悔しきでコックピットの壁を殴る。

\*\*\*

「学校の予算配分や備品整理項目に一番口を挟めるのは誰でしょうか?」

その会話を聞いていたわけではなく、しかしおそらくはそんなことを言っているだろうとそう言葉を紡ぐ。

職権乱用、とはこのさい誰も言うまい。

『艦長、今ので1番2番が過熱し冷却中。現在は停止中。』

しかし、主砲リニアキャノンへのチャージは完了しましたぜ?』

『側的完了。誤差修正。上下角よし!』

『艦長、発射準備整いました!!!』



よし、とイオナが叫ぶ。

「発射あ—— ツツ!!」

『発射あ—— ツツ!!!』

『『発射あツツ!!』』

復唱、そしてガンナーコックピットの二人が引き金を引く。

ズドオンツツツ!!!

それ以上に表現のしようのない強烈な爆音で、350ミリ口径の砲弾が放たれる。

『弾着あ—— く!!!』

ひゆるひゆると音を立て、砲弾が山なりに飛ぶ。

『……………今ツツツ!!』

瞬間、装甲化した校舎の一部が、盛大に噴煙を上げて破壊される。

巻き込まれ、半壊した校舎や装甲に押しつぶされ、一機のゴルドスが生き埋めになる。

なんとこの威力か。

『ワーオ……………これが本気の大統領の一撃デス?』

『鎧袖一触だツゼ……………すごい!』

「これが、N組総旗艦たる『大統領』の威力です。

さすがひいお祖父ちゃん、いい子いい子♪」

『……しかし、これは……』

負けた方が、修理するんですよね……俺、そうになったら……痛た……』

『トシ君、こういう時は勝つことを考えよう?』

『そうだけ、勝つたら勝つたで自軍の整備だ!』

いやあ、D組連中がいないと、きついでえ?』

「そういう事です。」

油断はしちゃいけません。まだ初撃で成功しただけなんです」

これからです、と相手を見て、イオナは言う。

笑っている物の、決して油断せずに。

しかし、勝つことを考えて。

\*\*\*

「撤退!! まず体制を立て直す!!」

後ろの状況!!」

『セイスモのせいでヤバイ!! 以上!!』

「チツ……丸く防御を固めるのは悪手、とはいえこれじゃあ……!!」

自軍の損耗は、大きい。

まだ、数十分の戦闘だというのに。

「味方と合流後、編成を変更!!」

後ろのセイスモは怖いでしょうし、おそらくは包囲殲滅つていうリナらしい展開になるわ!!

でも、食い破るにもまだ手詰まりよ!! 合流して可能性を増やす!!」

『了解!!』

嫌な展開だ。

しかし、さすがはイオナフェルト・ムーロアと言うべきか。

「……個人として、その能力、手腕に敬意を。」

しかし、まだ終わりと思わないで…!!」

メルヴィンは、まだ闘志を失わなかった。

\*\*\*

その後、結果だけならば、赤組は敗北し、白組の勝利となった。

だが、ウルトラザウルスを中破、損耗率24%まで追い込み、セイスモサウルスを撃沈し、自軍は27%の損耗の時点で、全滅前に『投降』した手腕は、ある種指揮官としてメルヴィンも十分に優秀だった証明となった。

おそらく、遠巻きに見ていた教師陣の評価も、なかなか平均点の高そうな様子になったであろう。

そして、『春の終わりの砲火後作戦』は終了した。

\*\*\*

「お疲れ様です」

と、テスト明け休み前、1日の超スピード校舎修理を終えたメルヴィンがC組の教室に入ると、そこにイオナがいた。

そして、その手にある紅茶を差し出してきた。

「どうも、会長殿。」

さすが、N組をまとめるだけあって、恐るべき指揮能力だったわ」

すす、と今の時期にホットは……という思いも消える、さわやかなレモンティー、すこし砂糖多めのそれを味わう。

「あはは……事前に物量や兵站でも細工して用意を整えてごり押ししただけですつて」

「それができてこそ、一流でしょう?」

ティーカップを、手身近な机に置き、そう言葉を紡ぐ。

「でも、それでもあそこまで苦しんだんです。」

「事実上引き分けですよ」

「勝者の余裕、そうとしか思えないわよ？」

「損害が全滅間近で「勝利」と言えるほど、私も欲が薄くなくなつて」

「は、と少々剣呑な雰囲気ですらう二人。」

その割に、不思議とウマが合っているようにも見える。

「だから、今年度の『お買い物』において、C組へかかる補助予算、すこし多めにします」

「ちよつと、それは職権乱用じゃない？」

「優秀な人間に、ちゃんとした報酬を払わないのは、愚か者であり自殺志願であり、何よりこの世全ての法則に逆らう非論理的で非科学的なことである」

「かの帝国主義者にそまつた裏切り物、かのゼネバス皇帝や、野蛮な暗黒軍の皇帝ですら、そんなことはしない」

「ひいお祖父ちゃんの言葉です。今使うにはぴつたりでしょう？」

「でも、そこに住む限り規定や法に従うのが人間の摂理、とも言うわ。」

「私は、不正するにしろそこまでする気はないの」

「禁止されなければ率先してすべきである。」

という理屈で反撃しますよ? 別に、書類上も学校の校則上も問題ありませんし」

メルヴィンの反対の言葉に、次々と反論を用意するイオナ。

また負けた気分だ……嫌ではないが、いつか反撃してやろうと、メルヴィンは心に決める。

「……ありがとう、生徒会長殿」

「いえいえ。当然の対価です♪」

「何の?」

「あなたの未来の」

「そっちの未来じゃなくって?」

「もちろんそっちも」

ふん、と思わず言ってしまう。

この、一見人畜無害な少女は、一体自分の何歩先を行っているのか……

「……負けたくないから」

「そうでなくっちゃ」

「予算、ありがたく使うわ。」

今度、組どうしの練習でコテンパンにしてやるから」

「装備だけ強化だったら、嫌っちゃいますからね?」

「そうならないよう、努力するわ」

紅茶ありがとう、とすべて飲んだうえでカップを返す。

メルヴェインは、じゃあね、とだけ言つてそのまま帰つていった。

「……ふふ、」

見送り、イオナは楽しそうに笑う。

「当たり前かな、この学校。私の夢にもぴつたり」

そういつて、ただ無邪気に笑う。

手際よく片づけをして、窓から外のピガザウ口に乗り込む。

「これから3年間、楽しくなりそうだね」

そして、彼女も帰路に就く。

途中、何処で寄り道して何を食べるか考えながら。

「ふんふふーん♪ うふふ♪」

これからの事を考えて、ニコニコと無邪気に笑う。

\*\*\*

季節が、変わる。

そして、新しいことが始まる。

\*\*\*

## 第6話：新ゾイド、買います

### その1

ZAC2179年、『新生月』4日目、

西方大陸某所、午後8時

『そちらに行つたぞ!! 収束率を変えてビームを叩き込め!!』

『駄目だ!! LCでも撃ち抜けない!?!』

『ゴルドス、何をやっている!?! 応答しろ!!』

そこは、何かの試験場だった。

コマンドウルフ数体、ゴルドス2体の部隊——その仕様から、共和国西方大陸方面部隊の一段と思われるもの達が、何かと戦っていた。

ゴルドスの主砲105ミリ高速レールガンが発射され、相手の小型ゾイドへ当たる。

吹き飛ばされ、地面に倒れ込み——



そして、フルフルと首を振り、立ち上がる。

『……冗談だろ…!?!』

いくら、旧式化していても、ゴルドスだ。

小型ゾイドに引けは取らない——そう思っていた。

鈍く光る、銀色の装甲。

まるで、骨格標本、それを外骨格として纏う、ラプトル型ゾイド。

ガンズナイパーではない、レブラプターでもない。

そのゾイドは、今まで誰も見たことがないゾイドだった。

そのゾイドの口に、赤い炎が集まり、放たれる。

『ぐっ…?!』

大型に反し、装甲の薄いゴルドスが二つの意味で悲鳴を上げる。

ポン、ポンとも聞こえるその『火球』は、数発でゴルドスを沈黙させた。

——小型ゾイドの火力とは、思えない威力だ。

『これが…!?!』

炎上する機体。システムフリーズの警告音。

その周りで、無数の銀色のゾイドたちに蹂躪される味方機。

その光景で、理解する。

これが……これこそが……!!」

『バイオ……ゾイド……!!』

銀色のゾイド—— 『バイオゾイド』の、性能を。

\*\*\*

翌日 中央大陸 『デルポイ』、ヘリック共和国首都「ヘリックシティ」のあるビル

ブン、とその銀色のゾイドの姿が止まり、きゆるきゆるとピントの合った画像に戻る。  
パチツと言う音と共に、壁際にいた一人がこの会議室の照明を付けた。

薄暗い部屋に明かりがともし、長机をU字型に囲んで座る、軍服、制服、私服、ドレスにスーツ、何とも統一感の無い、しかしどこか『似た者達』の雰囲気醸し出す面々が現れる。

彼らは、『共和国戦闘機獣産業推進委員会』と俗に呼ばれている集団である。

昨今、惑星Ziにおけるゾイドバトルの普及は、実は国家間の戦争無き間、兵器産業が衰えすぎないため、そして経済におけるゾイド関連の比率から、経済的な衰退を避けるべく、という面から、国家そのものが推進している面がある。

いわば、ゾイド産業、もつと言えば兵器産業が衰え過ぎないため、もつと言えば国が弱くならないために、ゾイドバトルを盛んにしている人々なのだ。

ゾイドバトル連盟に働きかけ、ゾイドバトル市場に旧式化した軍用ゾイドや兵器を流し、なおかつ稀に実験機や実験兵装を、実地に近い形で試験するために流し、その影響で負の面を少なく保つよう、最善の方法を行う。

単純に、ゾイド通しの決闘やその発展の戦いを『スポーツ』『文化』として残していくだけでなく、

その市場としての価値、国力の安定と発展、兵器産業が衰退し過ぎるのを防ぐという名目で、戦闘機獣ゾイドの研究や開発を共和国関連においてスムーズにしていくために、具体的な計画を練る機関。

それがここ、左巻きや平和主義者に悪の親玉扱いも受ける『共和国戦闘機獣産業推進委員会』である。

そして同時に、

他国や自らの国に属さない企業の最新兵器を徹底研究し、

対策を練る場所でもある。

「……これが、我が共和国軍西方大陸方面第3機甲師団、第2仮想敵（アグレッサー）部隊による、新興ゾイド企業『Dーガルド・ユニオンカンパニー』による新製品、

いえ、まったくの新概念のゾイド『バイオゾイド』の主力小型機、

『BZー006 バイオラプター』の、性能試験映像です」

壁際に立つ、共和国陸軍兵站部参謀補佐中尉『ジェリコ・カール』は、静かにそう周りに説明をした。

その顔には、言い知れぬ緊張と、どこか歯がゆさの残る感情を見せていた。

「いやはや、驚きましたなく、ねえ、見ました？ 見ましたみなさん!？」

あれ、中口径荷電粒子弾ですよ、アレ!!

いや、うちより先にやっちゃうか……!! あー、負けちゃったなー、すつごいな  
く？」

と、眼鏡越しにそう、どこか不真面目な物言いをするのは、共和国老舗ビーム兵器メーカー『マクサーエナジーウエポインダストリ』の、第4開発室室長『コウジ・テシロ』。

どこか、楽しいのか何なのかわからない、そんな感情をもって周りに「でしょ？」と煙たがられても聞きまわる。

「今確認しましたが諸元性能は速度と重量以外はガンズナイパーと同等、かつ主兵装の

単発火力は向こうが上であると判断します。火力の面ではガンズナイパーが上ですが、速度機動性は向こうが上と判断し、レブラプターに比べれば下ですが格闘性能も高く、なおかつモニター上でもご覧のとおり、防御力が異常です、興味深い」

共和国工廠開発部所属の『マース・アークライト』は、自分の持つ情報端末から一切目を離さずそう言い切る。

幾分か聞き取りづらいその独特の言い方だが、周りの人間たちはそれを脳内で理解できる程度の人間ばかりなので問題はなかった。

「だとすると、ビームガン装備のレブじゃ話にならねえわな、おっと失礼。

ガイロス帝國工廠さんがいなくて正解ですわ、ここ。

泣くか、採用を検討するか、また変な超兵器作るかのどれかでしょ、この案件？」

「テシロさん、ここでは真面目にしていたきたい」

「真面目に？」

まじめにこっちは言ってますよお、だってそうでしょう!?

こいつを見なさいよ!! この凶悪面!!」

と、カール中尉に注意されてもなお引かず、その『バイオラプター』というゾイドへ指をさす。

「どこの国にも属さない、行ってしまえばガイロスも、ネオゼネバスも関与しない『第三

『勢力』ですよ？

そしてこの完成度ですよ!? ねえ、みなさん!?

ここまでされてねえ、気にならないんですかあ!?!」

その、凶悪な面のゾイドを指し、素直な心情を叫ぶ。

「——まあまあ、落ち着きましよう。テシロさんのいう事もごもつともです」

と、そんな紳士的な口調でありながら、どこかおどけた声が響く。

「しかしまあ、言わせてもらえば、発想が弱者ですな、これは!」

装甲が厚い? 火力がある? 速度もいい?

3拍子揃えばいいというわけではないのでしょうか?」

そして、すかさず反論したのは、恰幅のいい紳士然とした男、

共和国銃器及び火砲の老舗中の老舗、『バイクラー&ホギス・ガンスミス社』の専務で

ある、ニコラス・ジェドリン、別名「明るい批評家ニコラス」である。

「ほー、さすが老舗中の老舗、バイクラーのいう事は違いますねえ?」

「はっはっは! いやいや、創業年数もあって怖いもの知らずなだけですとも。」

若手の企業ほど、慎重になれない老害の意見です」

しかし、とニコラスは、周りに牽制をするかのような視線を投げていく。

「しかし、装甲が厚ければ、その装甲を無力化してやればいい、とはだれもが思う事で

しょう？

貫通ができぬなら、浸透させればいい。

わが社は、昔から実体弾兵器ならば何でも作ってきました。

AP（貫通弾）、APFSDS（装弾筒付翼安定徹甲弾）、HE（榴弾）、HEAT（成形炸薬）、HESH（粘着榴弾）、なんでもござれです。

ふむ……：バイオゾイドの装甲は、なんと言いましたかな？」

「バイオ装甲。

流体金属を何らかの方法で固定化及びゾイド細胞と癒着し、おそらくは徹甲弾が侵入した瞬間に弾芯を折り無力化、ビームに対し屈折率変化による偏向で無効化している」と、映像からは推測できません」

マースのセリフに、やはり、と言うニコラス。

「あのゴルドスは弾種を間違えたのですよ、簡単に言えば。

わが社のHESHならば、装甲を無視して内部フレームを破壊できる。

ホプキソン効果、と地球の理論では言われてましたかな？」

「それは……」

「そいつはちよいと見解が早いんじゃないかい、ニコラスよお？」

しかし、そのニコラスの意見を否定するものが現れる。

「いまいち、場違いなカウボーイハットに、何とも地球の西部開拓時代な服装の、筋骨隆々とした男が、机に脚をかけた姿でその声を上げた。

「ジェームズ・エルパ社長、と言いますと？」

す、とカウボーイハットの下から、鋭い眼光を見せる。

彼の名は、ジェームズ・エルパ Jr.

共和国、ミサイル開発会社最王手グループ「エルパ」の総裁だった。

「俺のこともよお、爆発物には詳しいからな。

さっきの画像を判断するのに、あれじゃHESHでも3発同じ場所に着弾しなきゃいけないってわかるぜ？

ゴルドスの主砲はそんなにやわじゃあねえ。

お前さんのさっきの物言い、撃ってるのがロングレンジバスターキャノンで言っちゃいねえか？」

「ジェームズさん、ロングレンジで直射向きのHESHは意味がないですよ、ご冗談を」  
「言つとくがな、105ミリレールガンの衝撃でまだ動けるフレームなんざ聞いたことがねえぞ、小型ゾイドでならなおさらだ！」

けつ、と言いつつジェームズに、ニコラスはただ困ったような表情で対応する。

「だが、その考えは悪かねえな。」



早速だが、弾頭はH E S H っていう案でミサイル開発プランを組むぜ」  
「おやおや、他人の考えのまねごとですか。」

批判した割には手のひら返しが速い」

「じゃねえと、お互い、また『帝国工廠』の2番煎じになっちまうだろう？」  
と、その名前に、この場の誰もが眉を顰める。

帝国工廠。

名前の付かないこの場合、ここにはいない『ゼネバス帝国工廠』を現す。

その実体は、中小企業と職人達の工房の集まりであり、かつてゼネバス皇帝以下の元、長らく共和国に対抗するゾイドを作ってきた老舗ブランドだ。

今では、3つの国を股にかける「優良ゾイドのブランド」として、広く認知され、  
今でも、この共和国企業、鉦床にとつての、最大の『商売敵』だ。

「——あの、一ついいでしょうか？」

と、そこで、別の企業の間人が手を上げる。

見ると、若いパリッとしたスーツ姿の男性が、眼鏡の位置を直し、周りに視線を向けていた。

「おお、パノーパーのとこの若造か！

何か意見とは珍しいな？」

「ええ、まあ。」

我々はあくまで、電子的、システムのサポートがメインですから」

FCSからゾイド操作システムまで、ありとあらゆる電子機器をソフトとハード両方取り扱う王手『パノーパーシテム』の社員、エーリヒ・フランツは、そう静かに的確な言葉を吐く。

「私も、ゾイドの戦闘や戦術には詳しくありませんが、先ほどの映像を見て気づいたことが一つあります」

と、手持ちのゾイドギア大の携帯端末を操作し、先ほど映像が移されたスクリーンに別の映像が映し出される。

「……大々的にハッキングとは、パノーパーはやることやつば違うわー」

「その方が楽ですし、共和国のシステムはまだまだ帝国よりも、セキュリティがガバガバです」

「……貴重な意見ありがとうございます」

そう言った、カール中尉の顔には、酷く落ち込んだ色が映っていた。

「まあ、ともかく、

現時点でまず、このゾイドの、一般公開情報、及び、視覚からの推測をまとめる、と」  
フォン、とバイオラプターの3D解析データが現れ、各部の詳細な項目が映し出され

る。

「バイオ装甲の性能は、マースさんの言葉通りです。

そして、これを見る限りは、この装甲、普通の装甲の通り、全身を覆っているわけじゃないんですよ。

関節部、背部、腹部、覆えない場所と覆うべき場所がはっきりしてます」

いつ解析したのか、予測される装甲の薄い場所を洗い出したデータが次々と現れる。

「もちろん、そこは重々承知でしょうが、注目したいのは、ここ、」  
と、バイオラプターの3D映像が、口を開ける。

「先ほど、口内部武器のお話を聞いて調べてみました。

映像で着弾記録はありませんが、攻撃の瞬間、口を閉じる映像が数点あります」

その映像とは別のウィンドウが開き、バイオラプターへの砲撃の着弾シーンが流れる。

「ほう……………口が弱点だと?」

「なるほど、口内が弱いのはよくある話ですねえ。

だが、これは露骨です。実に、いい」

「あーあーあー、そうだよ、そうそう!!」

「これだよ、そっかー……………デスもジエノもお口を撃てと言うわけだし!」

「しかし、小型目標の口を狙うのは至難の業では？」

「この口の大きさ、機体サイズを考えるに、同クラスゾイドでは確実に有効な戦術です。何より、ウチのFCS搭載ならば100%当てられます」

と、自信、というよりも事実を言うように言葉を吐く。

「ガンズナイパーもカノントータスも、FCSは全部わが社製です。

今度、ゴールドスの近代化改修セットにも、対バイオゾイド用照準補正システムを積みます。

「ゴルヘックスは言わずもがなです」

その言動には、やると言ったらやる、と伝わるだけの力強さもあつた。

「おお……！」

……どうやら、ハードよりも先にソフトの面でも対策が速く立てられそうですね！」

ニコラスの大仰な言葉に、しかし顔を向けられたカール中尉もうなずく。

「バイオゾイドは、今のところ、まだゾイドバトル市場テストの前段階です。

しかし、1年以内には、実際の戦場でも運用されるでしょう。

こちらとしては、その前の段階で対策がほしいのです」

「我々の兵器がそう言った場所で売れすぎると、国際的な問題でしょうが、

まあ我々死を食い物にする商人としてはそれでいいのですが、おっと失礼？」

つまりは、やはりこういった新興ゾイドに対し『抑圧』や『排斥』より、『普及』させ『対策を売る』方が利益でしょうからな？

現に、必ずなければいけない需要でしょうか？ 共和国の政治家様たちには？」

「軍人と商人だけのこの場では何とも言えませんが、そうだと自分の共和国議会の友人はいいそうですね」

カール中尉の言葉に、ニコラスはいつもの笑みを浮かべる。

その笑みの意味は、この場の『共和国市民』にとつては意味の分かる物だった。

「共和国工廠に身を置く者として思う事なのですが、これだけの質のゾイドが普及するにもコストの面で不安ですが皆さんはどう思いますか？」

「逆ですよ、高コスト高性能だから、買い手が必ずいる。」

言い換えれば、数はそろえられない人的資源に引き換え、練度と何らかの資源由来の国庫の豊かさを持つ中小国が好みそうな機体です。

帝国工廠ブランドの方も、今自分たちのいる需要を脅かされててこ舞いですよ」

「ざまあみやがれ！ 低出力高信頼ビームの需要はマクサーがもらうぜ！」

「ミサイルの粒のデカさじゃ負けるが数じゃ負けねえよ！」

「みなさん大変ですね、需要がかぶってしまうと！」

ははは、と乾いた笑みと、一瞬の鋭い視線が飛ぶ。

コホン、と乱闘騒ぎの前に、カール中尉は咳払いで話を戻す。

「それと、今週の末と急な話ですが、『Dーガルド・ユニオンカンパニー』直結のゾイド乗り育成学校である、『私立デイガルド学院』において、全面的にバイオゾイドが導入されるということです」

「早いな、おい!?!」

「ふむ、しかし狙ったのでしようなこれは。」

新生月の中旬と言えば、全ゾイド市場における「新製品発表、第一弾の市場流通」の季節。

いわば、新製品のお披露目にはもってこいの季節です」

「チツ……一週間じや既存製品のそれ向け用途を提示するしかねえか!」

一月あればなあ……」

「情報部の不手際です、申し訳ありません」

「……既存品で、何処までやれるか……新規開発は間に合わねえだろうし……」

うーむ、とほぼ全員が、重苦しくつぶやく。

……バイオゾイドの正式な対策は、ソフトの面ではまだできる。

いわゆる、弱点はどこか、どういう攻撃ならば有効なのか、だ。

だが、ソフトだけでは、不十分だ。

いわゆる、議題に上がるバイオ装甲を無理やり抜く方法も必要なのだ。

ニコラス——バイクラール&ホギス・ガンズミス社の案だけでは不安、と誰もが、言った本人も多少は思っていた。

ふと、テシロはこの場を見渡し、「あれ？」とつぶやく。

「あれ？」

そういえば、「DDワーカーズ社」の連中がいないなあ……？

あ、と全員が、そのことに気付く。

「そういえば、」

「彼ら、とうとう外されたんですしたかな？」

「ありえませんが、ありえそうですが」

「ありえそうだけだな」

「でもないのは不自然です」

口々にそろえて言う全員の視線に、カール中尉はなぜか冷や汗を流す。

「……実は、事前資料を渡して、来るように言ったのですが——」

と、その言葉まで言った瞬間、

「遅れました————ツツ!!」

バアン、とドアが壊れる程の勢いで開き、誰かが入ってくる。

皆、ある種の予定調和に対するうんざりした表情、そして何より「来てしまったのか……」という絶望の表情で、ドアを見る。

そこに立たずむは、若いキャリアウーマン風の女性だった。

長い髪を後ろでまとめ、快活そうな笑みを浮かべそこにいた。

「いや、ごめんなさいみねさん、ちよつと連絡受けてすぐにも思っただけですけど、ちよつと色々」と

「遅れた理由にはあやふやですね、ガートルードさん」

カール中尉の一言、あはは……と目を泳がせて笑う女性——ガートルード。

彼女は、共和国高速機ゾイド及び電磁砲開発の最手企業『DDワークス』に所属する女性だった。

DDワークス。

その歴史は、コマンドウルフ開発まで遡る。

共和国がかつて、サーベルタイガー対策に迫われ、シールドライガー及びコマンドウルフの開発の時、集められた技術者達が設立し、以降帝国工廠も真つ青な技術で持つて、高速機系列にはほとんどかかわっている老舗なのではある。

だが、

共和国の軍部、主に兵站部や周りの企業からは、影でこう揶揄される。



曰く、『共和国のパンドラの箱』と。

「……で、なんで遅れたんですかね？」

そう切り出したテシロ自身、「んなこと聞くな。やめろ、言っちゃいけない」とは思っていた。

大体、DDワークスが遅れると何かが起こる。

いい時は、ライガーゼロ・パンツァーユニットの完成。

悪い時は………ケーニツヒウルフができた場合。

この企業、良いにしろ、何にしろ、

遅れた場合は、なにか起こる。

そして、大体が共和国を悩ませる結果になる。

「いや実は、」

全員身構えた。

「例のバイオゾイドの装甲、サンプルがないんで苦労しましたが、

抜ける可能性のある武器を、既存のプロジェクトの流用で作りました！」

そして、予想通りの予想外に、全員が頭を抱えた。

その様子に、当の本人たる彼女はただ首をかしげただけだった。

\*\*\*

それは、中央大陸の一角で行われた、後に「バイオゾイドシヨック」と呼ばれる2週間、始まりの狼煙だった。

そして話は、2日後の西方大陸北、ロブ平野のニューリバプールに戻る。

## その2

西方大陸エウロペ北、ロブ平野内都市『ニューリバプール』  
新生月7日目、午前7時、町の一角の共同駐ゾイドスペース

「……」

そこにいた少女、ことリナソレーネ・アシユワースは、困惑していた。

彼女の目の前、昨日は学校へ愛機のライガーゼロのクロムウエルはおいでしてきた。

理由はいろいろあるが、今日の『イベント』のためだ。

さて、つまり何が言いたいかと言えば、

ここには何も無い、何もいないはずである。その前提である。

——グルル……

しかし、その大型ゾイド駐車スペースには、当然のようにある大型ゾイドが鎮座していた。  
いた。

青い装甲、肩のインタークーラーなどの廃熱機構。

わかりやすいオレンジの全面クリアキャノピーは、ヘリック共和国製の証だ。パイプやフレームがむき出しな姿は、どこか古臭さを感じる。

しかし、その『獅子』は、両脇には格納型ミサイルポッドを、背後には20ミリビームガンを持つ、コンパクトに収納しつつも、意外と充実した火器を持つ。

その名を、『RZ-007 シールドライガー』。

共和国初的大型高速戦ゾイドであり、かつては惑星Zi最速だったゾイドだ。

「……クルセイダー?」

リナの問いかけに、そのシールドライガーは機嫌のいい唸り声を出し、自らのコックピットを開いた。

\*\*\*

「お父さん、クルセイダーは保護区行きじゃなかったんです?」

数分後、リナは自分の家である喫茶店兼バー「ライオン亭」にて、自身の父親であるエリックに尋ねていた。

「そうだったと思ったんだが、どうにも保護区では扱いきれないぐらい元気だったらしい。」

ここ最近は、普通のゾイドの生命力が戻りつつあるっていうのも間違いじゃないな。昨日乗ってみたが、前より元気なほどだ」

ぼん、と特性サンドのお昼ご飯を渡され、受け取りつつリナは口を開く。

「でも、体の修理は？ ただでさえあのドラ猫クロムウエルの維持費だつて……」

「なあに、心配ない！ そこまで貧乏じやないだろう？ 割と店も儲かっているからな。」

ああ、だが心苦しいっていうなら今週末は頼むぞ？」

「私はいいですけど、それでいいんですか？」

「なあ、リナ？」

お前も、クルセイダーも、昔と変わらない良い相棒同士じゃないか」

と、意味ありげな表情でそう問いかける父、エリック。

「……私が保護区送りにしたのに、なんででしょう？」

「そりや俺と、あいつの娘がお前だ。」

お前なら、レオマスターを名乗れると俺は思ってる。

何せ、俺は昔はそうだったからな」

店の端に立てかけられた、古い写真。

獅子の紋章を持つ若き日のエリックと、隣に映る母の写真だ。

「で、お母さんはネオゼネバスのライガー乗りで、今二人は別居中？」

「仕事の都合でだ！ 俺だって、俺だってあいつと毎日イチャイチャしたい!!」

「それ子供に向かって言う言葉です？」

「3人目は欲しくないか?」

最低、と小さくリナはつぶやく。

「まあ、ともかくだ!

恵まれている環境は最大限生かせ!

そうすれば、お前が一流のゾイド乗りになるまでがぐつと早くできる!」

「……それもそうですけど、知りませんよ?」

この世には、導入コストより恐ろしい、ランニングコストという物が存在するんですから」

リナは、弁当を受け取り、そのまま店の入り口へ向かう。

「いつてらっしやい!」

アドバイスだが、足回りのパーツ代は惜しむなよ!!」

「行ってきます!!」

2機が増えて、費用が余計に掛かりそうですけど!!」

\*\*\*

慣れた手つきで乗り込むコックピット。

ゼロもシールドも、ゼネバス系の高速機の流れをくむために、座席も操縦桿もコンソールも、あまり変わらない。

しいて言えば——全周囲モニターではない、半透明なオレンジ色のキャノピーは、思った以上に広さを感じる。

「クルセイダー？」

私なんかにも従って本当にいいんですか？」

ただ、そう言葉を紡ぎながらも、コンバットシステムを立ち上げる。

「昔の事とはいえ、あんなしつちやかめつちやかにぶつ壊して保護区へ送ったのに、

そんな奴になんで従うんです？」

本当に、ただ疑問を問いかけるように、リナは自分の乗るシールドライガーのわりにおとなしい個体に問う。

グルルルル、

それは、リナには分からない、ゾイドの、獣の言葉だ。

大変心苦しいが、リナは生まれてから一度もゾイドの声を聴いたことがない。

そう。ゾイドの声を聴ける人間など、ごく少数なのだ。

「何言ってるんだか。」

あーあ、感情表現豊かなドラ猫、今の相棒クロムウエルの方がやりやすいです」

素直に、ただそう言う。

よく嫌われないものだ………そう思いながら、操縦桿を握る。

「……でもね、クルセイダー」

そして、ゆっくりとスロットルを上げる。

「私は、帰ってきてうれしいです」

走り始めた『青い弾丸（ブルーブリッツ）』が、一つ吠えた。

\*\*\*

ニューリバプール西、『ウエストリバプール駅』北口、多目的ターミナルにて、  
「お、」

ぼったりと出会った、褐色の肌と長身痩躯な少女——ヒルダと、金髪でロールのかかったストレートに軍帽の少女——オテイーリエ。

「……時間通りでありますな、一分たがわず！」

「……そちらもだな？ うむ、地球人の時計は正確だとは聞くが？」

はは、と笑いながら、二人はそのまま人込みをかき分け、バス停などと違い人の少ない『ゾイド専用ターミナル』の方向へ歩く。

「………で、決めましたか？」

と、オテイーリエは少々声音を落とし、そうヒルダに尋ねる。

「………いや、まだな………貴殿にも心配させる、な」

「………いや、これは失敬。自分も、もしもフェルデイがああなつてしまえば……」



それは、朝の時間にはふさわしくない、重い話題だった。

\*\*\*

それは、先日の練習試合の後から始まる。

「ライジャーがもう戦えないだどツ?!」

共同大型整備場兼D組作業室の一角で、声を荒げるヒルダ。

彼女の目の前には、土下座する5人組がいた。

「ごめんツ!!」

手は尽くしたけど、でも!!

ゾイドコアの、生命力が、もう……!!」

その先頭において土下座した女生徒——D組、副委員長の『バリ子』ことヒバリ・ウエ  
リントンだ。

「!?!」

「……もともと、高齢だったんだ……」

生命力も落ちてきて、あの突撃の衝撃で……」

最後まで聞けず、膝から崩れ落ちる。

「……そんな……そんな、まさか……ライジャー……!!」

そして、その頬を涙が伝う。

——その日、ヒルダはずっと、ずっと泣いていた。

\*\*\*

「……保護区か、いいところだと聞くがな……」

「……元々、個体数が激減し、いること自体伝説だった、ゼネバス帝国の遺産、歴史を変えたかもしれない小型高速戦ゾイドの幻の名機……」

出会えて、動いている姿を見ているだけでも幸運だったかもしれないでありますな」  
ああ、とヒルダはうつむき答える。

「……保護区では、繁殖も推進していると聞く。」

……市場にライジャーが出るのはいつ頃だろうな……

まあ、出たとしても、私は……」

その拳を握り締め、静かに語る姿が、見ていていたたまれない。

この星、最強兵器にして、金属生命体「ゾイド」。

それは、ただ生活の一部や、兵器として存在しているわけではない。

ゾイドとそれに乗る人とは、

ある種『絆』で結ばれている。

相性、意気投合、性格、打算、ライバル、家族愛……

それは、ただ一言では表せない。

たとえ、どれほどひどく扱ったとしても、ゾイドと人との間には、絆が生まれる。

「……………こんな、事、言うべきではないでしょうが、」

そんな、絆が一方的に斬られてしまう事態になった相手へ、オティーリエはしかし、言いくいことを言う義務があった。

「今日、新しく乗るゾイドを決めなければいけないのであります。

……………簡単に割り切れないとはいえ、専用機を持てるというのであれば……学校の備品だけで、自分の実力が出し切れないのであれば……」

「……………ああ、それも頭ではわかってるんだ」

言いくいことを、それでもこんな泣き出しそうな顔をしていつてくれる友人に、ヒルダは感謝しつつも、そう重く言葉を紡ぐ。

「心配をかけるな。」

だが、まだどうしても……………心の整理が、追いつかないんだ……………」

「……………ヒルダ殿……………」

悲痛な笑みだった。

……………何も、言えない。

「……………遅いで、ありますな。リナ殿」

つい、情けなく話題を変えてしまう。オティーリエは自分を恥じた。

「……そうだな」

そして、それに乗っかるように言葉を出すヒルダも……

と、ガシャン、ガシャンと、大型の駆動系が駆け回る音が聞こえる。

「ん？」

疑問に思った瞬間、車で言えば4車線分ある道路を大きく跳躍し、ギリギリだが華麗に止まっているバスをよけ、驚く人込みを飛び越え、こちらの目の前に大型ゾイドが着地する。

ずざーとストライククロウを突き立てドリフトし、二人の前に止まるは、『シールドライガー』。

「この鮮やかなドリフトは、」

「やはり、」

頭を下げ、共和国式のキャノピーを開く。

「よつとー！」

しゅたつと飛び下りたのは、二人のよく知る顔。

——当然というべきか、C組唯一のライガー乗り、リナがいた。

「二人共、おはようございますですよー！」

「おはようでありますよ、リナ殿ー」

「うむ、おはようだ。」

ところで、そのゾイドは？」

と、早速隣にいるシールドライガーについて尋ねるヒルダ。

「ああ、この子はクルセイダー。」

昔、やらかして保護区に送っちゃったのが……どうも戻ってきたみたいで」

その説明に驚く二人から視線を外し、そこにいるクルセイダーを見る。

「そりゃあ、まあ酷いことしちゃったんですよ」

リナは語る。

——中学校2年、その時期に起こったゾイドバトルでの事件。

森での偵察を終えて、いざ本体をぶつけるといふセオリー通りの展開だった。

問題は、押された戦線を押し返すため、予備兵力となったりナの乗るクルセイダーを向かわせる判断をしたこと。

こういう場合、押されてる場所は切り捨て、押している場所をもっと押し込むのが正しいのに、

上の指揮官は、心情に負けた。

それはいい。まだ押し返せると思った。

そこがだめだった……

気を取られた隙に、アンブッシュしてきたレブラプターのパイルバンカーに、前足の隙間からコアを――

「死ななかつただけ、マシな状態で、その日のうちに保護区送りです。

クロムウエルに乗る時も……まあ、なかなか割り切れなくて……」

今まで、リナという人間を見てきたのなら、そんな表情を誰も見たことがないだろう。哀愁漂う笑みで、今ここにいるクルセイダーを撫でる。

「……恨んでくれりやよかつたんですけどね、私の下手で壊したようなものですし。

……この子、全然噛みつきもしないですよ？ クロムウエルだったら、叩いてくるだろうに……」

「……」

思わず、ヒルダは一人と一匹を見る。

――重ねてしまったのだ。

自分と、ライジャーに。

「……戻って、来るものなのか？」

つい、だからそんな疑問をぶつけてしまう。

「……さあ？」

偶然かもしれないし、断言はしません」

ただ、とリナは言う。

「ゾイドは、乗り手を選ぶ。

乗り手に選ばれたのならば、コアが壊れるまで付き合うし、壊されても無茶したのは分かったから、次はうまく扱え、と思つてまた乗せる。そのぐらいしてくれるんじゃないでしょうかね？」

あっけんからんと言うリナに、少々面食らう。

「……そうか」

だが、不思議とヒルダは笑っていた。

——なぜか、胸の奥につかえていたものが、取れたような気がしたのだ。

「……私は今日、新しいゾイドを見つけねばいかんのだが、」

そして、そう言葉が出てくる。

「だが？」

「……ライジャーにまた会えたら、嫉妬されるぐらいの機体にするべきだろうか？」

冗談混じりな言葉に、聞いた二人は笑う。

「そりゃあもう!! 保護区で寝てられないな! というぐらいでなければいかんでしょ  
う!？」

「そうですよー!! ねークルセイダー? 後でクロムウエルを見ても喧嘩しちやだめ  
すよー!？」

冗談混じりな言葉に、ヒルダの心が軽くなる。

今まで、失ったことに執着しすぎたかもしれない、と反省しながらも、うれしい気持  
ちだった。

「さてと、

クロムウエルよりは遅いとはいえ、『ブルーブリッツ』です。

3人ですよね？

懲罰席だーれだ!?!」

「げえ、複座でもそういえば!!」

「う……ふ、二人で座席にすし詰めの方がマシだから、ダメか?」

そして、3人はいつもの中のいい学生に戻る。

後は、このライガーで学校へ行くだけだ。最高速度250km/hと言えど、そろそ



ろ間に合わない。

「では出発しますかー。いやードライバーは一人で楽ですー」

「……確か、私の方が、体重が軽かったな？」

「嘘つけでありますう、筋肉多い方が重いに決まってるでありますう!!」

ワイのワイの、と顔を下げたシールドライガーへよじ登り、狭い座席がもつと狭く動いて現れた複座に二人を押し込む。

自分も座席に座り、シートベルトを締めようとして、

その時、リナのゾイドギアに、誰かからの通信が入った。

「あれ？ あ、イオナさんからのお電話!」

「イオナ様より?」「会長殿!」

とりあえず、すぐにゾイドギアをコンソールにセットし、スピーカーにつなげて通話ボタンを押す。

「はい、おはようございますですよー」

『おはようございますリナちゃん!!』

よかつた間に合って!』

え、とその短いやり取りで、リナは察する。

「近くにいるんですか?」

『はいそうですよ〜♪』

さて、私はどこにいますでしょうか?』

ど、の辺りで後ろで座るオティーリエが、乗せたヒルダの間からレーダーのコンソールを操作し、『友軍信号を探す』という設定で、機影を探す。

「ヒルダ殿、3次元位置特定器を見れるであります?」

「今見た、成程そこか」

回されたデータを正面座席で見たりナも、皆で上を見る。

パタパタと羽ばたく、妙に羽の短い『鳥』。

そのくせ足がまるでフロートか何かのように大きく、重しにしか見えないとは初見ならば誰もが思うだろう。

共和国共通キャノピーの光るそのゾイド、名前を『グライドラー』と言う。

水鳥型、共和国初にして、おおよそ今の兵器ゾイド群の始祖に当たる時期において唯一の、飛行ゾイドだ。

「グライドラー……共和国海軍仕様の現行テイルトロータータイプ!」

「対潜攻撃可能で、折りたたんでウルトラザウルス内に搭載して、弾道観測も行えるタイ

プの?」

「元は古いが、中身は最新……に近い代物か」

パタパタとマグネツサーウイングを羽ばたかせ、クルセイダーの隣に上手に着陸するグライドラー。

微笑ましいようなその様子を終え、こちらのコックピットの隣で、向こうのキャノピーが開閉する。

「リナちゃんおはようございます!」

あら? 今日は大人数ですね?」

挨拶まじりに出てくる柔和な笑みの少女は、そこからは想像もつかないだろうが、ミューズ学園N組委員長兼学園生徒会長にして、

かの、ヘリック・ムーロア2世の直系の子孫にあたる人物である、イオナフェルト・ムーロアその人だった。

「おはようございます。わざわざご足労いただくとは」

「あーもう、ヒルダさんすぐ固くするんだから」

「おはようございますであります。」

初めまして、生徒会長殿。会うのは初めてでありますな？」

「ですねー、オティーリエ・カリウスさん♪

試合とか練習はちらちら見てますが〜」

「あはは、まさか名前を知っているとは……」

さらりと情報を掌握しているこのニコニコ笑う少女の底知れなさに、オティーリエは冷や汗交じりにそう返すしかできなかつた。

「会長だけあつて、9割の生徒の名前と顔は覚えてるんですよー、イオナさん」

「うええ!?!」

「それほど難しいことじゃないですよ〜」

「否定しない!?!」

やはりこの生徒会長はとてつもない、と全員が思ったところで、「それはさておき」と本人がその話を打ち切る。

「みなさん、ちよつとお付き合ひお願いできますか?」

「はい?」

「学校に許可は取りますし、今日の『お買い物』はお昼前からです。

それまでに済ましたいことがあるので、お付き合ひお願いします」

そのイオナの提案は、意外な物だった。

「何が、あるんであります？」

オテイーリエの問いに、にこ、と笑うイオナ。

「今から1時間後ぐらいに、

公立アレキサンドル高校

対

私立デイガルド学院

の練習試合が始まります。

偵察に行きましょう！」

## その3

ミューズ森林地帯を南南西へ進む、青い弾丸と、最初の飛行ゾイド。

この広い北エウロペも、ゾイドにかかればほんの1時間以内に目的地に着く。  
広大な、アレキサンドル大地の中の――

「ヒヤッハー!!」

モヒカン姿の男たちが、火炎放射器を片手に暴れまわる。

店は、建物は破壊され、銃弾や火炎瓶、爆発物が飛び交う。

「弾圧反たーい!!」

「軍属の象徴たるゾイドの市街地の使用をやめろー!」

「革命の同志達よ、前へー!」

なにやら、東方大陸の文字の書かれたヘルメットで武装した若い人間たちが、大挙して何かを主張していた。

そこは、荒廃の極みのような街だった。

「うわあ、この西方大陸に、まだこんな紛争地域なんてあったんですね〜！」

ひよい、と火炎瓶をよけたリナの言葉に、変な笑みを浮かべるヒルダとオティーリエ。内心二人は、ここが同じ北エウロペなのかと驚いていた。

アレキサンドル大地にある都市、『ビッググディツパー』。

元は、グラム湖より西に位置する巨大な湖、ヘスペリデス湖から流れる川の名前から取られたコロニーが発展した町であり、比較的豊かで近代的な街並みが自慢らしい。

最大の特徴は、

犯罪発生率、暴動発生率、ともに北エウロペNo. 1

「……まるで押し迫る世紀末にはしゃいでいる子供みたいですね〜」

と、隣のグライダーの足元に降りていたイオナは、そんな言葉を苦笑まじりに吐いていた。

現在、このゾイドの通れるここ『大陸道90号線』は、なんだか良く分からない理屈と突飛な主張——いうのも憚られるアホな物——を繰り返すだけの謎の集団に占拠され、事実上通行止めである。

内容は、察していただきたい。

「うーん……あ、その治安局のおじさん！」

と、リナが声をかけると、「あああん?」と、モヒカン頭の世紀末のような格好の男——よく見ると腕に「治安局」の腕章がある人間が振り返る。

「この近くに迂回路ってありますか?」

「ひやははは! それが残念なことによお! 昨日グスタフが事故を起こしてもう一本の道路に濃硫酸がぶちまけられちゃったのさあ!」

悪いなあお嬢ちゃん!

なあに、今ムシヨにここにいるアホ共をぶち込んでやるさあ!!

踊れ踊れ踊れえ!!」

ヒヤッハー、とシヨットガンやグレネードランチャーを情け容赦なく撃ち放つ。

全部催涙弾とゴム弾で死者はいないが、手際よく、交渉もせず、迅速にこの集団を護



送車に放り込んでいく。

「うーん、絵面が悪いわりにすごく優秀な治安局員たちだなあ……」

「しかも、暴徒たちと違って、一発も民家に被害を出していない……」

「あ、治安局仕様のツインホーン！ レアでありますな、放水してる……」

しかし、そんなモヒカン治安局員達の努力もむなしく、バカなデモ隊の数は多い。

「でも、これじゃあ……試合に間に合うかどうか……」

まったく、ゴキブリ並みだ、などと口には出さない悪態をつきつつも、何もできない状況に焦りが生まれていく。

「……Eシールドアタックしちゃいましょうかね……？」

「いくらアレでも、殺人はまずいですよ……！」

「出力が低くても死ぬかもしれないしな……」

「それ以前にゾイドの武装を人に向けるのはちよつと……」

と、不穏極まりない思考に陥る4人。

だが、

次の瞬間、すさまじい光量と熱量を持った本流が、

そのデモ隊の頭上を、4人の脇を、すり抜け、その場を揺らす。

「?!?!」  
 「一瞬、何が起こったのかわからず、いや何が起こったのかを理解したせいで、4人は混乱のままに背後を確認する。」

「——つたくよお、朝からなんだあ？ 今日祝日でもねーのにどんちゃん騒ぎ！ 訳の分からない主義主張にイデオロギーで、天下の通学路のバイパス様を塞ぐたあ、』  
 どしん、どしんと音を立て、それが姿を現す。」

『お前ら、命張ってやってんなら、このぐらいいされる覚悟はあるんだよなあ!?!』

ずしいん、と踏み出した一歩は、テイラノサウルス型特有の太く、スラスターユニットのある足。

赤い塗装、凶暴な目つきはまだ本気ではない意味を持つ赤い色。

頭部にあるブレードに、背部のスラスターと荷電粒子コンバータが一つとなり、本来の腕とは別に存在する第3、4の腕たる『ハサミ』——フリーラウンドシールドとエクスブレイカーの基部となるユニットを持つそのゾイドは、

「じえ、じえ……!?」

「……魔装竜……ジエノブレイカー……!?!」

その場全員の、畏怖と驚愕の視線の中、そのジエノブレイカーはゆつくりと歩を進める。

『こちとら今日の試合は死んでも参加するつもりなんだよ。

それを邪魔するんなら命かけてもらうのも道理だろ……?』

ジエノブレイカーから響くのは、男勝りながらも女性の声だった。

その声と共に、スラスターが火を噴きはじめ、その体を宙へと浮かせていく。

『デモだか何だか知らねえが、

命かけてんなら避けんじゃねえぞ!?!』

尾をピンと伸ばし、廃熱カバーを全て開く。

口を開き、荷電粒子砲の砲身を伸ばす。  
また撃つ気だ……それも、直撃させる！

その光が放たれる瞬間になって、皆ようやく逃げ出した。  
すさまじい量の荷電粒子が、道路を、その場を包み込んだ。

「……………」

瞼の下から、光が収まるのを感じて目を開く。

意外なことに……道路は無事だった。

『ケッ！ 人に全力の荷電粒子砲なんざ撃つかつてんだ！』

ビビッて逃げてる程度の主張で、世の中変えられると思うんじゃないやねーぜ、っと！』

ガシン、と着地したジェノブレイカーの頭部をわざわざこちらに向け、その中にいる人物はスピーカー越しにつぶやく。

突然の出来事に呆然とする4人の目の前で、ちょうど腹部のハッチが開き、中から誰かが下りてくる。

「よっー！」

着地したのは、やはりというか、自分たちと同じ少女だった。

白い髪は、中央大陸の神族の血なのだろうか、だがその可愛らしい素顔のまま過ごしているという事は、間違いなくそういう部族の伝統は守っていないという事だろう。

「よお！ どこ校だお前ら？」

と、開口一番そう尋ねる。

なんとまあ、その快活そうな笑みに似合う、『らしい』セリフだった。

「……あ、我々です？」

「他に誰がいんだよ!？」

つつい、そう尋ねただけなのだが、若干目を吊り上げて相手はそう尋ねた。

「えっと、初めまして。私立ミューズ学園から、本日の試合を見に来ました。

アレキサンドロス高校の方ですよね？」

そして、間髪入れずにイオナが、自分たちのことを簡単に紹介した。

「おうおう、そっか！」

どこの学校か知らねえけど、あたしらの勝利を見に来るたあ、わかってんじゃねえか

！」

その途端、近づいてイオナの肩をたたき、機嫌よさそうに笑ってそう大声で言う。  
なんとまあ、わかりやすい人間だ。

「あはは……まあ、アレキサンドロス高のエース、ジェノブレイカー乗りのレドーナさんに言われるのは悪い気持ちではないですね」

と、イオナがそういうと相手——レドーナという彼女の顔が驚きに変わる。

「知ってんのかよ!？」

「一応準備知識は必要ですから……」

「あんだよ、あたしも人気者になつたなく、おい!？」

あーっはっはっはよっしやよっしや!!」

言い切るより早く、バンバンと肩をたたくレドーナ。

「……イオナさん、レドーナさん、つて、もしかして前年度エウロペカップ優勝決定戦で、20体以上のゾイドと、デスザウラー機を単騎で撃破した、あの『アレキサンドロスの赤い悪魔』の?」

リナは、ふと気づき、そう尋ねる。

「ええ、そ」

「よく知ってんじゃねえか、メガネ!

そうだが、あたし様ごとレドーナ・ザーラス様こそ、その『赤い悪魔』よお!!」

あのシユバルツんとこの、えっと、忘れたけど名前の長いチームにひと泡吹かせてやった張本人様だあ！」

イオナを完全に無視するかのようになりナの前に出て、そう胸を張って答える。

(調子のいい人だなあ……)

素直に、その場の人間はそう思ってしまった。

「——おおい、所でお嬢ちゃん方よ！」

と、そんな会話をしていると、あのモヒカンの治安局員がこちらに声をかけてきた。

「あん？」

なんだよおっちゃん！　しよっ引くんなら今日は午後にしてくれよ！」

「まったく、人間相手に荷電粒子砲をぶつ放すなんて、こりやあ普通なら少年院いきだせえ？」

けどまあ、俺らはなあんにも見なかったがなあ!!

今日は、デモ行進軍団が荷電粒子砲を持ち出すなんて、とんでもない話だったなあ!？」

その治安局員の言葉は、なかなかとんでもないことを言う。

「なんだよ、わかってんじゃねえか！」





「……我々も、行かないといけませんね」  
うんうん、と皆が頷いた。

\*\*\*

ビックデイツパー市の端、荒野に面した四角い建物がぽつんと立つそこは、

この街の最果て、『公立アレキサンドロス高校』

曰く、「二日に一回校門が爆破される代わりに、この街で学のある人間になれる場所」  
「おつせえぞ、ゾイド戦闘履修組イ!!」

「こちとらお前らが勝つ方に焼きそばパン8個賭けてんだよおつらぁーん!」

「敵前逃亡か赤い悪魔の野郎おぉおぉお  
!??!?!」  
出てきやがれオラア!?!」

「ガンリユウジマってやつかオラー!?!」

と、どう見てもいかにも不良軍団が、ヤジと怒号と飲み残しのペットボトルを校庭へ投げていく。

時刻は、現在試合の開始時刻。

なお、アレキサンドロス高校、及びデイガルド学園も、いまだ準備整わず。

「もう開始時刻だぞこの野郎オ!!」

「つーか、一分過ぎたぐらいでグダグダいうのもアレだけだよお!」

こういう時はきつちりやんだろうがよお?!」  
会場のボルテージは、とっくに臨界だった。

この高校、血の気の多さだけで言えば、大陸一を誇る。

古くからそういう若気の至り、要するに馬鹿な不良が集まり、まあ社会に必要な知識を学ぼうね、とでもいう暴論のままにこの高校の創設者のある種の投げやりなのか慈愛なのかわからない思いからできたこの場所は、問題はまあ絶えない。

しかし、10年前ほどから、ゾイドによる試合を選択授業で取り入れてから、表面上の問題はみるみる減っていくこととなった。

皆、喧嘩と暴力と高校生がやっては行けないことなどが好きなのであり、

要するに、ゾイドで殴り合いを、決闘をするようなゾイドバトルは——その性質によくマッチしたのだ。

さらに言えば、

ここは、去年のエウロペカップで、まさかの優勝をしている。

期待しているのだ……今年も、栄光をつかむことを

今日はそのための、行く末を占う前哨戦なのだ。

「間に合ったー!!」

そんな大地に、シールドライガーが一機とグライドラーが一機降り立つ。

ずぎーと、土煙を上げた拍子に、近くにいた人間が「危ないぞバカヤロー!」と叫んで退避した。

そんなことなどかまわず、クルセイダーの開いたキャノピーからリナたちは飛び降りる。

「来ましたねー! アレキサンドロス高校!」

「どうやら、試合開始は少々遅れているようだな?」

「まあ、なら序盤の動きも見れて万々歳かもでありますな!」

と、リナがライガーの脚のサーボモーター内側の空洞に入れていた椅子を取り出し、並べていくところに2人が座る。

「確かに、全体の流れを第三者の視点で見れるなんて機会はめったにありませんし、

今日は、午前中を少し休んで正解かもです」

グライドラーをワイヤー伝いに降りたイオナが椅子に座るのを確認し、リナもようやく座る。

「リナちゃん、用意がいいね?」

「昔から、ゾイドを飛ばした先でのんびりアフタヌーンティーなんてしちゃうもので」  
ゾイドギアをなにやらいじりながら言うリナ。

ニヒヒ、と言い表せる笑みに、全員も笑顔になる。

「さてと……まだ時間はかかりそうで……」

と、そんな準備万端な一行へ向かい、ジェットエンジンのような爆音と、ガシャンがしやんとサーボモーターが大きく稼働する音が響いてくる。

直後、何かがシールドライガーを飛び越え、数メートル先から砂を巻き上げる程の風圧を発生させてホバリングを始める。

「あれは!?!」

「まさか!?!」

いち早く、ヒルダとオティーリエが反応する。

それは、黒いボディと銀色に輝く刃を二つ持ち、赤い剣を携えた頭部を騎士然とした兜で包むジェノ系列のゾイド、

C組にとって、記憶に新しい存在、

「ジェノリッター……!」

しかも……!」

前は、そんな場所にあつたかどうかまで確認できなかつたが、左足装甲にビームガト

リングユニットと俗に言う帝国機甲師団では一般的な武器を模したエンブレムがあった。

物騒な形に、「SCHWARZ」の文字が質素に掘られたそれは、『校章』。

——帝立シユバルツ高等学校の、校章だ。

「シユバルツエス・シユトルムのー！」

ガシン、と降り立ったジェノリッターは、その後に遅れてきたセイバータイガー、それも高校の由来を考えれば中々らしい装備の、ビームガトリングユニット搭載型、『セイバータイガーSS』と並ぶように移動し、ようやくコックピットを開く。

「——ははははは!! やはりツバキのジェノリッターは、速い物だ！」

ははは、うぶっ……!?!」

「——酔い止めをあれ程飲めと言ったのに、この一年総番は……!」

そこから、黒く長い髪の地球系と、金髪碧眼の今にも吐きそうな顔で笑う少女が下りてくる。

格好は、帝国軍制服に似た、シユバルツ高等学校の制服一式だ。

間違いない。

「おーい！ ツバキさーん!!」

まさに知り合いになったばかりの顔を見て、リナは手を振って声をかけた。

「む?」

「あら、あなたはミュージズの!」

「リナでーす! その節はどうも」

黒髪の少女——ツバキに近づくと、どうも、と挨拶を返してくれた。

「こちらこそ。次は負けませんが」

「あはは、お手柔らかに……」

「む? ええと……あー!? ミューズ学園とはこの前の奴か!?!」

と、そこまでして、吐きそうな顔だった金髪碧眼の少女——シュバルツェス・シュトルム一年生の総番であるエルフリーダがようやくやくピンときた表情を見せた。

「あ、そちらもこんにちはー」

「む? お前、もう少し目がきつくて、いつも腰に手をやっていなかったか?」

「それ私の組の委員長の方です」「それは相手方の委員長の方です」

だがどうやら勘違いのようで、二人にそうツツコミを入れられた。

「はっはっはっは!」

「いやさすがに冗談だ!!」

このエルフリーダ・V・ブリッツェン、歴史の教科書の顔は全く覚えられないが、あつたことのある人間の顔を忘れてはせんっ!!」

「それ、威張って言う事ではありませんよね？ この前歴史が赤点でしたねそういうえば」的確なツツコミにも、めげずに豊かな胸を張って笑うエルフリーダ。

だが、そこは覚えておこうよ、年号じゃないんだから……とリナは内心思ったが口には出さなかった。

「そうかそうか、生憎顔を見れずじまいだった、ツバキがやたらと気に掛ける知能派のゾイド乗りとは貴殿か！ ほうほう？」

と、改めて彼女は、リナを上から下まで見る。

「ふむふむ……………」

そして、くるとツバキに向き直り、

「どういうことだ？ 知能派なのに胸がデカイぞ？」

そう言いのけて、一瞬でツバキの顔を心底感情のない真顔へと変えた。

「え……？」

「……………胸なんて、関係ないじゃないですか、胸だなんて……………」

それは、聞き取るのも一苦労なほどの小声だった。

こういう時、的確なツツコミを入れる印象もあつた彼女にしては珍しい。

……………まあ、スレンダーな体系を見て、少々リナは察したが。

「いや、私もこの胸の駄肉に知能が吸われているのではと、一回さらして胸を締めあげて

テストをやったが、そうしたら少しだけいい点になったからもしやと思ったモガ!?」  
「おおっと、エルフリーダさんでしたか？」

失礼ですがこの話題はここまでにしなければいけません。

どのみち彼女をここまでへこませ、おおっととととと、失礼、ここまで沈んだ気持ちにさせる話題をしてきているのですから、ダメージは最小限にすべきです」

ですを2回言つて、物理的に口をふさいでまで話を終わらせる。

こんなむき出しのゾイドコアをゴジユラスで踏むような真似は駄目だ。

「むむ? しかしこんなのはいつものことだぞ?」

「やめましょうよ、いつも心に超収束荷電粒子砲を撃つのは」

ポンと、顔の暗いまま肩をたたくツバキ。

わかつている、何も言うな……

そう、リナは軽く頷いて伝えた。

「む……………」

まあいいか!! 私が馬鹿なだけだ!! はっはっはっは!!」

そして、言った本人はこんな調子である。

……:こういう上官を持つ苦労は知りたくないリナだった。

「でも自分で馬鹿とは言う割に、肝心な時に迅速な場所に部隊を動かし、皆を牽引できる



手腕は見事だなんて、思ってますよ？」

と、すす、いつもの柔和な笑顔で、リナの背後からイオナが出てくる。

「む？　貴殿は？」

「初めまして、私はミューズ学園の生徒会長をやっております、イオナフェルト・ムーロアと言います」

よろしくお願いします、とペコペコ握手するイオナに、当然というかウムウム言いながら握手に応じるだけのエルフリーダ。

だが、当然苗字を聞いて隣のツバキは驚く。

「む、ムーロアとは、まさか…!？」

「あ、はい。ひいお祖父ちゃんはヘリック2世大統領です」

「あ、知っているぞ!!　共和国の大昔の大統領だな!!」

テストで名前だけ書いてまるをもらった!!　だから覚えているぞ!!」

「あなたその程度の認識でいいんですか!?!」

エルフリーダの言葉に、苦笑いで答えるイオナ。

いやはや……ヘリック共和国建国の父にして、ゼネバス、ガイロスの両帝国と渡り合  
い、中央大陸は風族の王族たるかの大統領を、この扱いは……………

「その程度もクソも、私に知識を求めるな！」

「う、この、脳細胞を丸ごと置き忘れたような人間は……!」

「あはは……」

エルフリーダの強烈な馬鹿さ加減に汗を流す一同、

「——その辺にしておけ、エル」

と、シュバルツ高校組の二人の背後から、そんな声がかげられた。

「ハッ!」

「総大将!　これは失礼!」

たった一言、よく通る声に二人が姿勢を正す。

当然、何がどうなっているかを確認すべく、リナもイオナも視線をそっちに向けた。

「いや、お二人には失礼した。

ここにいる阿呆は、ゾイド乗りとしての腕と皆を牽引する能力以外抜け落ちているのが欠点なもので。

悪いやつではないから、私の顔を立てて許してくれないか?」

そこには、一人の女性がいた。

シュバルツ高等学校の制服に身を包み、『ある偉人』を思い出すようなつばの広い帽子

を着用する、凜々しいたたずまいだった。

金髪で、緑に近い色合いの瞳を持つ……誰かに似ている気もする女性だ。

「……あなたに言われては、私は「気にしてませんから」と言わざる負えませんね」  
イオナは、そう彼女を知っているように言葉を紡いだ。

実際、黙っているリナも、彼女が何者かは、以前相手の高校を調べた際に知ってはい  
た。

「ほう、さすがはかのムーロアの血筋だ。

下調べは済ましているようで、挨拶の文句が思い浮かばなかったから助かるな」  
「だって、『ガイロス国防軍の至宝』と言われた方の血統ですもの。

調べなければ失礼でしょう？

シュバルツェス・シュトルム総大将、

フィーネ・キルシエ・シュバルツさん？」

その名を言われた彼女——フィーネは少し口の端を曲げる。

「言っておくが、私は大叔父様の直接の血統ではなく、その弟がお爺様だ。

だから、名前程能力は高くはないさ。

ネームバリユーも困ったものだな、王族や国家元首の家系ほどではないかもしれないが」

しかし、この場の誰もが思った。

かの、カール・リヒテン・シュバルツを思い出すような見事な皮肉だった。

## その4

「私は、ゾイドが好きなんですよ」

俗に、地球由来の『リムジン』という名で呼ばれる高級な車の中で、質素だが高級そうなスーツ姿の中年男性はカメラマンと女性リポーターの前で答えた。

「ゾイドが好き、ですって？」

「ええ……最初に見てときめいたのは、レブラプターです。もう30年も前ででしょうか？」

まるで、大型の猛禽類を思わせる雰囲気のかたちの、鍛えられた肉体。

毎日家では筋力トレーニングをしていると話す彼は、しかし意外なほど穏やかな笑顔で答えた。

「レブラプターは、後になって知ったことですが、格闘武器しかない、通に言わせれば「イロモノ小型ゾイド」だそうですが、私はその攻撃的でわかりやすいフォルムに見とれてしまいましたね……おおっと、これでは質問に答えられないほど長く語ってしまいます

な。

まあ、ともかく、前提として、私はゾイドが好きなのですよ」

長くなりそうだった話しをあえて切り上げた彼に、女性リポーターはこう質問を返す。

「しかし、デイン・ガルドさん？

ならばなぜ、著しくゾイドの寿命を短くするバイオゾイドを開発したのです？」

その質問に、男性——『Dーガルド・ユニオンカンパニー』の社長であるデインは、ばつが悪そうな笑みを見せた。

「……確かに、彼らには悪いことをしているのが現状です。

バイオゾイドは、その生まれる過程から自然な部分を抜き、コアも遺伝子レベルで調整・選別したものを使う……いわば、完全人工ゾイド。

禁忌と言われれば否定はできません。

なにせ、命を作り出すなど、神をまねた所業だ」

「そうなるよ、あなたは神という事になりますね」

「はは、これは手厳しい。」

しかし、そこをまず反論させてもらえるのなら、人は神の領域にしようと人間のままでと言わせてもらいますよ？

「エゴの塊のような、一人の紛れもない人間である私の言葉ですが」  
そして、とディーンは真剣なまなざしで話を続ける。

「エゴの塊であるからこそ、私はある理念を持ってバイオゾイドを作り出したのです」  
「理念？」

「はい。」

ゾイドは、戦闘機獣であり人間のパートナーだ。

人間の生み出した戦場でこそ、それがどんなイデオロギー、理由でできた物であろうと、

ゾイドは、そこで輝き、本当の生命の美しさを見せることができる」

いやいや、とそこで大きく手を振る。

「でも勘違いしないでくださいよ？ 私は本物の戦争は嫌いです。

しかし、こう、少年のようなことをこの年で言うのもおかしいですが……………」

ゾイドバトルが大好きなんですよ、私は。

ゾイドたちが、己の爪を、牙をぶつけ合い、ビームや砲弾、荷電粒子砲もいい！

とにかく、己のすべてをかけて戦いあう。

そんなゾイドバトルが好きで好きで仕方がないのです」

まるで、少年の頃の無邪気さのままに語るディーン。

「バイオゾイドは、確かに寿命も短く、パイロットも厳選します。スリーパー化技術がなければ、数をそろえての運用も難しい。だが、私はこの点だけは自信をもって言える。」

わが社のバイオゾイドこそ、今この惑星上で最も強く、素晴らしいゾイドだと！

バイオゾイドは私の考えた最強のゾイドを、我が社独自の技術と製法で生み出したものです！

そう……いうなれば、私の中の少年の夢を、大人げなくこの年でかなえた物なのです。だからこそ、自信をもって、先の言葉を言えるのですよ」

彼は、いかつい顔に無邪気なまでの笑みを浮かべて、そう言い切る。

自身に満ち溢れているのは、誰が聞いても分かるだろう。

「……なるほど……意地悪な質問をして申し訳ありません」

「いえいえ、ゾイドを大切にするなら、もちろん寿命も考えなければいけないでしょう！私も開発の段階でそこだけが悔しい限りでして……」

あのオーガノイドシステムですら、リミッターにより機能限定で延命ができるというのに……



そこが今後のバイオゾイドの課題でしょう。重々心に刻みますとも」

「個人的に応援しますよ。私もゾイドバトルが好きですから。」

ですが、

と、前置きの上で、女性リポーターはこう続ける。

「……そちらの、パイロットの方は大丈夫なのですか？」

ふと、手で示された先、

「……………すう……………ん……………すう……………」

そこには、ところどころ謎の機械が体に取り付けられたよくあるパイロット保護スーツを身にまとい、横になって完全に寝息を立てている小柄な少女がいた。

「ぶっ……………くく、まったくと、この子は……！」

思わず吹き出すディーンは、おっと、と表情を引き締め、カメラの前で向き直る。

「いえいえ、お見苦しいところを。」

何分、ここにいる私の娘は……………一日16時間は寝ているようなものでしてね」  
起きている時間が少なすぎる、と一瞬誰もが思った。

「その分、これで鼻肩目なしでの実力者なのですよ。」

まあ、想像しにくいでしょうが」

少しため息混じりに言う物の、寝ている自分の娘を撫でる顔は、とても優しいもの

だった。

「……余裕ですね、お二方とも」

「ええ、まあ。何か、まずかったですか？」

「……そうですね、しいて言うのなら……今日の試合、ディガルド学園が勝利するかが不安ですね」

ストレートな言葉に、しかしディーンの目は輝く。

「この密着番組を見ている視聴者のみなさんも問いたいはずですよ。」

謎に包まれた不気味で攻撃的な印象を持つ銀色のゾイド、  
バイオゾイドの実力はいかほどなのかと。

ガルドさんの言う最強、それはどれほど通用するのか、と」

そして投げかけられた質問に、待つてました、と言わんばかりの笑みを浮かべる  
ディーン。

「……私はですね、こういうテレビに出て、いつかこういう質問をされるかをずっと待つていたのですよ。」

無論、そのための答えは用意してあります」

す、と右のひとさし指を上げ、カメラへ向かって指を向ける。

「聞けば、アレキサンドロス高校は、素行の悪さとゾイドの腕でこの北エウロペーだとか

聞くね。

ならば、今頃この番組を何かの端末でこっそり覗いているだろう。うむ、授業も退屈だ折るし、試合も私の都合で待たせているからね。

さて、アレキサンドロスの諸君、先ほどまでのやり取りを見ているかどうかは関係なく、傲慢にこの言葉を君たちに言おう。

今日勝つのは、我が『私立デイガルド学園』の、私の生み出したバイオゾイド、私の生み出した学校の育てたゾイド乗りたちだ！

君たちには……いい練習台になってもらおうか」

それは、間違いのない宣戦布告だった。

「おっと、でもこれから観戦に行く私に場外乱闘だけはやめてくれたまえよ？」

私に勝つても、バイオゾイドには勝てんよ」

いい、と不敵な笑みを向け、高らかに宣戦布告をカメラに向かい言い放った。

\*\*\*

同時刻、

公立アレキサンドロス高校、校庭のなか

「ぎつつつつつっけんよ、このクソオヤジがアアアアツツツツ  
?!?!?!?!」

ズド、と音を立て、旧式の液晶型テレビがその画面に穴をあけながら宙を舞い、餌だー、と言わんばかりに口を開けたアロサウルス型の小型ゾイド『ドスゴドス』に食われる。

「あ? ああ!? てめえ、俺を舐めてんのか、舐めてんのか俺の監督してやったこの学校がなあ!? 生まれて1年にも満たねえてめえらの銀ピカ骨クソゾイドに負けるってのカオラア!?!」

なおもドスゴドスごと蹴りを入れに行こうとするガラの悪そうな男を、数人の同じぐらいガラの悪そうな男子生徒達が止めに入る。

「落ち着けよ、先公!!」

「あれ学校の備品だろ!?!」

「うるせえ!! もとはと言やあ、おめえらクスどもものせいだろうが!!」

と、先公と呼ばれた男が止めに入った男子生徒二人を殴り飛ばす。

「いでえ!?! ひでえ!?!」

「オヤジだつてグーパンはしねえのに!!」

「ガチ殴りくらつたこともねえ癖してクスだからてめえらはクスなんだよ、クスが!!」  
ペツ、と痰まで飛ばすこの男、

ここまでの会話で分かつたであろう、彼はこの学校の教師だ。  
名を、イツカク・オーガスト。

「この腐つたミカン共が!!」

無論の事、この学校のOB。

「ええ!! 先公の癖してそんなこと言うのかよ!?!」

「何だよ、イツカク!! 普通逆だろ!」

「どこが逆だよ、この腐りきつたミカン共が!!」

てええらはしよせんなあ、腐つたミカンでしかねえんだ!!

どんなに見た目を取り繕つても、隅にはアオカビが生えてるし、道行く一般のクソどもからは鼻をつままれる、そんな腐つたミカンなんだよ!!!」

おおよそ、一般の教員ならば言う事のない言葉を連呼する彼は、その経歴もアレで、高校卒業後暴力事件で書類送検、罰として徴兵され軍に入隊後、数多くの問題と何故か戦

果を挙げて最後は不名誉除隊という無駄に波乱万丈な物だった。

「いいか!？」

てめえらはどうやろうとこのままじゃ明るい未来はねえ!!

なんせもう腐つちまってんだからな、ゴミ箱行きか良くて畑の肥やしか、最悪は豚の餌で終わりだ!」

「「「「「ええ!?! そこまで?」「「「「「」

「そこまでだろうが!!」

おいそこにいる不動産でもやってそんな老け顔!! お前今月何度喧嘩した!?!」  
う、とその指さされた老け顔の生徒がよろめく。

「そこの金髪ピアス!! カツアゲ何件目だ!?!」

そこのガリ!! さすがにヤクはやめとけ!!

そこのスポーツ刈り!! 親父に紋々入れられたってな……痛かっただろ、まあ銭湯は諦めろ。

オイ、番長気取り!! 喧嘩もいいがお前赤点やばいからな!!

あ、そこの一年3人娘はまあ、まともだけど……こいつらとつるむのやめとけよ?

つーかそこの頭も下も軽そうな女子!! ……8万でいいや、後で」

いくつかとんでもない事を言い放ち、「で、だ」と言葉が続ける。

「ここままでやっておいて、まさかこのまま無事に爺になるまで生きられると思ってるのか？」

お前らはこのままじゃ碌な死に方はしねえ。

地獄にただ行くだけだ。ただ行くだけなんだよ、地獄にな!!!

ならばお前ら!!

お前らは、どう地獄に行きたい!? ええ!?!? どうだ!?!」

その質問に、全員は思案するような顔を見せ始める。

「……地獄に行くとか、わかんねえよ先公」

そして、誰かがそう言葉を紡ぎ、それにそうだそうだと賛同するように叫び始める。

「死ぬ時なんてわかんねーよ!」

「昼飯何くうかも決めてねえのに!!」

「そうだよ、わかんねえよ!!」

「わかんねえか？」

.....

だよな、わかるわけがねえ!! だからお前らは腐ったミカンなんだ!!」

ええ、と聞いておいてのその言い方に反応を示す生徒たちに、イツカクはしかしこう続ける。

「だがな、本気の腐ったミカンは、誰であろうと腹痛と吐き気を与えられる。

腐ったミカンだからこそ、何であろうと腹痛と下痢を与えられる。

汚い話だな。

そうさ、腐ったミカン共、

お前らは汚い手段でこそ輝くんだ!!

腐ってるなら、腐り切れればいい!!

半端なこととしてたら、舐められて馬鹿にされてそこで終わりだ!!!」

一度、全員居眠りせず聞いているか見まわし、全員が聞き耳を立てていると確信した顔で言葉を続ける。

「お前ら腐ったミカンが舐められないにはどうすればいい??」

簡単だ、お前らの武器を使え!!

腐つてようが何だろうが、こいつに手を出せばやばいと思われればいい!!

やばいやつが、堂々と生きてるように見えれば、



それは普通の奴かりや見れば輝いて見える!!  
じゃあ聞く?

お前らの武器はなんだ!? ええ!?!」

『ゾイドだ!!』

即答。

一角の言葉に、生徒たちは全員その単語を迷いなく言い放つ。

「わかってんじゃねえか……」

ゾイド!! 今じゃ、乗れない人間の人口も増えてやがる!!

乗れるだけですげえと言われ、それで戦えば一瞬でアイドル扱いだ!!

そして、その世界で強けりや完璧だ!!」

にい、と口の端を曲げて言い放つ。

まるで、世界の真理を語るように。

「お前ら、3年、2年は分かかってるだろ?」

去年、俺の下でゾイド戦闘技術を履修した中で、就職が決まらなかった奴はいなかつ

た。

プロに進んでいまだ夢追っかける馬鹿ができるまでになつた奴もいる、この底辺校出にもかかわらず、だ。

いいか？ 無い頭を振り絞つて聞け。

ゾイドと共に生きてきたこの星は、何処でだろうとゾイドの知識はいる。

知識つつーのはな、頭でも体でも覚えるものだ。

知識がある奴は、どんな仕事でも重宝される。

そして重要なのは、知識を扱う技術——知恵が今生きる上で必要なものだ。

そいつさえあれば、底辺校出ようと何だろうと、まともな職に就ける。

いいか、ゾイド戦はそのすべてを出し絞らなけりや、必ず負ける。

それどころか、すべて出し切つても勝てないこともある。

だが今のお前らに必要なのは、そのすべてを出し切るつつー『行程』だ。

この行程があつて初めて、腐つたミカン同然のお前らが、

普通の状態になれる権利がもらえるわけだ」

「じゃあ、この試合すべて出し切れば勝たなくてもいいってことかよ、イツカク!？」

はっ、と一人の生徒のヤジを笑い飛ばす。

「そうだな、そう思うんならそれでもいいさ。お前が良けりやな。」

なんにせよ、全力で戦ってくれ。そうすりやお前らも俺も内申点が上がる。だが、それだけでいいのか？

さつきも言っただろ？

要するに、勝てばビツクになれるんだよ!!」

その一言を待ってましたと言わんばかりに、全員が沸き立つ。

「落ち着け野郎ども。おっとそれとお嬢ちゃん共。

いいか、さつき言った行程だけはくれぐれもきちんと守れ。

わざわざ座学の時に居眠りしてる奴をしばいてたたき起こしてやり、ミミズが這うみたいな字でもなんでもノート書かせた、俺の特別手当が一銭も出ない努力を無駄にするな」

さて、とイツカクは校庭の方向を見る。

「じゃあ、まず何やるかつーと、」

と、その時、すさまじい爆音と共に赤いテイラノサウルスがドリフトするように止まり、その腹のコックピットが開き、一人の女生徒が出てくる。

「悪い!! 寝坊した上に道路をデモカスが塞いで、」



「ツツ!!」

堅物そうな顔を真っ赤にし、文字通り蒸気を出して揺らし続ける。

「……いやー、中々耳が痛いね、ゲラルト君……」

と、そのデイーンの一言に、クイ、と明らかに機械的な動きで首を向けるサイボーグ人間——デイガルド学園教員、ゲラルト・ゲオルザーク。

「失言を失礼しました!!」

しかし、ご息女はこう言っても絶対に目覚めないであります!!」

「いや、それは間違いではないね。きつと、私が強盗に襲われていても寝ている」

「……ぶつぶ、ふ、二人とも、言い過ぎ、だ、あく……い……」

と、声を上げた瞬間、ぴたりと機械通りの正確さで振動を止めるゲラルト。

「起きたか! よし、他の皆はゾイドに搭乗済みだ!!」

あとはお前の『デウス』のみだ!!」

「ありがとう、先生……うー、よく寝た……」

まだ覚束ない足取りで、ちよこちよこゾイドのいる方向へ向かっていく。

「気を付けろ!!」

……ふう……ありがとう、か。

暴言まがいのことを言ってまで起こした身としては、複雑な言葉だ」

「そういう事を思えるから、君はいい教員なのさ」

ぼん、と硬い肩をたたき、デインは彼に言う。

「よしてください、理事長閣下。私など、しよせん死にぞこないの傷痕軍人です。

こんな醜い体で生き恥をさらすような状態で、いい教員だとはとても」

「生き恥は確かに恥だがほかの人間には役に立つさ。

君のような人間だからこそ、安全で安心してゾイドに乗れるよう指導できる」

「買いかぶりですよ」

「そう思った時には、退職金を出ささ。

ま、今日もこれからよろしく頼むよ」

そんな言葉と共に、懐から白い中折れ帽を取り出してかぶり、上着のボタンを外し始める。

「理事長、何処へ？」

「取材の続きも試合後だからね。

それまでは、私も試合を楽しむのさ」

さつと脱いだ上着を片手で片に担ぎ、に、と笑う。

「……成程、ではあとはこちらで好きにします」

「そういうさりげなく察してくれるところも、私は買っているよ？」

と、言いながらディーンは立ち去る。

その背後で、ふうと人工肺からため息を漏らすゲラルト。

「……理事長は有能だが、なんというか……：……ジーナの親だな」

\*\*\*

ディーン・ガルドは、この治安の悪い学校の治安の悪い生徒たちがたまる方向へ歩いていく。

いや、しかし、今の彼の恰好はどうだ。

暑さもあるが、赤いシャツと白のズボンの上、着ていた上着は肩で担ぐ。

その鋭い眼光もあり、一瞬白い粉か何かを売る人にも見える。

高級そうな服がかえってそういう印象を持たせていた。

「……さて、何処かな……?」

と、その視界に、彼の目的の場所が見えた。

「俺は、もちろん俺の学校に5000賭けるぜ!」

「俺も!」

「俺は大穴狙い、ディガルドだ!」

「さー、皆さま張った張ったー!!」

去年優勝の怒涛の勢いの俺たちアレキサンドル高校か!?

はたまた不気味なゾイド群のディガルドか!?

勝つのはどっちだ!?

どっちにしろ、賭けは盛り上げなあかんでー!?

奇妙な訛りの言葉と共に、やたら老け顔な男子生徒がノミ屋同然な賭博を開いていた。

もちろん違法でゾイドバトル連盟非公認であるが、そんな細かい事を気にする人間は、ここにはいなかった。

「いいねえ……かつてのバックドラフト団じみた試合はしたくはないが……賭けはあった方がいい……!」

そしてここにいるティーンも、むしろ推奨する派だった。

「君君、」

「んあ? なんやおっさん?」

その主催らしき生徒に近づき、話しかける。

「今のオッズはどのくらいだね?」

「え? おお、そりゃまあ、ワイらの学校優勢やで!」



しかし意外にも7:3の割合で、圧倒的大穴つてわけやないのがすごいで、デイガルド学園！

「どや、奇跡の大穴狙う？ おっさん」

「無論大穴狙いだ。8万賭けよう」

「おお、と普通はこんな額は出せない皆がどよめく。」

「太っ腹やなく、おっさん!」

「ええんかい、こんな場末のノミ屋やで？」

「楽しいじゃないか。こういうスリルも。」

「それとも誰も何ももらえないかね？」

「一部だけでもワイにとつちやええ額や。それ以上はいらん。」

「それにちやんと勝ちに配当せな、午後にはワイ、校舎裏で埋められとるで？」

「はは、信じよう！ だが、負けた方が暴動を起こさないと限らないかもしれないが」

「そんな時は、頑張つて逃げなはれや!!」

「おおきに、とデイガルドと書かれた券をもらい、内心楽しみにしながら離れる。」

「ふっふっふ……ふいにするか、戻ってくるか……たまらない！」

「ギャンブル中毒だな、まったく私は……!」

しかし、と内心笑う。

自分の作った自慢の逸品（バイオゾイド）が負けるはずはない！

その思いだけは変わらなかった。

（去年の優勝校、決して弱いとは思ってはいないよ？

だがね、アレキサンドル校の諸君。

私のゾイドは、多少危険だが、確実に強い。

無論ゾイドだけではないがね……フツフツフ……！）

まるで誰か殺す事でも考えているような顔で、そんなことを考えて歩く。

そんな時、ふと近くでこんな言葉が耳に入ってきた。

「——ここ、ここで劣勢そうな方に賭ければ、大穴っていうシステムできつと帰りの費用も宿泊費もリターン!! できるかも?」

「ダメです!! 絶対、絶対にそんなこと許しません!!」

おや、とついつい聞き耳を立て、近づいてしまう。

見れば、見慣れないどこか一昔前の軍隊的な印象を受ける、青いベレー帽にクローク

が特徴的な制服に身を包んだ人間たちがいた。

「でも、もう帰りよしのレツゲル代もないよ、先生」

「そうです!! もうこうなりややくそなんです!! やっちやいましょう!!」

「ダメです!! 許しません!! たとえどんなにお金があっても、学生の内からギャンブルだなんて!!」

見れば、そんな装いの赤毛の少女と、彼女より小さな背丈の男子生徒が、身なりの良いどこか上品な出自を醸し出す美人の、おそらく教師であろう人物に何かを意見していた。

「ふむ? む?!」

そして、驚いたのはその背後。

数メートル先に、似たような装いの男女混合の人間たちがいたが、それよりもデインはその先にいたゾイドに目を奪われていた。

そこには、共和国共通の視認性の高いクリアキャノピーを持ち、猫に似たゾイドがいた。

いや、形こそ猫に近いが、丸みを帯びつつも太っているというよりは、強靱な肉体の野生体だったであろう力強さを持つ、別の生き物だ。

大きさは中型、カラーは茶色。

やはり、とその名前をつぶやく。

「ベアフファイターか……!」

実物を始めてみたデインは、思わず凝視して声を上げた。

「ん?」

そう、ベアフファイターの驚きはそこで終わらなかつた。

通常のベアフファイターの横には、あえてキャノピーに増加装甲を施し、突撃の為に両肩にメイスに似た装甲兼打撃武器を付けた改造機体もいた。

おそらくは、あれはベアフファイターの特徴「巡航形態」から「格闘形態」に移行した際には腕にスライドする機構があると一目見てわかつた。

「確かあの改造型の愛称は、『ベアデビル』か。珍しい、非常に珍しい……むむ!」

さらにその隣には、背後に巨大なミサイルが6連立ち並び、さらに両肩には巨大なミサイルポッドの鎮座するタイプもいる。

「バンブリアン……いや、雪原及び森林に対応した『グリズリアン』か!」

なるほど、肩と色以外は変わらないと思つたが、よく見れば露出部分もかなりの差が、

「おっさん、さつきからうるさいけど、誰あんた?」

と、ひとしきりレアゾイドに興奮しているうちに、気が付けば背の低い少年が近くに

いた。

「……おっと」

ようやく、自分の周りをその生徒たちに囲まれていることに、ディーンは気づいた。

\*\*\*

「毎度おおきにー!!」

とりあえず、有り金全部をディガルド側にかけて置いた一行だった。

「グルカ高等学校？」

聞いたことのない名前だな」

「うん。西方大陸でも地味なところにあつてさ。

緑と山以外何もない感じの場所」

「ほー、聞くだけだといいたところだが、実際不便そうだ。いや失礼」

気が付けば、その小さい少年——名をアーガスという彼とディーンは打ち解けていた。

「まあなんていうか、ウチは長い事共和国と同盟組んでた小国でさ。

グルカは国の名前。

俺としてはいいところだけど、問題は最近まで紛争地域みたいなもんでさ、貧乏で学校も旅費少ないみたいで」

「ちよつとアー君、初対面の方に失礼じゃない？」

と、アーガスに向かい赤毛の少女が注意する。

「いやいやお嬢さん、これでも私も同じ注意を家族に受けるぐらいはずか話してくる身だからね、気にしたら罰が当たるよ。なあ、アー君？」

「ほら、ディーっちも言ってるし」

「すでにあだ名で呼びあう関係!？」

「ロゼ姉もそんなに気を使わなくてもいいんじゃない？」

「ほう、ロゼさんというのかね。可愛い名前だ」

「え、あ、ありがとうございます♪」

とりあえず女性は褒めて置くという礼儀をしたただけだったが、ここまで喜ばれるととしながらディーンは悪い気はしなかった。

よく見れば、制服の下からでもわかるぐらい、年齢のわりにいい胸のふくらみだった。もちろん、邪なオヤジの下心は、なるべく見せないが。さすがに犯罪であるゆえに。

「……あの、皆さん……？」

ふと、背後から、どこか怒りを押し殺した声が聞こえる。

「おや、先生……ええと、そういえばお名前をお伺いしてませんでしたな。

失礼ながら、伺って」

「グルカ高等学校言語学教師!!」

兼!! ゾイド育成コース担当の!! コーネリア・イルクです!!」

それはそれと、とその教師は、人差し指を指してずいとディーンに近づく。

「あなた!! 仮にも大人でしょう!!」

なぜ、なぜ子供に!! 重大な局面を迎えながらも!!」

それをギャンブルなどという方法で解決するなんてことを!!

教えるのですか!?! 正気ですか!?!」

蒸気でも出そうな剣幕で、彼女はそう詰め寄る。

なるほど言いたいことは分かる。まさしく真面目そのものな彼女のいでたちなら、間

違いなく言うだろう。

「む?」

もちろん!! 正気で、何より確信をもって、この方法を押したままですとも!!」

しかし、ディーンはそう逆に言い放つ。

「ええ!?!」

「いいですか、コーネリア先生?」

あなた方は、今不幸のどん底にいる。

聞けば、新興の学校として、今!!

「今期のバトルの間に、短期部隊転校制度、いわゆる『傭兵』を行うことで名を上げた  
い!!」

「そのために少々離れたこの場所までやってきた物の、今日の宿代もない!!  
そう、まさに不幸のどん底だ、

「だがつまりは、チャンスだ!!」

「ずい、と押し畳みかけるよう、その言葉を撃ち放つ。

「え、あ、えと?」

「航空機事故の確率と宝くじの一等の確率は、理論上は同じです。

「要するにあなた方は今、運の総量で言えば宝くじ一等と同じ!!」

「このチャンスをふいにし地味に何か手をこまねているのみですと?」

「それはもつたない!! 実に!!」

「で、でも、運に任せるだなんて、」

「あなた方は、ここに来るまで努力してきたはずだね?」

「人は常に努力の上で最後の瞬間にほんの少しの運を天にゆだねる。

「なら今がその時だ。」

「というわけで、すでに賽は投げられた。」

「丁か半か、我々はすでに丁と言っているのだよ。」



ならやることは一つ！」

畳みかけるような超理論の後に、ディーンはくるりと背を向け、顔のみを後ろに向けて口の端を曲げる。

「このゾイドバトルを観戦者として楽しむことだ。

そうでしょう？」

決まった、と内心思うディーン。

だが、そこにはもはや置いてけぼりを喰らい思考を停止した顔のコーネリアがいるだけだった。

「……そ、その理屈は……おかしいです？」

「……ふむ。」

まあいいじゃないですか、たまには。こういう事もある物ということだ」

「我々損しかないような気がしますよ……!?!」

「もういいじゃん先生。試合始まつちやうよ？」

俺見たいな、噂のバイオゾイド」

「私も気になります!!」

「おう！では全員でいい場所を取ろう!!」

ささ、善は急げ！ 行きましようか!!」

はっはっは、と笑うディーンに連れられ、意気揚々としているロゼとアーガスが続き、コーネリアは他の生徒に哀れみの目で見られながら連れられて行く。

「さてさて、良い場所は……お、あそこに見えるのは！」

と、少し開けた場所に、ディーンにとっては少年のように目を輝かせられるものが見えた。

「あそこ！ 見えるかな、あの黒いテイラノサウルス型の!!」

「ジェノザウラー？ うわ、なんだろうあの剣かつこいいい……!!」

「アー君、あれはジェノリッターだよ！」

「そうそう、お!! 隣のはセイバータイガーSS!!」

む、あれはシールドライガー！ それにグライドラーも!! 私好きなんだよ、あれ！  
ちようどいい、とばかりに皆と共にその場所へと近づく。

なにせ、なぜかそこは他に数台ゾイドが置けるほど開けている。

「すみませーん!! ゾイドを数台おいて観戦したいのだが、いいですかなー!!」

と、数人の女子たちが、各々持ってきたであろう折りたたみ椅子に座り見ているところに声をかける。

「——ええ、どうぞで？」

瞬間、ほぼ同時に、  
軍帽に似た帽子をかぶる金髪の少女と、  
やや短めの髪の銀色のブレザーの少女が、  
振り向き答えた。

\*\*\*

## その5

「戦場では水よりもコーヒーが多く飲まれるらしい。

何せ、生水よりも煮沸された物の方が安全だ」

プシャーと音を立て、エスプレッソマシンからコーヒーが抽出される。

それは、セイバータイガー腹部の追加コンテナの中にあつた。

「それが理由とは言わない。私は、ただの金持ちな家に生まれただけの学生だからな。

当然これは金をかけた趣向品だ、好みで選んでいる」

カップに注がれたコーヒーをマドラーで人かき混ぜし、その香りを楽しむ。

「知っているか？ 西方大陸でも徒歩で行ける最高峰「マウントアース」は、旧基地の観光や絶景だけではない。

その名を関するこの豆から抽出された黒の雫たちの味は……」

すす、とフィーネは一口含み、一瞬にして体を満たす苦みと酸味、その芳醇な味わい

に目を細める。

「……んん……最高だ

ふ、と口の端を曲げ感想を漏らす。

「ふふ、なかなか面白い話です♪」

ライガーの腹部の給湯器から出るお湯。

沸騰直後のこの星では珍しい『軟水』のそれを温めたポットに勢いよく注ぎ、茶葉を程よく蒸らす。

「さすがは名門シユバルツ高等学校。

有事の際は泥水でも飲めるよう訓練されているだなんて、

私みたいなただの学生から見たらうらやましい限りです」

ここだ、というタイミングで温めたカップに注がれるは、芳醇な香りひきたつ至極の逸品。

そうして淹れられた紅茶のティーカップを受け取り、静かに、優雅に一口を含む。

「……んん……ちよつと贅沢な濃さかな……」

「すみません。別の香りがあるので、鼻が利かないかと思って」

「まあ、仕方ないですね。ここは土と泥の匂いが大きいですし」

ちら、とフィーネに冷やややかな視線と、若干嘲笑の入った笑みを送るイオナ。

ぴくつ、と目の端が動くフィーネが、フ、とわざとらしく鼻で笑う。

「チャノキに囲まれた生活では、鼻が変に敏感になって大変だろう。同情するよ」

「いえいえ。名門シユバルツ校で泥水をすすするような、血のにじむ努力をすするあなたには負けずもの」

「やれやれ、生粋の共和国人なだけはある。その精神力は感嘆の一言だ」

「名門の暗黒人の方に言われてしまうだなんて、光栄の極みですねえ」

お互い、常に笑顔で会話をしている。

しかし、なんだ？

まるで、今にも開戦しそうな緊張感が、場を支配している。

「……ねえ、なぜかしら。私達はとんでもない場所に来てしまった気がします……」

「コーネリア先生、そりゃあそうですとも。」

「ここは、対立する二つの宗教の武闘派が隣り合わせに座っているんですぞ？」

両手に何故かもらったコーヒーと紅茶を持ち、二人の大人は冷や汗交じりにつぶや

く。

「俺、砂糖欲しい」

「私は砂糖とミルク、」

と、同じく二つとももらっていた、ロゼとアーガスの言葉に、

「——ぬあんですつてえくくくく???

「——砂糖とミルク、だとお……………?????」

ギギギギギ、と音を立てて、イオナとフィーネが恐ろしい笑みでそちらに首を向ける。びくつ、と二人が驚き、事情を知るディーンが思わず目を見開く。

（しまったッ！ 過激派…………『ストレート以外は認めん』主義過激派かッ!?

殺される…………このままでは、バラバラにされへスペリデス湖に沈められるッ!!）

瞬間、二人の指がパチンと鳴らされ、側近と思わしき二人の人間が飛ぶ。

その手に何か、凶器にも見えるものを持ち、二人へと迫る。

「ちっ…………!」「ひっ!?!」

アーガスが男らしく前に出た瞬間、

さつ、と二人の前に、ミルクと角砂糖が差し出される。

「え？」

「こんなこともあろうかと、

ちゃんと一番相性のいいミルクと砂糖を用意しておきましたとも♪」

「どうぞ、角砂糖をお好きな数を。」

「おすすめは、角砂糖1にミルク多めです」

「……ありがとう」

二人がそう言って受け取る中、ほつ、と胸をなでおろすディーン。

「……私ももらっていいかな？」

「どうぞどうぞ♪」

「穏健派で、よかった……」

ほつと胸をなでおろし、とりあえず砂糖をもらった。

\*\*\*

「して、ミュージズの生徒会長殿はどう見る？」



改まって、フィーネはそうイオナへ訪ねる。

「どう、とは？」

「どちらが勝つ？」

「私は、安直に新型ゾイドたちに一票で」

はは、とフィーネはその返答に笑う。

「なんだ、あなたもかムーロア会長殿。」

実は私もだ」

と、その返答に、今度は少し驚いた顔を見せるイオナ。

「意外ですね。」

昨年あなた達を打ち破ったアレキサンドロスはいいのですか？」

「ああ、彼らにはさんざん辛酸を舐めさせられたよ。」

だから私は彼らが嫌いなんだよ」

途端、ははははは、と二人は笑いだす。

「ははは、でもアレキサンドロスは、調子のいい時はとことん調子のいいゾイド乗りたちですよ？」

「ああ、だが、噂ではバイオゾイドは『実弾とビームを通さない』特殊装甲らしい。」

すでに、本社のプレゼンで共和国軍が負けたと聞いている」

「ゴルドスとコマンドウルフ相手でしたね」

「旧式だが、かつては主力だった機体だ。手も足も出ないとは中々やるちなみに、彼女らの言う情報は、結構な機密だ。」

「……しかし、無敵の装甲だけで、果たしてアレキサンドロスの勢い、そして、『例の戦い方』に勝てるんでしょうか?」

その問いに対し、ただ手を振って何とも言えないと伝えるフィーネ。

「うーん……」

そして、イオナは、

「そこらへん、どう思います?」

バイオゾイドの生みの親、デイーン・ガルドさんは?」

と、近くにいたデイーンに話しかけた。

「え?」「ええ!」「そうなの?」

周りの見知らぬ学校の生徒たちに驚かれる中、ふう、と肩をすくめるデイーン。

「……隠していたわけじゃないが、まさか知っていたとはね?」

「情報は武器です♪」

「まさか、隣に来ていただけるとは思いませんでした。」

それも、そんな『フーテン』のような姿で」

ははは、笑い、そしてフムと顎に手を当て唸る。

「しかし君らも意地悪な質問だねえ？」

暗に私に手の内を語れというのかね？」

「確かに、あなたの学校の情報が、他校に流れるのは避けたいでしょうけど、」

「私もあなたの先の放送は見たのですよ、デインン社長。」

バイオゾイドは自分の最高傑作、

そんなあなたが、その程度の手の内を語ってくれないとでも？」

二人の、意味深な視線と言葉が放たれ、

途端、大きな声で笑いだすデインン。

「はっはっはっはっは!!」

こりゃあ、一本取られた!!

これでは、私が口を紡げば先の発言が嘘になる、か!!」

ふう、と笑いつかれた喉を紅茶で潤して、再び口の端を曲げた不敵な顔を上げる。

「よろしい。」

君らに教えてあげよう。

バイオゾイドの、もう一つの素晴らしい性能を！」

そう、と言葉を続ける。

「その名も、『SLS』！」

\*\*\*

試合10分前、

ジーナ・ガルドは、まるで骨格標本そのものな姿の銀色のゾイド——バイオラプター達の間を縫い、目的の場所にたどり着いていた。

「——98、99、100！」

その場所には、その背中に車椅子に座るおしとやかそうな少女を乗せ、腕立て伏せをする男がいた。

「……リヨウヘイ、お前、何をしてる？」

「ふーっ……ああ、ちよつとミサトに頼んで筋トレをな」

と、背中の上に乗っていた車椅子の少女が、器用にその背中から降りる。

「はい。キクチ君がどうしても、体がなまりそうだから、つて」

「……お前たち、許可する方も考えた方も、よくやれるな……」

立ち上がり、湯気が上がりそうな汗を肩にかけたタオルで拭く男子生徒——リヨウヘイ・キクチという東方大陸出身者と、同じくミサト・サイゴウにあきれた声をかける。

「悪いとは思ったんだが、自重だけじゃ物足りなくてな」

「私も、リヨウヘイ君がいないとゾイドに乗れませんし」

「先に乗っていただいいだろ？」

まったく、と指だけで二人をゾイドに乗れと指示を出し、自分も自身のゾイドに向かう。

銀色の小型ゾイドたちのほぼ中央に、一際異彩を放つ大型ゾイドが3体。

ティラノサウルス、トリケラトプス、メガラプトル、

それらの骨格標本のような、しかしその中に赤く輝く目とコアを持つバイオゾイドたち。

そのうち、ティラノ型が、自身の主を見つけ、目で追う。

「デウス、時間だ」

その言葉を理解し、漆黒の外骨格じみた装甲を持つティラノサウルスの胸部——コアのようにも見えるそこを開く。

「ふん……！」

グイ、と彼女を押し込むよう、銀色の巨大なラプトルのコックピットへ接続する。

「腰、装着できました！ 後は一人で大丈夫ですよ、リョウヘイ君」

「ああ……俺もトリケラに行く。」

今日は負けねえぞ？ エース！」

「上等です、健常者君？」

ぐ、とサムズアップし、それに返し立ち去る。

さて、とミサトは座席が下がると同時に、自分の体にまとうスーツの丸い『プラグ』に、周りに伸びるケーブルを指していく。

「神経ケーブル、か……本当に、ゾイドから伸びる神経みたい」

さしずめ、と最後のケーブルを背中に刺し、つぶやく。

「私はゾイドの、『第2の脳』かな？」

左右の液晶スクリーンの球体とでもいうべき、おおよそゾイドの物と思えない「操縦桿」に指をつなげる。

真つ暗だった周囲に明かりがともっていき、その前方にゾイドの目からくる景色が映る。

「映りが悪い……ああ、違うか。」

普通に見たらこうなんだもんね」

いや、言うほど悪くはないその映像に、そんな声とため息が出る。

そして、おもむろに右操縦桿のスイッチを入れる。

ドクン!

「うっ……!」

瞬間、彼女の脊髄に鋭い痛みが走った。

\*\*\*

「ぐ……!?!」

一足遅れコックピットに乗り込んだリョウヘイは、脊髄から、いや全身の神経からくる鋭い痛みにうずくまる。

血圧の急上昇に毛細血管が耐えられず、鼻血が垂れ、目を充血させ瞳孔を収縮していく。

「適性が……低いつつーのも、考え物だな……!」

ぐ、と右腕で鼻血をぬぐう。

「オオイ、大丈夫か?」

瞬間、その脳内に声が響く。

「ああ、『相棒』! お前こそ、鼻からなんか垂れてねえだろうなあ!?!」

「オレ人間じゃナイ

エエト、オレ、オレノ事ナンテ言ウンダツケ?」

「ゾイドだ!! バイオゾイド!!」

ぐ、と脳内の声に声を張り上げ、広がり、人間では見れない『生』のゾイドの視界に目を細める。

「バイオトリケラがてめえの名前だ!!」

グオオオ、とリョウヘイの声に合わせるよう、バイオトリケラがうなる。

\*\*\*

〈グ、オ……オ前ノ眠気ガ……〉

「耐えろ。耐えてやる」

黒いティラノ型バイオゾイド——その名もバイオティラノの『意思』にそう答える。

〈人間、ナンデ眠イ時寝ナイ? 馬鹿ナノカ?〉

「そうだ。眠い時寝かせてくれない。」

なぜかみんなあくせく起きて、面倒な戦いに身を投じる」

〈戦イハ良イダロ?〉

「……かもな……」

ぐ、と起き上がる感覚でバイオティラノを起こし、自分が首をほぐす動きも正確に映し出す。

「コマンダー、起動。バイオティラノ、全バイタル問題なし。」



全機、準備は？」

『Aセクション全機行ける！ バイオトリケラもOKだ！』

「了解。

Bセクション、リーダー、バイオメガラプトル、準備は？」

OKです、とすぐさま答えが返ってくる。

\*\*\*

「ただ、『コテツ』ったら、ずっとゾイドコアが活性してて……元氣すぎです」

ぐいぐい、と『足』をストレッチしながら、ミサトは微笑む。

〈ボク元氣!! イツデモ戦エル!!〉

「はいはい」

『今のはメガラプトルへの返事か？』

「あ！

ごめんなさい、つい！」

謝りつつ、彼女はバイオメガラプトル——小鉄を半歩前に出す。

\*\*\*

『作戦は、確か『O—9』からステップ4を『O—32』に変更するタイプでいいんです

よね？』



「SLS。」

スピリット・リンク・システム。

いや、スピリットと言っても本当に魂とつながっているわけじゃあないが、そう言っても差し支えないという意味も込めて名付けたんだ」

遠くで、整列し始めたゾイド群を見てデインは語る。

「ゾイドとの精神リンク技術はすでに確立されていたが、我が社はそれをより強く引き上げた!!」

バイオゾイドの全神経は、科学の力で強化はされている物の、基本は野生体本来の密度と感度を持つ!!

それを、違法や人体に影響が出ないギリギリまでの精神リンクで直結し、あたかもゾイドと一体になったかのように動くことが出来る!!

うれしい副作用として、神経の病による麻痺がなくなっている間は治り、症状も緩和していくという物もあるのだ!!」

ふつつつと、とても楽しそうに、大の大人が笑う。

「ゾイドとの精神リンクによる様々な武勇伝、伝説は多い。

だが、ゾイドとの精神リンクを多用することが少ないのはなぜか?」

「聞くが、オーガノイドシステムに当てられ廃人になりたいかね?」

「聞きますが、砲撃管制を勘でやりますか？」

神経の疲れを考えれば、長時間行動できないシステムをなんでありがたいがたがるのか？」

と、すぐさま二人の反撃が来る。

しかし、デイン・ガルドはその口の端を曲げた。

「それがどうした!？」

そんな物抜きで、ゾイドと文字通り一つになる!!

そんなシステムがあるなら、使ってみようと思うのが男の子の心だ!!」

「私達女子でーす!!」

と、熱意ある言葉に、残酷な返しが飛ぶ。

しかし、彼はめげない。

「だがね、これだけ言うからには、バイオゾイドは強いよ？」

とにかく強い!! ロマンもある!!

いずれ君たちの学校にも、正式にバトルを申し込み勝たせていただく……!

ついでに今日からバイオラプターは販売だから買ってくれると嬉しいな!!」

ははは、と二つの学校の学生代表が笑う。

「そりゃあいい。」

まあ、まずはアレキサンドロス校を打ち破つてからだな!!」  
「ですぬ。」

「昨年優勝校、その名は伊達じゃありませんよ?」  
でも、とイオナは考え込むよう首をかしげる。

「どうせですし……」

この後、勝った方に、勝った方へかけたこの場の高校が試合を申し込む。

と、言うのはどうです?」

ほう、とその横で目を輝かせるフィーネ。

「学生の身でギャンプルをするようになるとは、お爺様もお嘆きになるかな?」

「おりますか?」

「乗るとも。」

「ここで逃げたのなら、お爺様から『お前は真のゾイド乗りにはなれん』と言われてしまふ。」

シユバルツの名に懸けて、負けは少なくあろうとも、逃げることは許されん」

はっはっはっは、とその会話を聞いていたデーンが、横で笑う。

「いいな!! 最高だ!!」

もちろん、今日はわが校が勝つだろうが、これはどちらが勝つても良い事になりそう

だ!!」

「試合の日程は、後日すぐに報告します」

「もう勝った気か？」

次は祝杯の紅茶缶でも開けるのかな？」

「ふふ……私、これでもギャンブル運だけは強いんですよぉ？」

「言つたな？ 負けた時はアレキサンドロスの次に、この前のリベンジマッチと行こうか」

「自由だ」

ふふふふふ、と不穏ながらもどこか楽しんでいる二人の笑い声が重なる。

「さあ、速く!! 試合開始はまだか!!」

こちらの御仁と合わせてもう10万近く突っ込んでいるのに!!」

「負けたら帰れない、負けたら帰れない……!!」

皆が皆、それぞれの思い——若干邪な思いを込めて、試合はまだかとせかす。

さあ、時間だ。

\*\*\*

殺せ! 遅せえ!! やんのかコラあ!! すつぞこらー!! ぶちかませー!!

『あー! あー!! 静粛に!! 静粛に!!』

アレキサンドロス校の諸君も落ち着きたまえー!!」  
「うるせー!!」

『ヒツ?!』

会場の熱気、とりわけアレキサンドロス側の熱気を押えようとしたジャツジマンに、対ゾイド用アンチマテリアルライフルが叩き込まれる。

『はあ……この校がほかのジャツジマンに嫌われる理由がわかる……』

あー、コホン!!

それでは、遅れてしまったが!!』

そうして、ようやくジャツジマンが顔を上げる。

『では?』

公立、アレキサンドロス高校!!

VS

私立ティガルド学園!!

バトルモード2666!!』

げえ、と会場のあちこちから息をのみ、驚愕する声が聞こえる。

「2666……悪魔の『666（オーメン）デスマッチ』!!」

「集団ルール無用の殴り合い乱闘かよ!! 敵さん可哀そうに!!」

そうして、バトルモードが宣言され、いよいよ始まる。

「レディー……ファイツ!!!」

カーンツ!!

戦いのゴングが……鳴った!!



## その6

バトルモード2666

泣く子も黙る、過激な『666（オーメン）デスマッチ』!!

それは、ゾイドをボロボロにしようとかしようとか、どんな数の差があろうと、

とにかく、コンバットシステムさえフリーズしなければどこまでも戦えるルール！  
部位破壊、コックピットキャノピー吹き飛び、そんなことは知ったことではない。

砕け散るまで戦え!!

そんな過激さが売りなのだ!!

そして、

このルールこそ、アレキサンドロスの本領発揮。

\*\*\*

『オラオラオラオラ!!!』

『ヒヤッハー!!!』

デッドボーダーが、ドスゴドスが、テイガゴドスが、ダブルガトリング装備のレッド  
ホーンが、突っ込む。

銀色のゾイドの大群へ、ただひたすら突っ込む！

ガスン、と、一体へのレッドホーンの角がぶち当たる。

吹き飛ばされたバイオラプター。

そのまま、一瞬でシステムフリーズを起こす。

『おいおい、聞いてたのと違うぜえ!?!』

『貧弱なんだよ、オラア!!』

そして、出鼻をくじかれた一団に向け、ビームガトリングが斉射される。

しかし、不気味な銀色の装甲は、直撃のはずのビームの雨をはじき、霧散させる。

『は!?!』

『何だそれ!?!』

そして、逃げつつも時折振り向いて口から火球を放つ。

『うおおああ!?!』

それは、小型ゾイドとは思えない凶悪な火力だ。

もしも、レッドホーンの装甲がこういったビーム系列に強い塗料が無ければ、焦げ跡が付いた程度では済まない。

『オイ!! こいつらさつきから射撃が一つも効いてないぞ!?!』

『みたいだな、おい!?!』

ぴゅーん、と飛び交う小口径荷電粒子ビーム砲などは、銀色の装甲に拡散、無効化される。

試しに、とレッドホーンBGが、対ゾイド3連砲を叩き込む。

ガンツ、と音を立て、弾丸ははじかれる。

が、その衝撃で一体のバイオラプターが吹き飛び、玉突き事故さながらの要領でぶつかり、2体ともシステムフリーズを起こす。

『見たか!?』

『あー、そっか、装甲は抜けねえけど……アレだな!!』

『アレだ!! デカいキャノンと、後格闘だ!!!』

語彙力はないが、彼らは言動や行動ほど馬鹿じゃなかった。

\*\*\*

『A-9、A-22、SF（システムフリーズ）です!!』

『AセクションはフォーメーションをP1よりP4へ変更の後、O-9を続行。

Bセクション、反転の後にオペレーション変更までフォーメーションをP-32で続行』

『ASリーダー了解!! 前に出ます!!』

『BSリーダー、了解!!』

「コマンドーはこれより、『ゴッドサンダー』の発射態勢に移行する。

そろそろ、件の『デカ物』が見えてくるはずだが、それよりもデッドボーダーに注意しろ。

P4のフォーメーションで常に移動するように」

『『了解!!』』』』

さて、とバイオティラノは動きを止める。

「……『神の雷』って名前、ダサくないか?」

へヨク、分カラナイ

\*\*\*

バイオゾイドの能力は、すぐに丸裸となった。

「こちら、ブリギットだ!! 全員、よく聞け!!」

アレキサンドロス高校側の副総長——『皆のノート女番長』ことブリギット・カン

ザキは、その司令室で声を荒げた。

「バイオゾイドに聞く攻撃は限られている!! 小口径弾では無意味だ!!」

『しよ、しようこう!?!』

『ノート番長!! もっと漢字少なく!!』

「バカ共が!! 自分の武器を見て、ゴドスとかの手と同じぐらいの武器じゃ意味がない

という事だ!!

ついでだがビームはもはやただの飾りだ!!

格闘戦を挑め!! 体当たりの方が効果がある!!」

『おっけー!!』

『何だよ、いつも通りじゃねえか!!』

「バカが!! 格闘でも同格サイズのぶちかましじゃ意味がない!!

奴らは火器が少ないが大粒で威力が高い!!

テイガゴドスの頭なら、あれも数発は耐えられる!!

先頭に置いてなるべく突っ込め!!

デッドボーダー!! お前たちだけが射撃でダメージが与えられる!!

月を落とすつもりでドンドン撃て!!」

あいよー、などの統一感のない返事を聞き、彼女は頭を抱える。

「……馬鹿ばかりと話すのは疲れる!」

『全国模試10位台という事が違うぜえ!』

『で、ブリちゃん今月何人血祭りで補導??』

ガン、と通信機へ、聞こえた操縦席と火器管制席の声に蹴りを入れる。

「お前らは後で屋上だ」

『『ヒーロー！』』

「変な声を上げる暇があるなら、とつとと突っ込め、バカが!!!」

ズドオン、と言う爆音は、しかしいま彼女の乗るゾイドには衝撃一つ伝わらせない。

「いい展開をする相手だが、『これ』を殺しきれるか？ デイガルド学園」

ギユウウウウウウウウウウウウウウ!!

唸りを上げる、2本の角。

その下から覗く長い3本目の角と、鋭い視線。

基部に見えるなだらかな曲面美は、かつて最強を沈めるべく生まれた特殊装甲――

『反荷電粒子シールド』。

脇腹から水平に放たれ、向きを変え相手へ飛ぶミサイル。

そのサイズ比を見よ！

中型ゾイドのブースターはありそうなミサイルが、まるで小粒のマイクロミサイル。

腰で回り続けるは、半永久動力の『ハイパーローリングチャージャー』。

近くにあるビーム砲は、本来シールドライガーに乗るはずの大型にもかかわらず、予備兵装にしか見えない。

この超巨大ゾイドこそ、アレキサンドロスがジャンクの中から見つけ、修復した恐るべき『竜殺し』。

トリケラトプス型、『超巨大』戦闘機獣。

RZ-055 マッドサンダー

かつて、最強だったデスザウラーをただの案山子に変えた、狂える雷神である。  
「ポツカ、弾幕が薄いぞ!!」

サンチョ!! 先頭に出ろ!!

こいつを倒せる手段があろうとなかろうと、前に出るのがこいつの役目だ!!」

『アイサー、キャプテン!!』

「女はサーじゃない、マームだ!!」

『細かいことはいいんだよ!!』

『そーそー!!』

2連大口径衝撃砲、そして二つのビームキャノンが火を噴く。

\*\*\*

『うおー、マッドが来たぞー!!』

『ぶっこみいくぞおー!!』

唸るマッドサンダーのマグネーザー。その音だけで周りの味方の士気は上がる。

『Bセクション、フォーメーションをP-32からP-01に変更。』

B Sリーダーを先頭にマッドサンダーの侵攻を止める。

神の雷を使う』

「了解イツ!!」

パイロットの戦意高揚に反応し、SLSを介しバイオトリケラが吠える。

「Eシールドアタックをする!! 道を任せるぞツ!!」

『『『了解!!』』』』

バイオトリケラの前面、金色の角を中心にEシールドが展開される。

\*\*\*

「このマッドサンダーに突っ込む気か、チビ!!」

大型ゾイドですら小さく見える相手へ勇敢に向かう相手に笑みを漏らす。

『いい感じの馬鹿で好きだぜえ!!』

『来いよお!! その度胸気に入ったあ!!』

「ねじ伏せろ!! マグネーザーの肥やしにしてやれ!!」

アイサー、と凶暴な笑みを浮かべて良そうな声音が上がり、マッドサンダーの巨体が

俊敏に相手を捉える。

『おおおおおおりやあああああああああああつっ!!』

「こおおおおおおいッ!!」

激突。



銀色のトリケラトプス型ゾイドのEシールドと、巨大なトリケラトプス型ゾイドの回転するマグネーザーがぶつかり合う。

「力で勝てると思うなよ、新型ア!?!」

指令席で叫ぶブリギット。

「——へッ、」

しかし、体格差とパワーで押され始めるバイオトリケラの中で、リョウヘイは笑う。

「『一瞬でも拮抗して』、『隙が出来』りや……」

俺の、『俺たちの勝ち』だ!!」

瞬間、マッドサンダーの背後で、黒い光がはじける。

『『『な、うわああああああ?!?!?!』』』』

まるで空間がゆがむような錯覚すら見える一撃は、マッドサンダーの腰のあたりを消し飛ばす。

そう、

マッドサンダー最大の弱点である、

ハイパーローリングチャージャーを。

「——う、嘘だろう…?!」

安全に配慮し、特殊なカーボンで守られているとはいえ、コックピットや司令室はめ

ちやめちやだった。

衝撃で座席から放り出され、しりもちをついたブリギットは、そんな一撃にそんな声を漏らす。

\*\*\*

「——ビームスマツシャーの原理で超高密度圧縮したバイオ粒子を放つことで、一時的にマイクロブラックホールに似た現象まで起こる兵器、か」

しゆう、と煙を上げるバイオテイルの口を閉じ、思わず冷や汗が出るジーナ。「学生の身分で使つていい兵器じゃないぞ、わが父よ」

\*\*\*

『すまん!! やられた!!』

マジかよお、と声の上がるアレキサンドロスの面々。

そこは、まさに多勢に無勢だった。

単体で見れば、性能のいいゾイドのそろうアレキサンドロス高校だが、

その場所は銀色のゾイドたちが、目で見えてわかる程の数で押していた。

『こいつら……聞いてたより多くないか!?!』

『つーか、あーし同じ数で戦うって聞いてたんですけどお!?!』

『人数は俺らと大差ないはずだよな!?!』

まだ、数の上ではマッドサンダーが落ちたぐらいだ。

ドスゴドスもレッドホーンBGも、デッドボーダーもヘルデイガンナーたちも健在だ。

『馬鹿、動きをみやがれ!!』

『ああ!!? お前も大して成績変わ……は!!?』

そこで、気づく。

一部よく動くゾイドと、どこか機械的、あるいは動くゾイドへ追従するゾイドたちがいる。

『スリーパーか!!』

『ずるいなあ、オイ!!』

スリーパーゾイド。無人型のゾイドは、ゾイドバトル連盟の使用ルール内では『武装』扱いである。

人が乗っていない分戦力が下がるが、数の埋め合わせに使えば大変有利な状況に出来る場合もある。

皆の印象はよくないが。

『つーこたあ、さつき殺した馬鹿は無人か!! つまんねー!!』

『鬱陶しい手え使いやがって!! さつきマッドを沈めたやつらと戦わせろやあ!!』

ぎゃん、ぎゃん、と射撃が対して効果のないバイオゾイドを、爪と牙とその質量を利用した格闘で沈める。

だが、大変困った状況だ。

『糞、今のは有人か!?!』

『こんなダチいねえよ!!』

『友人』じゃねえ、寒いギャグかますな!!』

『うるせえ、どうしろってんだ!?!』

今潰したのは、無人機か、有人か? それがわからない。

偏差値ワーストだから、というわけではないが判別するための脳は彼らは一切機能していないのだ。

『こういう時どうすればいいか聞ける奴が最初に沈んだしなあ!!』

『——おいおい、野郎共、何キンタマ落としたみたいな声出してんだあ!?!』

そんな時、アレキサンドロス側のゾイド群の右翼に固まっていたバイオラプター達が吹き飛ぶ。

『——要するによお、より取り見取りって事じゃねえかよお!?!』

二つのハサミでバイオゾイドの首を掴み、地面にこすりつけながら豪快にターンする、赤いティラノサウルス。

『こんだけいりやあ、今日の撃墜数トップのスペシャル井!!』

システムリリースしたそれらを投げつけ、3機巻き込みでさらにリリースさせる。

『学食で食いたい放題だぜえ——ッ!!』

両腕のワイヤークローを伸ばし、2体のラプターをからめとり、モーニングスターよろしく周りの敵へぶつけていく。

『ははははははははははははッ!!』

どおしたあ!? デイガルド校つてのはこの程度なのかよお!?!』

赤い目の暴君竜の口が開き、荷電粒子砲が放たれる。

たった一機、

その一機の数秒の戦闘により、バイオラプター達が相当数減っていく。

『例のジェノブレイカーか……』

Bセクション、前へ。ミサト!』

「了解ですつ!」

〈ヤツチャエ!!〉

瞬間、バイオメガラプトルを主軸とした部隊が前に出る。

バイオラプターの一群がジェノブレイカーを囲み、その壁を跳躍で超えたバイオメガ

ラプトルが鋭い爪を振るう。

スパンツ!

その、あまりの軽い衝撃と共に、フリーラウンドシールドの装甲に二つの切れ込みが入る。

「嘘だろ!?!」

自身の愛機の最も固い部分を切り裂いた威力に驚く中、

「行ける……!」

バイオゾイドの性能を確信し、フュン、と鋭い爪が首筋に迫る。

避けられない。

「チツ、調子乗んじゃねえっ!!!」

それを理解する前に、機体と自分の凶暴性を乗せて体当たりを敢行する。

「!?!」

驚愕の意識のまま即座に後ろへ飛ぶ。

(牽制!)(ブツパナス!!)

飛び始めた最中に気づき、反動で着地が難しくなるリスクを承知で口からヘルファイアを放つ。

「チツ!」

傷のついたフリーラウンドシールドでそれを防御、同時にアンカーを下す。  
「ぶっ放せ、タコ野郎!!」

ガンツ、と拳で荷電粒子砲のスイッチを殴る。

その怒りと気合でチャージを5割まで終わらせ、荷電粒子砲を放つ。

「しまっ——っ?!」

着地の硬直、光の本流に飲み込まれるには十分な間。

「ぎやあああああああああああああつっ?!?!」

荷電粒子砲は見事直撃し、バイオメガラプトルを光の本流で包み込む。

〈熱イ!! スゴイ熱イツ?!〉

「ぐ、ううううううう…!!」

しかし、その本流はバイオメガラプトルを起点とし、四方八方に拡散して降り注いでいる。

いくら5割の出力とはいえ、貫通はするはずだ。

「…っ。」

その感触は、不思議なことにジエノブレイカーのローディ、そしてそれに乗るレドーナにも伝わった。

「……まさか、」

荷電粒子砲を止める。そして、すぐに動き出し、自然と格闘戦の用意をしていた。

「はーっ……はーっ……!」

じゆう、と音を立て赤熱化した正面装甲。

しかし、すぐに水蒸気も止み、元の銀色の外骨格へ戻っていく。

「耐えられた……!?!」

〈怖カッタ……デモ大丈夫!〉

荷電粒子砲の余波で周りの土は黒く焦げ、拡散した余波は周りにも影響を与える。

しかし、バイオメガラプトルは健在だった。

〈ア、・右!〉

「!?!」

バイオメガラプトルの視界の端に映る煌きにすぐ反応する。

操縦桿より早く頭で動した体が回避を選択するが、ロケットブースターで飛ぶクローはよけきれない。

「楽しいことしてくれてるじゃねえかテメエ——ツ!!」

たわんでいたワイヤーがピン、とまっすぐ張られ、それに沿うように全速力でやってくる角のようなブレード。

〈!!!〉



頭部を直撃する瞬間、紙一重でよけ、ティラノとメガラプトルの頭部がぶつかり合う。俗に、『鏢迫り合い』。

きしむ金属の音を立てながら、ぶつかり合う両者のコア出力があたりを揺らす。

「ぐっ……すごいパワー……これがオーガのイドシテム……!!」

「チイイ!! イラつくぐらい反応が速ええなあ?!」

エクスブレイカー二つが挟み込むよう襲う。

しかし、すり抜けたと錯覚するような反応速度でそれは回避され、代わりに高温プラズマ火球の直撃をもらう。

「がッ……舌噛んだ……!!」

ペッ……やってくれんな、銀色野郎お——ツ!!」

血の痰と共に、ウエボンバイндターのミサイルをばらまく。

ずん、ずん、とステップを踏むような軽やかさでよけるバイオメガラプトルに、煙に紛れた全力のタツクルを当てる。

「きやあああああッ?!」

吹き飛ばされ、地面に転がって衝撃を逃がす。

「クッ……!」

素早く反応し、ヘルファイアを再び放つ。

ずん、と大きく音を立て、あの損傷していたフリーラウンドシールドが地面に舞い落ちる。

「……やるじゃねえか」

煙を上げるサブアームを一瞥し、吠えるジェノブレイカー。

「上等だぜ、ディガルド。」

正直舐めてたわ。悪かったな、いやマジで」

ぱち、ぱちつ、とコンソールのボタンを押し、画面に『OS—LIMIT：ON』の文字が出る。

「……まだなの……」

機体は無事だが、コンバットシステムのモチベーションが下がってきたことは脳で感じる。

そろそろ、まずい。

「上等だテメエ、銀色の細くて弱っちそうなガイコツの癖しやがって!!」

覚悟できてんだろうなあ？ じゃあ見せてやるよ……!」

『UNLOCK』と書かれた画面に浮かぶボタンに指を伸ばす。

「——こいつの本気を、見やがれクソが、」

ボタンに触れる。

ビィ————ツツ!!!

「!?」

だがその瞬間、そのけたましい音が響く。

「——私達の勝ちだ……!」

にい、と静かにコックピットで笑う。

『バトル、オールオーバー!!』

バトル、オールオーバー!!

アレキサンドロス校の監督責任者からの申請により、

このバトル、アレキサンドル高校側の敗北とする!!』

「は!?!」

『ウイナー!!』

私立デイガルド学園ツ!!!』

「はあ————ツツツツ」

この時、

こんな声は、あたり一面から響いたという。

\*\*\*

!?!?!?!?!?!?

「ふつつつぎあつつつけんなよ、ゴウルオルアアアアアアアアアアアツツ!!!」

「俺の今月のバイト代があああああああつつ!!」

「金返せ!! 食券返せ馬鹿野郎お—— ツツ!!」

断末魔と怒号が、観客席の大部分から響く。

コーラ、焼きそばパン、缶コーヒーが空を舞い、暴徒と化した生徒たちが暴れ始める。

「お、お、お、

大穴—— ツツ!!?!?!」

「やったー!! 帰りの運賃手に入ったー!!」

うおおおおお、と泣き叫ぶ、グルカ高等学校の面々。

その横で、静かに紅茶をすするイオナと、ため息詣りにコーヒーをあおるフィーネ。

「予想通り」

「予想が外れた」

両者、苦笑を漏らしながらそう言葉を紡ぐ。

「ところで、そもそも私も負ける方に予想はしていたが、あんな賭けを持ちかけられて勝った方にしたわけだ。

で、この最初から破綻した賭けに勝った根拠は?」

「根拠も何も、そつちも予想が外れたとお嘆きになつたじゃないですか。

そつちの言葉も聞きたいですね」

「では、そちらが先だ」

「ふふ……まあ、きつと同じ理由ですよ。忌々しくも」

スコーンを一口含み、すぐに咀嚼する。

「……アレキサンドロス校の今日は前哨戦です。

勝てば幸先もいいですが、『勝つために全力は出してはいけない』のが『前哨戦』です」

どうぞ、と新しいスコーンをファイネに差し出し、受け取るのを確認して言葉を紡ぐ。

「アレキサンドロスはあれで優勝校。

監督、作戦担当は、そのイケイケドンドンの戦い方でそこまでやった手練れ。

今日も、新型の性能や作戦にひるまず、騒がず、散らず、

ある種嫌なぐらい『代り映えの無い突撃に攻撃の全力一辺倒』、

見事です。ここまで馬鹿に徹しきれぬ戦い方は」

「ああ。

彼らは怖れない。だから、生半可な方法では太刀打ちできんよ」

フツ、と笑いながらスコーンを一口で平らげるファイネ。

コーヒーで流し込み、フムとうなる。

「だが、私の予想が外れた、はそういう事じゃない。

てつきり、あの赤い悪魔は『本気を出す』のかと思つてな？」

「OSリミッターの解除ですか？」

「データでは、まだ6割のはずでは？」

「そのデータに、私の直接対峙の感想がないだけさ。」

「おや、ついわが校の機密を教えてしまった！失礼？忘れてくれ」

「ははは、と二人は笑う。」

「どこか剣呑で、そしてどこまでも同類の匂いを茶葉と豆の匂いで隠して。」

「……そうか、もうあの動きは6割か……」

ふと、直接対決した彼女たちの様子に思いが移る。

\*\*\*

アレキサンドロス校チーム集合場所

「ふざけんなよクソ先公があ——ツ!!」

「がッ、とイツカクの胸ぐらをつかむレドーナ。」

「振りかぶった拳は、しかし右腕で受け止められる。」

「なんだ？先生様に逆らうとは、内申点に俺はマイナスつけるのを忘れたか？」

「うるせえ!!中途半端なことしやがって!!」

「まだ負けてねえ!!まだ負けてねえだろうがよ、くそがッ!!」

「最後までやらせろッ!!行けただろうがよお!?!」

そういうルールだろうがッ!! あたしらの得意な、最後までやるルールッ!!  
それを、」

「——ああ。だから、まだ負けてないうちに引き下がったんだよ」  
グツ、と拳をひねり、小さな体のバランスを崩させる。

「うお、」

「調子に乗ってんじゃねえぞ、メスガキがあああ!!」  
バキッ、とその額に自分の頭をぶつける。

衝撃で額が割れ、よろめくレドーナを後ろにいた生徒たちが支える。

「て、てめえ……!」

「お前はなあ?! 頭使わなすぎなんだよ!!」

お前も、お前らもだッ!!

前哨戦つつつたろ?! あ!?

そりゃ勝ちたいだろうさ!! 勝つことに意味がある!!

だけどなあ!!?

ぐい、と自分もれた額から流れる血をぬぐう。

「勝ちつていうのはな、最後の最後までもいい。最後の最後じゃなきやダメなこともあるッ!!」

あまりの興奮に、さらに額から血が噴き出す。

「いいか、俺らはもう無名で名誉も、誇りもねえ、ただのチンピラでポツと出の集まりじゃねえ!!」

前年度優勝っていう奇跡が!! 実績が!!! 信頼が、伝統が!!!

そんな煩わしい、面倒臭え、たった一つの『価値』がツ!!!

……俺たちの『値打ち』がついて回ってるんだ……!!」

荒い息を肩でしながら、周りにいる者たちを見回し、語りかける。

「……先公……!」

「はあ、はあ……俺の内申点に、お前らの就職先、まともな道!!」

全部だ……全部確保するには、ここだけ勝つてりやいって話じゃ、もうねえんだ

……!!

クズ、ゴミ、不良品!!

そんなものからまともになるには、まだだ!!

まだ、まだ全力で俺たちをぶつけるわけにはいかねえ……!」

イツカクは、皆に背を向ける。

「……今年度も優勝!!」

『!?!』



「……今年度も、優勝だぜ。」

いつそ世界大会に出る勢いで、無い脳みそも馬鹿みたいにある凶暴性と体力も使つていく。

「どんなにダメでも、ベスト4入りだ」

『……』

「お前らは、無い脳みそは別の所で使え。」

……俺は、お前らに考えられない部分を教えてやる」

コツコツ、と背を向けたまま歩いていくイツカク。

「待てよ………!」

「おいレドーナ! どうせ後で保健室で会うだろ!」

「まだ話は終わってねえ……!」

「終わりだ!! イツカク先生の事も考えろ!!」

「考えてらあ!!!」

あの負けず嫌いのクソ先公がツ!! 悔しくないわけねーだろツ!!」

ブリギットに止められたレドーナは、そう叫ぶ。

「あのイツカクだぞ?! 一発殴られてやろうか迷うぐらいには……ツ!!」

悔しがらるだろうがよ、クソがツ………!」

誰もいない、保健室前の廊下。

ガッツ、と音を立て、学校の壁に拳をぶつける。

「……………チツ！」

血のにじむほど握られた拳を壁に押し付け、悔し涙が廊下を濡らす。

「ああ……………お前らにゴミみてえな『頭のいい負け』なんてことさせたんだ…ツ！  
今年も優勝しなきゃ……………割りにあわねえだろうがよ……………!!」

\*\*\*

「さて!!」

パンツ、と両手を叩き、イオナは立ち上がる。

「まあ、表面上とはいえ、バイオゾイドの『対策』はいくつか考え尽きました。  
出来レースとはいえ賭けにも勝ちましたしね」

「フツ、一つ貸した」

フィーネの言葉に満足したイオナは、改めてティーンに向き合う。

「ティーン・ガルド社長。今日はありがとうございました。」

近々、そちらに試合を申し込むので、その時にまた」

「いいとも!! そちらの学校は好みのゾイドが見れそうだ!!」

だが、まだまだ私の自慢のバイオゾイドは増えるよ〜？ まだ秘密もある!!

出来れば今日みたいなことは無しだ。最後までやりあおう!!

心苦しいが、全力で戦おうじゃないか!

「ええ。」

新製品の売り上げが不振になるぐらい叩き潰して行こうと思います!

はっはっはっは、と大声で笑う二人。

「では、敵に塩を送るつもりではないが、今日から今日見せた4機種は市場に出る。

サンプルやアグレッサーでもいい。

存分に買って色々試してみてくれたまえよ」

「もちろん!」

でも、それ以上に『我々のゾイド』が先ですが」

二人の不敵な笑みは、新たな戦いの予感をあたりに想起させた。

———そうして、アレキサンドロス校での試合が終わった。